
流れ着いて!ミッドチルダ!

d.c.2隊長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ着いて！ミッドチルダ！

【Nコード】

N6350W

【作者名】

d.c.2隊長

【あらすじ】

それは夢で見た世界。

それは夢で出会った少女。

2人は時空を、次元を飛び越えて再び出会う。

それは、一つのif〜もしも〜の物語。

流れ着いて！ミッドチルダ！

始まります！

／注意）これは作者の前作”流れ着いて！藍蘭島！”のifの続編となります。

前作を読んで頂いた後に見て下さることを推奨致します。

更にキャラ崩壊やオリジナル展開、個人的解釈等が多々含まれる可能性があります。苦手な方はバックボタン連打をお願いします。

プロローグ（前書き）

若干修正しました。

二作目入ります！

更新は藍蘭島に比べれば遅くなると思いますが、何卒御容赦をm)

——) m

プロローグ

ここはどこにあるか分からない、明治文化をそのまま残した島……
藍蘭島。

その島の住人の男達は、12年前の百年に一度級の大波に飲まれ、
一人残らずいなくなってしまった。

このままでは子孫が残せなくなり、滅ぶしか道はない。

しかし男達がいなくなった日から12年後の現在、島に2人の男が
流れ着いた。

片方は行人いくとという14の少年。

もう片方は右京うきやうという20の青年だった。

彼らはこの島の住人達と少しずつ仲良くなり、いつしか数人の娘達
から好意を寄せられていく。

多少のハプニングやシリアスな場面、危険な時もあった。

時には全力で戦ったりもした。

そんな激動(?)の4ヶ月が過ぎたとある日。

主人公である右京の日常はガラリと変わる事となる。

ここはちかげの屋敷にある倉庫……右京曰わくガラクタ部屋。

倉庫の中には壊れた電化製品や18禁を示す本、コスプレの衣装や部屋に入りきららない大量の本などがあった。

右京はこの倉庫の整理をちかげと”一緒に”することになっていたのだが……………。

「ちかげのやろう……………まさか地下迷宮を使って逃げるとは……………」

ちかげはこの屋敷の特徴とも言える地下迷宮を使い、片付けから逃げ出したのだ。

流石の右京でも下手に迷宮に入れば出られない可能性もある為、仕方なく一人で片付けていた。

二、三時間は経っただろうが、倉庫は最初に見た時とは比べ物にならないほど整理されていた。

「よし、こんなもんだろ……………ちかげは後で説教をすることで……………ん？」

部屋から出ようとした右京の目に一つの青い光が止まる。

近づいて確認した所、それは少し大きめの青いビー玉のような球体だった。

青……というよりも”蒼”というべき色合いに、右京はしばらく目を奪われてしまう。

「……綺麗なビー玉……いや、宝石か？」

右京は無意識に”蒼”に向かって手を伸ばす。

そしてその指先が”蒼”に触れた時……それは起こった。

「うおっ！？」

「やっと……やっと見つけた……」

突如”蒼”が浮き上がり、倉庫の中に突風が巻き起こる。

同時に、右京の脳内に直接、機械的な女性の声が響く。

「なんだ！？誰だ！？」

突然の有り得ない出来事に右京は混乱する。

そんなことはお構いなしに突風は強くなり、右京から視界を奪う。

「ようやく巡り会えた。幾千の時を超えてようやく……私の……」

「お前は……誰だ！？」

「私の……」マスター”となる男性トクに」

「お前は……」

瞬間、右京の足元に魔法陣が広がる。

それは、この世界では理解出来ない文字。

この世界では有り得ない陣。

「共に……マイマスター」

足下の魔法陣が強く発光し、倉庫内が光で埋め尽くされる。

目も開けられない程強く、けれども暖かな光の中で右京は確かに聞いた。

(私の名前は……レイ……)

やがて光は収束し、倉庫内はいつもの薄暗さを取り戻す。

しかしそこにはあの”蒼”と……。

右京の姿はなかった。

「ん？」

「どうかした？なのは」

「……ううん、何でもないよフェイトちゃん。ただ……」

何だか……懐かしい感じがしたんだ。

プロローグ（後書き）

原作はうる覚えだし時系列分らないしでグダグダになりそうです
が……

頑張ります（*。。（ノ

それは不屈の魂（前書き）

第二話となります。

オリジナル展開があるというより、オリジナル展開しかないような？

しかも短い……せめて4ページ以上は書けるように頑張りたいです。

それは不屈の魂

その世界の名前は”ミッドチルダ”。

地球とは異なる”次元”に存在する世界である。

このミッドチルダにはある組織が存在する。

その名は”時空管理局”。

無数に存在する世界を管理し、平和を守る組織である。

その時空管理局には若くしてエースと呼ばれる三人の女性がいた。

”八神はやて”、”フェイト・T・ハラオウン”…そして”高町なのは”。

まだ二十歳に満たない彼女達は類い希な魔力と実力を持ち、小学三年からの付き合いでもあった。

そんな親友である彼女達は、はやてをトップに一つの部隊を作った。

機動六課…正式名称”古代遺失物管理部機動六課”。

ロストロギアと呼ばれる、古代のオーバーテクノロジー、或いは間違った進化を続けて滅びてしまった世界の道具を管理する部隊である。

因みに、ロストロギアには危険な物が多く、ヘタをすれば世界を滅

ぼしてしまつものも存在する為、時空管理局はこのロストロギアの管理もしている。

様々な願いや思惑から生まれた機動六課には4人と一匹のフォワード陣……未来のエースがいた。

今はまだ小さな存在の彼女達は、なのはの指導によって少しずつ……しかし確実に力を付けていく。

そして訓練漬けの日々の中で、一つの事件が舞い込んだ。

それは、ミッドチルダ某所の山岳部を走る列車の中にあるロストロギア、“レリック”を回収し、列車の中の“ガジェットドローン”と呼ばれる機動兵器を全て殲滅せよ、というもの。

この命を受けたはやてはフォワード陣となのは、フェイトに出撃するようにつた。

これがフォワード陣の最初の出撃となる。

山岳部へと向かうへりの中でなのはは少しそわそわとしていた。

それは緊張というより、早く着きたいという焦りからきているように見えた。

「あの……高町隊長？どうしたんですか？」

「……ちょっとね、予感がするんだ」

青い髪を少女の問い掛けになのはは顔を山岳部の方を向きながら答

える。

「予感…ですか？」

「うん、予感…とても大切な何かに出会える…そんな予感」

真剣で、それでいて嬉しそうな瞳。

へりの中にいる全員がその瞳に見入っていたその時、機動六課から通信が入る。

「（なのはさん！こちらロングアーチ！列車の中にアンノウンを確認しました！！）」

「アンノウン!？」

「なんで急に…!？」

フォワード陣は突然の通信内容に驚きを隠せない。

それはへりの操縦をしているヴァイス・グランセニック、なのはの傍らに浮いている身長30cm程の小人、リインフォース？（ツヴァイ）も同じだった。

「な、なのはさん!どうしましょう!？」

「大丈夫だよリイン」

目を回して慌てるリインフォースの頭を撫でるのは。

大丈夫とはつきり言い切ったのはをフワード陣は不思議そうに見る。

「そのアンノウンはきつと大丈夫。だから私達は私達でレリックの回収とガジェット殲滅をしよう？いいね？」

【は、はい！！】

なのは達が山岳部に着くまで後三分弱。

〈No side out〉

倉庫の中を覆い尽くした光が収まったことを確認した俺は、目を塞いでいた腕を下げて目を開く。

そこは先ほどまでいた倉庫ではなく……列車の車両の中……だと思われる場所にいた。

「……夢……じゃないな。どこだよここは……」

溜め息を付いて左手で額を押さえると何やら固い感触があった。

左手を額から離すとその手には……蒼い宝石が輝いていた。

「持ってきたしまったのか？いや、それにしても……さっき聞こえた

声は…お前なのか？」

宝石に向かって問い掛けてみるが返事はない。

当然か、と自嘲気味に笑った後にとりあえず外に出ようと扉の方に視線を向ける。

そこには…カプセルのような形をした子供より少し小さい機械が浮いていた。

…最近の科学はここまで発達していたのか。

「つとあ!？」

そんなことを考えていると突然機械が目のような黄色い部分からビームのようなものを放ってきた。

咄嗟に座席へと跳んで避けたが、俺の後ろにあった扉が粉々に砕けてしまっていた。

夢ではなく現実のこの状況であんなものを食らってしまったえば、只では済まないだろう。

最悪…死ぬ。

「死ぬつもりはないがな…!!」

座席から飛び出し、機械へと走る。

距離は五メートルもない…あつという間に機械の前に付き、俺は

右腕を振りかぶる。

「オラア!!」

全力で左足を踏み込み、右腕を機械の黄色い部分へと突き出す。

瞬間、ドゴツ!という鈍い音が響き、右腕に鈍痛が走る。

「チツ……堅いな」

殴った機械は後ろの扉を突き破って吹っ飛んだが、それだけだ。

生身の拳では傷一つ付けられないくらいに堅い……実際、機械は一車両先で悠然と浮いている。

「クソツ……倒せないなら逃げるしか……」

いや、列車が走っている以上、逃げられないだろう。

何か、武器でもあれば……そう考えて両手を握り締めた時、頭の中で声が聞こえた。

(私の名前を呼んでください)

それは倉庫で聞いた声。

(あなたは私が求めた男性^{マスター})

それは機械的な女性の声。

(あなたが私を求めてくださるならば……)

その声は俺の胸の中の”何か”を呼び覚まし。

(私は全力を持って……)

俺と声を繋ぐ”言葉”を呼び起こし。

(あなたに答えます)

俺の”魂”を揺さぶった。

左手に握られた”蒼”を機械に向けて突き出す。

右手は左腕の肘を掴み、しっかりと足を床に付け、目を閉じる。

機械から攻撃が来るかも知れない。

しかし、不安は微塵もなかった。

「我、時空を越えし者なり」

それは俺自身を指す言葉。

「選びし者の元、その力を放ち、応えよ」

それは”蒼”を指す言葉。

「過去は糧に、記憶は胸に」

機械からビームが放たれる。

しかしビームは俺の周りにある瑠璃色の壁に弾かれた。

「そして不屈の魂は……」

目を開き、感覚として認識していた瑠璃色の壁を視認する。

それは俺が倉庫で見た魔法陣と同じ色をしていた。

「我等の”心”に。この手に魔法を！！」
チカラ

重なる言葉に”蒼”との絆を感じ、左手を天高く掲げて”彼女”の名を呼ぶ。

「レイジングソウル！！セエエツトアアアップ！！」

「スタンバイレディ。セットアップ」

刹那、車両の天井を突き破るほどの瑠璃色の柱が立ち上る。

その中で俺の服装が変わっていく。

黒い太股ほどの長さの袖のない上着。

腹が完全に見える、上着と同じく袖のない白いアンダーシャツ。

黒い太めのベルトを巻いた白い長ズボン。

両手には肘まで隠れる手甲が付けられ、両足も膝が隠れる脚甲が付

けられた。

いつも首の後ろで纏められた髪はポニーテールになっているようだ。

そして瑠璃色の柱は消え失せ、俺は自分の目の前に浮いているものに目を向ける。

それは一本の棍。

一切の装飾がないその白銀の姿に目を奪われながらも俺は棍を手取る。

その際に右の手甲の甲の部分に輝く蒼い宝石がキラリと光った。

俺は棍を前に突き出し、機械へと突っ込む。

機械はまたビームを撃ってきたが、避ける必要性を感じない。

だから俺は……

「ハアツ!!」

棍を右から左へ振り抜き、ビームを弾いた。

そのまま速度を下げることなく進んで棍を左手に持って機械の前にさつきと同じく右手を振りかぶり、左足を踏み込んだ姿勢で止まり

……

「次は……いてえぞ？オラァ!!」

再び機械の黄色い部分に右手を突き出した。

先ほどのような鈍痛はなく、変わりに何かを貫いたような感覚。

俺の右手は見事に機械を貫いていた。

俺はすぐに右手を引き抜いて離れるが、距離が近い。

「やべっ」

呟いた瞬間、機械が爆発した。

俺の視界は再び、光に包まれたのだった。

それは不屈の魂（後書き）

右京のバリアジャケットの説明が分かりづらい方が沢山いると思います。

イメージとしてはコードギアスR2のC・C・の衣装を男用にしたい感じですが。

デバイスの名前は紅様から提供されたレイジングソウルを使用していきます。

ただ、設定は自分好みに弄るのでそのまま使うというワケではないです……すみません。

設定の提供は本当に嬉しかったですv（*^^*）ノ

設定の提供をしてくださった紅様、胡蝶ノ夢様、本当にありがとうございます（*。。（ノ

それは夢で出会った少女（前書き）

若干修正しました。

やっぱり原作見ないとオリジナル展開になりますよねー……嫌われ
ないといいんですが。

他の作者様のなのはstrickersを見ながら勉強します。

今回は右京が魔法を……？

それでは第二話をどうぞ！

それは夢で出会った少女

（No side）

右京がガジェットの爆発に巻き込まれた時と同時刻。

なのは達を乗せたヘリは目的の列車を目視し、なのはは別の場所から文字通り”飛んできた”フェイトと共に空を飛ぶガジェットを破壊すべく、ヘリから飛び出そうとした時に通信がきた。

「（こちらロングアーチ、アンノウンから巨大な魔力反応！！推定S+！！あ、いえ……Dランクほどです）」

なのは達も見た瑠璃色の柱。

それは一時、リミッターを外したなのはと同等の魔力量を示したがすぐに低下し、フォワード陣よりも低い数値を示した。

なのは達隊長陣は自らにリミッターをかけている。

部隊には保有ランクが定められており、なのは達の本来の魔力量ではそのランクをオーバーしてしまう。

そのため、自らにリミッターをかけて魔力量を制限し、枠内に収まるようにしたのだ。

一瞬とはいえ、隊長陣と同等の魔力量を示したアンノウンにフォワード陣は啞然としている。

そんなフォワード陣を見たのは苦笑しながらも今は消えてしまった瑠璃色の柱があった場所を見る。

(あの魔力……違う……あの暖かさ……あれに私は触れたことがある)

遠き過去、まだ自分が僅か6つと7つ、9つの時に出会った男性を思い出す。

片手の指で数えきれるほどの少ない出会い。

合計しても10分に満たない僅かな会話。

そんな少ない時間にも関わらず、1日たりとも忘れることがなかった男性^{ヒト}。

(あなたがくれた言葉で私はフェイトちゃんと友達になれました)

今の親友とまだ敵対していた時に求めた答え。

その答えをくれた男性の顔は10年経った今でも鮮明に思い出せる。

何気なく、なのはは自分の髪を束ねている布に左手で触れる。

それは10年間ずっと大事に使っている大切な宝物。

男性に憧れた少女はもういない。

そこには愛おしそうな表情で布に触れる一人の女性がいた。

(やっと……やっと逢えるのかな?)

まだその姿を確認していない故に、その考えは希望的観測の域を出ない。

しかし、なのはには確かな確信があった。

幽霊のように現れ、幽霊のように消えた彼の姿が……。

なのはには列車の中に幻視できていた。

「あなたは……」そこ”にいますか？右京さん」

「なのはさん？何か言いました？」

「……なんでもないよスバル。さぁみんな！！初めての任務、しっかりやろう！！」

【はい！！】

なのははフォワード陣の返事に笑顔を返し、へりを飛び降りた。

空にはガジェットが大量に飛び回っていたが、なのはは見向きもせず瑠璃色の柱があった虚空を見ていた。

（早くアンノウンが右京さんかどうか確かめたい……だから）

「すぐに終わらせるよレイジングハート！！セットアップ！！」

[o k m a s t e r s t a n d b y r e a d y]

桃色の魔力を纏い、なのはは白をメインカラーに青いラインが入ったバリアジャケットを身に纏う。

桃色の魔力が霧散したその場所に存在するのは”不屈のエースオブエース”。

手に持つ杖（相棒）は不屈の心。

なのははフェイトと合流し、空のガジェットを殲滅していく。

教え子達の道を開くために。

一刻も早くアンノウンを彼と確認するために。

〔No side out〕

「……ん？痛くない？」

爆発相手に無駄だと思いつつもほぼ反射的に顔を隠すように×字にしていた両手を下げる。

するとそこには瑠璃色の丸い盾が存在した。

「プロテクション……：防御魔法を展開しました。お怪我はありませんか？マイマスター」

「ああ、助かった。ありがとなレイジングソウル」

レイジングソウルの張ってくれたプロテクションとやらのおかげで
外傷は見当たらない。

……っか気になったことが幾つかある。

幸いにも近くにあの機械は見当たらないし、今のうちに聞いておく
とするか。

「レイジングソウル、幾つか聞きたいことがある」

「なんででしょうか？」

「お前はなんだ？」

「古代ベルカ式インテリジェントデバイス、”レイジングソウル”
が私の名称です」

古代ベルカ式？インテリジェントデバイス？

いきなり聞き慣れない単語が出てきたな。

「デバイスとはなんだ？」

「魔導師が魔法を使う際、より円滑に使えるようにサポートする道
具です」

魔導師に魔法ときたか……さっきのプロテクションとやらも魔法な
のだろうな。

アニメや漫画などの魔法使いが持つ杖のようなものだろうか。

「インテリジェントデバイスと言ったが、他に種類があるのか？」

「ストレージ、アームド、ブリスト、ユニゾンデバイスが有ります」
レイジングソウル曰わく、ストレージは最低限の会話しか出来ない
が空き容量が非常に多いデバイス。

アームドは武器の形状をしたデバイスで魔法を使わなくともある程
度戦えるデバイス。

ブリストは持ち主以外の魔導師、あるいは持ち主自身を強化などの
サポートをする手助けするデバイス。

ユニゾンはマスターとユニゾン（融合）することができる特殊なデ
バイスとの説明を受けた。

インテリジェントデバイスは高度なAIを持ち、戦闘から日常まで
幅広く活躍できるので頑張ります……という説明だか売り込みだか
分からない説明を受けた。

「……まあいいか。魔法と言ったが、俺にも魔法が使えるのか？」

「先ほどのプロテクションは私に登録されている魔法をマイマスタ
ーの魔力で使用したものです。マイマスターは魔力量は少ないので
大きな魔法は使えません」

ふむ……魔力量が少ないなら仕方ない。

なんの訓練も受けていない魔法使い初心者の俺なら仕方ないが。

「先ほどのプロテクションも多様は出来ません。ですが、マイマスターはそれを補う身体能力がありますから、最低限最小限の強化魔法を使うだけでも充分他の魔導師と渡り合えると思います」

「そうかい」

盾すら数回しか使えないとはな……相当魔力量が少ないようだ。

大分話していたのか、さっきの機械と同じ機械が複数、向こうの車両の中に見えた。

どうやらこちらに向かっていているようだ。

「レイジングソウル、さっきの機械がきたから潰すぞ。…が、その前に2つ聞かせる」

「なんででしょうか？」

俺は棍を両手で持って少し前屈みになって構える。

答えを聞いたら、すぐに走り出せるように。

「この服装はなんだ？」

「マイマスターを守る防護服……バリアジャケットです」

「このデザインはなんだ？」

「私がマイマスターに似合うようにデザインしました……よくお似合いです」

「ありがとよっ！！」

聞きたいことも聞いたので、機械が俺のいる車両に入った瞬間に棍で一突きする。

棍は見事に機械を貫通し、機械からはバチバチと電気が漏れ出す。

先ほどのように爆発されてはかなわないので棍を引き抜き、後続の機械に向かって蹴り飛ばした。

飛ばされた機械は後続の機械にぶつかり、同時に爆発した。

「片付いたか？」

「そのようです。ですが他の車両の中に同じ反応を多数確認しました。更に車両内にマイマスターの他に魔力反応を4つ、上空に2つ確認、いずれも魔力量はマイマスターよりも上です」

「それは俺以外にも魔法使い……魔導師がいるってことだな……後、機械も。機械の数は？」

「上空に60…52…46…数がどんどん減っています。車両内には30…28…25…こちらもどんどん減っています」

上空にもいたのか……車両内に比べて減りが早いのは、レイジングソウルの言う2つの魔力…魔導師が強いからだろうか。

他にも機械と戦ってくれている奴らがいるのか……嬉しい限りだ。

なら、俺も車両内の機械の数を減らす手伝いをしようと他の車両へ

と走る。

目についた機械は片っ端から棍で貫き、殴って壊す。

「魔法を使わない魔導師ってどうよ?。」

「いいんじゃないでしょうか?マイマスターが魔法を使わなくても戦えるのは事実ですから」

「そうかい!。」

レイジングソウルの返しに笑みを浮かべながらも機械は破壊する。

今ので9機目……他も破壊されていることを考えれば、大分少なくなっているハズだ。

「エリオ君!。」

次の車両へ移ろうとした時、上から少女の声が聞こえた。

なんでこんな所に?と思いつつながら車両の窓を開け、そこから逆上がりのように上へと上がる。

「ふえ!。」

「……レイジングソウル。お前の言った魔導師の一人はこの子か?」

「はい、間違いありません」

そこにいたのはマントを着て帽子を被った全体的に桃色の少女……髪までピンクとはな。

少女が驚いてこちらを見ているが気にせず、少女の隣に行つて目の前にあつた大穴を見下ろす。

そこには赤い髪の少年がデカイ丸い機械のアームで持ち上げられている姿があつた。

反射的に助ける為に穴から降りようとした瞬間。

「なっ!?!」

「エリオ君!?!」

機械が少年を外へと投げ捨てた。

下には高い崖と森があるのみ……もしも激突なんてしたら、助かる見込みは薄い。

「クソッ!?!」

俺は反射的に少年に向かって飛び降り、その小さな体を抱き締める。

が、なぜか桃色の少女まで落ちてきた。

「バカ!?!」

「い、ごめんなさい!でも、エリオ君が!」

「んなことどうでもいい!?!」

落ちてきた少女に右手を伸ばしてその小さな体を抱き締める。

まだ下には距離があるが、それも数十秒でなくなるだろう。

「レイジングソウル！何かないか！？」

「飛行魔法が登録されていますが、マイマスターの魔力量では……」

「ちっ……仕方ないか」

ならばせめて、この2人だけでも助ける努力をしよう。

〈キャラロside〉

私とエリオ君を抱き締めていたお兄さんが私達の下になるように体を入れ替えた。

さっきの会話の通りなら、このお兄さんは空を飛ぶ手段がない。

けれど、私なら……そう思って私達を追うように飛んでいるフリードを見る。

また失敗するかも知れない……制御出来ないかも知れない。

そう考えると怖くて……震えてしまう。

「怖いのか？」

お兄さんの声に反応して上を向く……落ちているから下かな？

そこには優しいな笑みを浮かべたお兄さんの顔があった。

「大丈夫だ、お前達は死なないさ。俺が体を張って守ってやるよ」

ああ、このお兄さんは名前も知らない私達の為に、自分の体をクッションにするつもりなんだ。

……それはダメ、絶対にさせない。

こんなことを考えるのはおかしいかもしれない。

それでも、思ってしまったんだ。

「……そんなことはさせません！！私が……私とフリードが……エリオ君とあなたを助けます！！」

この抱き締められた時から感じる安心感を手放したくないと。

だから私は……

「フリード……今まで窮屈な思いをさせてゴメンね。でも……もう逃げないから！！」

自分で恐れていた自分の力を信じる。

絶対に成功させる……勇気は、この人から貰ったから！

「竜魂……召喚！！」

〈キャロside out〉

「おお……」

少女の両手のグローブについている宝石が光り、桃色の光に包まれた。

そして光が晴れた時、俺は……ドラゴンというべきか？そんな感じの生物の背中にいた。

召喚とか言ってたから、この少女が出したのだろうか。

「……すげえじゃねえか嬢ちゃん」

「え……えへへ」

誉めながら少女の頭を撫でると嬉しそうな声が聞こえた。

それにしても、この少女と少年には見覚えがあるな……。

だが初対面のハズだし……まあいいさ。

「嬢ちゃん、列車に戻るぞ。あの機械……必ず破壊する」

「はい！フリード……！」

「グオオオオオオ……！」

ドラゴンはフリードというらしいな。

フリードは少女の声に反応し、列車に向かって飛ぶ。

思ったよりも落ちていなかったのか……それともフリードが速いのか、あっという間に先ほどの機械を視認出来る高度に達した。

「ん……え？あの……」

丁度少年も起きたようだ。

俺は抱えていた少年を下ろし、少年の頭に手を置く。

「話は後だ……あの機械を破壊する。手伝ってくれないか？」

「……はい！」

「いい返事だ少年！レイジングソウル！！なんかないか！？デカい一撃を叩き込みたい！」

「あります。私のセカンドフォームなら、マイマスターの魔力量でも、カートリッジの使用で超至近距離の斬撃魔法が使えます」

セカンドフォーム？カートリッジ？また訳分からん単語が出てきたな。

まあいい……言ってみれば分かることだ。

「ならレイジングソウル。セカンドフォーム！」

「スラッシュスタイル」

両手の手甲の肘部分から一発ずつ薬莢が飛び出し、俺の手から棍と手甲が消え失せる。

代わりに俺の手に現れたのは……俺の身長ほどもある両刃の斧だった。

しかしこの斧、片方の刃が妙に長く、下向きに反りがある……まるで刀のように。

「まあいい……準備はいいな少年少女」

「はい!!」

「いい返事だ!!レイジングソウル!カートリッジ!!」

「ロードカートリッジ」

少年が俺の隣で槍を構え、少女が俺達の後ろで両手を×字にクロスする。

斧の両刃の中心から二発の薬莢が排出され、斧の長い刃に瑠璃色の光が灯り、その刃をさらに巨大化させた。

「ツインブースト、スラッシュアンドストライク!!」

少女の声と共に、少年の槍と俺の斧に桃色の光が灯り、その刃を更に長く、強くする。

これなら確実にいける。

「レイジングソウル。斬撃魔法の名前は？」

「まだ決まっています。登録されているのは魔法の構成のみですから」

なるほど、後で考えるとしようか。

俺は斧をしっかりと両手で握り締め、デカくなった刃を空に向けて担ぐように構える。

「一閃必中！！」

「一撃ひっさあつ！！」

少年が機械に向かって真っ直ぐ跳び、俺は空に向かって飛び上がる。

少年の槍は機械に突き刺さり、切り裂くように引き抜いた。

その直後に俺の斧が機械を真っ二つに……ではなく、なぜか米字のように八分割にして爆散させた。

「……説明しろ、レイジングソウル」

「今の魔法は接触時に魔力刃を急速に広げ、表面に切れ込みを入れてそのまま切り裂く魔法です。少しでもめり込めばバラバラです。マイマスターの前に立ちただかるモノにはお似合いです。腐腐腐……」

……エグいということはわかった。

魔法もレイジングソウルも。

笑い方もなんか怪しいしな。

「ありがとうございます。助かりました！」

すっかり光を失った斧を見ていると後ろの少年がお礼を言ってきた。更に少女もドラゴンから降りてきて……ドラゴンがちっさくなった。召喚というより、解放というように考えた俺はおかしくないと信じたい。

「お兄さん、さっきはありがとうございます！私はキャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

「同じく、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

敬礼をしながら自己紹介してくれた少年少女……キャロとエリオ。

……やはり、ここは俺のいた世界とは別の世界のようだ。

そのことを再認識しつつ、俺も敬礼しながら自己紹介をした。

「フタツキ喜喜 ウキヨウ右京だ。宜しくな、エリオ、キャロ」

自己紹介をした後、俺達は談笑しながら、2人を迎えに来るとい
へりを待っていた。

俺が違う世界から飛ばされてきたと説明すると、キャロが元いた次
元から別の次元へと飛ばされた者……次元漂流者”だと教えてくれ
た。

藍蘭島といい今回といい……よく漂流するな……いや、流れ着く……
か？

更には機動六課なる部隊やロストロギア、時空管理局、この世界の
名前が”ミッドチルダ”であるなどの話を受けた。

……機密とか大丈夫なんだろうな。

今回この場所にいたのもロストロギアの回収とさっきの機械……ガジ
エットの殲滅という任務だからだそうだ。

その任務も同僚の方で終わったらしい。

初任務で緊張したとは2人の話……因みに、俺達はバリアジャケッ
トは解除しており、2人は制服姿だ。

ていつか時空管理局とやらはこんな子供に戦わせてどういっつもり
だ？

年齢はまだ10だというし……ゆきのより年下だぞ。

そんな不満を抱きながら待っていた時、空から飛来する一つの影。

その影を見た2人は立ち上がり、影に向かって手を振った。

「なのはさーん!!」

「ここですよー!!」

なのは。

いや、人違いだ……俺があの子を見たのはこの世界じゃない。

そう、ただ、名前が一緒なだけだ。

「2人ともお疲れ様。その人……が……」

飛んできた影は車両へと降り立ち、俺と目が合う。

聞き覚えのある声と……見覚えのある顔。

影……女性はバリアジャケットと思わしき白い服を消し、制服の姿になる。

栗色の髪、赤い宝石のついたペンダントのような装飾品。

そして……髪をサイドポニーに纏めている白い布。

嗚呼、そうか。

あの時、公園で泣いていた少女はこんなにも立派に成長したのか。

「…久しぶりだな。なのは……綺麗になった」

「あ……」

なのはがその瞳に涙を溜める。

それは、彼女を”夢で出会った少女”だと確信させた。

「右京さん!!」

感極まったように、なのはが俺に抱きついてきた。

涙を流し、顔を胸にこすりつけ、離さないとはかりに両手をしっかりと腰に回す姿は……とても幼く見えた。

再び出会った右京となのは。

互いが互いを忘れることはなく。

違う世界、違う時間を過ごした2人。

さあ、物語は幕を開けた。

始まるのは、不屈の心と魂が織り成す物語。

それは夢で出会った少女（後書き）

というわけで再会しました右京となのは。

更に魔法も使いました。

とは言ってもカートリッジの魔力と右京の魔力が9：1の割合ですが。

超至近距離斬撃魔法の名前募集します。

非殺傷だと、どんな痛みになるのだろうか……。

その拳は唐突に（前書き）

はい、第四話目になります。

今回は短い？

オリジナル展開は思った以上にページ数が進みませんねorz

文も支離滅裂になっていないか心配です。

そしてある意味で急展開

更にあるキャラが崩壊しているかも。

それではどうぞぞ！

その拳は唐突に

「右京さん……右京さん……っ！」

抱きついてきたなのはの頭を撫でる。

今のなのはの姿は明らかに、最後に夢で見た姿からかなりの時間が経っていることを示している。

それでも俺を覚えていてくれたことは素直に嬉しく……あの夢が一方通行ではないことが分かった。

「あの……右京さん」

「ん？どうした？エリオ」

なのはの頭を撫でながらそんなことを考えているとエリオに呼ばれた。

その声に反応して首だけ後ろを振り返ってみると……エリオとキャラの2人はなぜかポカンとしており、フリードはキャラの足元で首を傾げていた。

「右京さんは……なのはさんとお知り合いなんですか？」

「……そうだな……」

知り合い……と言えば知り合いになるのだろうか。

しかし、俺がなのはと出会ったのは”夢の中”という曖昧なものだ。会話した時間も短いし、夢を見た回数もたった四回……四回目に至っては、俺は姿すら現していない。

知り合いというには、何かが違う気がした……のだが。

「うん、右京さんは私のお友達だよ」

俺が答えるべき答えはなのはが出した。

本人が言っているなら、俺が迷う必要はないだろう。

「お友達つっても顔見知り程度だな」

「にゃはは……」

俺の言葉に、なのはは苦笑する。

もう涙は止まっているようだ……離れてはいないが。

「しかし、なのはが魔導師だったとはな……知らなかった」

「私だって右京さんが魔導師だったなんて知らなかったよ」

「魔導師歴20分程度だな」

「ええっ!？」

何やら子供2人が驚いている……何かおかしい所でもあっただろう

か？

なぜかなのはもびっくりしているし。

「あんなにスゴい魔法を使ってたのに……」

「魔導師歴20分……ということは……」

「右京さん……今日魔導師になったの？」

「ああ」

直後、三人から驚愕の声を上げられた。

流石にうるさかったので一喝したらすぐに収まったが。

ここはヘリコプターの中。

あの一喝の後、すぐに三人の迎えのヘリがやってきたのだが、なぜか俺まで乗り込むハメになってしまった。

この世界の地理は皆無なのでありがたいと言えはありがたいのだが……まさか三人掛かりで押し込められるとはな。

因みに座っている場所だが……俺の右隣になのは、左隣にキャロ、

その隣にエリオ。

俺の正面に金髪の女性、キャラの正面にオレンジ、エリオの正面に青い髪の少女だ。

そして、俺と金髪の女性の間には……30cmほどの小人（ ）である。

「お兄さんがアンノウンですね？私はリインフォー스空曹長です！リインと呼んで下さい」

「ああ、宜しくなリイン」

うん、小さいことと浮いてることを除けば、普通の女の子だ。

もはやクセとなっていていいのかのように、俺の右手はリインの頭を撫でる。

リインは嬉しそうな笑顔を見せ、なぜか俺の右肩に座った。

「……まあいいか。そっちの三人にはまだ自己紹介をしていなかったな。俺は喜喜 右京……なのはの知り合いで次元漂流者だ。そちらの言うアンノウンってのは俺のことだろうな」

キャラとエリオのした敬礼をしながら、簡単な自己紹介をする。

するとオレンジの少女は少し不信感を露わにし、金髪の女性は少し困惑しているようだ。

因みに青い髪の少女は……

「私はスバル・ナカジマ二等陸士です！！スバルって呼んで下さい
！！」

うん、元気がいいな。

ナカジマ……中島？キャロやエリオと違って日本人っぽい名前なん
だな。

「ティアナ・ランスター二等陸士です……質問してもいいですか？」

「ああ、別にいいぞ」

「あなたのデバイスはどこで手に入れましたか？」

「倉庫の整理をし終わった時に偶然見つけた」

そういえば、なんであんなところにあつたのやら。

もしかして、流れ着いたのか？……まさかな。

「あなたはガジェットを幾つ破壊しましたか？」

「なんでもなこと聞くんだけ……カプセルみたいなのを9、エリオ
とキャロと一緒に丸い奴を1……だな」

「「はい」

【嘘……】

俺の答えにエリオとキヤロは笑って頷き、他は唾然としている。

なんだ？俺がガジェットを破壊するとおかしいのか？

「う、右京さんってDランクだよな？どうやってガジェットを倒したの？」

「拳で殴って棍で貫いて足で踏み潰した」

【……………】

なのはの言葉に、ありのまましたことを話したら全員が黙ってしまった。

あれか、魔力少ない奴は倒せたらおかしいのか。

「ほ、本当ですか？」

「マイマスターを疑うのは許しません。そんなに疑うなら、私の中に保存されている映像を見せますが」

「あ、はい、じゃあ後で見せてもら……………え？今の誰!？」

オレンジの少女……………もうティアナでいいか。

ティアナがしつこく聞いてきたら、俺の前にレイジングソウルがどことなく怒気を孕んだ声で言葉を発していた。

まあ、機械的な声なのであまり感情が入っていないように聞こえるが。

因みにレイジングソウルは現在待機状態……蒼い宝石のついたペンダントになり、俺の首に掛かっている。

「今のは俺の相棒さ」

「レイジングソウルと申します。マイマスターに危害を加える輩はバラバラにします」

【……………】

また黙ってしまった。

エリオとキャロに至っては震えている……あの斬撃魔法を思い出したんだろうな……食らったガジェットは文字通り、バラバラになったし。

「相棒が過激なことを言って申し訳ないな」

「あ、いえ……私はフェイト・T・ハラオウンです」

「フェイトと呼んでも？」

「かまいません」

そう言っただけで笑顔を見せるフェイト。

ふむ……フェイト、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、リイン。

初対面のハズなんだがな……どうしてこうも”見たことがある”と

思ってしまうのか。

「でも、なのはの知り合いに右京なんて名前の人がいたっけ？」

「にやはは……十年も会ってないし、話してもなかったね」

十年か……俺の中では1、2ヶ月前に会ってるんだがな。

もちろん、夢の中で。

「え？右京さんって幾つ？」

「二十歳だが」

【ええ！？】

「てめえらどういう意味で驚いてんだコラ」

特になのはの驚き方が酷いな。

まあ、なのはからしたら十年間全く姿が変わっていないことになるから仕方ないのか？

「俺は違う世界にいたんだ。時間の流れが違ってても不思議じゃないさ」

「でも、右京さんはなのはと同じ世界にいたんだよね？」

「さあな」

「ワケが分からないよ……」

フェイトががつくりとうなだれる。

夢で会いました、なんて言ったところで信じられないだろうしな。

「ところで、俺はどうなるんだ？不振人物として拘束されるのか？」

「えっと……それは……」

フェイトが気まずそうに目を逸らす。

この反応は肯定と捉えていいだろう。

隣にいるのはとキャロ、エリオも悲しげな表情をしている。

まあ仕方ないだろうな……話によれば、俺は突然現れたアンノウン（正体不明）らしいし、そんな奴が武装して低い魔力ランクにも関わらずにガジェットを破壊してるんだから。

ガジェットを破壊したから、犯人とは言わないだろうが、それでも怪しいことには変わらない。

最悪、レイジングソウルを取り上げられるかも知れないな。

（その時は……ひと暴れだな）

「（お供します、マイマスター）」

（ん？レイジングソウル？）

「（はい。今行っているのは念話という魔法です）」

念話……俗に言うテレパシーという奴だろう。

脳内で会話をする魔法で、人に聞かれない話をするのに便利だ
そうだ。

（まあいいさ……もしも、お前が取り上げられる場合には……全力
で逃げるぞ）

「（了解です、マイマスター）」

少し重くなった空気のままヘリが着陸した場所は……どこかの屋上
だった。

全員がヘリから降りるとそこには、4人と一匹がいた。

群青色の狼に金髪の白衣を着た女性、赤みの強いオレンジの髪の少
女にキャラ口より少し濃い桃色の髪の女性。

そして、俺と同じ茶髪の女性。

「みんなおかえりー。初任務お疲れ様」

「ただいまーはやてちゃん」

「ただいまはやて」

なのは、フェイトがはやてと呼ばれた女性に近付き、キャ口達4人と一匹は直立不動になった。

どうやら高い地位の人物のようだ……関西訛りがあって、なかなかフランクそうな雰囲気だが。

その後ろにいる三人と一匹の内の二人……オレンジの少女と桃色の女性は射抜くような視線で俺を見ている。

仕方ないかと思いつながら、なんとなく狼を見てみた。

「……………」

「……………」

狼は明らかに俺を見ていた。

瞬間、俺の体に言葉に出来ない感覚が走った。

俺はこの感覚を知っている。

そう思った時、俺と狼は互いに向かって一歩進んだ。

「右京さん？」

「ザフィーラ？どうしたの？」

後ろでキャラが、向こうで金髪の女性が何か言っているが聞こえない。

俺と狼はもう一歩進み、更にもう一歩、更に…と少しずつ距離を縮める。

ある程度近付いたところで一度立ち止まる……すると、狼の体が光り、なんとガタイのいい男性になった。

だが、そんなことはどうでもいい。

後ろや向こうで何やら騒いでいるがどうでもいい。

今はただ……

「喜喜 右京」

「ザフィーラ」

「「いざ、尋常に……」「」

コイツと拳を交えたい!!

「「勝負!!」「」

くなのはside」

今、なぜか右京さんとザフィーラが戦っている。

デバイスも魔法も何も使わない肉弾戦だけ……。

「うわ……デバイスも強化魔法もなしでザフィーラと互角やなんて……何者やあの人」

はやてちゃんもヴォルケンリッターのみんなもビックリしてるみたい。

フェイトちゃんもフォワードのみんなも……もちろん私も。

「オラアー!!」

「ぐっ……ハアッ!!」

「おぐっ……まだまだあ!!」

殴って、蹴って、時に防いでを繰り返しているけど、二人はなぜか避けることをしない。

でも、なぜか2人とも楽しそうだ……ザフィーラって、あんな笑い方するんだね。

「……なあ、なのはちゃん」

「なに? はやてちゃん」

「私な、アンノウンの人が連れてこられたら、一旦拘束して、事情を聞いて、本部の方に送ろうって考えてたんや」

はやてちゃんは私に話しかけているけど、視線はずっと右京さん達の方を向いたまま。

それにはやてちゃんの考えは正しいと思うけど……どうして過去形なのかな。

「ランクDでデバイス、魔法なしであの戦闘力……それにリインからの通信で、ライトニングの2人とリインに懐かれているらしいから悪い人やないやろっし……何より、なのはちゃんの知り合いやろ？」

「うん、そうだよ」

私が右京さんと再会した時にはもうライトニングの2人と楽しそうにお話ししてたし。

リインにもすぐに懐かれたし、不信感を持ってたティアナも、ヘリの中で不信感はなくなったみたいだし。

「ランクDなら部隊の保有制限に引っかかることもないし、お偉いさんの許可もすぐに取りれるやろ。入隊試験は今やってる殴り合い、階級は……三等陸士にしとけば、後はクロノ君がなんとかしてくれろ。ていつかさせる」

あ、あはは……クロノ君ご愁傷様。

はやてちゃん、目がなんだか、昔テレビで見た獲物を狙うライオンみたいな目してるよ。

でも、それはつまり、右京さんを機動六課に引き入れるってことだよね。

もし右京さんが入ってくれたら……スターズに来てくれないかな。

そしたら……長く一緒にいられるのに。

くなのはside out)

「ふんっ!!」

「ダラア!!」

互いの右ハイキックが交差する。

パン!と乾いた音が鳴り響き、お互いに一旦距離を取る。

楽しい。

避けることをしない殴り合い。体中痛いけど、ザフィーラも俺も倒れない。

楽しい。

藍蘭島で大牙と戦った時と同じくらいに気分が高揚する。

たのしい。

ああ、認めるし、わかりきってたことだ。

タノシイ。

俺は戦闘狂でバトルマニアで戦狂いでケンカ好きで……戦うことが大好きだ。

「ザフィーラアアアア！！！」

「右きよおおお！！！」

お互いに同時に突っ込み、すぐ近くで止まって俺はしっかりと左足を踏み込んで右腕を振りかぶり……ザフィーラは右足を踏み込んで左腕を振りかぶる。

「俺の……勝ちだあああ！！！」

突き出した拳は互いの左と右頬に突き刺さり、俺達の体はそこで一度止まった。

誰も、一言も喋らない静かな屋上で最初に言葉を発したのは……

「……す……い……」

はやてと呼ばれた女性だった。

その言葉と同時に、俺とザフィーラは崩れ落ち……

「やるじゃねえか……」

「貴様もな……」

「右京さん!？」

満足そうなファイラの顔と俺を呼ぶなのはの声を最後に、俺の意識は闇へと沈んだ。

その拳は唐突に（後書き）

はい、ザフィーラが大牙ポジションです。

ザフィーラ大好きなんです。

時間は主人公のプロフィールの予定です。

斬撃魔法も載せるつもりですが、名前がまだ決まっていなかったり。

考えてくださった名前がどれもこれも捨てがたい…！！

魔法名はまだまだ募集中です。

プロフィール（前書き）

タイトル通り、プロフィールです。

読みづらく、理解し辛い可能性が多々あります。

右京とレイジングソウルのプロフィールですので、興味が御座いましたらどうぞ

プロフィール

どうも皆様おはようございます、こんにちは、こんばんは。

作者の d・c・2 隊長と申します。

「流れ着いて！藍蘭島！に引き続き、主人公をしてる右京だ」

今回もプロフィールは即興で考えております。

「またか……前回もそれで人外にされたんだったな」

大丈夫、君の身体能力が人外でも今では”右京だから”、”兄貴だから”で説明が出来るほどに読者の皆様に定着した。

「あんま嬉しくねえ……」

それでは右京のプロフィールをどうぞ。

名前：フタツキウキョウ 喜喜右京

年齢：20

身長：187cm

体重：71kg

魔力ランク：D

使用デバイス：レイジングソウル

容姿：腰程の長さの茶髪を首の後ろで纏め、普段は黒い半袖のTシャツと青いGパンというシンプルな服装をしている。

備考：今作の主人公。

ちかげの屋敷の倉庫を整理し終えた時に偶然、待機状態のレイジングソウルを発見、触れたことでレイジングソウルが起動し、ミッドチルダへと飛ばされた。

飛ばされた時期は、原作のファーストアラートと同時期。性格は気さくな兄貴気質で口調は少々荒い。

小さいことは気にしないが間違ったことをした相手を見ると叱り、自分が良いと思う方向へ教育しようとする。

身体能力は異常の一言で瞬歩ができたり、手刀で木を切り裂いたり、ライフルの弾を見切ったりできる。

極端に頭はいいという訳ではないが悪い訳でもなく、知恵は回る。なのは、フェイト、はやて、リン、フォワード陣のことを”夢”

で知っているが、なのは以外は第四話現在では気付いていない。

だいたいこんな感じかな。

「相変わらず人外か……まあいいか」

続きまして、レイジングソウルのプロフィール。

「私ですね」

「それじゃ……どうぞ」

名前：レイジングソウル

術式：古代ベルカ式

形式：インテリジェントデバイス

AI：女性

性格：右京至上主義

B J：黒い袖無しの太股まである黒いジャケットと腹部が完全に出ている白いアンダーシャツ、黒い太いベルトで固定された白いGパ
ンと膝まで隠れる脚甲がある、全体的に動きやすいバリアジャケット
ト（デザインはレイジングソウル本人が考案）。

簡単に言うなら、コードギアスR2のC・Cの衣装を男性用にし

たもの。

形状

ファーストフォーム” ノーマルスタイル”

両手に肘まで隠れる手甲と一切の装飾がない白銀の棍の状態であり、セトアップ時はこの状態になる。

コアは右手甲の甲部分になり、カートリッジは両手甲の肘部分に六発ずつあり、補充は一発ずつ入れていくタイプ。

セカンドフォーム” スラッシュスタイル”

190cmほどの方刃が長く、下向きに刀のように反りがある不思議な形状をした両刃の斧になる。

コアは反りがある方の刃の根元にあり、カートリッジは両刃の間に六発発存在し、石突きの部分から一発ずつ入れていくタイプ。

サードフォーム”？”

フルドライブ”？”

オーバードライブ”？”

備考：倉庫の中になぜかあったデバイスで、右京が触れたことで起動し、右京をミッドチルダへと飛ばした。

起動時に”男性”と発言したこともあり、右京のことをマイマスタ―と呼びながらも男性として見ている。

右京至上主義の為か、度々危ない発言をして周りを沈黙させる。尚、名前がなのは持つレイジングハートとよく似ているが、別に関わりはない。尚、変形させると見た目が丸ごと変わるため、カートリッジの排出場所や補充の場所も変わる。

魔法

プロテクション

ポピュラーな防御魔法。

しかし、右京の魔力では広くするほど薄く、強度もなくなる為、狭くして少しでも強度を上げている。

更に魔力量が少ない為、十回ほどしか使えない。

八花一閃^{はっかいっせん}

セカンドフォーム時に使用出来る斬撃魔法。

カートリッジを使用して魔力刃を形成、刃を巨大化させて斬り込む魔法。

接触時にほんの少しでも刃が通れば、魔力刃が急速に広がり、内側から米時に切れ込みを入れてそのまま刃を通し、八分割にするという、正しく必殺技。

少しでもめり込んだらスパツといく魔法です。

「マイマスターの前に立ちは大かるモノは全てバラバラになればいいのです」

「避けられるかめり込まない程の防御魔法を使われたらただ刃をでかくするだけの魔法だな」

今回のプロフィールはここまで。

「新魔法やフォームが解禁されれば、新設定という形で書くかもしれません」

「その時はまた、名前を募集するかもな……カッコいいのを頼むぜ？」

尚、今回の魔法名はスモーク様のものを採用させて頂きました。

「他の人も捨てがたかったんだが……悪いが、今回は見送らせてもらった」

沢山名前を考えてくださってありがとございました。

「これからも流れ着いて！ミッドチルダ！をよろしくな！」

プロフィール（後書き）

前作のように右京に対する質問や、番外編の案などは常に募集しております。

他の作者様のように、人気投票なんかしてみたり……携帯なので
きませんがorz

その魂は星と雷と夜天と共に（前書き）

うあー短い……もっと詰め込んでよかったかもしれない。

無理やりな感じがする文がありますが、あまり突っ込まないで頂けると助かります（汗）

では、第六話をどうぞ

その魂は星と雷と夜天と共に

（No side）

気絶した右京とザフィーラを医務室に寝かせた後、隊長陣三名とリインフォース、ヴォルケンリッター三名、フォワード陣四名プラス1は機動六課の会議室に集まっていた。

その室内は暗く、一つのスクリーンがあり、そこには右京がセットアップした瞬間からザフィーラと殴り合った瞬間までの映像が流れていた。

「レイジングソウルさん、ガジェットを破壊するシーンだけ繰り返し流してくれへん？」

「ええ、構いませんよ。何度でもマイマスターの勇姿を見せてあげます」

その映像を流しているのは、言わずもがなレイジングソウルである。最初は流ったレイジングソウルだが、ティアナに見せる約束をしていたことを思い出して今に至る。

本人は一刻も早く、右京の寝顔をその身に記録したいと思っているのだが、それと同じくらいに自分の主の勇姿を見せつけたいと思っているため、ノリノリで見せていた。

スクリーンには右京がガジェットを殴って破壊したシーン、棍で貫いたシーン、踏み砕いたシーン、斧で八分割したシーンが繰り返し

流されている。

そのスクリーンを見ている10人プラス1は皆、思い思いの表情をしていた。

はやてと赤みの強いオレンジ髪の少女：ヴィータは真面目な表情で。なのはは真面目な表情だが、右京を目で追う姿は恋する乙女そのものだった。

フェイトと濃い桃色の髪の女性：シグナムはワクワクというか、好戦的な目で見ている。

リインとフォワード陣はそのムチャクチャとも言える戦い方に啞然としながらも憧れの眼差しを向けていた。

そして画面が再び、右京が魔法を使う瞬間になった時だった。

『一閃必中!!』

『【一撃ひつさあつ!!】』

暗い室内、しかも隊長陣までいるにも関わらず、ティアナを除くフォワード陣とリインは右手を上げて叫んでいた。

因みに、なのはもこっそりと右手を上げていたりする。

「つつせーぞお前ら!!」

【ごめんなさい!!...】

当然、ヴィータからお叱りを受けた4人であった。

スクリーンは上げられ、レイジングソウルは右京の元へと送られた。明るくなった会議室で隊長陣は席に座り、フォワード陣は立った状態であった。

「さて、このアンノウン……次元漂流者の喜喜 右京さんやけど……」

はやてはそう言って室内にいる全員の顔を見回す。

全員の表情を見たはやては真面目な表情を崩さずに言葉を続ける。

「本来なら事情を聞いて本部へと護送し、本来いた世界を探して帰すのが筋なんやけど……魔力ランクはD、人柄はライトニングの2人と高町隊長から問題なしと聞いたし、戦闘力も私を含めた隊長達は満場一致で最低でも陸戦AAと判断……私は、右京さんさえ良ければ、六課に迎えたいと思ってる」

はやての言葉に、驚いた者は一人もいなかった。

繰り返し見たガジェットとの戦闘と、屋上でみたザフィーラとの殴り合いで戦闘力が魔力ランクと不釣り合いな程に高いことは明白。

本来なら、真面目なシグナムやヴィータ、ティアナは異論を唱えそうなところだが、むしろ来て欲しいとすら考えていた。

そんな隊長陣の心境はこんな感じである。

（部隊保有ランクに引っかけからず、しかも即戦力……なんとか入ってくれへんかな）

（やっと会えたんだし、六課に入ってくれるといいな……一緒に訓練したり、ご飯食べたり……）

（エリオとキャロも懐いてるみたいだし、右京さんのことももっと知りたいな。何よりも、なのはが喜ぶと思うし）

（ザフィーラといきなり殴り合うなんて面白い奴だったな……なのはの奴もフォワードの奴らも喜ぶだろうし、入れても大丈夫だろうしな）

（血が騒ぐ……早く奴と戦いたい！！）

誰がどれかは推して知るべし。

因みに、フォワード陣の心境はこの人がいたら心強いという考えでいたが、一人だけ、なのはと同じくらいに六課に入って欲しいと考えていた人物がいた。

キャロである。

（あの安心感……あの大きな背中……なんでだろう。私はあの人を

……もつと知りたい)

一度感じた安心感。

それは自身の持つ恐怖を吹き飛ばし、勇気を与えてくれた。

その感覚を手放したくないと思ったキャロもまた、右京に六課に入
つて欲しいと思っていた。

「……反対はないみたいやな。右京さんが目覚めたら、勧誘してみ
るわ」

誰からも反対意見が出なかったことに満足したように、はやては一
度頷いた。

丁度その時、レイジングソウルから連絡が入った。

右京が目覚めた……と。

〈No side out〉

「……ここはどこだ？」

目が覚めたときに見たのは、見覚えのない天井だった。

上半身を起こし、周囲を確認する。

薬品の入った棚、デスク、隣のベッドにはザフィーラが狼の状態で

眠っている。

どうやら俺はベッドで眠っていたらしく、ここは医務室のような場所らしい。

「お目覚めですか？マイマスター」

「たった今な。どれくらい眠ってた？」

「二時間程です」

二時間……それだけ気絶していたのか。

ザフィーラ……大牙と同じくらい強かったな。

「だが、次は勝つ」

右手で固く握り拳を作ってザフィーラに向ける。

眠っているザフィーラから返事はない。

だが、その背中が「勝つのは俺だ」と言っている気がした。

俺が右手を下ろすと同時に、医務室の扉が開いた。

そこに立っていたのは……

「右京さん、大丈夫……みたいやな」

「体起こして大丈夫？どこか痛いところはない？」

「なのは……」

はやて、なのは、フェイトの三人だった。

「機動六課に入れ……ねえ」

「アカン？」

「ダメっつーか、そう簡単に入れるもんなのか？俺は一応、不審人物だろう？更に俺は次元漂流者だぞ？」

キヤロから次元漂流者はその元いた世界を探し出して送り返すのが主流だと聞いている。

俺がいた世界は地球……なのは達の出身世界と同じだから、事情を話せばすぐに帰れると思っていたんだが。

と、そこまで考えておかしいと思った。

なのは達と同じ世界出身なら、なのはと俺との時間のズレはどう説明する？

藍蘭島と日本では時間の流れが違った……いくら藍蘭島でもそこまで非常識ではないだろう……現に、そこで聞いた歴史と俺の知る歴

史は一致した。

所詮は夢の話だった？しかしなのは俺と会ったことを覚えているし、渡した布を持っていた。

色々思いつく可能性の中で、俺は一つの仮定をする。

それは、俺のいた地球となのは達の地球は別物ではないか？というもの。

つまり、なのは達の地球には藍蘭島がない可能性があり、あったとしてもそこは俺の知る藍蘭島ではない可能性がある。

全ては可能性の話だが……なぜか確信が持てた。

俺となのは達の地球は”違う”。

ならば、元いた世界に送り返すことが出来ず、俺は保護され続けることになる。

ここで機動六課に入らなければ、事情はもう話してあるし、本部とやらへ送られることになるだろう。

その時こそ、本当にレイジングソウルが取り上げられる可能性がある。

全てはあくまでも可能性だが……あまりいい結果を見いだせない。

「……仮に入るとしたら、俺の扱いはどうなる？」

「私らの知り合いに信用出来る地位の高い人がおる。その人に右京さんの隊員証を作ってもらってミッドチルダでの一時的な戸籍も用意してもらおう。右京さんはその人の紹介で苦手な魔法戦の実力を上げにこの機動六課に来た新人隊員……っっていう筋書きや」

コイツ、俺を引き入れる気満々だな。

しかもさつきから次元漂流者の件に触れないってことは……可能性に気付いているのか、ただ忘れていただけか……。

「……………条件がある」

「可能な限り応えるつもりや」

「機動六課にいる間の俺の食住の確保と、機動六課にいるのは”俺のいた世界が見つかるまで”だ」

ニヤリ。

はやてはそんな擬音が聞こえそうな笑みを浮かべた。

コイツ……やはり可能性に気付いていたようだ……思った以上に頭が回るみたいだな。

なのはとフェイトは首を傾げているが。

「その他は？」

「対応はあくまでも形だけだ……なるべく従うようにはするが、許容出来ない命令などがきた場合は……俺の全力を持って拒否させて

もらっぞぞ」

俺は、エリオやキャラロのような子供を危険な場所に出す時空管理局にいい感情は持っていない。

その時空管理局から来る命令には従うつもりは一切ない。

全く聞かないのはマズいので、普通のヤツなら聞く努力はするがな。

「……うん、わかった。他には？」

「ないな。しばらくの間、宜しく頼む」

「こちらこそ。ようこそ、機動六課へ」

こうして俺はしばらくの間、機動六課に世話になることになった……
…隊員として。

くなのはside」

「ねえはやてちゃん、右京の配置はどうするの？」

右京さんのいた医務室から出た私達は、通路を歩きながら右京さんの機動六課での配置を決めようとしていた。

私としては、スターズに入って欲しいんだけどなあ。

「右京さんの部屋も決めないとダメだよな……」

「え？私達の部屋じゃダメなの？」

「それは流石に……」

むう……同じ部屋に住んで少しでも長く一緒にいようと思っただのに。

でも確かに年頃の男女が同じ部屋ってのは問題あるかな？

別に右京さんがいいなら問題が起きても……エへへ。

「なのはちゃんが何を想像しとるか手に取るように分かるけど……まあそれはええわ。なのはちゃんには悪いけど、右京さんはライトニングに入って貰うつもりやで」

「ええ　　っ！！」

それじゃあ一緒にいる時間が短くなっちゃう。

これははやてちゃんの嫌がらせなのかな？

まずは理由を聞いて、納得出来なかったら……。

「なんや悪寒を感じる……理由はライトニングの2人…特にキヤロが懐いてること、フェイトちゃんがあまり一緒に訓練出来ひんことや。遊撃も考えたけど、今の右京さんには任せられへん」

理由は納得できたけど……どうして遊撃は任せられないのかな。
別に問題ないように見えるけど。

「右京さんは多分、魔法戦は全くと言っていいほど慣れてない……と
いうか出来ないと思う。だから、フォワード陣と一緒に訓練して魔
導師としての実力を上げてもらわなあかん」

そういえば魔法を使ったのはプロテクション一回とあの斬撃魔法の
計二回だけだった。

本人も魔導師歴20分って言ってたし……。

「そうだね。私がしっかり教えてあげないとダメだよね!!」

「な、なのは……抑えて抑えて」

「フェイトちゃん！これは私に課せられた使命なの！今から右京さ
んを含めた訓練を考えないと！」

こうしてはられない。

早く部屋に戻って訓練メニューを組み直さないと!!

「行っちゃった……報告書書かないとダメなのに」

「なのは隊長は本当に右京さんが好きやねんなあ……」

その後、報告書のことを思い出した私は徹夜で訓練メニューと報告書の両方をこなした。

くなのは side out

その魂は星と雷と夜天と共に（後書き）

という訳で入隊が確定しました。

信用出来るお偉いさんはもちろんククロノ……哀れな。

ヒロインはなのはを押しているように見えますが、キーパーソンなだけで実はヒロインになるかは確定していません……八割くらいヒロインしてますが。

不屈の心と魂が織りなす物語ですし

入隊する前の過ごし方〜一日目〜前編（前書き）

タイトル無駄に長くなってしまいました。

頑張れ自分頑張れ自分と己を奮い立たせております。

ギャグもシリアスもバトルも程良くいれたい今日この頃。

それでは第七話をどうぞ

入隊する前の過ごし方〜一日目〜前編

機動六課に世話になること……期間限定で隊員になることになった翌日。

医務室で目覚めた俺が体を起こして最初に見たのは……フェイトとは違う金髪の女性だった。

「あら、おはようございます」

「ああ、おはようさん。昨日屋上にいた人だよな？」

「はい。シヤマルと言います」

「喜喜 右京だ。宜しくなシヤマル」

シヤマルとの挨拶をした俺はベッドから降りて体を解すために屈伸をする。

隣のベッドには既にザフィーラの姿はない……もう復活したらしいな。

「はやてちゃんが、右京さんが起きたら部隊長室に来るよつに言ってましたけど……場所、知らないですよね？」

「全く分からないな。地図でも貰えるとありがたいんだが……ところで、今何時か知らないか？」

「見取り図は昨日、はやてより受け取っておりますので私がナビい

たします。現在AM5:21です」

俺の問いに答えたのはシャマルではなく、俺が寝ていたベッドの枕元にいたレイジングソウルだった。

5時21分か……藍蘭島での生活が染み付いてるようだな。

「ならレイジングソウル。洗面所かその類の場所までのナビを頼む。それからシャマルに頼みがあるんだが……」

「了解しました、マイマスター」

「なんでしよう?」

俺は枕元のレイジングソウルを手にとって首に掛ける。

束ねている髪をレイジングソウルの紐の外へと出し、少し図々しいかもな……と苦笑気味にシャマルに頼んだ。

「タオルと歯ブラシと歯磨き粉……予備があつたら譲ってくれないか?」

レイジングソウルのナビの下、歯磨きセットとタオルをシャマルから譲ってもらった俺は洗面所にたどり着いた。

そこには既に先客がいた……ティアナである。

「あ……おはようございます右京さん」

「おはようさん。早いなティアナ」

「右京さんこそ」

俺はティアナの隣に並び、歯磨きをし始める。

すると、ティアナも同じように歯磨きを始めた。

しゃこしゃこという音だけが洗面所に響き、少しして2人して口の中を洗い流し、顔を洗う。

「そつえば右京さん、隊舎の中を出歩いて大丈夫なんですか？」

「さあな……六課にはしばらく世話になる予定だが、今はどうか知らん。はやくには部隊長室に来るように言われているが」

と言つても俺が直接聞いた訳ではなく、シャルマルから聞いたんだが。

それに、一体何の呼び出しなんだか……まさか、今更やつぱり六課に入れるのは無理でした……なんて言わないだろうな。

「ということはお右京さん、六課に入るんですか？」

「なんでそんなに嬉しそうなんだか…入る予定だよ、予定」

あくまでも予定の口約束。

俺自身は守るつもりだが、軍隊に入るといふのは口で言うほど簡単ではないだろう。

「ま、なのはの友達だから心配はしてないがな。それじゃ、はやてのところに行くてくるわ」

「私が案内しましょうか？」

「レイジングソウルがナビしてくれるから大丈夫だよ」

俺はティアナに背を向け、右手を上げて小さく振りながら洗面所から出た。

レイジングソウルのナビのおかげではやてのいる……と思われる部隊長室の前にたどり着いた。

現在AM5:38……はやては起きているのやら。

「はやて、右京だ。起きてるか？」

扉の向こうに向かってノックをしてから声をかける。

程なくして「入ってええよー」という声が聞こえたが……どうやって入るんだ？

ノブは見当たらないし、近付いて開くならノックの時点で開くだろうし……。

と、考えていたらいきなり扉が横にスライドした。

「ごめんな右京さん。ロックしてたん忘れてたわ」

部屋の中に苦笑しながら右手で謝罪のポーズをするはやてがいた。

俺は苦笑しながら「構わない」と言って部屋の中へと入り、はやての前まで行く。

デスクを挟んだ形で向かい合うとはやては苦笑を浮かべたまま、口を開いた。

「昨日言った右京さんのミッドでの戸籍や、隊員として来る為の紹介文…隊員の証たる隊員証やねんけどな。作ること自体は問題ないんやけど……最短でも2日は掛かってしまうんや。その間の右京さんの行動のことで少し話があつてな」

なるほど、別に隊員になることは問題ないのか。

約束を反故にされたらどうしてくれようかと内心考えていたが、無駄になってよかったな。

「その間は監禁でもするのか？」

「そんなことせえへんよ。ここに来る新人隊員が一足早くに見学に来るって六課の人間にはもうメールで伝えてある。だから、隊舎の

中を歩き回ってくれてもかまへんし、なんならミッドを観光してくれてもええよ」

ただし監視付きでと言っただけは笑った。

メールなんて一体いつ送ったのやら。

監視付きとはいえ、町に出てもいい上に隊舎内を歩き回っても問題ないとは……信頼されていると捉えておくか。

「さつき会ったティアナは俺がその新人隊員だと知らなかったみたいだが……」

「送ったのはほんの数分前だから、見てなかったんとちゃうかな？あ、そうや……もうすぐフォワード陣の訓練が始まる時間やし、見学に行ってみたらどうやろ？」

訓練か……確かに訓練の内容は気になるし、新人隊員として入ったら俺もすることになるだろうから見ておきたいな。

ならば善は急げだ。

「ああ、そうさせてもらう。外に出たい時にはレイジングソウルに連絡してもらえばいいか？」

「そうやな、うん、それでええよ」

「それじゃ、失礼する」

なんとなく、右手で敬礼するとはやても笑いながら敬礼を返してく

れた。

俺も小さく笑い、部屋から退室し、適当に通路を歩く。

「あ、右京さん」

「ん？フェイトか」

その途中でフェイトとバッタリあった。

んー、やっぱり見たことがあるんだよなあ……。

「えっと……何か付いてる？」

「ああ、悪い、そういう訳じゃないんだ」

どうやらジロジロと見すぎたらしく、フェイトがキョトンとして自分の体を見下ろしたり、顔を触ったりし始めた。

俺は一言謝り、聞きたいことを聞くことにした。

「なあフェイト。悪いがティアナ達が訓練する場所まで連れて行ってくれないか？」

「私がナビしますが？」

「訓練時の集合場所でも地図に書かれてるのか？」

「いえ、そこまでは……」

レイジングソウルがはやてから受け取ったのはあくまでも地図。

どこかの部屋に向かうなら問題ないが、集場所なんて書いてないし、俺が行っていいという確証はない……いや、歩き回ってもいいとは言われてるが。

「あはは……うん、いいよ、案内してあげる。こっちだよ」

俺とレイジングソウルのやり取りに小さく笑みを零したフェイトは俺の前に立って歩き始めた。

……その方向が俺が歩いてきた道だったのは少しショックだったがな……知らない内に離れていたようだ。

「右京さんとなのはって、いつ出会ったの？」

フェイトの案内でティアナ達の集場所に向かっていく最中、フェイトがそんなことを聞いてきた。

いつ……と聞かれると俺は1、2ヶ月前としか答えられないんだがな……さて、どう答えたものか。

……よし、逆に聞いてみるか……質問に質問を返すのは好きじゃないが。

「フェイトはいつ出会ったんだ？」

「え？私は……九才の時だよ」

九才ってーと……俺が3、4回目に見た時か。

なのはにどうすれば話を聞いて貰えるか？という質問を受けた時と布を渡した時、確かなのはは小学三年生…九才くらいだったはずだ。

「ちょっと離れ離れになった時期もあったけど……それからはなのはとはやてとずっと一緒に……大切な親友です」

少し照れくさいのか頬を淡く染めたフェイトの笑顔は、可愛らしさと美しさを兼ね備えた笑顔だ。

離れ離れになったという言葉と今の笑顔で思い出したことがある。

俺はフェイトを一方的に知っている……なのはに布を渡した時に見た金髪の少女。

あれがフェイトだったのだろう。

「……そうか」

「はい……あ、私も言ったんだから、右京さんも教えてほしいかなのはにいつ出会ったの？」

どうやら誤魔化されたことに気付いたようで、フェイトはムスツとして下から俺を見上げてきた。

天然で無防備なのか、狙ってやってるのか……前者だな、確実に。

さて、どう言うべきか……と考えているとロビーのような広々とした場所に辿り着き、出入り口の外にはティアナ達となのはの姿が見えた。

「さあな……なのはに聞けば分かるんじゃないか？案内ありがとな」

「右京さん教えてよー……もう」

俺は誤魔化しながらフェイトに礼を言っ出て出入り口の外へと向かった。

後ろから苦笑気味のフェイトの声が聞こえたので、思わず笑ってしまった。

「さ」というわけで、今日は右京さんとみんなまで模擬戦をしてもらいます」

【はいーい】

「ちよつと待て」

なのは達に合流し、訓練を見学したいと言った。

”見学”をしたいと言ったハズなんだが……。

「どうしたの？右京さん」

「どうしたのじゃねえ。なんで”見学”つつたのに”体験”になつてんだよ」

「ダメ？」

「ダメつてワケじゃないんだが、説明はしてくれ」

そしてなのはがした説明はこうだ。

俺は既に機動六課に配属……入隊することは決まっている。

今は一足早く見学に来た新人隊員扱いだが、はやてから訓練を受けさせてもいいと言われている。

レイジングソウルにガジェットを破壊する場面は見せてもらったが、やはり自分の目で見たい。

俺の戦闘力を見たところ、陸戦ランクAAは固いので、フォワード陣と多対1の模擬戦を行っても大丈夫。

後々やるんだから今のうちにやっちゃおう。

ということらしいが……納得できん。

だがフォワード陣はやる気満々でセットアップしているし、場所もいつも模擬戦をする訓練フィールドに来ているらしいし、やるしか

ない空気だ。

「しかし、訓練フィールドという割に、何も無いな……」

「ふっふっふ……甘いよ右京さん。シャーリーお願い！」

「はい！」

シャーリーと呼ばれたメガネをかけた茶髪の女性がPCのキーボードを叩くような行動をする。

すると、何もなかったハズの訓練フィールドがたちまち廃墟のような場所になった。

ホログラムか？とも考えたが、どうやら違うようだ……ビルとか瓦礫とか触れるし。

ミッドチルダの科学力はスゴいな。

「驚いた？これが、六課自慢のバーチャルフィールドだよ」

なのはが俺の隣まで歩いてきて自慢気に言った。

「ああ、驚いた。こりゃあ楽しい模擬戦ができそうだ」

あんなに嫌がっていたのに、模擬戦が楽しみとは俺も現金な奴だと思っ。

リアルで触れる廃墟……隠れたり、瓦礫を使ったりとより実戦に近い模擬戦が出来るに違いない。

更に、今から始まるのは俺にとっては未知の戦い。

ただか魔導師歴1日の俺が、フォワード陣に一体どれだけ食らいつけるか……いや……。

食らいつくしてやるぞ。

「フォワードのみんなは準備万端みたいだし、右京さんも準備してね？」

「ああ」

離れていったなのは言葉に短く返し、俺は胸の蒼を右手で握る。

模擬戦……つまり、ケンカってことだよな。

全く、俺はいつからバトルマニアになってしまったのか。

もし理由があるとすればそれは十中八九、大牙との殴り合いなのだが。

「行くぞレイジングソウル！！セットアップ！！」

「スタンバイレディ」

俺の体を瑠璃色の光が包み、服装がバリアジャケットへと変化する。

光が消えた後に自分の姿を確認する……手甲に棍と最初の装備か……どうやらこれがファーストフォームのようだな。

手に持つ棍をクルクルと回しながら、体の周りに生き物のよつに動かし、両手でしっかりと握ってフォワード陣に向ける。

俺も相手もやる気は充分、準備も万端。

「それじゃあ、右京さん対フォワード四名の模擬戦……」

勝敗条件は……全滅したら負けでさせたら勝ち。

「スタート!!」

なのはの言葉により、たった今、ケンカ模擬戦が始まった。

入隊する前の過ごし方〜一日目〜前編（後書き）

番外編を書くとしたら

短編集

希望されたもの

何かの作品のパクリ

うーむ、したいことが沢山……。

なんて、今から番外編の話は早いですね。

次回はフォワード陣との模擬戦！！

戦闘描写は書くのも見るのも好きな作者でした。

入隊する前の過ごし方〜一日目〜中編（前書き）

修正しました。

自分が一番楽しみました

テンション上がりすぎて、何を書いたやら……

戦闘描写は難しいですが、楽しいです。

皆様も楽しんで貰えるかは不安ですが…

それでは第八話をどうぞ

入隊する前の過ごし方〜一日目〜中編

↳ No side

右京がフォワード陣と模擬戦をしようとしていた同時刻。

部隊長室にて、はやてはとある人物と通信をしていた。

はやての目の前の空間に浮かぶ画面に映っているのは……

「右京さんの件、ありがとうなクロノ君」

『構わないさ』

フェイトの兄であり、機動六課の設立に協力した人物……クロノ・ハラウン提督である。

はやてが右京の戸籍や隊員証、紹介文を頼んで人物である。

「でも正直意外やわ……クロノ君のことやから」そんなこと出来るわけないだろう！」とか言うんやと思うたのに」

ぶっちゃけた話、はやては次元漂流者である右京を六課に入れると言った時は絶対にクロノは反対すると思っていた。

とは言っても、はやては無理やりにもクロノに納得させるつもりでいたし、最初にレイジングソウル提供の戦闘シーンを送っていたので、高い戦闘力や低い魔力を盾にするつもりでもいたのだが。

しかし、実際ははやての想像とは違い、一言の否定もなくクロノは右京が六課に入ることによしとした。

しかも隊員証や紹介文などははやてが頼む前にクロノが自分で言い出したことなのだ。

『あの動画を見せて貰ったところ、彼の人柄も戦闘力も問題はない。次元漂流者ではあるが、はやての言うとおりなら彼のいた世界はそう簡単には見つからないだろう……それに隊長陣も彼自身も入ることに異議を唱えていないなら何も問題はない。何よりも……』

機動六課に必要なのは彼のような人間だ……と。

クロノはそう言って笑った。

「そっか……うん、わかった。右京さんの件、よろしくなクロノ君」

『任されたよ』

その言葉を最後に、クロノの映っていた画面が消えた。

その瞬間、はやては座っていたイスに深く座り直し、ハア……と息を吐いた。

クロノの言った理由は打算的で、言うほど人柄は見ていないように感じた。

確かに部隊保有ランクにも、お偉い方の目にもさほど余裕がない今、右京のような低ランク良戦力は望ましい。

はやてが右京を引き入れた理由の中には当然、そんな考えも含まれている。

「それでも……それだけやないんよ？」

誰にでもなく、はやては呟く。

なのはの嬉しそうな顔を見た。

エリオのお兄さんと慕う姿を見た。

キャロの右京に褒められて照れる姿を見た。

三人に笑顔を向ける右京の姿を見た。

屋上で戦い、お互いに似たような笑みを浮かべる右京とザフィーラの姿を見た。

そんな姿を見てしまつては引き離せなくなるではないか。

なのはに至つては十年ぶりに会つた好きな人なのだ。

親友の為、部隊の為とはやては呟く。

「……右京さんか……」

はやての前に画面が現れ、何かを映す。

それは、右京がエリオとキャロの2人を褒める場面。

その場面を見て、はやては微笑ましそうに……どこか羨ましそうに
呟くのだった。

「お兄ちゃん”って……こんな感じかな」

〔No side out〕

「でえええい!!」

「はああああ!!」

エリオとスバルの2人が左右から突っ込んでくる。

叫び声を上げる2人を見た俺は棍を縦にして斜めに構え、2人の攻
撃を待つ。

すると2人はいきなり左右に分かれ……間からオレンジの光が5つ
飛んできた。

「魔力弾です」

「見れば分かる」

抑揚のないレイジングソウルの声に答えながら、俺は右方向へと跳
んで魔力弾を避ける。

しかし、着地点にはスバルが右手を振りかぶって待っており、俺が着地するタイミングで右ストレートを繰り出した。

「でえええい！！……ってあれ！？」

しかしスバルの拳は空を切り、俺はスバルの頭上のビルの壁に、横向きに着地した。

何てことはない。ただ、着地する場所を棍で突き、棒高跳びのように跳んだだけだ。

「まず1人！！」

「させません！！」

「おおっと！？」

隙だらけだったスバルを攻撃しようとしたら、エリオが突っ込んできた。

当たるわけにはいかないので、すぐに壁を蹴ってエリオの槍を避けて地面に着地する。

そのまま後ろのスバルとエリオを無視してティアナ達に向かって走る。

さっきの魔力弾はティアナだろうし、キャロの強化は厄介だ、先に潰せば楽になるだろう。

「くっ!!」

ティアナが顔をしかめながら魔力弾を数発放ってきた。

俺は走る速度を緩めることなく、一発を右手で弾き、残りも棍を振って弾いた。

「嘘!?!」

「本当だよ!!」

驚愕の表情を浮かべるティアナとキヤロ。

まだ少し2人と距離があるが、それも後数秒で縮まるだろう。

「まずは……ティアナから潰させてもらおうぞ!!」

「でやあああ!!」

「なに!!?!」

ティアナに向かって走っていると突然エリオが右側に現れ、手に持つ槍を振るってきた。

咄嗟に左へ跳ぶことで槍を避けることに成功し、壁を背にしたが……まさか、もう追い付くとはな……どんな足の速さだよ。

「クロスファイア」

「ちっ……」

「シユ トー!!」

今度はティアナから魔力弾が飛んできた。

後ろは壁、前にはエリオがいるので俺はその場から高く飛び上がることで避けたのだが……それが間違이었다。

「一撃ひつとおう!! デイバイイイイン……」

なんとスバルが右手の前に青い光を作り出して振りかぶりながら、青い道の上を走ってきたのだ。

今俺がいるのは空中……完全に死に体だ。

「プロテクション」

「くっ!!」

「バスタアアアアア!!」

瞬間、俺は青い光の奔流に飲み込まれた。

〈ティアナside〉

「よし! 入った!!」

スバルの砲撃魔法は完璧なタイミングで右京さんを捉えた。

確かにあの動画……ガジェットと戦っていた時の右京さんはすごかった。

でも魔法を使ったのは二回……だから、魔法戦は慣れていないと予想した私達の作戦は早期決着。

本当なら、最初のクロスファイアシユート、もしくは囷だったスバルがエリオの一撃で終わらせるつもりだった。

しかしそれは過小評価だった……右京さんの身体能力は予想以上で、エリオの速さがなければ、私がキャロが撃墜されていたかもしれない。

「ありがとうエリオ……エリオ？」

「油断しないでくださいティアナさん……」

「まだなのはさんから、撃墜判定をもらっていません」

エリオとキャロの2人はまだ警戒態勢をとっていた。

確かにキャロの言うとおり、撃墜判定は出ていないけれど……空中にいたし、魔力ランクD程度の防御魔法でスバルの砲撃魔法を防ぎきれるとも思わない。

そう考えているとスバルがこっちに合流した。

「やったねティア！！気持ちいいくらい完璧に入ったよ」

「わかったからあんまりハシヤがない！」

スバルも合流したし、後は撃墜判定を待つのみ。

右京さんはビルの中に入ってしまっただし、こちらから姿は見えない。

それでも……今になって嫌な予感がする。

「ねえスバル……さっきの一撃、本当に入ったの？」

「え？そう言われてみれば……でも手応えはあったから、入ったと思うけど」

手応えがあつたなら、流された、避けられたということはない。

やっぱり気のせいかしら……。

〈ティアナ side out〉

「大丈夫ですか？マイマスター」

「なんとかな……それにしても、あれも魔法か……」

「はい。更に、あの少年の速度も魔法による強化です」

何でもアリだな魔法は……。

今の状況を確認するでしょう。

今いるのはビルの一室の中……スバルの魔法を受けた時にぶち込まれたようだ。

レイジングソウルが咄嗟にプロテクションを張り、両腕をクロスさせて顔をガードしたおかげか、少なくともは動くに支障がないくらいにダメージを抑えられたようだ。

バリアジャケットは所々埃が付いており、ガードした手甲には……なんと傷一つない。

棍も傷一つない……なんという強度だ。

「しっかし厄介だな……ティアナの射撃、スバルの一撃、エリオの速さにキャロの強化……」

はっきり言って勝てる可能性は低い。

それは俺自身の対魔導師戦の経験不足と魔法の知識の無さ……そしてあいつらのチームワークの良さだ。

さて、どうしたものか……。

「レイジングソウル、なんかないか？」

「あります」

「あるのかよ」

「あります。マイマスターの脳内に私の情報をインストールし、魔法の知識を得られれば、勝つ可能性は高まります」

ふむ……確かに魔法の知識を得ることは嬉しいな。

ここで勘違いしてはいけないのが、俺が得るのはレイジングソウルそのものの情報とプログラムされている魔法の情報であり、決して戦闘力が変わるワケではない。

だが、知っているのはそれだけで力だ。

とは言っても俺自身が訓練しないと魔力運用やらマルチタスクやらの関係で上手く魔法が使えないのだが……ここまですれいじソウルワルの説明である。

「んじゃ、早速やってくれ」

「それでは、私のコアにキスして下さい」

「よし、わかつ……ってなんでやねん」

思わず関西弁になってしまった。

レイジングソウルが言うには、口の粘膜に接触した方がインストールしやすいんだとか。

はつきり言ってかなり嘘臭いんだが……まあ仕方ないか。

「わかったよ……頼むぜ？レイジングソウル」

「はい……ドキドキ」

ドキドキと口（？）に出すレイジングソウルに苦笑しながら、右手甲に輝く蒼に口づける。

その瞬間、俺の頭の中に膨大な情報が入り込んできた。

ファーストフォーム、セカンドフォーム、サードフォーム、フルドライブ、オーバードライブ、カートリッジ、魔法、e t c …。

頭が割れそうな痛みというのもなく、俺はレイジングソウルから来る情報を全て受け入れていく。

一分か、十分か、一時間か……気付けば、情報のインストールは終わっており、俺はいつの間にか立ち尽くしていた。

「はふう……如何ですか？マイマスター」

「問題ない……レイジングソウル」

「はい」

「俺達は今ようやく、あいつらと同じ土俵に立った」

魔力が低く、多対1、知識もない状態で始まった模擬戦。

だが、知識を得た今ならある程度、魔法の行使ができるだろう。

「だが知識だけで、経験がないことには変わらない」

しかし、行使出来るようになっても、俺は自力で魔法を使ったことがない。

そんな奴が魔法を本当に使えるか？無理に決まってるだろ。

「だからサポートしろ。これは模擬戦ケンカだ……やるからには勝つ。しかし俺1人では厳しい……だからお前のサポートがいる」

レイジングソウルがいなかったら、さっきのスバルの一撃でやられていた。

俺1人では魔法はおろか、バリアジャケットすら展開出来ない。

「俺とお前は一心同体……俺が危ない時は助けてくれ……さっきみたいにな」

「……イエス、マイマスター。魔法の行使、咄嗟の防御はお任せ下さい。マイマスターのサポート、我が機能の全てを使って全力でやらせていただきます」

「頼もしいねえ……それじゃあ行くぞ？」

「イエス、マイマスター」

くなのはside)

「うわぁ……みんなも容赦ないですね」

「そうだね……」

シャーリーが冷や汗を流しながら呟く。

スバルのデイバインバスターは確かに完璧なタイミングだった。

それでも右京さんは両腕でしっかりガードしていたし、プロテクションも張られていた。

それに、右京さんの姿はビルに突っ込んだ際の土煙で見えない。

倒れているのか、無事なのかが分からなければ撃墜判定は出せない。

そもそも、負けるということが想像出来ない。

本当にあれで終わり？

「そんなことはないよね……右京さん」

私が呟くと同時に、ビルの煙が晴れる。

「嘘……」

「さっすが右京さん」

そこには、少しバリアジャケットに傷が付いているけど、しっかりと立っている右京さんがいた。

右京さんはビルから飛び降り、フォワードのみんなの前に姿を現す。

「さあ………模擬戦再開だ」

フィールドに、力強い声が響いた。

「なのはside out」

「行くぞレイジングソウル!!」

「イエス、マイマスター」

俺はフォワード陣に向かって走る。

狙いは当然……ティアナだ。

「スバル！エリオ！もう一度やるわよ!!」

「「おう!!」」

スバルとエリオがさっきと同じく突っ込んでくる。

そして左右に広がり、中央からオレンジの魔力弾が5発ほど飛んできた。

それをさつきと同じく右に避けるとやはり、スバルが殴りかかってきた。

「でやあああ!!」

「さつきとは違つんだよ!!」

「え?キヤアア!!」

「うわあ!?!」

俺は殴りかかってきたスバルの肩に手を置いて逆立ちをし、振り下ろすようにスバルの背中を両膝で蹴り飛ばす。

飛んでいったスバルはエリオを巻き込み、ビルに激突した。

「今度こそ倒れてもらうぞ!!ティアナ!!」

俺はティアナに向かって走るが……なぜか迎撃が来ない。

不自然に思いながらも俺はティアナへと迫り……

「ハアツ!!」

棍を右から横一閃に振るつた。

しかし、棍はティアナを捉えることなくすり抜けた。

「なっ!?!」

「幻術です。マイマスター、背後に魔力反応」

「厄介な！」

すぐに背後に振り返る。

そこにはフォワード陣4人が全員存在し、キャロの両手が桃色に光り、エリオの槍の先端も桃色の光を帯びた。

あー、そういえばキャロを途中から見なかったな…とか思っていたらエリオが物凄いスピードで突っ込んできた。

「ハアアアアツー!!」

エリオの槍と俺が接触した瞬間、土煙が巻き起こった。

「…………え？」

エリオが驚愕の声を漏らす。

まあ仕方ないのかもしれない。

なぜなら…………

「これが…………魔法か」

俺が槍の刃の部分を両手で握り締めて止めており、俺に直撃して
なかつたのだから。

土煙が晴れると、フォワード達やなのは達からも驚愕の声が聞こえ
た。

まあそんなことはどうでもいい。

「魔法つてすげえな……幻術とかできんのか……」

槍を掴んでいる両手が痛む……あれほどの速度で突っ込んできたん
だ、それを受け止めたら痛んで当然だろう。

「スバルの魔法もエリオの速さもすげえ」

俺の今までの常識が一切通じない未知の魔法。チカラ

「キャラの強化魔法もすげえ」

そんな魔法チカラと模擬戦ケンカが出来る。

それがこんなにも楽しい。

「楽しいねえ……大牙やザフィーラとの殴り合いとはまた違った楽
しさがある」

「うわっ!?!?」

掴んでいた槍をエリオごと投げる。

エリオは無事、ティアナ達のところへと着地した。

「こんなに楽しいんだ……燃えるよなあレイジングソウル」

「はい」

やってやるさ……俺の全身全霊で。

暴れてやるさ……俺の全力全開で。

魔法はレイジングソウルがサポートしてくれる。

俺はただ、力の限り暴れるのみ。

「行くぞ」

「はい」

両手の拳をガツンと音を鳴らせてぶつけ、体は正面に、腰を落とし、両手は曲げて引く。

「行くぞ！」

「はい！」

口は笑みを作り、目は4人を見据え、足に力を込める。

「行くぞお……！」

「はい!!」

ああ、これだ……この感じだ。

血が、心が、魂が燃える。

テンションはMAX、やる気は臨界点突破、負けるつもりなんか全くない。

あるのは……勝利への執着のみ!!

「最っつっつ高にハイって奴だあああああ!!!!!!!!」
「」

地が砕けるほどの跳躍。

俺が向かっているのはティアナではなく……エリオだ。

「速い!?!」

エリオは驚いたものの、しっかりと槍を構える。

「セカンド!!」

「スラッシュスタイル!!」

両手の手甲から一発ずつ薬莢が排出され、手甲と棍は斧へと姿を変

える。

俺は速度を一切緩めず、エリオに向かって斧を振り上げる。

「オラア!!」

「くっ!!」

エリオは槍で防いだが、軽い体重が災いしてか、上空へと吹き飛んだ。

すぐさま追い討ちをしようとしたのだが……

「クロスファイアシュート!!」

「フリード!ブラストフレア!!」

数発のオレンジの魔力弾と火球が飛んできた。

「しゃらくせえ!!」

俺は力の限り、斧を横一閃に振るい、火球をかき消し、魔力弾を弾き飛ばした。

「そんな!?!」

「なんつーデタラメな!!」

「レイジングソウル!!カートリッジロード!!」

「ロードカートリッジ」

斧から葉莖が二発排出され、刃が瑠璃色の光に包まれて巨大化する。俺は斧の刃を横向きにし、居合いのように構える。

「八花……………」

「やばっ！？キャロ！ブースト！！」

「は、はい！！」

「僕も手伝います！！」

空にいたエリオがティアナ達のところに着地し、ティアナとエリオが防御魔法を張る。

スバルがないのが気になるが、今は気にしない。

今は……………全力で振るうのみ！！

「一閃！！」

横一閃に斧を振るう。

巨大化した刃は2つの防御魔法に同時に当たり……………そして。

「……………そんな……………」

それぞれ4つの切れ目が走り、あっさりと裂けた。

斧の魔力刃はそのまま三人へと突き刺さり、戦闘不能へと追い込んだ。

「後はスバ…っ!？」

「でやああああ!!」

突然真横から来た攻撃に驚くも、俺は斧を盾にして防ぐ。

しかし、スバルの力が強かったようで数メートル吹っ飛ばされてしまった。

「決められなかった!?でも!!」

「あめえよ……ファーストフォルム」

「ノーマルスタイル」

斧から薬莖が一発排出され、手甲と棍へと姿を変える。

スバルはまた右手に光を溜めている……あの魔法か。

ならば、俺も見せてやるさ。

「レイジングソウル……”聖拳”行くぞ」

「オーライ、マイマスター」

俺は棍を投げ捨てて両手を曲げて引き、手甲から二発ずつ薬莖が排出される。

すると、両手の手甲が瑠璃色の光に包まれていく。

「「デイバイイイイイン……………っ！！」」

お互いに、同時に全速力で互いに向かって走る。

そして同時に右手を振りかぶり……………

「フイストオオオオオ！！！！」

「バスタアアアアア！！！！」

互いの光が放たれた。

瑠璃色と青の光がせめぎ合い、幻想的な光の粒子を撒き散らす。

やがて拮抗していた2つの光は……………青が瑠璃色を飲み込む形で終わった。

〈No side〉

スバルの前には煙が立ち込めていた。

手応えは充分……………自分の憧れの人であるのはと自分の魔法……………デイバインバスターとよく似た名前の魔法を使ったことには驚いたが。

スバル達の作戦は、ティアナ達が囷となり、一番破壊力のあるスバルが右京の死角から最大の一撃を入れるというものだった。

まさかティアナ達がやられると思わなかったスバルは、予想外の出来事からデイバインバスターではなく、普通に拳を振るってしまっただが、結果オーライだろう。

自分達が勝った。

「勝った……」

その喜びを飛び上がることで体で表現しようとしたスバル。

「やつ……っ!?!」

「セカンドお……」

しかしスバルは忘れていた。

右京は”両手”に魔力をチャージしたこと……

戦場では一瞬たりとも油断してはならないということ。

「インツツツパクトオオオオ!!!」

両手を上げて飛び上がっていたスバルに防ぐ術はない。

右京がいるのはスバルの左側の為、リボルバーナックルで防ぐこともままならない。

やがて瑠璃色の光の奔流はスバルの体を飲み込み、意識までも飲み込んだ。

それが意味するのは……

「そこまで！！フォワード陣全員の気絶を確認！！右京さんの勝利とします！！！」

不屈の魂の勝利であった。

〔 N o s i d e o u t 〕

入隊する前の過ごし方〜一日目〜中編（後書き）

右京「今回俺が使った魔法を紹介するぞ」

デイベインフィスト

瞬間最大威力はスバルのデイベインバスターに拮抗できるくらい。

スバルと違って手に魔力を纏わせ、両手にチャージすることを除けば、後はスバルのデイベインバスターと同じ。

分類上は砲撃魔法に該当。

しかし、射程も短く、今の魔力ではカートリッジを使ってもB＋くらいの威力しか出ない。

使うとテンション上がる。

右京「やっぱり魔力が低いと威力も低いらしいな……射撃魔法も使えるようになった方が良さそうだ。また、名前を考えてもらうことになるかもしれないが、その時は頼むぜ？」

入隊する前の過ごし方〜一日目〜後編（前書き）

プロットなしでその場のノリで書くことが俺のジャスティス

右京「行き当たりばったりなだけだろうが……」

今回で一日目が終わります。

右京「長い一日だったな」

という訳で流れ着いて！ミッドチルダ！第十話！

右京「違う！流れ着いて！ミッドチルダ！第九話、どうぞ。後書きにも軽く目を通してみてくれな」

入隊する前の過ごし方〜一日目〜後編

模擬戦を終えた俺達は、六課の食堂で朝食を取ることになった。

なので、俺達は今、食堂に向かっていた。

「右京さん、魔法戦馴れてなかったんじゃないんですか？」

「馴れてなかったさ。実際、幻術とかモロに引つかかったし、プロテクション、八花一閃とディバインフィストくらいしか魔法使っていないし。ああ、そういえば、作戦考えたのはティアナか？」

「ええ、まあ……」

やはり、あの模擬戦の動きは全てティアナの指示だったようだ。

射撃、援護のタイミングに幻術、スバルの一撃とかも全部計算か…。

「すげえじゃねえかティアナ。お前とは戦りたくないわ」

「いえ、そんな……」

クセになってきているらしく、右手はティアナの頭へと伸びて撫でる。

するとティアナは顔を赤らめて俯いてしまった……照れているようだ。

因みに俺達は既にバリアジャケットを解除しており、ティアナ達は

訓練着で俺はいつもの私服だ。

「右京さん」

「ん？どうした？キャロ」

キャロに名前を呼ばれたので声の方に……見下ろす形でキャロを見る。

なぜか左手がキャロに握られており、エリオも隣にいて……2人も真剣な表情だ。

何か、真面目な話なのだろうか。

「その……私達と一緒にご飯を食べませんか？」

「それから……その……」

別に飯くらい構わないんだが。

エリオが何かを言おうとして、キャロと一緒にモジモジとした。

そして、次に出てきた言葉は……

「その……お兄（さん／ちゃん）って言うてもいいですか!？」

「「はあ!？」」

なぜかなのはとスバルとティアナの三人がビククリしていた。

ところ変わって食堂。

俺はフォワード達と同じテーブルに座っており、テーブルの上にはこれでもかと山盛りになっているスパゲティやサラダ、様々なパンやコーンポタージュといった料理が並べられていた。

「お兄ちゃん、はいどうぞ」

「ああ、ありがとなキャラ」

キャラから小皿に分けられたスパゲティとサラダを受け取る。

結局俺はキャラとエリオの兄発言を了承した。

初めから駄目なんて言つつもりもなかったし、藍蘭島にいた時も何人かから兄と言われていたしな。

「それにしても……」

チラッとスバルとエリオの2人の前を見る。

そこには山盛りの……スパゲティやらサラダやらパンやらがあった。

因みに座っている場所だが、俺の左隣にキャラ、その隣にエリオが座っており、右側にティアナ、その隣にスバルという感じだ。

「……………あれ、入るのか？」

「気持ちは分かりますが……………まだお代わりしますよ」

「マジで!？」

ティアナが疲れたような表情でそう教えてくれた。

あれでまだお代わりするとか……………スパゲティなんかマジで山だぞ山。

あの体の中のどこに入るんだ……………特にエリオ。

「まあいいか……………いただきます」

「……………いただきます」

「きゅくる〜」

こうして、俺のミッドチルダでの初めての朝食が始まった。

↳ N o s i d e ↵

「うっ〜いいなあ、右京さんごはん……………」

「まあまあ」

右京とフォワード達の座るテーブルに羨ましそうな視線を送ってい

るのは、スターズ分隊の隊長、高町なのは。

そのなのはを宥めているのは、ライトニング分隊の隊長、フェイト・T・ハラオウンである。

その2人と同じテーブルに座っている機動六課部隊長、八神はやてはとリインは、なのはに苦笑している。

「私もお兄さんと一緒にごはん食べたいですう〜」

「お昼か晩御飯の時なー」

リインも羨ましそうな視線を送るので、はやてはリインの頭を撫でながら解決策を呟く。

はやてがふと、右京達のテーブルを見てみるとそこには楽しそうに談笑しながら食事をしているフォワード達の姿。

右京はスバルとエリオの皿の上のものがなくなるのを見計らって、また食べ物盛り、手渡す。

その姿があまりにも自然に見えたため、はやてはクスリと笑ってしまった。

「むう……いいもん、晩御飯は一緒に食べるもん。ところではやてちゃん、右京さんの入る部隊とお部屋は決まったの？」

「右京さんはやっぱり、ライトニングに入ってもらおうよ。部屋は…
…どないしょー……」

はやての答えに不満そうにするのはとは対照的に嬉しそうな表情のフェイト。

しかし、まだ部屋は決まっていないという感じの言葉を聞いたのはは、ニツコリと笑った。

「じゃあ右京さんは私達の部屋に……」

「ダメ」

「即答!？」

なのは意見は即座に却下された。

いくら好意を向けている男性とは言え、年頃の男女が一緒に住むのはダメだと2人は首を振る。

それに、なのははフェイトと同じ部屋にいるのだから……と二回目になる説明を受けた。

因みに、エリオはまだ年齢が低い為、キャロと同じ部屋で過ごすしている。

「うう……じゃあ、せめて近くの部屋に……」

「それも考えたけどな、新人が隊長陣の近くってのはどうかと思うんよ。と言っても、一人部屋にするっていうのも、他の隊員から不満が来るかもしれへんし……」

うーん、と唸りながら三人は思考する。

もともと機動六課は48名の偶数だったので、二人部屋で均等に分けることができていた。

そこに右京が入る為奇数となり、一人部屋になってしまう。

これが位の高い人物ならまだしも、右京は三等陸士という設定になる為、不満が出る可能性がある。

ならば三人部屋にするのはどうか？

しかし二人で丁度いい広さなのに、もう一人入れたら狭くなるのでは……ベッドを二人で使えば大丈夫なのだが、大人二人では窮屈な思いをするだろう……大人二人……。

「……あ……」

三人は同時に右京とフォワード達のテーブルを見る。

正確には、エリオとキャロの二人を見た。

大人二人では厳しいなら、子供との相部屋ならどうか？

「ライトニングの二人は右京さんに懐いてるし、喜びそうやな」

「そうだね。それに、右京さんはフォワードに入る予定だし……」

「私と同じライトニングになるんだし、三人で親睦を深められるし……」

「」「よし、これでいい」「」

こうして、右京、エリオ、キャロの三人の預かり知らぬところで部屋割りが決められた。

〔No side out〕

朝食を終えた俺達は再び訓練フィールドに来ていた。

今この場にいるのは俺、フォワード4人+1、なのはと……

「右京つつたな。あたしはヴィータだ」

「シグナムだ」

「喜喜 右京だ。よろしくな、ヴィータ、シグナム」

以上の8人+1だ。

フォワード達はこれから訓練を始めるらしく、俺は見学する。

念の為、もう一度言うが”見学”をする。

なのに……

「フタツキ……先ほど、お前とフォワード達の模擬戦の動画を見せてもらった」

「そうか…それで？」

「私と模擬戦をしないか？」

グツと拳を握り、どことなく期待した眼差しを向けるシグナムがいた。

おかしいな……俺は訓練を見学すると言ったはずなんだが、なぜ模擬戦を進められているのだろうか。

「また始まったよ……バトルマニアめ」

ヴィータの呟きが聞こえた……シグナムはバトルマニアらしい。

つまり、俺と同じ人種か。

「それは魅力的な話だが……また今度な」

「む、なぜだ？」

「カートリッジが心許ないんだよ……予備を持ってないから、補充できてないんだ」

ファーストフォルムの装弾数は両手甲に六発ずつ……列車で一発ずつ、模擬戦で三発ずつ使ったので、残り二発ずつ。

セカンドフォルムは装弾数は六発であり、列車で二発、模擬戦で三発使ったので残り一発しかない。

「だから今は勘弁な。その代わり、近い内に必ず模擬戦することを

約束する。俺もお前と戦いたいからな」

「仕方ないか……わかった、また日を改めよう」

話がついたところで、俺は訓練をしているのは達の方を見る。

訓練内容は……基礎的な体力や反射神経などを上げることがを主にしているようだ。

体力を上げればそれだけ活動出来る時間が延びるし、反射神経を上げれば相手の攻撃に反応出来るようになる。

そんな基礎的な訓練が終われば、次は魔法を使った訓練に入る。

なのはの放つ魔力弾を避け続けたり、なのはに一撃を当てようとしていたり模擬戦じみた訓練をしている。

あ、スバルが直撃した……どうやら訓練で体力がなくなってきて注意力が散漫になってきているようだ。

この出来事の三十分後、ティアナの魔力弾がなのはに何とか命中し、訓練は終了した。

訓練の感想だが……見ている分にも、恐ろしくハードだと感じた。

そして昼食の時間、俺はなぜかエリオ、キャロと一緒にはやて、フイトと同じテーブルに座っていた。

「えっと……」

「あの……」

エリオとキャラは緊張しているのか、そわそわと落ち着きがない。

はやては部隊長で、フェイトは二人の上司だから仕方ないかもしれないな。

「で、話ってなんだ？」

「右京さんが隊員として入隊する時の話を少しな」

ふむ、確か最短で2日……つまり明後日には新人隊員として入隊することになる可能性がある。

しかし、それなら俺一人でいいはず……エリオとキャラを呼ぶ理由が分からないな。

「右京さんはフォワードとして入隊し、分隊はフェイトちゃんこのライトニングに入ってもらおうことになる……因みに、コールサインはライトニング05になる」

「ホントですか!?!」

なるほど、それで二人も呼んだのか。

二人も嬉しそうな声を上げているし、拒否される心配はなさそうだな。

「それともう一つ」

フェイトが右手の人差し指を立てて微笑を浮かべる。

まだ何かあるらしい。

「これは今日からお願いしたいんだけど……三人が良ければ、同じ部屋に住んでほしいんだ」

「僕はいいですよ」

「私も大丈夫です」

そして4人の視線が俺に集中する。

エリオとキャロなんか目をキラキラさせて、期待の眼差しを向けているし……まあ断るつもりはないんだがな。

「二人がいいなら断る理由はないよ」

「決まりやな」

こうして、俺は今日から二人と同じ部屋で暮らすことが決まった。

……医務室暮らしと思っていたから嬉しい誤算だったな。

午後の訓練は夕方の5時までみつちりと続いた。

この訓練も俺は見学していたのだが、その間、シグナムからしつつく模擬戦に誘われていたのは想像に難しくないだろう。

つつく、カートリッジが補充出来ればいつでもやるつつってんのに……。

訓練を終えたフォワード陣が次に行うのは、書類提出……事務的な作業だった。

フォワードに入るからには俺もやることになるのだろうか……。

「俺……事務仕事ってやったことないんだよな……」

「私が教えましょうか？」

「悪いなティアナ……頼むわ」

という流れでティアナに事務仕事を教えてもらうことになった。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だ。

しかし、問題が発生した。

ティアナの説明はとても分かりやすいのだが……俺はミッドチルダの言葉が全く分からないのだ。

「……ミッド語……頑張って覚えるか」

「あ、確認するのは私とヴィータ副隊長だから、日本語で大丈夫だよ右京さん」

なのはの言葉に安心しつつ、俺はしばらくの間、ティアナから事務仕事の説明を受けていた。

そして夕飯。

俺はなのは、フェイト、はやて（リン）、ヴィータと同じテーブルで食事を取っていた。

因みに夕飯はビーフシチューとクロワッサン、オニオンサラダだ。

「昼もパンだったよな……ひょっとしてミッドチルダには米がないのか？」

「そんなことはないよ？ただ、はやてちゃんがたまに地球の料理を作ってくれるから、その時くらいしかご飯は出ないかな」

部隊長が直々に作ってんのかよ。

聞けば、はやては料理が得意であり、感覚を忘れない為に時々腕を振るっているんだとか。

しかもギガウマらしい……とはヴィータ談……ギガウマってなんだよ。

「ふむ……んじゃ、今度厨房借りてなんか作るかな」

「お兄さんは料理出来るですか？」

「食べる程度には作れるさ」

俺の呟きに反応したりインの言葉に作れると返す。

藍蘭島ではよく作っていたからな……藍蘭島か……。

俺は……いつ、帰ることが出来るのだろうか。

「右京さん？どうかした？」

「……何でもないよ。このビーフシチューめえな」

キョトンとしたなのはに何でもないと返し、ビーフシチューに舌鼓を打つ。

……あれ？ビーフシチューも地球の料理じゃね？

時間は一気に飛んで現在22:17。

俺はエリオとキャロに手を引かれ、二人の部屋まで来ていた。

二段ベッドが一つに勉強机が2つ……トイレが一つ……充分一人暮らしが出来る広さだ。

「ベッドは二人で埋まるから、俺は床で……」

「お兄ちゃんは私と寝ましょう」

「「まてまてまてまて」」

エリオと二人して右手を前に出し、キャロにツッコミを入れる。

この娘は羞恥心はないのか？いや、別に何かするつもりもないし、一緒に寝るのは構わないんだが。

「お兄さん、僕と寝ましょう」

「エリオ、お前もか」

いや、男同士だからキャロ以上に問題ないんだが。

因みに二人共、それぞれピンクとイエローのパジャマを着ている。

俺は変わらず私服だ……替えの服を買わないとダメだな。

「お兄ちゃん私と！」

「僕と！」

「ジャンケンしろジャンケン」

全く、いつの間にこんなに懐かれたのやら。

まあ、嫌われるよりはマシだが………そういえば、なのはも俺に好意があるようだったな。

……自分で考えるとイタク思えるな………自意識過剰な奴だな俺。

「勝ちました!!」

「負けた……」

どうやら考えている間に勝敗が決したようだ。

ジャンケンに勝利したのは……

「エへへ……」

キャラだった。

俺はキャラに腕枕をしており、キャラが使っていた枕を借りている。

しかし、エリオの落ち込みようは見えていられなかったな………そんな

にも俺と寝たかったのだろうか。

そんなことを考えながら、キャロの頭を撫でてやる。

「お兄ちゃん……」

喜ばれた。

それにしても……落ち着くな。

この静かな空間で自分以外の体温を感じるといっことはこころも落ち着くのか。

いつの間にか、部屋には2人の寝息だけが小さく響いている。

「ホント……お子様は寝るのが早いことで」

ベッドに入ってからほんの数分で寝てしまった2人の寝息を聞きながら笑みを浮かべる。

そうだ、はやてに三人で寝られるような大きいベッドを頼んでみよう。

そうすれば、あんなに落ち込むエリオやキャロを見なくてすむだろう。

まあそれは後日の話だ。

今は……

「お休み……よい夢を」

この温もりの中で微睡ウトウトむととじやう。

入隊する前の過ごし方〜一日目〜後編（後書き）

他の作者様がよく自キャラと喋っていたのでつい前書きでやってしまった。

前書きで右京に何かやらせたい

魔法を使ったら、後書きで魔法の説明をさせるのに……

前書きで右京にやらせたい、やってほしいことがあれば何なりと！

入隊する前の過ごし方〜二日目〜前編（前書き）

戦闘がないとテンションが上がらない……というわけで、右京と会話をしたいと思います。

右「断る」

いきなり断られた…まあいいや。

今回はとある人物と邂逅します。

右「誰かは見て確かめてくれ」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第十七話！

右「ちがあう！！流れ着いて！ミッドチルダ！第十話！どうぞ！」

因みに、プロフィールも1話に数えられています。

入隊する前の過ごし方〜二日目〜前編

AM5:08……俺は暖かいものを腕に抱えながら起床した。

まあ、暖かいものとはキャロのことなのだが。

「ん……あふ……」

上半身を起こして屈伸をしながら欠伸を一つ。

日が登りきっていないらしく、部屋の中は薄暗い。

今更だが、この部屋の二段ベッドは上がキャロ、下がエリオとなっている。

なので、ベッドから下りようとしたのだが……

「ん……う〜……」

キャロに右手をしっかりと握られており、下りることが出来ない。

見ている分には微笑ましいのだが、今は早く洗面所に行きたい。

「すぐ戻る……だから離してくれな」

小声で、左手でキャロの頭を撫でながら呟くと、キャロは右手から手を離してくれた。

実は起きているのでは？と考えたが、くしくしと目をこする辺り、

寝ているようだ。

そんなキャラを見て小さく笑いながらベッドから下りる。

そして歯磨きセットとタオルを持って洗面所へと向かった。

勿論、レイジングソウルを首にさげて。

〈ティアナside〉

数分前に起きた私は今、洗面所へと向かっている。

その間、私は昨日の模擬戦のことを考えていた。

昨日の模擬戦……私達対右京さんという形で行われた模擬戦は右京さんの勝利で終わった。

魔導師初心者で、希少技能レアスキルもなく、魔力が少ない上に一人だったのに私達は負けた。

確かに身体能力が高いことは認めるが、はっきり言ってしまえば、右京さんは”それだけ”だ。

実際、最初から後半まで私達が押していた。

それなのに、最後の最後で逆転されてしまった。

魔力弾を手（正確には手甲）で弾いたり、フリードの炎をかき消したりとデタラメな行動もあったけど、負けるなんて思わなかった。

「やっぱり、油断したからかな……」

油断したから……言い訳ね。

敗因としては、相手を見くびっていたこと……

「あの斬撃魔法……確か、”八花一閃”って言ってたっけ」

あの魔法を防ぎきれずに三人いつぺんに撃破されたことよね。

あの魔法がどういうものかは知っていたハズなのに……ブーストしてもらった私とエリオの防御魔法はあっさり切り裂かれた。

1mmたりとも刃を通しちゃいけないなんてね……一撃必殺とはよく言ったものだわ。

でも、受けてみて分かったことがある。

あの魔法は見た目に反して威力がそれほど高くないのだ。

なのに、なぜ一撃で沈められたか……それは、接触時にバリアジャケットも切り裂かれ、体に直接受けたから。

よほど防御魔法に自信がない限り、あの魔法は防御してはいけない。

「それに射撃魔法は一度も使っていない……次、模擬戦をやる時は私達が勝つ」

「そりゃあ楽しみだ」

突然聞こえた声に、思考の海から現実に戻される。

その声の主は……当然ながら右京さんだった。

昨日と同じように、しゃしゃしゃという音だけが、洗面所を支配する。

数分後、2人で口の中を洗い流し、顔を洗ってタオルで拭いた。

そこで、私はなんとなく聞いてみた。

「右京さん」

「ん？」

「また今度、私達と模擬戦やりませんか？」

「やだね、絶対お前らとはやらねえ。特にお前とは絶対やらねえ」

あっさりと断られてしまった。

右京さんはバトルマニアだと思っていたから、正直意外だ。

しかも私とは絶対にやらないって…。

「どうして私なんですか？スバルみたいな才能も、エリオやキャロみたいなレアスキルもない、凡人の私を……」

「才能？レアスキル？よくわからんが、んなもん関係ねえよ。お前には作戦を考えられる頭と、正確な射撃の腕がある……幻術だつてある。確かにスバルの一撃、エリオの速さ、キャロの強化は厄介だが、それを纏め上げ、正確な援護射撃が出来る奴が、俺が一番恐いね」

私が驚いたのは仕方ないことだと思う。

右京さんはたった一度の模擬戦で、私達のことをよく分かってきていたのだから。

何よりも、私のことを誉めてくれているのだから。

「だからよ、自分を凡人なんて言うな。天才と呼ばれる奴らは、一見始めから何かが出来ると思われがちだが……その実、血のにじむような努力をした者達のことだと俺は思う。」天才”という言葉は、その努力を否定する”悪口”なのさ。いいじゃないか凡人で凡人には凡人の生き方や誇りがあるんだから」

それに、俺だって凡人だ……と言って右京さんは笑った。

右京さんの言葉は、私の内の悩みを吹き飛ばすようだった。

そうだ、凡人の私にだって誇りがあるんだ。

私の……ランスターの弾丸はどんなものだって撃ち抜ける。

それを証明する為に、私は頑張つて努力しているのだから。

「ありがとうございます右京さん」

「なんでお礼を言われたんだか……どういたしまして、”先輩”」

そう言つてニヤリと笑い、右京さんは私の頭をクシャクシャと撫でてから、洗面所から出て行った。

……そういえば、兄さんもあんな風に頭撫でてくれたっけ。

そんなことを考えながら、私はスバルのいる自分の部屋に向かった。

〈ティアナ side out〉

部屋に戻ってみると、2人ともまだ眠っていた。

「レイジングソウル、今何時だ？」

「現在、AM5:32です」

どうやら、思っていた以上にティアナと話し込んでしまったようだ。確か早朝訓練は6：00からだったな。

「2人とも朝だぞー起きろー」

「は〜い……」

パンパンと両手を叩きながら少し大きめの声で言うと、2人とも起きてくれた。

全く同じタイミングで、同じ動作だったのはびっくりしたが。

「ほら、キャロ、おいで」

「ん〜…」

二段ベッドの上にいるキャロを呼ぶと、四つん這いでこちらに向かって来た。

そのキャロを抱き上げ、床に下ろす。

幼い身に早起きは辛いらしく、まだフラフラしているが、早く着替えてシャキツしてもらわないと訓練に遅刻してしまう。

「ほら、シャキツとしろ。訓練に遅刻するぞ〜」

「ん〜…」

起きるどころか、いつの間にか出てきたエリオとキャロは俺の足に抱きついてきた。

懐かれているのは嬉しいのだが……仕方ない。

「ふう……いい加減にしろー!」

「いたっ!？」

「きゃっっ!」

俺の怒号と共に、2人の小さな悲鳴と、ゴチンツという音が部屋の中に響いた。

「おはようございます……」

「おはようさん」

「おはよ……2人とも、どうしたの?そのタンゴ」

「眠気覚ましです……」

「遅刻しないための処置です……」

「は?」

キャロとエリオの2人の頭には、ギャグでしかみないようなタンコブが出来ていた。

それを見たスバルが疑問の声を上げ、2人が説明したのだが、訳が分からなかったのか、ティアナとスバルの2人は首を傾げている。

因みにフリードは俺の頭の上にいる……タンコブはついていない。

「みんなおはよ〜」

【おはようございます!~!】

「おはようさん、なのは」

そうこうしている内になのはが来た。

手には紙袋を持っている……一体何が入っているのやら。

「なのは、その袋はなんだ？」

「これ？これは右京さんへのプレゼント」

実際に聞いてみるとなのはは満面の笑みを浮かべ、俺に紙袋を渡してきた。

その中身を確認すると……大量のカートリッジが入っていた。

「……ありがたいが、なぜカートリッジ?しかもこんなに……」

「昨日シグナムさんに右京さんのカートリッジが心許ないって聞かされてね、シャーリーに用意してもらったんだ」

いや、俺が言いたいのはまだ隊員じゃない俺にカートリッジを渡しても平気なのか？ということなんだが……。

「あ、はやてちゃんの許可はあるよ」

あんの狸……部隊長の自覚あるんだろうな。

まあいいか……信頼されているとおこづ……カートリッジは嬉しいしな。

「それじゃあ今日の早朝訓練を始めようか。右京さんはどうする？」

「今日も見学させてもらおうさ。頑張れよ、お前ら」

【はい……！】

うん、いい返事だ。

訓練が終わったのは8：45。

今は食堂で朝食をとっているのだが……。

「和食や……」

「和食だね……」

「和食だあ……」

上から、はやて、なのは、フェイト。

そう、今日の朝食は完全な和食。

白飯、何かよくわからない魚の焼き魚、玉ねぎと玉子の味噌汁、ニンジンと里芋と糸こんにゃくと鶏肉の煮物という献立だ。

因みに、俺はフォワード四名と一緒にテーブルに座っている。

「見たことない料理ですね……」

「でもおいしそう」

「スバルさん、よだれ……」

「うう……ニンジン……」

料理を不思議そうに見るティアナと、料理を見てよだれを垂らすスバル、スバルのよだれを注意するエリオに、ニンジンを嫌そうに見ているキャラ。

因みに、スバルとエリオの白飯は山盛り、魚も山盛り、味噌汁と煮物は鍋ごと持ってきているというフードファイター顔負けな食卓となっている。

「さてと、食べますか。いただきます」

【いただきますー!】

みんな、箸を持って食べ始める。

うん、なかなか美味くできたな。

実はこの料理達を作ったのは俺だ。

白飯をどうしても食いたくなつた俺は、訓練の途中で食堂へと向かい、料理を作ろうとしていたおばちゃんに交渉して朝食だけ作らせてもらったのだ。

因みに、味見をしたおばちゃんからは及第点を貰っている。

「このスープ美味しい……」

「わ、この細いのなんだろう？パスタとかじゃないみたい」

「焼き魚も美味しいです」

「ニンジン……」

「いや、キャロ。お前ただけニンジン嫌いなんだよ……食べてくれないと、作った身としては悲しいんだが」

【え!?!】

俺の言葉に反応したのはフォワード陣だけじゃなく、なのは達隊長達（いつの間にかヴィータもいた）や、ちらほらという他の隊員達だった。

他の隊員達からは「あの人が作ったんだ……」「ていうかあいつ誰？」
「例の早めに来た新人隊員だろ？」などという会話が聞こえる。

本当に伝えていたんだなはやて……。

「この料理、右京さんが作ったの!？」

「いつの間に来たんだなのは。俺が全部作ったよ……隊員分作るの
は骨が折れた」

なのはは目算7mは離れたテーブルにいたのに、どうやって一瞬で
ここまでできたのだろうか……。

因みに、俺が作ったとは言ったが、一人で作るにはあまりにも隊員
の数が多いので、途中でおばちゃんに手伝ってもらった。

「右京さん、料理できたんだ」

「なんでそんなに嬉しそうなんだよ、なのは。元いた世界では日常
的に作っていたからな……食べる程度には作れるつもりだ」

実際、俺の料理の腕はよく聞くプロ級なんて言うほどじゃない。

ただ、普通に食べるし、普通に美味しいというレベルだ。

勿論、料理の他の家事全般は出来る。

「だから、食べないってのは悲しいな」

「……………」

苦笑しながらキャラロの方を見つめる。

キャラロはニンジンと俺の顔を交互に見ており、困ったような表情をしている……なら、食べざるを得ない状況にしてやるか。

俺はキャラロの煮物からニンジンを箸でつまみ上げる。

それをキャラロの口元まで持っていく。

「ほれ、あーん」

【はい!?!】

俺とフリード以外の全員（隊員は除くがレイジングソウルは含む）がビックリした。

いや、そんな驚くことか？あー、でも女性はあーんやら姫抱きやらに憧れを抱くとはよく聞くな。

でも実際の所、全体の何%が本当に憧れているんだろうな……どうでもいいが。

「あの……お兄ちゃん……何を……」

「何って”あーん”だよ”あーん”。ほら、早く食べないと周りか

ら凝視されたままだぞ？」

俺がそう言つと、キャラが周りを見回す。

はやてとスバルは興味深そうに、フェイトとエリオは顔を赤くして、なのはとティアナはどこか羨ましそうに俺達を見ている。

キャラは恥ずかしそうだが、俺は別に恥ずかしいなんて思っぢゃない。

「ほらほら、早く食べないとこのままだぞ？」

「う……わかりましたよ……あ、あーん……む」

キャラは恥ずかしそうにしながらも、ニンジンを口にする。

少し顔をしかめるが、よく噛み、飲み込んだ。

「よくできました」

「恥ずかしいです……」

「「キャラ」「」

「「わー……うわー……」

「「いいなあ」「」

「羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい羨ましい妬ましい……」

キャロの頭を撫でる俺、恥ずかしそうに俯くキャロ、黄色い声を上げるはやてとスバル、顔を真っ赤にしているフェイトとエリオ、羨望の眼差しをキャロに送るなのはティアナ、呪詛を呟くレイジングソウル……。

これは……あれだな、カオスって奴か？

つーかなのはは分かるが、なんでティアナまで羨ましそうにしてるんだか。

……俺、ここに来て三日目のハズだよな…？

「なあ、右京」

「なんだ？ ヴィータ」

「また飯作ってくれ。はやてには負けるけど、お前の飯も美味いからな」

「そいつはどうも。最高の誉め言葉だ」

「はやて、外に出たい」

「いや、いきなり言われても…」

朝食を終えた後の休憩中に俺ははやくにそう切り出した。

ミッドチルダは俺にとって未知の世界だ。

そんな世界に興味を抱かないほど、俺は冒険心がないわけじゃない。

「はやくは監視付きなら、ミッドチルダを観光してもいいと言ったじゃないか」

「言つたけど…今は監視に付けられるような人はおらんし…」

ああ、それじゃあ観光は無理そうだな。

監視が付けられないなら、観光に行く条件を満たせないのだから。

「それじゃあ仕方ないか……諦め」

「別にいいんじゃないかな」

「「フェイト(ちゃん)?」」

諦めようと思ったところで会話に入ってきたのはフェイト。

突然の乱入に、俺もはやくもキョトンとしてしまう。

「右京さんなら大丈夫だと思うよ?子供じゃないんだし」

「いや、そういう問題やないんやけど……」

「？」

ああ、ダメだ……この娘天然だ。

しかも組織とかに絶対向いていないタイプだ。

「……はあ……まあええか」

「いいのかよ」

「いいと思うよ。私は今から外回りに行くから、途中まで一緒に行こうよ」

フェイトが俺の右手を両手で握り、ニッコリと笑う。

どうすればいい？という意味を込めて、はやてを見してみる。

はやては苦笑して肩をすくめるだけだった。

「それじゃ……途中まで頼むわ」

「うん」

こうして、俺はフェイトと一緒にミッドチルダの首都、クラナガンへと向かった。

フェイトが車を運転出来るのは意外だったな。

「これ、右京さんに渡してって、はやてから」

クラナガンへとつき、車から降りた俺はフェイトから数枚の紙幣をもらった。

なんでも、この紙幣はミッドチルダの通貨であり、この数枚の紙幣だと、日本円に換算すると、二万ほどらしい。

通貨の読み方は分からないが、フェイトのデバイスから通貨の読み方やクラナガンの地図をレイジングソウルに送ってもらったので、間違うことはないだろう、多分。

「私の外回りの仕事が終わるのが大体17:00くらいだから、その時間になったら、ここで待っててね」

「俺の保護者かお前は……まあ似たようなもんだな。了解しましたよフェイト隊長殿」

俺は冗談めかして言いながら敬礼をする。

フェイトは少し不満そうにしたがすぐにニコリと笑い、車を走らせた。

さて…現在の時刻は10:12……待ち合わせまで約七時間か。

どうやって時間を潰そうか……幸い、科学力はともかく、地球の文化とさほど変わらないようだ。

地図を見る限り、デパートとかゲーセンとかあるし……因みに、地図はレイジングソウルから発せられている画面に映っており、場所や店の名前は日本語に訳してある。

資金は二万……さて、どうしようか。

「ねえねえそこのお兄さん」

「あん？」

急に声をかけられた俺は、声のした方……後ろを振り返る。

そこにいたのは、水色の髪をショートカットにした女の子だった。

「なんだ？」

「この辺でさ、赤い髪の女の子と銀髪の眼帯した小さい女の子見なかった？」

「いや、見てないが……」

「そっかー…どこいったんだか」

ガクツと肩を落とし、頭をポリポリかく女の子。

どうやら、その女の子達とはぐれてしまったようだな。

「良かったら、探すのを手伝うぞ？幸いにも、時間はあるからな」

「ホント？助かるよー」

さっきのガクツと肩を落とした時の暗い表情から一転、笑顔になる女の子。

よく表情が変わる奴だ。

「俺は喜喜 右京ってんだ。あんたは？」

この時の俺は、知らなかった。

「あたし？」

この出会った女の子が…

「あたしはね……」

後に敵として出会っなんて……全く、知らなかった。

「セイン”って言うんだ。よろしくね、右京さん」

入隊する前の過ごし方〜二日目〜前編（後書き）

というわけで、ナンバーズとの邂逅でした。

因みに、自分はセツテが大好きです。

セツテ可愛いよセツテ。

さてと、次回の前書きは、右京に何してもらおうk

右「ディバインフィストオ!!!」

ぎゃーす!!

入隊する前の過ごし方〜二日目〜後編（前書き）

今回はかなりグダグダです……途中で方向を見失いました。

右京「ノリで書くからだ……今回はキャラ崩壊が含まれているかもな」

苦手な方は御用心。それでは流れ着いて！ミッドチルダ！第二話！

右京「違う！！流れ着いて！ミッドチルダ！第11話！どうぞ！」

入隊する前の過ごし方〜二日目〜後編

↳ No side

ここはどこにあるのか分からない、研究所の一室。

その一室の中にある大量のモニターの前に、紫色の髪の白衣を着た男性が座っており、傍らには秘書のような格好をした女性がいた。

「ドクター。チンク、セイン、ノーヴェの三人が見当たらないのですが……」

「ああ、彼女達なら、ミッドチルダの首都^{クラナガン}へお出かけさ。たまには外の空気を吸いたいたいんだそうだよ」

ドクターと呼ばれた男性の言葉に、女性はなるほど小さく頷いて納得の意を示す。

ふと、女性は男性がモニターから全く目をそらさないことを不思議に思い、男性が見ているモニターに目を向ける。

そこには、ガジェットを”何の魔法も使わずに”破壊する男性と、同じ男性が”魔法を使って”ガジェットを破壊する場面が映っている。

「これは……三日前の映像ですか？」

「そつだよーノ。この青年……なぜか気になるのだよ」

女性……ウーノは男性の言葉に首を傾げる。

ウーノには、モニターに映る青年が、男性の興味を持つような存在には見えないのだ。

確かに、魔法を使わずにガジェットを破壊する力は凄まじいが、このように身体能力が高いだけでは男性の興味対象にはなり得ない。

検知された魔力も低いの一言であり、ますます興味対象になる理由がない。

「自分でも分からないのだがね、なぜか気になる……この青年……興味とは違う、この感覚……私はこの感覚を”よく”知っている」

男性にとってはよく知るハズの感覚なのに、それが男性には分からない。

習知している未知の感覚……それが、彼から普段の笑みを消していた。

「是非とも、彼と話してみたいものだよ。そうすれば、この感覚も分かるかもしれないね」

不意に、男性の視界に別のモニターが入る。

そこに映るのは自分の娘と言っても過言ではないセインと……今さつき話題に出た青年が映っていた。

（No side out）

「どの辺りではぐれたか分かるか？」

「えーと…わかんない」

セインはあはは…と笑って自分の頬をポリポリとかく。

ふむ…情報はゼロに近いな…大雑把な容姿しかわかっていない。

「なあ、その女の子達の名前は？」

「赤い髪の娘がノーヴェで銀髪の眼帯娘がチンクだよ」

「ノーヴェとチンクだな…よし、覚えた。それじゃあ、探すとしてどうか」

「二手に別れる？」

「いや、仮に俺が見つけてもチンクはともかく、ノーヴェは判別できないかもしれないし、警戒されるかもしれない。だから、一緒に探そう」

「あいよ」

というわけで二人を探すために歩き始めた。

ミッドチルダの首都と言うだけあって、人の数は非常に多い。

ノーヴェとチンクの二人を目で探しつつも、ついついクラナガンの街も眺めてしまう。

ビルの造形や、店の内装、車やバイク……所々に地球以上の科学力を感じつつも、感想は”地球とあまり変わらない”だった。

そういえば、昼食を取ってないな……二人を見つけたら、適当な店に入って食べるとしようか。

「うーん、いないなあ……チンク姉はともかく、ノーヴェはすぐ見つかると思ったのに」

「あそこの歩道橋にでも行ってみるか？高いところなら見つかるかもよ」

「うし、それで行こう！」

見た目通りというか、なかなか活発な奴だな。

俺達は目に見える場所にあった歩道橋まで行き、その上から見える範囲の街を眺めて見たが……やはり人が多いので見つけられない。

「どうだ？」

「ダメ、見つからない……そっちは？」

「こっちもダメだ……もしかしたら、どこかの店内にいるのかもな」

まだ街を全部見た訳じゃないから何とも言えないが、可能性はある。

もしくは二人もセインを探しており、互いに奔走してすれ違っているかだ。

「そういえば、通信出来るような物を持ってないのか？携帯とか」

「通信機の類はラボ……じゃなくて家に置いて来ちゃって」

やはり、自分の足で探すしかないようだ。

さてと、どこを探したもんかね。

「セイン、三人で一緒に歩いた道を覚えているか？」

「え？うーん……ちょっとだけなら」

「充分だ。がむしゃらに歩くよりはいい。そこに行くぞ」

セインの案内の下、やってきた場所は、デパートの前だった。

まずはここでウィンドウショッピングをしたんだとか。

「デパートの中も見てみるか？」

「うん、見てみる」

というわけでデパートの中に入る俺達。

中は……うん、やっぱり地球とそれほど変わらないな。

一階は幼児向けの服や、ネイルサロンなんかがある。

デパートの階層の店舗が知りたかった俺は、エスカレーターのとこ
ろにあったデパートの見取り図を確認する。

このデパートは八階建てであり、二階は化粧品売り場、三階はスー
ツなどの正装を売っており、四階は若者向けの衣服が、五階はぬい
ぐるみや玩具といった子供向けの階になっている。

六階は本や文房具、画材などが売られており、七階には飲食店が並
び、八階はイベントブースのようだ。

「お、二階に迷子センターがあるな……行ってみるか？」

「そうだね」

〈ノーヴェ side〉

「まったくセインの奴……どこいったんだ？」

「デパートにいるかと思ったんだが……姉の予想が外れたな……」

ああ、チンク姉がしょんぼりしてる……可愛……じゃなくて。

セインの奴……見つけたらぶっ壊してやる。

『迷子のお知らせです』

「迷子？」

チンク姉が放送を聞いて顔を上げる。

そうか、セイン以外にも迷子になった奴が……

『……にお住まいのチンク様、ノーヴェ様。二階、迷子センターにて保護者のセイン様とウキヨウ・フタツキ様がお待ちです』

ブチっと頭の中のケーブルが切れた気がした。

ウキヨウとかは知らないが……セインが保護者だと？

「ノーヴェ……姉は今、とてつもなく大声を出したい」

「奇遇だなチンク姉……あたしもだ」

二人で大きく息を吸う。

そして、怒りと共に吐き出した。

「セエエエエイイイインー!!」「」

くノーヴェ side outく

「妹が世話になった。セインとノーヴェの姉チンクだ」

「いやいや、気にしなさんな。喜喜 右京だ。右京と呼んでくれ」

「わかった。では右京も、私のことはチンクと呼んでほしい」

「了解だ、チンク」

あの放送の数秒後、チンクとノーヴェがやってきた。

チンク達も俺達のような思考に至り、デパートにいたそうだ。

因みにセインだが、たった今頭に巨大なタンコブをノーヴェに作られて昏倒した。

ノーヴェはセインの右手を持って、引きずりながらこちらに歩いてきた。

「あんたがウキヨウだな？あたしはノーヴェってんだ」

「喜喜 右京だ。よろしくなノーヴェ」

「?ウキヨウ・フタツキじゃないのか?」

「ミッドチルダの読み方に合わせたただだよ。喜喜 右京が正しいんだ」

「面倒だな……右京でいいよな?」

「ああ」

チンクとノーヴェとも合流できたし、自己紹介もしたし。

時間は……13:23か……昼には少し、遅いかな。

「チンク、ノーヴェ。良かったら、一緒に昼飯でもどうだ?」

「昼食か?私は構わないが……」

「あたしら金持っていないぜ?」

「心配すんな、奢ってやるよ」

「おやおやあゝ、ひょっとして右京さんナンパしてる?」

いつの間にか復活したセインがニヤニヤしながらそんなことを言うてきた。

セインの言葉を聞いたノーヴェが少し顔を赤くしてセインの頭を叩いた……ノーヴェは純情らしい。

「そうだな、この綺麗どころ三人と飯が食えるなら、飯代くらい安

いもんだ」

と、半分冗談で言ってみたんだが……。

「む、私は綺麗なのか？」

「あはは、右京さん上手いねえ」

「バ、バカ言っな！あ、あた、あたしがキ…キレイだなんてそんな……」

三者三様の反応をしてくれた。

あゝ、なんかノーヴェを見てると和むわ…今更だが、ノーヴェってスバルに似てるな…まあ気にする必要もないか。

「で、お嬢さん方は、俺と昼食を共にしてくれるのかな？」

「うむ、姉は構わんぞ」

「あたしもいいよ」

「あ…あたしも…別に」

「ありがとよ。それじゃ、七階に行くか」

なぜかナンパした形になったが、俺達は飲食店が建ち並ぶ七階に向かった。

1人寂しく食うよりは、大人数の方がいいしな。

資金もあるし、四人分くらい問題ないだろう。

「ただしセイン。お前はダメだ」

「なんで!？」

やってきたのはファミレスのような場所。

デパートの中にある割には、店内はとても広く、ちらほらと家族連れを見かける。

メニューも、地球と遜色ない品揃えだ。

「ご注文はお決まりですか？」

「俺は、サンドイッチとコーヒー」

「私はハンバーグセットを」

「あたしオムライス！」

「あたしはカレーで」

それぞれの注文が終わり、確認した店員は奥へと引っ込んでいった。

料理も店員の対応も……なんだろうな、藍蘭島にいたからか、懐かしいと感じてしまった。

ファミレスなんて何ヶ月…ヘタすりゃ何年振りか。

「なあ右京…今更だが、本当に良かったのか？私達の間まで……」

「いって。気にすんなよチンク」

「そつだよチンク姉。右京さんがいって言ってるんだし、遠慮なく奢られようよ」

「お前は少し遠慮しろ！」

ノーヴェの右拳がセインの頭に突き刺さる。

この三人って姉妹なんだよなあ……途中で聞いた話だと、他にも何人か姉妹がいるらしいが。

その割には似てない……共通点と言えば、チンクとノーヴェの瞳の色が金色ということくらいか。

セインは青いが。

「お待たせしましたー」

そんなことを考えていると料理が来た……いや、早くないか？

「まあいいか……いただきます」

「？右京は何をしているんだ？」

「両手を合わせて、料理に頭下げてるね」

「なあ右京。何してるんだ？」

いつものように両手を合わせていただきますと言つと、三人からツッコミがきた。

どうやら、彼女達にはこのようなことをする概念がないようだ。

「これは、料理に対して、料理を作ってくれた人に対して感謝しているんだ。自らの糧となり、自らの力になってくれる食材、料理、作ってくれた人に”いただきます”という感謝を。食べ終わった後には”ごちそうさまでした”ともう一度感謝を。食べる側の礼儀だよ」

という説明をしたら、三人からへ〜という感心したような声が聞こえてきた。

そして、それぞれの目の前にある料理に向かって手を合わせ……

「「「いただきます」」」

と言つて一礼し、食べ始めた。

その姿に満足しつつ、俺も目の前のサンドイッチに舌鼓を打つのだつた。

お、タマゴサンドうめえな。

「「「「「ちそうさまでした」「」「」

しばらくして料理を食べ終えた俺達は同時に一礼した。

そしていざ会計。

「2、860円（日本語訳）になります」

ふむ、だいたいこんなもんだろうな。

店を出た俺達はデパート内を物色し始めた。

服も買ったかったし、色々と売ってる物も見なかったしな。

という訳でやってきたのは若者向けの服が売ってる店。

「右京さん服が欲しいの？」

「ああ、コレしか持ってないから……2、3着くらい買っつもりだ」

「じゃああたしが選んであげるよ」

俺の答えを聞くまでもなく、セインは店内に入ってしまった。

変なの選んだりしないだろうな……。

「昼食の礼だ、私も選んでやるっ」

「あたしも選んでいいか？」

「そういうことなら……んじゃ頼むな」

結局三人が選んでくれることになった。

セインは少し心配だが、2人なら大丈夫だろう。

という訳で三人が選んでくれた服だが。

セインが選んだのは、オレンジのパーカーに黄緑のＴシャツ、青いジーンズ。

チンクが選んだのは、フードの付いた白いノースリと黒いジーンズ。

ノーヴェは青い長袖に上着黒い半袖のＴシャツと灰色のジーンズ。

……なんで色違いとはいえみんなジーンズ選んだよ……まあ全部買ったんだが。

全部で6,380円（日本語訳）也。

「ありがとうよ、三人とも」

礼を言うと、セインとチンクは満足そうに笑い、ノーヴェは照れくさそうにそっぽ向いた。

それを見たセインがノーヴェをからかい、拳で黙らされたことは想像に難くないだろう。

現在16:48……もうすぐフェイトとの待ち合わせ時間なので、早く行きたいのだが……。

「兄ちゃん、痛い目見なくなったら、彼女達置いて失せな」

「じゃないと……痛い目見るぜ？」

「痛い目見たくないなら、早く消えなよ？ククク……」

「」「」「」……「」「」「」

場所は思いつきり街道、人気がないどころか、360°からガン見されている。

ていつか何こいつら？三人とも世紀末に出てくる雑魚みたいな格好してるんだが。

しかもなんで一人一回”痛い目見”って言ってるんだ？マイブームかなんかか？

ていつかもう見た目やらセリフやら雑魚臭やらなんかもう全体的に

……

「「古いな」「

【ぶぶっ】

ノーヴェと俺の言葉が被り、チンピラ以外のその場にいた全員が吹き出した。

小説やらマンガやらドラマくらいにしか見ないと思っていたチンピラが目の前にいる。

むしろ小説とかでも見なさそうな濃い奴らがいて、全体的に古くて……ダメだ、混乱して何が言いたいやら。

「おまつ…ふざけてんのか…！」

「いや、こっちのセリフだわ」

「いいから女の子置いてどっか行けよ…！ぶっ殺すぞ…！」

「うわ、嘔ませ犬の匂いが……」

「てめっ……殺す!!」

本音を言っているといきなり一人が殴りかかってきた。

遅いし、避けることも受けることも簡単だが、俺はそれを顔に受ける。

「っ……」

「「「右京!?」」」

「っはあ、調子に乗ってるからだ!!」

三人娘が俺を心配する声を上げ、殴った奴が嘲笑する。

その声が、イヤにかんに障る。

「てめえ!!右京に何しやがる!!」

「うるせえ!!女は黙ってる!!」

「お前が黙ってる」

「あばぶっ!!」

ノーヴェに手を上げようとした雑魚の頭にかかと落としを決め、地面が陥没するくらいの力で頭を踏みつける。

幸いにも、雑魚の頭は潰れなかったのでスプラッタなことにはなっていない。

「「なっ……」」

「「えっ?」」

雑魚2人が顔を地面に埋めた雑魚を見て啞然とし、三人娘はビツクリしている。

周りの人間もシーンとして、一言も喋らない。

「さてと……先に出したのはそっちだが……当然、手を出される覚悟もあるよな?」

「ふ……ふざけんじゃねえ!」

「ボコボコにしてやる!」

殴りかかってくる雑魚2人……ザフィーラに比べても、エリオに比べても、スバルに比べても……遅い。

2人の攻撃を体を低くすることで避け、一人の腹に左ストレートを突き刺す。

「ぐぶっ!」

そのまま地面に向かって打ち下ろすと、悲鳴を上げる間もなく沈黙した。

さて、後一人だと後ろを見てみると……丁度ノーヴェのハイキックが雑魚の首に決まり、雑魚が倒れるところだった。

「やるじゃねえかノーヴェ」

「右京兄！顔大丈夫か！？」

「ああ、こんくらい大丈夫……ん？右京兄？」

「あ、いや、その……」

俺の心配をするノーヴェの言葉に引っかけた繰り返してみると、ノーヴェの顔が赤くなった。

可愛い奴……と思った俺は正常だろう。

「時空管理局です！道をあけて下さい！」

「ヤッバ……チンク姉！ノーヴェ！」

どうやら誰かが通報したらしく、時空管理局が来たようだ。

しかし、セインの慌てっぷりはどうということだ？

「くっ……濟まない右京。私達は……」

どうやら、チンク達は理由は言えないが、時空管理局に会うわけにはいかないようだ。

正直問いただきたいが……俺を見てこんなにすまなさそうな顔をされては……な。

仕方ない。

「行けよ。こっちは何とかしてやる」

「右京兄……」

「右京さんごめん！」

「済まない……」

三人は苦しそうな表情でこの場から走り去っていった。

その直後、人垣を掻き分けて現れたのは……薄紫の長髪の女性だった。

「108部隊所属、ギンガ・ナカジマです。事情聴取の為、ご同行願えますか？」

「ああ、構わないさ」

「それでは、こちらへ」

「右京さん……！」

「ようフェイト」

「お久しぶりですフェイトさん」

「え……？あれ？」

ギンガの所属している部隊に連行された一時間後。

事情聴取を終えた俺とギンガのいる部屋にフェイトが血相を変えて入ってきた。

そして、俺とギンガの姿を見るや否や、急にキョトンとした。

「えっと……右京さんが捕まったって、はやてから連絡があったんだけど……」

「は？ちよつと街で絡まれてそつから騒ぎになってギンガから事情聴取を受けたただけだよ。はやてにもそう言ったハズだぞ？なあ？」

「はい、私も聞いてましたから、間違いないです」

「そつ……事情聴取は終わったんだよね？帰っても大丈夫かな？ギンガ」

「構いませんよ」

というわけで、案外あっさりと六課に帰れることとなった。

事情を全部話して、はやて達の知り合いだと言って確認が取れたら、すぐに解放とか……。

時空管理局……大丈夫なのか？

ここは帰る途中の車の中。

時刻は既に18:30を回っており、辺りをオレンジ色に染め上げている。

「ねえ、右京さん」

「うん？」

「どうして騒ぎなんか起こしたの？」

「そつだなあ……………」

不意に頭の中をよぎったのは、この世界にはいない弟分の言葉。

しばらく会えないかも知れない弟分の言葉を思い出し、少し嬉しくなる。

「男は女を守るもの」…それを実行しただけだよ」

「右京さんは誰かを守ったんだ？」

「そんな大層なもんじゃないかな」

「そっか」

フェイトは俺の言葉に満足がいったらしく、笑みを浮かべた。

そのまま静かに…互いに喋ることなく、暗くなりつつある道を進む。

帰ったら、なのは達に買ってきたものを渡さないとな。

そんなことを考えながら、俺は服の入った買い物袋とは別の買い物袋を見ていた。

…騒ぎの時に落として少しくしゃくしゃになっているが、大丈夫だよな？

↳ No side

「ただいまドクター」

「おかえり……楽しんできたみたいだね」

セイン達が訪れたのは、ドクターと呼ばれる男性のいる一室。

それは、沢山のモニターがあるあの部屋だった。

「あの青年はどうだった？」

「青年？ああ、右京さんのこと？いい人だったよ……ガジェットを破壊した人とは思えないくらい」

男性の言葉に、セインはニヤリと笑って返す。

その言葉に満足そうにした男性は、再び、青年……右京がガジェットを破壊する場面を見る。

「少々アクシデント（迷子）はありましたが、任務は問題無く完了しました。最後に戦闘力も垣間見ることもできました」

「それは、大きい収穫だ」

チンクの言葉を聞いた男性は、笑みを作る。

少しずつ、少しずつこの感覚が分かってきた。

しかし、まだ足りない……感覚を確固たるものにする何かが。

「あのさ……ドクター」

「なんだい？」

感覚がその確固たるものになる瞬間。

「あたしさ……右京兄を……その……仲間にしたんだ」

男性は椅子から勢いよく立ち上がった。

突然の行動に三人は驚くが、男性は気にすることなく、高らかに笑う。

「ふ…はは…ははははは！…ようやくこの感覚がなんなのかわかった！…そうだ！…私はこの感覚を知っていた！…なぜ気付かなかつた！…この感覚は”私そのもの”だったハズなのに！…」

男性の言葉が理解出来ない三人は、なんだコイツ？という目を向ける。

そんな冷たい視線を受けながらも、男性の言葉は止まらない。

「喜喜 右京…：私は君が欲しい！…」

「何言ってるんだアホドクター！…」

「ぐふあ！…」

男性の狂言は、ノーヴェの右足によってそれ以上紡がれることはなかった。

男性の言った欲しいとはどういう意味だったのか…：それは今のところ、誰にもわからなかった。

その日の夜、機動六課では、隊長陣五名とフォワード陣四名、リインとシャマルの11人は、えらく上機嫌だった。

その首もとには、それぞれ違ったペンダントが輝いていたという。

入隊する前の過ごし方〜二日目〜後編（後書き）

どうしてこうなった

どうしてこうなった

大事じゃないけど二回言いました

スカさんある意味爆弾発言

こんな調子で大丈夫か？

入隊！機動六課（前書き）

遅くなりました（スライディング土下座

右京「そのまま地面に足を擦らせてスネの皮がずる向けになってしまえ」

最近、右京が自分に酷い……

右京「こんな作者だが、生暖かく見守ってやってくれ」

グスン……それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第14話！

右京「ちがああう！！流れ着いて！ミッドチルダ！第12話！どうぞ！」

入隊！機動六課

クラナガン観光の翌日の a m 4 : 5 7 …… 起きると枕元に一つの封筒が置いてあった。

更に、部屋の扉の下にはダンボールが一つ…。

一体、いつ部屋に入られたのだろうか…… まあいいか。

「ふあ…… 〴〵…… 起きるにはほんの少し早いな…… 起きるが」

まだ完全に目覚めていない頭を軽く叩き、少しでも目覚めさせる。

因みに、隣にはエリオが眠っている…… まだぐっすりとな。

とりあえず封筒を開けて中身を確認する。

中に入っているのは、俺の管理局員としての隊員証と、クロノ・ハラウンとかいう奴からの紹介文…… 推薦状みたいなものか。

そして、俺の筋書きだ。

「出身世界は第97管理外世界”地球”。まだ未熟だが、将来性は高く、また、機動六課隊長陣とも知り合い。高町教導官に指導してもらおう名目で配属される新人隊員”…… ねえ……」

色々と無理があるんじゃないか？この筋書き。

普通の新人隊員なら、正規の訓練を他の隊員と一緒に受けるもんじ

やないのか？

ていうか、なのはって教導官だったのか……知らなかった。

とまあ色々ツッコみたいところはあるが、軍隊も管理局も知らない俺が言っても仕方ないだろう。

ただな、隊員証の名前がな……

「なんで二月になってんだよ……喜喜だっつの……」

思いつきり”二月 右京”ってなってんだよな……後ではやてに修正してもらうか。

ダンボールの中には、男性隊員が着ていた制服の上下と、ティアナ達が着ていた訓練着の上下が入っていた。

さて、確認もしたし……

「まずは顔を洗って、歯あ磨いて……さっぱりするか」

いつものように洗面所に行って、いつもいるティアナとたわいない雑談をしてから部屋に帰ってきた。

当然のように、子供2人はまだ寝ている。

今日はちょっと趣向を変えて、レイジングソウルに起こしてもらおうことにしよう。

「レイジングソウル、2人を起こしてくれ」

「イエス、マイマスター……2人とも起きなさい。後五秒で起きなければ……バラバラにしてしまいますよ？大体マイマスターと共に寝るなんて羨ましい妬ましい、五秒と言わず今すぐバラバラにしたい気分です。いや、気分と言わずに実行しましょう。ああ、安心して下さい、殺傷設定にしておきますから……マイマスターに抱かれた余韻に浸ったまま逝けることを誇りなさい、それではさようなら」

「おはようございますっっ……！」

「チツ……」

なんとという露骨な舌打ち……舌がないのにどうやって舌打ちをしたんだろうか。

というか、レイジングソウルに頼むのはやめておこう……ああ、エリオもキャラもあんなガクブル震えちゃって。

「起きたなら、早く顔洗って歯あ磨いてきなさい。もたもたしてる遅刻するぞ」

「は……はい」

逃げるように部屋から出て行く2人……そんなに怖かったか。

さてと……俺は今の内に訓練着に着替えるとしようか。

「嗚呼、流石はマイマスター……素晴らしい肉体美です……無駄な

く引き締まった筋肉が私の視線を花に集まる蝶のように止まらせ…
…ああ！なぜ首から外して布団に埋めて枕で蓋をするのですか！？
これでは見えません！！マイマスター！？マイマスターアアア！？」

（No side）

現在AM6：05……いつもの集合場所に集まっていたフォワード
四名は、なのはの隣にいる人物を見て、目を見開いていた。

その人物とは……言わずもがな、訓練着を着た右京である。

右京は慣れない敬礼をして、フォワード達の方をしっかりと見た。

「本日より、この機動六課に配属されました、喜喜 右京三等陸士
であります」

「右京さんはみんなと同じフォワード……ライトニング分隊に所属
することになります」

右京の敬語に違和感を感じるのか、なのはとフォワード達は若干苦
笑気味だ。

しかし、次のなのはの言葉でフォワード達は嬉しそうに顔を綻ばせ、
ライトニングの2人は2人でハイタッチをして喜んでいる。

少し前に知っていたことでも、実際に言われるとやはり嬉しいのだろう。

「今日の訓練は右京さんを入れた5人での初めての訓練：右京さん以外は前にやった、ガジェットガジェットの破壊訓練をしてもらいます。難易度も上がって、数も多くなってるから、気をつけてね？」

【はい！】

「了解だ」

元気よく返事をするフォワード達と、すっかり元の口調に戻った右京を見て、なのはは満足げに笑う。

そして六人＋フリードは、訓練場であるバーチャルフィールドへと向かうのだった。

（No side out）

今回の訓練のフィールドは、前回と同じく廃墟。

俺達5人はビルの屋上で、目標の数と自分達の実力を計算し、どう動くかを考える。ガジェット

「なのはの説明だと、俺達は20分以内に全40機のガジェットを

全て捕獲、もしくは破壊して全滅させなければならぬ」

「私達がやった時の五倍の数……しかも、能力は上がっているから以前に比べると難易度は段違い」

「目安としては一人につき八機、破壊か捕獲する計算だな」

情報は大体これくらい。

ガジェットの動きがどれくらい良いのかはまだ分からないが、すぐに分かることだ。

ティアナ達に聞けば、前は数が少なかったがAMFという技術により、苦戦したとか。

「ふむ……ティアナ、どう動く？」

「右京さん、スバル、エリオは前に出てガジェットを翻弄しながら、私とキャロが要所要所で援護……ですかね」

まあ、そんなところだろうな。

射撃にも援護にも向かない俺を後方に下げる意味もないし。

「俺に異論はない」

「僕もです」

「あたしも」

「私もありません」

「という訳だ。ティアナの考えでいい」

【了解！】

なぜか仕切ってしまった。

…俺、階級的にはティアナとスバルよりも下なんだがな。

〈ティアナside〉

もうすぐ、右京さんを入れた初めての訓練が始まる。

やることは単純…20分以内にガジェットの全機破壊or捕獲。

しかし、その数は40と多い上に、ガジェットの能力も上がっている。

私達の…私の実力が上がっていても、右京さんが入ったとしても…ちゃんとこなすことが出来るだろうか。

「なに不安がってんだ？」

「右京さん…」

右京さんは私の左隣に立ってクシャクシャと私の頭を撫でる。

「どうやら、顔に出ていたらしい。」

「まあ、俺という不安要素があるから、不安になるのは分かるが……」

別に、そういうわけじゃないのだけれど。

「安心しろって。俺達なら出来るさ。俺が暴れて、ティアナが援護……それだけでも勝てる」

「それは楽観的過ぎるんじゃない……」

「事実さ。お前は、お前が思っている以上に強い……俺が保証する」

右京さんはそう言って笑った。

私のことをそこまで評価してくれているなんて思いもなかった。

だから、私は期待に応える。

「はい……援護は任せて下さい」

「頼むぜ？リーダー」

「はい！」

訓練が始まった。

負けるつもりなんて全くない。

むしろ、なのはさんが驚くぐらいの速さで全機破壊か捕獲する。

「私達なら出来る……行くわよ！クロスミラージュー！」

「a i l r i b a c t」

「ティアナ s i d e o u t」

「N o s i d e」

「レイジングソウル！セカンドフォーム！」

「スラッシュスタイル」

右京の左右の手甲から二発の薬莖が排出され、手甲と棍が斧へと姿を変える。

そしてそのまま斧を左から横一閃に振るい、一気に3機のガジエツトを破壊する。

「でやあああー！」

右京の頭上をウイングロードを使って走っていたスバルがウイングロードから飛び降り、その勢いのままガジェットに向かって跳び蹴りをして1機破壊。

すぐに前進し、右手に装着されたりボルバーナックルでガジェットに殴りかかり、これも破壊した。

「ヴァリアブル……シュ ト!!」

ティアナはビルの上より、多重殻の誘導弾（魔力弾の上に魔力の膜を張る技術。難易度AA）で狙撃を行う。

誘導弾はガジェットのAMFを貫き、4機を一気に撃破した。

「サンダアア……レエエイジ!!」

エリオはビルとビルを繋ぐ通路の上から飛び降り、魔力変換資質（雷）によって帯電させた槍……ストラダを地面に突き刺す。

すると、エリオの周りに雷が発生して地を走り、2機のガジェットを破壊。

「フリード！ブラストフレア！」

「きゅく〜!!」

キャロもティアナと同じ位置からフリードの放つ火球を強化し、フリードは火球を放つ。

フリードの火球は4機のガジェットに向かって放たれたが、1機を

破壊するも3機に逃げられてしまう。

「アルケミックチエーン!!!」

しかし、逃げた先には魔法陣が存在し、そこから無数の鎖が出現、ガジェット3機を捕らえた。

ここまで僅か4分、ガジェットの数は25機にまで減っていた。

「数が多い……なあ!!」

右京が叫びながら斧を振るう。

その一閃はガジェットを1機切り裂き、2機目を破壊しようとするが、逃げられてしまう。

その逃げたガジェットは、エリオの刺突によって破壊された。

「やるじゃねえかエリオ!」

「はい!」

右京に褒められ、エリオは嬉しそうに笑顔を浮かべる。

ふと、右京が前方を向くと、スバルが3機のガジェットを追い掛けている。右京はなかなかに

標的を定められないようだ。

「エリオ、スバルとガジェットを挟み打ちにしる」

「わかりました！」

エリオは短時間自らの速度を上げる魔法、“ソニックムーブ”を使ってスバルの前方へと先回りする。

右京はそれを見届け、自分もスバル達に向かって走る。

「レイジングソウル！カートリッジロード！」

「ロードカートリッジ」

斧から薬莖が二発排出され、斧の刃が魔力刃で更に巨大化する。

スバル達を確認すれば、挟み打ちが成功し、ガジェットの動きが止まっていた。

「2人共どけえええ！！一撃……ひつさあつ！！」

右京の声を聞いたスバルとエリオはその場から飛び退く。

それと擦れ違うように右京がガジェット3機の至近距離まで……今から使う魔法の射程距離まで入った。

「八花……一閃！！」

横一閃。

魔力刃はAMFをものともせず……否、”AMFごと”ガジェット

を八分割した。

「レイジングソウル！カートリッジロード……！」

「ロードカートリッジ」

更に二発、斧から葉莢が排出される。

右京の前方には5機のガジェットが右京に向かってきていた。

それを見据えながら、右京は刃を空に向けながら斧を振りかぶる。

一度光を失った刃には再び、瑠璃色の魔力刃が輝いた。

「飛べ……！」

「クリティカルブレード」

右京が斧を全力で縦に一閃する。

すると、瑠璃色の魔力刃が斧から離れ、ガジェットに向かって飛んだ。……

飛んだ魔力刃はガジェットを1機破壊するだけに止まったが……

「ティアナあ……！」

「クロスファイアシュート……！」

ビルから飛んできた4つの魔力弾が的確に残りのガジェットを貫き、

破壊した。

ここまで計六分、ガジェットは残り15機。

右京は念話を使っていない為、さっきのティアナを呼ぶ声は恐らく、聞こえてはいなかった。

それでもタイミング魔力弾が飛んできたのは、少ない日数の中で彼ら育んだ”絆”が生んだチームワーク故にだろう。

「まだまだ行くぞ！！エリオ！スバル！止まんなよ！！」

「「おうー！！」

地上では前線三人が休むことなく走り回ってガジェットを追いかけ、時には破壊する。

「キャロ、向こうのガジェットを捕まえられる？」

「はい！アルケミックチェーン！！」

ビルの屋上にいる後衛2人は、前線三人が翻弄し、孤立したガジェットを破壊、もしくは捕獲する。

「（右京さん、右方向にガジェット！）」

「（わかった！！）」

時にはティアナが右京達前線に指示を出し、前線がそれに従って行動する。

それぞれが休むことなく、魔力を使い、体力を使い、ガジェットを破壊していった。

「みんなお疲れ様ー」

あれから数分後、訓練が終わったフォワード達は、なのはから労いの言葉を受けていた。

訓練の結果は、クリアタイム12分49秒、35機を撃墜し、5機を捕獲した。

右京はともかく、フォワード達の成長速度は凄まじいということが分かった。

「みんなスゴいね。ビックリしちゃった」

【ありがとうございます!!】

「なかなか楽しかったな」

こうして、右京が正式に機動六課に入隊して初めての訓練が終わった。

（No side out）

時間は一気に飛んで夕方。

書類提出をテイアナに教わりながら終わらせた俺は、はやてのいる部隊長室の前にいた。

「はやて、右京だ」

「入ってええよ」

部隊長のお許しが出たところで、部屋に入る。

今回はロックされている、なんてことはなかった。

「邪魔するぞ」

「邪魔するなら帰ってー」

「あいよー…ってなにやらせんだ」

はやての言葉にヒターンして部屋から出るところだった……危ない危ない。

「あはは、右京さんも結構ノリがええんやな。ほんで、どうしたん？なんか用事？」

「ああ」

俺ははやての前行き、朝、枕元にあった封筒を差し出す。

因みに、今の俺の服装は普段着だ。

「中に入ってる隊員証を見てみる」

はやては不思議そうに首を傾げたが、すぐに封筒を開けて中身を出した。

中身は俺が見た時と変わらず、俺の隊員証、クロノとかいう奴からの紹介状、俺の隊員としての筋書きが入っていた。

「いや、これ置いたん私やし、中身は知ってるけど………あ」

ほう、部屋の中に入ったのははやてだったのか。

はやては隊員証を持って確認すると、小さく呟いてやってしまったという顔をした。

「……すぐに訂正させてもらっわ」

「なるべく早く頼むわ」

「任しといて」

さて、要件も済んだことだし、俺は部屋から出ることにしよう。

っとその前に……。

「はやて」

「ん？」

俺は入口の前で止まり、はやての方を向き、名を呼ぶ。

はやてがこちらを見たことを確認し、俺は敬礼をする。

「本日から機動六課に配属されることになりました、喜喜 右京三等陸士です。短い期間ではありますが、宜しく願います」

「……機動六課部隊長、八神はやて二等空佐です。歓迎しますよ、右京さん」

自分で引き入れたクセに歓迎するも何もないだろう……とは言わない。

これはあくまでも、形式なのだから。

こうして、俺の機動六課……ミッドチルダでの生活は本当の意味で幕を開けたのだった。

入隊！機動六課（後書き）

右京「今回俺が使った魔法の説明だ」

名称：クリティカルブレード

セカンドフォームの八花一閃に使用する魔力刃を飛ばす魔法。

縦、横、斜めの向きで飛ばすことが出来る……分かり易く言うなら、シャーマンキングの葉が使う真空仏つ陀切り。

誘導性は皆無であり、速度もさほど速くないが、魔力刃をそのまま飛ばしているので面積は広く、密集地や密室で真価を発揮する。

しかし、八花一閃のような力（八分割）はないので、突破力は見た目ほどなく、威力も見た目ほど高くない（これは現時点での右京の魔法全てに言える）。

尚、分類上は射撃魔法ではなく、八花一閃同様に斬撃魔法に該当。

右京「あんまり使えない魔法だな。まあ俺が使える数少ない遠距離魔法なんだが……カートリッジの消費と威力が割に合わないな。魔力が上がれば、見た目通りの威力が見込めるだろう」

行く先は故郷？（前書き）

短いです。

右京「なら長く書く努力をしるよ」

返す言葉もございません……今回は、ちょっと書いてて混乱しました……自分が

右京「あれ？と思うかも知れないが、暖かい目で見てください」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第13話！

右京「違う！流れ着いて！ミッドチルダ！第13話！……って合ってる！？」

ふふん

右京「（イラッ）」

行く先は故郷？

「デイバインバスター！！」

「散開！」

【はい！】

なのはの砲撃魔法……デイバインバスターが放たれた瞬間、俺達フオワードは四方に散ることで避ける。

こんな始まり方で済まないが、今は早朝訓練の仕上げである”高町教導官”直々の回避訓練……シュートイベクションをやっている。

訓練を終えて満身創痍（俺以外）の状態でなのはの魔法を10分間避け続けるか、魔法をかいくぐってなのはに一撃を当てるという訓練だ。

ティアナの話では、前は術者が操作する誘導弾のみで行ったらしいが……

「アクセルシューター……シュート！！」

誘導弾が俺に向かってきたので、左へ避ける。

「デイバインバスター！！」

「うおおおお！？」

避けた先には桃色の光が飛んできていた。

俺は、以前したように棍で地面を突き、棒高跳びのように跳んで砲撃魔法を避ける。

そして、その勢いのまま、ビルの中へと入り込んだ。

……とまあこのように誘導弾以外も使っている訳だ。

ステージは廃墟……一番やりやすいんだろうな。

「（右京さん！無事ですか！？）」

「（大丈夫だ、ダメージは受けちゃいない。ティアナ、悪いが、各自の状況を教えてくれ）」

「（わかりました。ちょっと待って下さい）」

ティアナとの念話が一旦切れる。

説明していなかったが、このシュートイェイションという訓練だが、被弾すると初めからやり直しというリスクがある。

例えば残り一秒耐えればクリアとなる状況であっても、その一秒の間に被弾すれば、また10分間避けなければならぬ。

まあ、避け続けるのは性に合わないんだがな。

「（確認しました。私とキャラは一緒に、右京の左斜め向かいのビルにいます。エリオ、スバルもビルの影からなのはさんの隙を窺っ

て……あ、今スバルが」

「（確認した。ティアナはスバルの援護をしてくれないか？）」

「（わかりました）」

再び、ティアナとの念話が切れた。

ビルの外を確認すれば、スバルがウイングロードを駆使してなのはと立ち回っている。

……ように見えたが、よく見てみれば、誘導弾に追い回されて逃げているだけだった。

なのはが誘導弾の操作に集中していると考えたのか、エリオがなのはに突撃するも、それはなのはのプロテクションに防がれてしまった。

「エリオ！？……よかった、被弾は免れたか」

プロテクションに防がれてそのまま誘導弾を受けるかと思ったが、ティアナの魔力弾がエリオに近寄る魔力弾を弾き、エリオはすぐになのはから離れた。

動く誘導弾に精密に当てるとはな……やるじゃねえかティアナ……と内心で誉める。

さて、俺はどう動こうか。

速さだけなら、俺は魔法なしでもエリオより速く動けるが、それは

一直線に限る。

なのはが地面に立ってればいいのだが、生憎、空中にいる。

もしも攻撃が防がれてしまえば、俺はなすすべがない。

「……考えても仕方ないな。レイジングソウル、セカンドフォーム」

「スラッシュスタイル」

手甲から薬莖が排出され、手甲と棍が斧へと姿を変える。

ものは試した。

「（キャロ。ティアナ）」

「（はい）」

「（どうしました？右京さん）」

「（八花一閃を試す。突っ込むからティアナは援護を、キャロは突っ込んだ俺の攻撃が”成功しようがしまいが”鎖で捕まえて引っ張ってくれ）」

「（（わかりました））」

2人の念話による返事に頷き、俺はビルから飛び降りる。

すぐに誘導弾が飛んできたが、ティアナが魔力弾で弾いてくれたので、安全に着地できた。

そして上空のなのはを見据え、斧を居合いのよつに構える。

「レイジングソウル、カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」

斧から二発の薬莖が排出され、斧の刃に魔力刃が発生し、刃を巨大化させる。

右足で地面を強く踏みしめ、力を溜める。

「八花……」

ドンツという音と共に、跳躍する為に右足で踏みつけた地面がはぜる。

なのはは一瞬、目を見開くが、すぐにプロテクションを張った。

すでになのはは俺の距離……目の前だった。

「一閃!」

全力で斧を左から右へと横一閃に振るう。

しかし、振り切ることは出来ず……魔力刃はプロテクションにぶつかり、光の火花を散らしていた。

それはつまり……

「……どんだけかてえんだよ」

「それでも隊長だよ？右京さん」

俺の八花一閃の魔力刃が、1mmたりとも通っていないことを意味する。

軽く話しているが、俺は冷や汗をかき、なのははニコニコと笑顔を浮かべている。

空中にいるため、これ以上力を込めることができずに俺の体は落下を始めた。

そこになのは誘導弾が飛んでくるが……

「アルケミックチェーン……キャロだね」

「ご明察」

俺の後ろから伸びてきた鎖が俺に巻きつき、後方に引っ張った。

誘導弾は空を通り過ぎ、俺はビルの中へと引きずり込まれた。

そこにはキャロとティアナがいた。

「ナイス援護だ二人とも」

「えへへ……」

「ありがとうございます。でも……」

「ああ、八花一閃は利かなかった……キャロの強化をかければまだわからないが……二度も効かないだろうな」

今、こうして俺達が話し合うことが出きるのは、満身創痍の中でスバルとエリオの二人がなのはの注意を引き付けてくれているからだ。しかし、二人の限界は近いだろう……早くケリをつけなければ。

「……ティアナ、クロスファイアは最大何発同時に撃てる？」

「そうですね……六発ですね。それ以上は精度が落ちて誤射する可能性があります」

「そうか……充分だな」

「「え？」」

俺の言葉に疑問の声を上げるティアナとキャロ。

「レイジングソウル……サードフォルム」

「ガンズスタイル」

「スバルside」

右京さんがなのはさんに突っ込んで、前にティアナ達を倒した斬撃魔法を使った。

けれど、右京さんの魔法はなのはさんのプロテクションを斬り裂けなかった。

なのはさん凄い！と思いながらも右京さんの魔法が通じなかったことに愕然とする。

ブーストしたプロテクション二枚をあっさり切り裂いた魔法もなのはさんの前には通じない……前みたいにエリオが突っ込んでも多分通じない。

「（スバル。エリオ。聞こえるか？）」

「（お兄さん？）」

「（右京さん？聞こえるよ）」

そんなことを考えていると右京さんから念話 came。

正直、今も私とエリオはなのはさんの誘導弾から逃げている最中なので手短にしてほしい。

「（今から、俺とティアナでなのはを攻撃する。だから、ビルかどつかに隠れる。当たっても知らないからな）」

「（りょ……了解！）」

ティアナと二人で……一体何をするつもりなんだろう？

そう考えながらも私とエリオはそれぞれ別のビルの中に隠れた。

くスバルsideく

くなのはsideく

みんな隠れてしまった。

魔力反応だけで誘導弾を追わせることも出来ることは出来るけど、その場合は若干精度が落ちてしまう。

どうしようか……と考えた時、ビルの屋上に右京さん、ティアナ、キャラの三人を見つけた。

私はすぐに誘導弾を三人に向けて操作する。

そして、誘導弾が三人に当たる瞬間……三人の姿が消えた。

「やっぱり幻影……本体は……！」

下から一発の魔力弾が飛んできたけど、余裕を持って避ける。

幻影を囷に別方向から攻撃……良い手だけど、攻撃の手が足りない。

魔力弾が飛んできた方向…下を見ると、三人がいた。

「デイバイン…バスター!!!」

すぐに三人に向かって砲撃魔法を放つ。

魔法は三人に直撃し、三人の姿を煙で隠した。

「被弾…それじゃあ、また初めから」

「十時の方向に魔力反応です」

「え？」

レイジングハートの言った方向を見ると、そこには既に魔力弾を展開しているティアナと右京さんの姿。

キャラはその後ろで…恐らく二人を強化している。

三人がいる場所は…私がさっき誘導弾を飛ばした幻影のあった場所だった。

つまり……

「下にいた三人も幻影……」
シルエット

「クロスファイアシュート……」

右京さんとティアナの声が聞こえた瞬間、私はプロテクションを張

った。

言い方は悪いけれど、ティアナはともかく右京さんの放つクロスファイアシュートの威力はたかが知れている。

だから、充分耐えられる。

「バルカンシフト!!」

瞬間、二人から魔力弾が……違う、ティアナから魔力弾が放たれた。何発も何十発も五個ある魔力球から放たれる。

やがて、魔力弾が止まったと思つた瞬間、今度は瑠璃色の魔力弾が連続で飛んできた……右京さんのものだ。

多分、ティアナのクロスファイアシュートを見様見真似で使っているんだと思う。

魔力弾の構成は甘く、魔力球も2つしかない。

魔力弾の速度自体は速い……が、威力は全くと言っていいほどない。やがて、魔力弾が止まると間髪入れずにオレンジの魔力弾が飛んでくる。

「バルカンシフト……なるほどね」

動けない。

少しでもプロテクションを解いたら被弾してしまう。

このままでは、制限時間が来てしまう。

でも、こんな速度で撃ち続ければ先に魔力が尽きる。

その時を狙えば……

「スバル！！エリオ！！いけえ！！」

「「でやああああ！！」」

「っ！？」

右京さんの声と共に、左右からスバルとエリオの2人が突撃してきた。

スバルはウイングロードを使い、自分とエリオの足場も確保している。

このままでは被弾する……

「だけど……まだ！」

私は左右にもプロテクションを張り、二人の攻撃を受け止める。

……ちょっとムキになってるね、私。

よし、魔力弾が止まった。

左右にいた二人も、レイジングハートを振ってウイングロードから落とす。

「「うわっ!?!」」

「残念でした!?!デイベイイイイン……」

レイジングハートを右京さん達に向け、魔力をチャージ。

放つのは、私の十八番。

これで、また初めからだよ!!

「バス……いたっ!?!」

撃つ瞬間、私の頭に何かが当たった。

それは……私がついさつき避けた、ティアナの魔力弾だった。

「なのはside out」

「じゃあ、あの魔力弾は誘導弾だったんだ……」

結果から言えば、俺達はなのはに一撃当てることに成功した。

手順はまず、俺とティアナとキャロのいる場所の前にティアナの幻影を配置。

この時、同時に地面にも幻影を配置し、気付かれないようにビルの影に隠しながら誘導弾を飛ばす。

そしてなのはがビルの屋上の幻影を消したら、あたかも地面の幻影が撃ったように下から誘導弾をなのはに向かわせる。

避けられた誘導弾はそのまま上空で待機させ、俺とティアナがキャロにブーストで補助されたスピード重視のクロスファイアを交代で撃ち続けてなのはを足止め。

足止めをして少ししてからスバルとエリオに突撃させて更に動けなくする。

そして、さっきの誘導弾が完全に意識の外へ行ったのを見計らって誘導弾を落とす。

これが作戦の大体の内容だな。

かなり穴だらけで博打要素があっただが。

まず、先に地面の幻影が先に見つかったら？

ビル屋上の幻影を消し、そのままバルカンシフト。

誘導弾が消されたら？

バルカンシフトで時間を稼ぐしかないな。

バルカンシフトを避けられたら？

広範囲にバラまいて、プロテクションを誘発させるしかない。

誘発出来なかったら、作戦終了。

スバルとエリオの攻撃が迎撃されたら？

バルカンシフトを中断し、作戦を練り直すしかない。

まあ、三枚のプロテクション発動、タイムリミットから来る焦り、一撃足りとも受けてはいけない条件、とここまで揃っていれば、誘導弾による迎撃もないと考えたがドンピシャだったな。

誘導弾に気付かれて消されたら？

ごり押し、もしくは作戦を練り直す。

とまあこんな感じで穴だらけな作戦だった訳だ。

「という感じだな」

「あはは……でもちゃんと私に一撃与えたし、早朝訓練終了！みんなお疲れ様」

【お疲れ様でした！！】

因みに、あの訓練は十分内に起きた出来事だ。

思ったよりも時間が経っていないからびっくりしたな。

「あ、おったおった」

「はやてちゃん？」

そんなことを考えていると、なぜかはやてがやってきた。

一体何の用だろうか。

「出張任務が入ってな、みんなに報告に来たんよ」

「報告なら、通信やメールでいいだろうに」

「出張任務って言ったよね？どこに行くの？」

俺の言葉に苦笑しながらもなのはははやてに続きを促す。

そして、紡がれたはやての言葉は、俺を動揺させるには充分だった。

「出張先は第97管理外世界”地球”……私となのはちゃんと……
右京さんの故郷や」

行く先は故郷？（後書き）

右京「今回使った魔法の説明だ」

名称：クロスファイアシュート

単純に、ティアナのクロスファイアシュートを大幅に劣化させたものの。

見様見真似でレイジングソウルが模倣してプログラムを構成。

威力はほとんどないものの、射速だけならばティアナのクロスファイアシュートに匹敵する。

名称：クロスファイアシュート”バルカンシフト”

ティアナと二人で行うシフト。

特に特殊な行動をする訳ではなく、ただ、二人でクロスファイアシュートを交互に放つというもの。

交互に放つという行動のおかげで連写速度は上がり、魔力の続く限り、途切れない弾幕を張ることが出来る。

アニメではなのもクロスファイアシュートを撃ってたから、なのはと二人でも可能……か？

右京「今回はこんなところだな……サードフォームの説明は、デバ
イスの形が出てないからまた今度だな。何か質問があれば、いつで
も俺が答えるぜ」

久しぶりの帰郷？（前書き）

更に修正しました。

短く、グダグダ、支離滅裂です。

今回ばかりは流石に低クオリティとしか言えません。

右京「YouTubeはPCの音声出力デバイスがどうにかなつてて音声が出ないしな。ネットで調べてサウンドステージ探したり、とある作品を参考にさせて貰ったりしてるのにな」

自分なりにには頑張っているんですが……それでは流れ着いて！ミッドチルダ！

右京「第14話、スタートだ」

久しぶりの帰郷？

ここは転送ポートとやらへ向かうへりの中。

地球に向かうのは俺達フォワード陣となのは達隊長陣+リイン&シヤマルだ。

当然、部隊長であるはやても行くのだが……一番偉い奴が堂々と部隊を空けるってのはどういうことだ？

まあ本人が問題ないって言うてるから気にしないでおう。

因みにこの出張任務の内容だが……ロストロギアの反応が地球の海鳴市という場所で発見されたから、その回収だそうだ。

しかもその海鳴市という場所はなのははやてが住んでいた場所らしい。

「で、リインはどうしてでっかくなってるんだ？」

「リインはこのくらいまで大きくなれるです！これがアウトフレーム・フルサイズです！」

リインはなぜかキャロとエリオくらいの大きさ……普通の少女のサイズになっている。

そして、なぜか俺の膝の上に座っている。

「それは分かったが、なぜ俺の膝の上に座る？」

「座り心地が良さそうで……実際に良くて……ダメですか？」

「いんや……転送ポートにつくまでな」

「はいです」

嬉しそうに返事をしたリインの頭を撫でる。

…娘とのんびりする父親というのはこういう感じだろうか。

へりの中じゃなく、縁側や、木陰の中で木にもたれかかりながらすれば、最高にのんびり出来るだろうな。

「……えい」

トスツという軽い衝撃が左肩に来る。

チラリと横目で確認すると……なのはが頭を俺の左肩に乗せていた。

「……何してる？」

「にやはは……ダメ？」

「……転送ポートまでな」

「うん」

なのはは笑顔で返事をする、そのまま体を預けてきた。

…家族というのはこういう感じなのだろうか。

そう考えながら、俺は小さく笑みを浮かべていた。

「うう……いいな……リイン曹長……」

「帰る時にしてもらいなよ」

「くっ……私はなぜ右京さんの隣に座らなかったのかしら……」

「テイ、ティア？なんか黒いよ？」

「…私も帰りにももらおかな……大体、リインやったら、なのはちゃんのポジションは私……」

「は、はやてちゃん？」

「……………」

「ヴィータ、なぜリインを見ている？」

「キャラがエリオが右京さんの膝の上なら、私がなのはの位置……
いいかも」

「私にも身体があれば、一晩中……いや、年がら年中マイマスター
と共に……」

どれが誰のセリフかは推して知るべし。

俺は知らん。

しばらくして転送ポートに着いた俺達ははやて、ヴィータ、シグナム、シャマル等と別れ、地球へと転送された。

視界が一瞬光に覆い尽くされ、次に目を開くとそこには、緑に囲まれた湖があった。

「ここが…地球…」

「隊長達と右京さんの故郷…」

フォワード達はみんな、思い思いの感想を呟いて感動の声を上げている。

……もし、ここが……この世界が本当に俺の元いた世界なら、俺は六課から出て行く。

元々、そういう約束だからだ。

「でも……違うんだよなあ……」

違和感。

ただその一言に限る。

ここは地球だ……だがこの違和感は何だろうか。

馴染めない……なんというか、疎外感というか……孤独感というのか。

はっきりと分かることは、この地球は俺がいた地球ではない。

この違和感が、疎外感が、孤独感が……寂しさが、俺がいた地球^{セカイ}ではないのだと言っている。

「……来るんじゃないかったな」

誰にも聞こえないように、俺は呟く。

俺の世界は……一体どこにあるのだろうか。

暗い思考を振り払うと、話は現地協力者が来る……というところだった。

なのはが言うには、俺も知っている人物らしい。

一体誰だろうか……などと考えていると、俺達の前に一台の車が止まった。

車から出てきたのは、2人の女性……なんだが、この2人、なんか

見覚えが……。

「あーっ!!」

「あっ!!」

「ん？」

女性2人が俺を見た瞬間、金髪の女性が指を指して、紫色の髪の女性が自らの口を手で隠しながら驚愕の声を上げた。

一瞬間聞いた声……見覚えのある顔と髪色、聞き覚えのある声……俺も知っている人物……あ。

「右京さんじゃない!!」

「ホントだ…右京さんだ…」

「ああ、すずかとアリスか」

「アリサよ!!アリサ・バニングス!!」

そうだ、二回目の夢の時に見たなのはの友達2人だ。

なのはが19ということは当然、2人も19ということだ。

というか……。

「よく覚えてたな」

「まあね」

「なのはちゃんも毎日のように右京さんに会いたって言ってたから」

「すずかちゃん！それ以上はダメえ！！」

「ハア…ハア…と、という訳で、現地協力者の」

「アリサ・バニングスです」

「月村すずかです」

【よろしくお願いします！】

「よろしくな」

一悶着あったが、ようやく互いの自己紹介を終えた俺達。

この場所…湖畔のコテージのような場所は、この2人が提供してくれたらしい。

因みに、別行動のはやて達には、すずかの家のメイドが迎えに行きたとか……。

俺達はアリサ達に荷物を預かってもらい、任務の調査をスターズ、ライトニングに分かれて開始することになった。

対象のロストログは誰かが所持しているのか、単独で動いているのかは不明だが、移動している為、探索範囲は海鳴市全域。

だから、さっきも言ったように二手に別れて探すことになったのだが……。

「ライトニングとスターズで別れてって言ったのに、なぜ、ライトニングの俺がスターズのお前らと探索してるんだ？」

「それはね、右京さんにサーチャーの設置の仕方を教える為だよ」と、高町教導官殿が笑顔で言いやがった。

…確かに、俺はサーチャーとやらの設置の仕方は知らないし、そういうことならスターズにいた方が都合がいいのだが……。

「なぜくつつく？」

「この方が教えやすいかなって。サーチャーはね……」

なぜか俺の右手に腕を絡ませながらサーチャーとやらの設置の仕方を説明するのは。

そして、俺の左手を繋ぎながらサーチャーを設置するライン。

因みに、俺の魔力ではサーチャー一つ設置するのにもやたら時間がかかり、疲労もかなりのものだ。

「ティア！！アイス屋だよアイス屋！！買いに行こう？」

「今は任務中でしょうが！！だいたいこの世界のお金持ってないでしょ」

「そうだった……うう……アイス……」

後ろからこんな会話が聞こえてきたが、今はサーチャーの説明を聞いているため、気にしないでおこう。

2人とも、やることはやってるしな。

「右京さん聞いている？」

「聞いているよ」

ま、頑張って設置していきますか。

時間帯はもう夕方。

俺達は粗方サーチャーを設置し終えたところだ。

途中ではやてから、聖王教会からの情報でロストログアは運搬中に紛失したもので事件性はないが、高価なものなので無傷で回収

して欲しいという連絡がきたが。

ライトニング側にも念話を飛ばしたが、丁度サーチャーの設置を終えたところらしい。

「（ロングアーチ（拠点）に帰る前に、何か買って帰るうか？）」「

「（ん）大丈夫やと思うよ。晩御飯は現地協力者の方々が用意してくれるらしいし」

「（そっか。でも手ぶらで帰るのも何かなあ…）」

なのはが念話でそう言った後、携帯を取り出してどこかへと連絡しだした。

ていうか携帯持ってたのか。

「あ、お母さん？」

どうやら連絡相手は母親だったようだ。

「なのはさんのお母さん!？」

「いたのね…」

「当たり前だろうが」

この2人、最近ポケ側になってきてないか？

しかしスバルよ、なんでそんなに驚愕しているんだ？

なのはに母親がいたらおかしいのか？

「うん…うん…じゃあ後でね。…さてと…じゃあ行こうか」

「どこにだ？」

「私の実家。喫茶店なんだ」

「「喫茶店！？」」

「「喫茶翠屋」です！」

いや、名前だけ言われてもわからんて。

ていうか、なのはの実家って喫茶店だったのか。

「それじゃ、なのはのご両親に挨拶しに行くか」

「え！？そんな、挨拶だなんて……」

「なのはの部下ですってな」

「ガクッ……」

【あはは……】

やってきましたなのはの実家…喫茶翠屋。

そして、この店の前にいる男女の2人組が…。

「ようこそ、喫茶翠屋へ。僕がなのはの父親の高町 士郎だよ」

「なのはの母親の高町 桃子です」

（（父親！？母親！？えっ！？若っ！？）（）

え、これがご両親？

とんでもなく若いんだが…兄、姉でも充分通じる見た目だぞ。

不意に、父親と目が合った。

「…君、なのはとどういう関係かな？」

なぜだろうか…笑顔なのに凄まじいほどの怒気を感じる。

「部下と上司の関係ですか？」

「ならばなぜ、腕を組んでいるのかね？」

いや、なのはが勝手に抱きついていてだけで、俺の意志じゃないんだがな。

「本人に聞いて下さい」

「なのは?」

「え?好きな人と腕を組みたいと思うのは普通でしょ?」

ピシツと何かに罅が入る音がした気がした。

なのは父から溢れる怒気が増し、リインは涙目になり、ティアナとスバルは距離を取った。

「ふ…ふふ…そうか…君はなのはの彼氏なのか…」

どうしてそうなった。

なのはが言ったのは好きという言葉であり、彼氏彼女の話はしていない筈なんだが。

「いや、彼氏ではないです」

「見苦しいな…なのはがそう言ったじゃないか」

言っつねえよ。

しかも見苦しいって…言い訳してないんだが。

「だから…」

「まだ言い訳をするのか!宜しいならば戦闘だ!…なのはの彼氏だと言っつのなら、この僕を倒してから宣言しろ!…」

この親めんどくせええええ!!

しかも言ってることメチャクチャじゃねえか!!

「土郎さん」

「止めるな桃子!僕は今からこの輩を」

「土郎さん」

「だから止め……るな……」

恐る恐るなのは父が背後を振り返ると、そこにはニコニコと笑顔を浮かべているのは母。

なのに、なのは父はガタガタと震えている。

「ちょっと向こうで……お話ししましょうか」

「いや、桃子!僕にはこの輩を……待て!いや、待って下さい!あ……っ……」

なのは父はなのは母に引きずられ、店の裏へと姿を消した。

俺達(なのはを除く)はその光景をただ立ち尽くして見ていることしか出来なかった。

「ということがあった」

「あはは……大変だったみたいだね」

今俺達がいるのはフェイトの運転している車の中だ。

そして今、丁度喫茶翠屋で起きた出来事を話し終えたところだ。

因みに、俺はフェイトの隣の助手席に座り、俺の膝の上にリインが座り、後部座席になのは、ティアナ、スバルの三人が座っている。

……警察に見つかったら、定員オーバーでアウトだな。

「右京さん……ごめんね。迷惑かけて……」

「別に迷惑じゃないが……あんまり、腕を組んだりするのは控えてくれ。あらぬ誤解を招くぞ」

「右京さんなら私はいいいよ？」

「付き合ってる訳じゃないからダメだ。控えなさい」

はい……と元気なさそうに返事をするのはと苦笑する俺達。

ここまで想ってくれてるのは嬉しいんだが……一緒に居たいと言った奴がいるんだよなあ……俺には。

そう考えると、なぜか違和感が増した気がした。

違和感が大きくなったと同時に疎外感、孤独感も増し、妙な寂しさを感じる。

なぜこんなにも、俺は”独り”だと感じるのだろうか。

すぐ隣を見ればフェイトがいて。

俺の膝の上にはリンがいて温もりも感じて。

バックミラーにはちゃんと三人も映っていて、振り返れば姿があるのに。

「?なあに?右京さん」

「いや…なんでもない」

俺に笑顔を向けるなのはがいるというのに。

俺の中の違和感は。疎外感。孤独感は。∴寂しさは消えてくれな
い。

それらの感覚が妙に俺を不安にさせ、確信させた。

やはり、この地球は俺のいた地球^{セカイ}ではないのだと。

そんな不安を抱えたまま、俺はフェイト達と拠点に向かうのだった。

久しぶりの帰郷？（後書き）

というわけで、なのは達の世界は右京のいた世界ではありませんでした。

今回は食事に銭湯にロストログアに……書ききれるかな……

不安だらけですが、頑張ります（*。。（ノ

任務の終わり（前書き）

右京のCVって誰だろうね

右京「あー…誰だろうな」

たまにプロフィールにCV・とか書いてあるのを見て気になった疑問。

という訳で、読者の皆様の右京のイメージCVは誰か聞いてみようかと

右京「俺もそれは気になるな。因みに、お前は誰のつもりなんだ？」

……………それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第15話！

右京「考えてなかったのか……まあいいか。任務の終わり、スタートだ」

任務の終わり

あれから拠点に戻った俺達はライトニングとはやて達、現地協力者達と合流し、晩飯を食べようとしていた。

その前に……。

「どちら様？」

「君が右京さんだね。なのはの姉の高町 美由希です」

「クロノの妻のエイミー・ハラオウンです」

「あたしはアルフ。フェイトの使い魔だよ」

「喜喜 右京だ。宜しくな」

しかし、なのはの姉か……あまり似ていない気がするな。

因みに、エイミーは二児の母で、アルフは普段はハラオウン家で家事手伝いをしているらしい。

エリオとキャラも小さいときにアルフに遊んでもらったらしい……見た目はエリオ達よりも年下に見えるんだがな。

そして始まる晩飯……バーベキューだから、大勢で食うにはいいな。

「はい、右京さん。追加の皿や」

「悪いなはやて」

はやてから追加の材料が乗った皿を受け取り、焼いていく。

追加が早い気がするが……仕方ないんだ。

「スバル！あんたお肉食べ過ぎ！！」

「だって美味しいんだも……ああっ！私の育てたお肉が！！」

「甘いぜスバル……バーベキューは戦場だ！油断すると命取り（と書いて肉が食えなくと読む）なるぜ」

「ならば、貴様の肉……私が頂く！」

「あ！てめっ！シグナム！！」

「はいエリオ、キャロ。たくさん食べてね？」

「ありがとございます！フェイトさん」

「ありがとございます！はい、フリード」

「きゅく〜」

「肉〜」

いやはや、みんな元気なこった。

スターズは（1人ライトニングが混じっているが）バーベキュー戦

争をしている。

ライトニングギンアルフは一家団欒（フリードは荷物に混じっていた）をしている。

俺とはやてはあまりに食材の消費が早いので焼く専門になっている。

「で、右京さんとは進展したの？」

「お姉ちゃん!？」

「してないわね〜この様子じゃ」

「私がアプローチしてみようかな……右京さん結構カッコいいし……
…なんだか落ち着くし」

「だ、ダメダメ!！」

なのは達はガールズトークと……丸聞こえだから、俺がいないところ
でしてほしいな。

にしても、シャマルの姿が見えないな……一体どこに行ったんだか。

「はやて。焼くのは俺がするから、食っとけ」

「ええって。私も手伝うよ」

「お兄さんとはやてちゃんの分は、ラインが確保してるです」

「そうか、そいつは安心だな」

「ありがとうなリン」

「えへへ」

俺とはやてが交互にリンの頭を撫でると、リンは嬉しそうに顔を綻ばせた。

…こつこつのも、家族の団欒というのだろうか…家族じゃないが。

「あ、右京さん」

「ん？」

そんな感じで和んでいると、シャマルに声をかけられた。

シャマルの手には……あー……うーむ……。

「シャマル……何を持っている？」

「野菜炒めを作ってみたんです 一口いかがですか？」

【シャマルの料理！？】

野菜炒めだったのか……その皿の上の形容しがたいものは。

ていつか、はやて達のその反応はなんなんだ？

「まあ、せっかくだしいただこうかな」

「はい」

「あかん！右京さんそれはあかん！！」

「？なにがダメなんだ？確かに見た目は悪いが、せつかくシャマルが作ったんだ。なら、食べないと勿体無いだろう？」

と言って俺はシャマルの作った野菜炒めへと、シャマルが渡してくれたスプーンを伸ばす。

……野菜炒めつてスプーンを使う料理だったか？と思いながら、俺はそれを口へと運んだ。

「ふむ、見た目は流動食で食感はニチャニチャ、甘すぎて辛すぎて食材の味を全て殺し、何ともいえない嫌悪感が体中を巡りぐふっ…」

「キヤアアア！？お兄さん！？お兄さん！？」

「シャマル！！あんた右京さんに野菜炒めと偽って何食べさせたんや！？」

「偽ってません！！右京さん大丈夫ですか！？……ああ！脈が弱くなってる！」

しかし、残念ながらこのコテージには風呂がないとアリサから言われた。

「仕方ないな……近場の湖で水浴びするか」

「さ、流石に風邪引いちゃうよ？」

確かにフェイトの言うとおり、この肌寒い時期に水浴びは危険だな。

となると、風呂無しかねえ……。

「そうすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう」

なにやらエイミー達がお互いに納得しあっていた。

話が分からない俺達フォワード達はみんな、首を傾げて不思議そうにしていた。

「さて、機動六課一同は着替えを用意して銭湯準備！これより、市内のスーパー銭湯に向かいます！」

「スーパー……」

「セントウ……?」

というわけでやってきたのはスーパー銭湯こと、海鳴スパラクーア。まるでスパリゾートのような広々とした銭湯らしい。

「いらっしやいませー、海鳴スパラクーアへようこそ！団体様ですか？」

「えつと……大人13人と子供4人です」

「エリオとキャロとリンとアルフだな。ヴィータは子供じゃないのか？」

「あたしは大人だ!!」

ふむ、ヴィータは大人だったのか……やはり人は見かけによらないもんだな。

「悪かったよ」

「分かればいい」

謝ったら機嫌を直してくれたようだ。

いざ入場というところで、エリオが男湯と女湯で分かれていたことになぜか安堵していた。

しかし、安心したエリオに向かってキャロが無垢な笑顔を浮かべて言い放った。

「広いお風呂だって。エリオ君、一緒に入ろう？」

「えっ！？ば、僕はその…一応男の子だし……」

「でも、あそこ見てみて？」

キャロの指差した先には入浴施設の利用規定があり、そこにはある一文が書かれていた。

”女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願いします”

……エリオは10歳だから、女湯へ入ることは出来る。

キャロは純粹にエリオと一緒に入りたいたいだけなんだろうな。

「せっかくだし、一緒に入ろうよ」

「フェイトさん!？」

フェイトは息子と一緒に入りたいたいだけ……と。

エリオは顔真っ赤だな……思春期真っ盛りだな。

エリオは他の女性陣がいるから……と言うも、その女性陣からOKが

出てしまった為、逃げ場がなくなってしまった。

さあ、どうする？エリオクン。

「あ、あの…お気持ちは非常に嬉しいんですが…ほ、ほら！僕が女湯に行くとお兄さんが1人になっちゃいますし！」

「ん？俺は別に構わんが」

「お兄さん…」

うーん、そろそろエリオが泣きそうだな。

仕方ないな、助け舟を出すとしよう。

「冗談だよ冗談。確かに1人は寂しいからな……フェイト、キャロ、悪いがエリオは借りて行くぞ」

「むっ…仕方ないね」

「はい…」

「ほっ…」

というわけでエリオは俺と共に男湯入ることとなった。

今は脱衣場にて、服を脱ぎ終えてタオルを腰に巻いたところだ。

因みに、レイジングソウルは俺が脱いでいると念話でハアハア言っていたので脱衣場のロッカーの中にぶち込んでおいた。

「お兄ちゃん！エリオ君！」

「お兄さん！エリオ！」

……おかしいな、今、ここにいるハズのない声が聞こえたんだが。

そう考えながら、エリオと2人で恐る恐る声のした方を向く。

「キャ、キャ、キャロ！？リ、ライン曹長！？」

「こーら、こっちは男湯だぞ？」

そこにいたのはエリオの言った通り、体に長いタオルを巻いたキャロとラインがいた。

……今頃フェイト、泣いてるんじゃないだろうか。

「女の子も11歳以下はこっちに入っていていいんですって」

「だから一緒に入ります」

というわけでなぜか4人で入ることになった。

中はかなり広く、客の姿も多い。

俺達は目についた風呂に向かい、かけ湯をしてから入る。

「ふう……いい湯だ」

「です」

「お兄ちゃん、エリオ君、リイン曹長。後で洗いつこしましょう」

「え……その……」

エリオの顔はまだ赤いな……まあ思春期の少年の女子2人と風呂に入るのは、いささか刺激が強いだろっな。

しかし、洗いつこか……藍蘭島に流れ着いた日に、あいつらとしたなあ。

懐かしい思い出だ。

「んじゃ、洗いつこしますか」

「はい」

「はい……」

因みに、洗いつこの順番はリイン 俺 キャロ エリオ、という順番になった。

終始エリオの顔が赤かったのは、想像に難しくないだろう。

くなのはsideく

「で、あんた達は右京さんのことどう思ってるの？」

始まりはアリサちゃんの一言。

それを聞いた私は、機動六課の面々に視線を向ける。

すずかちゃん、お姉ちゃんやエイミーさん、アルフも興味津々なようだ。

「そつやな……かなり優良物件やと私は思うよ。家事出来るし、面倒見いいし、器量もよし。ラインもかなり懐いてるし、人当たりもええしな。私個人としては……お兄ちゃんって感じやな」

む、はやてちゃん……もしかしてライバル？

でも、お兄ちゃんって言ってるし……油断しちゃダメ、恋は戦争なの。

「私は……まだよく分からないかな。でも、右京さんがエリオとキヤロと一緒にいるのを見ると安心するんだ……父親ってあんな感じかなくて。そうになると私と右京さんは……えへっ……」

何を想像したのか、フェイトちゃんは両頬に手を当てて顔を赤くし

た。

フェイトちゃんはライバル認定なの。

「あたしはフォワード達を纏める年長者くらいにしか思っていないぞ」

「嘘はダメよヴィータちゃん。ヘリの時に右京さんの膝の上に座る
リンちゃんにあんなに羨ましそうな熱い視線を送っていたくせに
」

「お、送ってねえ!!」

ふふふ、私知ってるんだよ？ヴィータちゃん。

ヘリの時も、エリオとキャラコが右京さんに頭を撫でてもらってる時
にも羨ましそうな熱い視線を送っていることを。

「戦いたい相手だな」

腕を組んで凜つと言い放ったのはシグナムさん。

そういえば、シグナムさんは右京さんと戦いたかって前から言っ
たね……帰ったら模擬戦組もう。

「右京さんいい人ですよねー」

うん、スバルは素直な子だよね本当に。

これは心配ないかな。

「右京さんは……そうですね……頼れる男性ですかね」

そういえば、最近のティアナは心なしか、余裕がある気がする。

突撃思考もなりを潜めて、援護に徹するようになったし……確実に決められるような時に素早く鋭い一撃を入れるようになった。

むう……これは、強敵かな。

「なのはは……言わなくてもいいわ、分かるから」

「アリスちゃん酷い！」

〈なのは side out〉

俺は今、露天風呂にいる。

エリオとキャラロは子供用の露天風呂があったので、絆を深めるべく、そこに二人で入れた。

リインはどこに行ったって？

まず言うておくと、この露天風呂は座れば肩が浸かるぐらいの浅さであり、俺はあぐらをかいて座っている。

なにが言いたいかと言つとだな…。

「いいお湯ですね」

「そうだな」

リインは俺のあぐらの上に座り、一緒に入っているということだ。

羞恥心はないのかねえ……羞恥心がない女の子の相手は馴れてるがな……藍蘭島で。

気分的には、娘と風呂に入る父親か、妹と入る兄だな。

「全くもう……アリサちゃんてば酷いんだから」

「あはは、なのはちゃんが右京さん好きなのは周知の事実やからな」

「そうだね」

……今、誰の声が聞こえた？

激しく聞き覚えのある声が聞こえたんだが……よし、露天風呂から出よう……しまった、リインがいるから動けん。

そうこうしていると湯気の向こうから三人分の人影が近づいてきて……。

【……………】

「なるほど、ここは混浴だったのか」

「そ、そうみたいだね」

「あ、あはは……」

「……………」

「はやてちゃん達、顔真っ赤です」

露天風呂に入ってきたのは、なのは、フェイト、はやての三人だった。

俺達は互いに背中を向けて、互いを見ないようにしている。

リインはなのは達の方に行った。

入ってきた直後は悲鳴を上げられそうになったが、なのはが二人の口を塞いだので、悲鳴を上げられずに済んだ。

で、今に至る………言っておくが、三人はちゃんとタオルを体に巻いていたから、裸は見えていない。

まあ、見たいとも思わないんだが。

「……………さて、上がるか」

「なあ右京さん？もうちょい反応してくれてもええんちゃう？」

「何をどう反応しろと？」

「うう……私らを見て慌てるとか赤くなるとか……」

慌てはしたがな……流石に、こいつらまでキャロとリンみたいに男湯に来たのかと焦った。

「恥ずかしくないのか？と言われれば、恥ずかしくないと言ってやるう。」

「こう言っでは失礼だが……女性の裸は見慣れてるし、元々そう言った感情は薄いしな。」

「悪いが、別にどうとも思わないな。恥ずかしくないのか？とは思うが……どうなんだ？」

「「恥ずかしいです……」」

「でも、どうとも思わないっていうのは……ちょっと悔しいな」

「そう言っつてなのは、後ろから俺に抱きついてきた。」

「背中には何やら柔らかな感触が……ってちょっとまで。」

「なのは……お前まさか」

「タオル外してみました。どうかな……これでも何とも思わない？」

「なのは……大胆過ぎるよ……」

「右京さん……背中おつきいなあ……」

「リインもお兄さんに抱きつくです!」

なのはに抱き付かれ、フェイトは惚け、はやては顔を赤くして、リインにも抱き付かれ……男としては、嬉しい状況なんだろうな。

俺はさほど嬉しくないが。

「わかったから離れてくれ……離れてくれないと……」

三人纏めて食っちまうぞ?

俺なのはの手を握り、なのはの顔を横目で見ながら囁くようにそう呟いた。

その言葉を聞いたリインは意味が分からなかったのか不思議そうに首を傾げ、なのは達は真っ赤になって惚けていた。

「ははっ、のぼせる前に上がれよ?」

「あ!待って下さいお兄さん!」

俺とリインは惚けたなのは達をそのままに、露天風呂から上がった。

19になっても、まだまだ子供だな。

……ただ、その反応が藍蘭島の少女と被り、再び違和感や孤独感が増したのはなんでだろうか。

風呂を満喫した俺達は、脱衣場で着替え、外に出て体の熱を冷ましていた。

そんなとき、キャロのデバイス……ケリュケイオンとシヤマルのデバイス……クラールヴィントに反応があった。

「魔力反応……リインちゃん！」

「はいです！エリアサーチ！」

シヤマルの声に返事を返し、リインはエリアサーチという広域探知魔法を使い、魔力反応を探す。

「ロストログアの反応を確認しました！今回の目標ですよ！」

「お仕事だね。みんな、頑張ってきて！」

「フェイト、エリオ、キャロ、気をつけて行ってこいよ！」

【はいっ……！】

エイミィとアルフの言葉に元気良く返事を返すフォワード陣（俺を

除く)。

その後、ティアナがはやて、リイン、シャマルにオプティックハイドという魔法をかけ、三人の姿を見えなくする。

「空に上がって結界に閉じ込めるから、その中で捕まえてね」

【はい！】

「了解だ」

「ほなら、スターズとライティング、出動や！」

【了解！！】

さてと………任務開始だな。

今回の任務は俺達フォワード陣がメインになり、隊長陣はサポートに回るらしい。

俺、スバル、エリオの三人が先行し、ティアナとキヤロの2人は後ろを走っている……もちろん、セットアップ済みだ。

『第一戦闘空間、河川敷グラウンドに固定。スターズF、ライティングF、エンゲージ！！』

しばらく走っていると、ロストロギアの反応があったという河川敷グラウンドにたどり着いた。

そこには、ロストロギアと思わしき物が存在していた。

ただ…その存在が……

「スライムだな」

「スライムだね」

「スライムですね」

「スライムだ…」

「可愛い……」

上から俺、スバル、ティアナ、エリオ、キャロと呟いたが……キャロは違うか。

とにかく、スライムとしか呼称のしようがない物体が鬱陶しい程の数が蠢いていた。

まさか、これ全部捕獲しろ、なんて言わないだろうな。

「（どうなんだ？はやて）」

「（危険を感じると複数に分裂し、ダミーを増やすタイプみたいやな……せやけど本体は一つ。本体を封印すると全部消えるハズや）」

なるほどな……分裂して増殖するということは、限りなく増え続ける可能性がある。

そうなつては厄介だから、さっさと本体を見つけて封印しないと……俺は封印出来ないが。

「放っておけば、増殖したダミーが街中に広がる恐れがある。私達空戦チームは、広がったダミーを回収する。そちらは、ラインのサポートでお前達がやってみせる」

「素早く考えて素早く動く！練習通りにやれば、いけるハズだよ！」

【はいっ！！】

シグナムに言われ、なのはに信じられてフォワード陣の士気は申し分ない。

それじゃあ、サクッと終わらせるか。

「間違つてもオリジナルを壊すなよ？特にスバル」

「わ、分かっています！」

さてと……どないせえと？

あれからしばらく経ったが、スライムの数はあまり減っていない。

あのスライム、物理攻撃や魔力弾、フリードの火球が、全く効かないのだ。

冗談は見た目だけにしてほしいもんだな…。

方針としては、ダミー体は全て同じ行動をするみたいなので、シヤマルがその行動パターンを解析し、行動パターンに当てはまらない奴……つまりオリジナルを探して発見次第に封印するということになった。

「八花一閃!!」

「デイバイン……バスター!!」

ここまでやってようやく破壊出来るくらいだ……やべ、そろそろカートリッジが……。

そして、カートリッジが心許なくなってきた時にそれは起きた。

「ダミーが……消えていく?」

「(こちらティアナ。キャラがオリジナルを封印しました)」

「(了解だティアナ)」

こうして、ロストロギア回収任務は案外、あっさりと終わったのだ。

「そう……もう帰っちゃうんだ……」

「一晩くらい泊まっていけばいいのに……って訳にもいかないか」

「うん……ごめんね？今度は休暇の時に、遊びに来るから」

なのは、アリサ、すずかの三人が言葉を交わす。

その様子を見ていた俺は、どこか懐かしさを感じていた。

「右京さんも……せっかく久しぶりに会えたのに」

「本当ね」

「そうだな……まあ、またいつか会えるさ」

またいつか。

それはいつになるのだろうか。

そもそも、俺はいつまでミッドチルダにいるのだろうか。

藍蘭島の奴らは今頃、どうしているのだろうか。

そんな考えを胸の内に秘めながら、俺は、六課の奴らとミッドチルダへと帰還した。

任務の終わり（後書き）

サウンドステージはいかがでしたでしょうか？

楽しんでいただけたのなら、幸いです。

そろそろちょっとした番外編を書こうかと思えます。

何か希望がありましたら、どしどし意見を下さい。

ホテル・アグスタ（前書き）

今回のお話はホテル・アグスタ。

原作のような事件は起きるのか？

右京「展開はかなり急ぎ足だ……読むときに不快になったら済まない」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第16話！

右京「ホテル・アグスタ……スタートだ」

因みに、自分の右京のイメージCVは中村 悠一さんです。

「ラ カアアアア！！」とか、「この感情……まさしくAIDA！！」
の人ですね。

ホテル・アグスタ

地球から帰還した翌日、機動六課に新たな任務が届いた。

それは、オークション会場であるホテル・アグスタの警備任務。

このオークションはただ骨董品だけが取り引きされる訳ではない。

オークションの本命は、取引許可が出ているロストロギア。

そのロストロギアに反応して出てくる可能性のあるガジェットを警戒するのが、機動六課の任務である。

レリックとやらが関わっている可能性は低いらしいが、ガジェットが出てくる可能性は高い為、油断は出来ない。

「ほな改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及び、レリックの収集者は、現状ではこの男」

そう言ったはやての前にモニターが現れ、そこに白衣を着た紫色の髪の男性の姿が映し出された。

どうやら、この人物がガジェットの製作者らしい。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者……」 ジェイル・スカリエッティ」の線を中心に操作を進めてる」

「こっちの捜査は私が中心になって進めるけど、一応みんなも覚え

「おいてね」

【はい！】

「了解だ」

ジェイル・スカリエッティ……名前と見た目は覚えておくか。

ホテル・アグスタには既に、シグナムとヴィータが昨夜からずっと警備しているらしい。

なのは、フェイト、はやての隊長三名はホテルの中で警備に回る為、俺達フォワード陣はシグナムとヴィータの副隊長達の指示に従いながら外側を警備する。

というのが少し前の話。

俺達は今、オークション会場の外側で別れて待機している。

すると、スバルとティアナから念話が来た……暇潰しかねえ。

「（でも今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合か）」

「（そうね。そういえば、あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか、副隊長のこと）」

「（うーん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけどね）」

スバルの言う”守護騎士”というのは、シグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラのことだろう。

異名か何かだろうか……というかスバル、姉がいたんだな。

スバルが言うには、はやてが使用するデバイス”夜天の書”という本の形をしたデバイスらしい。

そして守護騎士の4人とリインははやてが所有する特別固有戦力であり、全員が揃えば無敵の部隊になるとか。

なにが所有する特別固有戦力だ……まるで物みたいな言い方じゃが
つて。

スバルが悪いつてわけじゃないが……情報の大元は時空管理局か……
…今のところ、嫌なイメージしかないな。

「（まあ、隊長達の詳しい出自とか、能力の詳細は特秘事項だから、
私も詳しくは知らないけど）」

「（レアスキル持ちの人はみんなそうよね）」

「（何か言った？ティア）」

「（何でもないわよ）」

「（そう…じゃあ、また後でね）」

どうやら、念話は終わったようだ。

しかし、俺は一切喋らなかつたし、話も振られていないのに、念話を繋ぐ意味はあったのだろうか。

「（右京さん）」

「（ティアナか。どうした？）」

念話が終わったかと思えば、また念話があった。

相手は今言った通り、ティアナだ。

「（右京さんは……機動六課の保有している戦力をどう思いますか？）」

どう思うと聞かれても、返答に困るんだがな。

俺はこの機動六課しか部隊を知らない。

だから他の部隊に比べて……という判断が出来ない。

「（そうだな……よく分からんが、なかなかの戦力なんじゃないか？）」

「（なかなか、なんて言葉じゃ収まりませんよ）」

普通では考えられないほどの戦力……隊長達は全員オーバーSランクであり、副隊長すら、ニアSランク。

他の隊員達も前線から管制官まで全員が、未来のエリート達。

フェイトの秘蔵っ子であり、10歳でBランクを取っているエリオと、レアな竜召喚士のキャロ。

危なっかしくはあるが、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバツクアツプもあるスバル。

「（つついつい考えてしまっんです……やっぱり、部隊の中であたしだけが凡人かって）」

そう吐き出したティアナの声は……少し、弱々しい。

よほど悩んでいたのだろう。

「（なんであたしみたいなのが、この部隊に呼ばれたんだろうって思っていました）」

周りと自分を比較し、周りの凄い部分や経歴に目が行き、自分には何もないと悩んだ少女の不安はどれほどのものだろうか。

周りに言えず、溜めるしかない負の感情は一体どれだけ彼女を苦しめていたのだろうか。

「（あたしは…本当に、この部隊にいるような存在なんでしょうか）」

「（当然だ）」

「（え?）」

彼女は気付いているだろうか。

なのはと模擬戦のような訓練をする時、ティアナが作戦の基盤にな

ることを。

「（前に言ったよな？天才というのはその実、血のにじむような努力をした者達のことだと）」

「（…はい）」

彼女は気付いているだろうか。

ティアナの援護射撃があることで、俺達前線組みが安心して戦えることを。

「（ティアナは努力をしていないのか?）」

「（しています!!訓練の時間以外だって……それ以前だってたくさん!!）」

彼女は気付いているだろうか。

ティアナが抜けたその瞬間から、ほとんどの作戦が使えなくなることを。

「（だったら、凡人だとかエリートだとか、んな小さいことは気にすんな。胸を張れ。前を向け。自信を持て。俺が認めてやる。お前には確かな実力があるし、この部隊にいてもいいんだとな）」

「（……はい……はいっ……）」

少し涙声に聞こえるティアナの声が頭に響く。

それと同時に、シャーリーから通信が入った。

『来ましたっ！ガジェットドローン陸戦？型、機影30……35……
陸戦？型、機影2、3、4！』

『前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の総合管制
と合わせて……私、シャマルが現場指揮を行います』

「（だ、そうだ……行けるな？リーダー）」

「（行けます……ありがとございます、右京さん）」

「（気にすんな）」

さてと……お仕事スタートだ。

（ティアナside）

「（シャマル先生！あたしも状況を見たいんです。前線のモニター、
貰えませんか？）」

「（了解。クロスミラージュに直結するわ）」

シャマル先生に念話を飛ばし、前線のモニターが欲しいと言つと、
すぐにクロスミラージュにモニターが送られてきた。

そこに映るのは、副隊長の戦い。

ヴィータ副隊長が鉄球を飛ばしてガジェットを破壊し、シグナム副隊長がガジェットを切り裂き、ザフィーラが地面から突起を出現させてガジェットを串刺しにする。

リミッターを付けているのに、この戦闘力…すごい。

『ケリユケイオンに反応！！誰かが召喚魔法を使っています！』

『クラールヴィントにも反応。でも、この魔力反応は……』

『大きい…なにこれ！？』

キャロ、シャマル先生、シャーリーさんと矢継ぎ早に通信がはいる。

シャーリーさんの言うとおり、切り替わったモニターに示された魔力反応はAランクという大きさだ。

『スターズF、ライトニングFと合流して防衛ラインをお願い！』

『はい！』

シャマル先生から指示を受け、スバルと一緒にライトニングのいる正面玄関前に向かう。

合流して…しっかり任務をこなす為に。

〈ティアナside out〉

「遠隔召喚…来ます！」

ティアナ達と合流してすぐに、キャロが真剣な表情でそう言った。

直後、前方に四つの魔法陣が地面に現れ、そこからカプセルのようなガジェットが10機、丸いデカイガジェットが1機現れた。

「あれって、召喚魔法陣!？」

「召喚って、こんなこともできるの!？」

「……優れた召喚士は、転送のエキスパートでもあるんです」

つまり、召喚士がいる限り、どこからでもガジェットが現れるということがある。

だったら、召喚士を叩けばいいんだが……。

「キャロ、召喚士の位置は分かるか？」

「…ごめんなさい、そこまでは……」

「そうか…仕方ないな。じゃあ、防衛ラインを越えられないように

ガジェットを破壊するぞ！」

【了解！！】

いつものように俺、スバル、エリオが前線で戦い、ティアナとキャロは援護に徹する。

いざ戦ってみると……ガジェットの動きがやたらよくなっている。

「関係ないがな……！」

俺は丸いガジェットを相手にしている。

ロボットアームやビームなどで攻撃されるが、俺にしてみれば全然遅い。

余裕を持って避け、懐に潜り込む。

「レイジングソウル！！カートリッジロード！！」

「ロードカートリッジ」

棍を後ろへ投げ捨て、両手の手甲から二発ずつ、薬莢が排出される。

そして両手に魔力が集まり、右ストレートを放つ。

「デイベインフィストオ！！」

ガツンと鈍い音が鳴り、ガジェットはぐらりと傾く。

……砲撃が出なかった？

チラツと両手を確認してみるが、まだ魔力を放っていない左手に瑠璃色の光はない。

なぜだ？

「AMFです。このままこのガジェットの近くにおいては、魔法の行使が出来ません」

AMF……ティアナ達が前に言ってた”アンチマジックフィールド”とか言う、魔法の発動を困難にする奴か。

そうになると……コイツのAMFの範囲にティアナ達を入れる訳にはいかないな。

「オラア！！」

傾いたガジェットに左ストレートを、先程右ストレートを打ち込んだ箇所に打ち込む。

再びガツンと鈍い音が鳴り、ガジェットの巨大が更に傾いた。

「更にい！！」

全く同じ箇所に右膝を叩き込む。

すると、ガジェットの装甲がかなりへこみ、ガジェットは地面に叩き付けられた。

「右京さん……凄い……」

「魔法を使わずに、？型を……」

「賞賛は嬉しいが、しっかり守れよ？」

【はい!!】

ティアナ達に声をかけながら、俺はデカイガジェットから一度離れ、投げ捨てた棍を回収する。

その際に周りを確認する……四人とも（+フリード）、ガジェットを破壊しているが、無理に破壊しには行っていない。

ちゃんと、防衛戦を行っているようだな。

むしろ、俺が突っ込んでいる。

「あのデカイのだけは、必ず破壊しないと……レイジングソウル、カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」

両手の手甲から二発ずつ、薬莖が排出される。

すると、手に持った棍の片方の先端に魔力が集まり、槍の刃のような形をした魔力刃となった。

「キャロ!! エリオ!! 行くぞ!!」

「はい!!」

「はい!! ツインブースト……スラッシュアンドストライク!! 更に、アルケミックチェーン!!」

キャロのアルケミックチェーンがデカイガジェットをガツチリと捕らえ、エリオのストラダーと俺の棍にキャロの強化が施され、魔力刃が桃色に輝く。

それをデカイガジェットに向け、エリオとタイミングを合わせる。

「レイジングソウル!!」

「ストラダー!!」

「「フラッシュ(ソニック)ムーブ」

「「はいつちし衝刃!! 十文字!!」

2人で加速魔法で同時に加速し、×字を描くようにガジェットに魔力刃を突き刺し、そのまま突き抜ける。

突き抜けた俺達はガジェットの後ろの地面に着地し、ゆっくりと自分の獲物を前に向けた。

「「俺(僕/私)達に……貫けぬ物無し!!」

俺が棍を左に、エリオがストラダーを右に振り、三人で決め台詞のように声を上げる。

すると、ガジェットは特撮のような大爆発を起こし、辺りを赤く染めた。

「スバル side」

「かつ……カッコいい……」

「右京さん……ホントムチャクチャね。キャロ、いつのまに練習したの？」

「じ……実は、動きの段取りを決めてただけで……練習も何もしてないんです」

「ということは……ぶつつけ本番ってことだよな？」

「一発で決めちゃうなんて……三人とも凄いなあ。」

「ライトニングが？型を倒して、ガジェットは？型だけになり、数もだいぶ減った。」

「後は、私とティアのクロスシフトで頑張れば、充分かな？」

「ティア、私達も……」

「右京さん！一旦ここまで下がって下さい！バルカンシフトで一掃します！」

「了解した！エリオ、下がるぞ！」

「はい！」

……え？

私とティアのクロスシフトじゃないの？

「ティ…ティア？」

「スバル、前に出たらダメよ？」

「う…うん」

言われるままに、ティアと右京さんの後ろに下がる。

右京さんはもう、デバイスを變形させていて……ティアと一緒にデバイスを構えた。

「クロスファイアシュート・バルカンシフト！」

名前の通り、まるでバルカンのようにクロスファイアシュートがガジェットに向かって飛ぶ。

2人の魔力弾は1機につき数発当たり、次々にガジェットを撃ち抜いて破壊していった。

クロスシフトよりも早く……沢山破壊していった。

「……片付いたか？」

「増援が来るかもしれませんが、今のところは……」

「んじゃ、警戒は続けるぞ」

「」「はい！」「」

「……はい」

ティアの隣で右京さんが、私達に指示を出す。

……ティアの隣はいつも私だったのに、今は右京さんがいる。

最近は訓練でも、私とティアのコンビネーションを使う回数は少なくなかった。

昨日の訓練だって……。

「スバル？どうしたのよ」

「え！？あ……えっと……なんでもないよティア」

「そう……なんかあったら、すぐ言いなさいよ」

「うん、ありがとう」

ティアが心配してくれた……それだけで、ちょっと気分が楽になっ

た。

うん…もう大丈夫。

ちょっとだけ…ちょっとだけ寂しいと感じただけだから。

「ガジェットの増援だ……防衛ライン、越えられるなよ!!」

【了解!!】

頑張ろう。

ティアの隣に立てるように。

右京さんよりも、頼られるように。

〈スバルside out〉

「これでラストオオオ!!」

ファーストフォルム状態で最後の1機を殴りつけ、拳を貫通させて引き抜き、後方へ跳んで距離を取る。

その後、ガジェットが爆発し、全機の破壊を終えた。

その直後、シヤマルから通信が入った。

『ガジエットの全機撃墜を確認！召喚士の正体は分からずじまいだけど、居ると分かった以上は対策も取れるわ。みんな、お疲れ様』
どうやら任務は終了したらしい。

トラブルも怪我もないし、任務は成功と言っていいだろう。

その後、しばらくして隊長三名がやってきた。

俺達は任務の報告を終え、スターズ、ライトニングに分かれて、現場調査の手伝いをする事になった。

「現場調査もお仕事の一つだし、勉強だよ。私は向こうにいるから、わからないことがあったら、遠慮なく聞いてね？」

とはフェイトの言葉だ。

そこから俺達は、調査現場に向かうのだった。

六課に戻ったのは、日がだいぶ傾いた時間帯だった。

「みんなお疲れ様。それじゃ、今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えて、ご飯食べてお風呂でも入って、ゆっくりしてね」

【はい！】

「あいよ」

フォワード4人はなのはとフェイトに敬礼をし、その場で解散となった。

さてと、先に風呂が、それとも飯か……。

「ちよつとスバル、どこに行くのよ」

「え？あ…ちよつと自主トレを…」

自主トレか……任務の後まで訓練するとは真面目だな。

だが、体力も落ちているのに訓練するっていうのは感心しないな。

「今日は止めとけ。疲れてる時に訓練しても身に付かないぞ」

「大丈夫です！！私、体力だけは自信がありますから！！」

「俺より体力がないので却下。今日は訓練は止めとけ。なのはも言っただろう？午後の訓練は休みだっつて」

「うう……わかりました」

ガツクリとうなだれるスバル。

不思議そうにスバルを見るティアナ。

…なんか任務の時からスバルの様子が変だな。

なんというか…少し焦りというか、陰りのようなものが見える。

「…まあいいか。さてと、晩飯作りますか」

「お兄ちゃん、何を作るの？」

「今日はな……」

まあ…飯でも食って、風呂に入れば、明日には元のスバルに戻るだろうな。

デザートはアイスに決まりだな。

ホテル・アグスタ（後書き）

右京「今回の俺の…というか俺とエリオ、キャラの使用した魔法の紹介だ」

名称：フラッシュムーブ

フェイト、エリオのソニックムーブと同じ短距離加速魔法。

無印時代になのはが使ったものと同じ魔法だが、加速時間や速度は劣る。

尚、習得したのは出張任務の朝の訓練が終わった後で、なのはからレイジングソウルにプログラムを送って貰った。

理由は”私の魔法も使って欲しい”というもの。

名称：衝刃十文字

キャラがアルケミックチェーンで対象を捕らえると同時に、右京とエリオの二人にツインブーストをかける。

その後、右京とエリオの二人が魔力刃の発生した棍とストラーダを構えて対象にx字になるように同タイミングで加速魔法を用いて突撃するというもの。

提案はキャラとエリオの二人であり、理由は”ティアナと同じことをしたい”というもの。

決して、君と響きあうRPGのUAではない。

右京「今回はこんなもんだな。因みに、決め台詞はエリオと俺が考えたんだ。キャラがノリノリだったのには、ビックリしたな」

その心、叫びを上げて（前書き）

今回は、上手く書けたか心配です。

右京「いつも上手く書けてないだろう？」

自分は面白いと思って書いてるけど、楽しんでもらえるかは分からないからね。正直、駄文とか言いたくない

右京「まあ……自分で自分の作品を貶すのは誉められたものじゃないな」

今回の話は原作では、ティアナが暴走する部分になります。それでは流れ着いて！ミッドチルダ！第17話！

右京「その心、叫びを上げて……スタートだ」

その心、叫びを上げて

〔No side〕

ホテル・アグスタの任務を終えた日から数日間、フォワード陣はいつものようになのはの訓練を受けていた。

その数日間の間、スバルは誰にも内緒で自主的に訓練を行っていた。

別になのはの訓練に不満がある訳ではない。

むしろ、憧れであるなのはの訓練を受けられていることは嬉しい。

しかし、今はどうしても力があるのだ。

ティアナの隣に立ち続ける為に…ティアナに右京よりも頼りにされる為に。

そんな訓練を続いたスバルに一つのチャンスが巡ってきた。

それが、なのはとの模擬戦である。

しかし、この模擬戦にて、一つの事件が起きてしまうのだった。

〔No side out〕

ここは訓練場であるバーチャルフィールド。

ステージは廃墟にて固定されており、俺、エリオ、キャロ、ヴィー
タは廃墟の屋上にいる。

今から始まるのは、ティアナとスバル対なのはの模擬戦だ。

予定ではこの模擬戦の後に俺とエリオとキャロ対フェイトの模擬戦
がある。

……フェイトはまだいないがな。

「もう始まつてる!？」

「いや、今から始まるところだ」

と思いきや、たった今やってきた。

息が少し切れているところを見るに、急いで来たようだな。

「もう……スターズも私がやるつもりだったのに」

「だったら遅れんなよ」

「すみません……」

俺の言葉を聞いてフェイトはしょんぼりと肩を落とした。

しかし、フェイトの言うことも分かる。

最近のなのはは見ても聞いてもオーバーワーク気味だ。

朝早くから夜遅くまで仕事漬けの毎日。

早朝から夕方までフォワードの訓練を行い、夕方から夜まで事務仕事に追われる。

更に事務仕事の後はフォワード陣の訓練の様子を確認し、訓練のスケジュールを組む。

ちゃんと睡眠を取れているのか謎だ。

しかし、それも全てフォワード達の為。

それをフォワード達も分かっているからこそ、文句も言わずに訓練を受けているのだ。

「さあ……始まるぞ」

「頑張れー！スバルさん！」

「ティアナさん頑張ってください！」

スバルか……少し様子がおかしかったが…。

……嫌な予感がするな。

（No side）

場所は変わり、なのは達三人のいるフィールド。

三人は既にセットアップを終えており、準備は万端である。

ティアナとスバルは緊張しているらしく、その表情は固い。

対照的になのはの表情はいつも通りであり、少しワクワクしているという顔をしていた。

「準備はいいね？」

「「はい！」」

「それじゃあ、レディ……ゴォー!!」

なのはが右手を上げると、周りに幾つもの桃色の魔力弾が現れる。

そこから掛け声と共に右手を下げて二人に向けると、魔力弾が一斉に二人に襲い掛かる。

「行くわよスバル！」

「うん！」

それを見た二人は少ない言葉で意志疎通を終え、左右に分かれることで回避する。

その後すぐにスバルはウイングロードを展開し、なのはへと近付く。なのははすぐに魔力弾を新しく作り出し、スバルへと放った。

しかし、このスバルはティアナの作り出した幻影であり、なのはの魔力弾はスバルに当たらずにすり抜けた。

「やっぱり幻影……なら本体は……」

「でやああああ!!」

「後ろっ!!」

なのはが振り返った時には、スバルは既に右腕を振りかぶっていた。

なのはは魔力を込める時間はなかったがプロテクションを展開し、スバルの拳を受け止めた、

「やっぱり……堅い……っ!!」

攻撃を決められなかったせいも、スバルの顔が歪む。

しかし、この短時間でなのはの背後に回り、プロテクションで受け止められたとは言え攻撃を加えたことを見れば、明らかにレベルアップしている。

なのははそれを嬉しく思い、少しだけ笑みを浮かべた。

「アクセルシューター……」

「っ!？」

なのは新しくアクセルシューター……誘導型の魔力弾を作り出す。それを見たスバルはすぐになのはを見たまま後退し、ウイングロードの上を疾走する。

「シュート!!」

誘導弾がスバル目掛けて動き出す。

スバルはウイングロードを引き伸ばし、なのはに背を向けて誘導弾から逃げる。

「後方から魔力反応多数」

その時、スバルとは反対側から数発のオレンジ色の魔力弾がなのはに向かって飛んできた。

なのはは誘導弾の操作を一旦止め、魔力弾が飛んできた方向に手を翳してプロテクションを展開し、魔力弾を受け止める。

飛んできた方向を見ると、遠くのビルの上に、クロスミラージユを構えるティアナの姿があった。

「いつのまにあんな遠くまで……違う、あれは多分……」

「デイバインバスター」

なのははレイジングハートをティアナに向け、自分の十八番の砲撃魔法を放つ。

桃色の砲撃はまっすぐティアナへと向かい、直撃した。

「…手応えがない…やっぱり幻影…」

しかし、どうやら幻影だったようで、砲撃は無駄撃ちに終わった。

ティアナ達の作戦は、幻影とスバルの機動力を生かしたヒット&アウェイを繰り返し、なのはが疲弊したところで一撃を当てるといったもの。

この作戦は、スバルの体力とティアナの魔力量が鍵となる。

度重なる基礎訓練により、ティアナの魔力量は上がり、魔力運用も上手くなっている為、以前よりも低コストで幻影を使える。

スバルも元々あった体力が度重なる基礎訓練によって更に上がり、今のところは息一つ乱してはいない。

この作戦が取れるということは、二人がレベルアップしていることを如実に表している。

二人は確実に強くなった。

（行ける……まだまだ幻影は使える。右京さんの言った通り、私は強くなってる！）

ティアナはその事実をしつかりと感じ、喜びから笑みを浮かべる。

しかし、スバルは違った。

(逃げてるだけじゃダメだ……私がなのはさんの防御を貫いて一撃与えないと……右京さんならそうするはずだから！)

なのはの抜き打ちのような防御魔法を貫けなかった事実には、自分は弱いと考えてしまうスバル。

そんな自分と、自分の仲間達に頼られている人物を重ねてしまう。

右京ならそうする……だから、自分もそうすればきつと……。

そう考えてしまったスバルは、動いてしまった。

「(ティアア!!私がつっ込む!!)」

「(はあ!?ちよつと、作戦は!?)」

「(大丈夫!!)」

「(大丈夫って、答えになつてな……コラ、スバル!?)」

一方的にティアナに念話をして自分の意見を言ってから、また一方的に念話を切る。

スバルはウイングロードを上空に向かって垂直に伸ばし、そこを走る。

当然、そんな伸ばし方をすれば、なのは気付かないハズがない。

「スバル…？ いったいなにを……」

なのはには、スバルとティアナの意図が理解出来ないうでいた。

自分を疲弊させる作戦なら、さっきの行動を繰り返せばいい。

しかし、ウイングロードを上空へ伸ばし、今もそこを走っているスバルの行動は理解出来ない。

やがてウイングロードはU字のようにカーブし、その行き着く先は…… なのはの頭上。

「ああ、もう……！」

苛立ったようなティアナの声が下から聞こえたかと思えば、オレンジ色の魔力弾が飛んできた。

その弾速は速い為、再びなのははプロテクションを張り、防ぐ。

しかし、魔力弾は止むことなく飛んできている。

威力はあまり感じず、弾速を重視した魔力弾。

なのはの頭によぎったのは、右京とティアナが使ったバルカンシフト。

「足止め……でも、なんで急に作戦の変更を……」

意味の分からない行動になのはは混乱する。

その時、スバルがなのはの頭上から落下してきた。

「一撃必倒！！ダイバiiiiiiiiん……」

「2人とも……何をやってるの？……私には、分からないよ……」

スバルの右拳の前に、青色の魔力が集まる。

それを感じながら、なのはは悲しみの声を出しながら俯き、スバルに向けて右手を翳した。

「バスツ……！？バインド！？」

「スバル！？」

「ねえ……」

スバルはダイバインバスターを放とうとした体勢でなのはのバインド……捕縛魔法に捕らえられ、空中に固定される。

ティアナが心配そうな声を上げるが、それを掻き消すように、なのはの感情のない声が訓練場に響いた。

「さっきまで良かったのに……どうしちゃったの？」

なのはの心からの疑問の言葉。

先ほどの2人の成長に対する喜びを上回る困惑の言葉に、2人はその体を固くした。

「あ……」

はっきり言ってしまうえば、これはスバルの独断である。

ティアナの行動は、例え悪手であったとしても、よく合わせたと言わざるを得ない。

スバルの落下しながらの砲撃は、確かに威力は上がるだろう。

しかし、その間は全くの無防備になってしまう。

砲撃用の魔力まで溜めていては、咄嗟の防御や回避も出来ない……
事実、バインドで捕らえられてしまった。

早い話、スバルの行動は無謀過ぎるのだ。

「スバル……ダメじゃない、こんな危ない行動……実践でこんなこととしてたら……ケガじゃすまないかもしれない」

「っ!？」

驚いたのはティアナ。

確かに、もしもこれが命を落とすかもしれない実践ならば、スバルは……。

そう考えてしまったティアナは、愕然としてその場に座り込んでし

まう。

「危ないことしないでさ……ちゃんとやる？」

なのはの悲しみの目がスバルを射抜く。

スバルの目に映るのは、自分の行動のせいで愕然あいはつとしている親友と、悲しみの目を向ける自分の憧れの人。

それを見たスバルは自分の行動の浅はかさを悔い……小さな怒りが灯った。

「なんで……？」

「……？」

スバルの声に、なのはとティアナはそちらに視線を向ける。

「なんで意味がないって言うんですか？私だって、一生懸命考えて動いたのに……」

「それでこんなことになったら意味がないでしょ？」

なのはの言葉で小さかった怒りが、少し大きくなる。

「ティアと一緒にだから、上手くいくと思ったから……」

「いきなり言われてマトモに動けるワケないでしょ？」

ティアナの言葉で更に怒りが大きくなる。

「私だって！右京さんみたいに出来ると思ったから！！」
スバルが心の中を叫ぶ。

それは、以前から感じていた自分の居場所がなくなるかのような焦りと、自分の行動を否定される怒りから来る叫び。

「私が右京さんみたいに出来れば、またティアが頼ってくれると思っただから！！」

自分よりも右京と訓練や任務で一緒に動き、頼りにする親友の姿を見て考えてしまった。

「私がティアのパートナーなのに！！」

ひょっとして自分は親友ティアナにとって……

「私は！！」

もう、いらなのではないか？

「私は……ティアの隣に居ただけなのに……」

「ティアナの意志は聞いたのか？」

「「「!?!?!」」」

三人が同時に声のした方を見る。

そこには、なぜかセツトアップした状態の右京の姿があった。

〈No side out〉

スバルの叫びは、離れたビルにいた俺達の元にも聞こえていた。

俺という存在のせいで、スバルがそこまで悩んでいたことには結構ショックだったが……今はそんなことはどうでもいい。

「どういう……意味ですか」

敵意を隠すことなく、涙を流しながらスバルは俺を睨み付ける。

「なのは……スバルのバインドを外して、ティアナを連れて離れてくれ」

「う…うん…」

なのは一度頷くとスバルのバインドを解除し、ティアナを連れて俺がいたビルの方に飛んだ。

俺とスバルは、ウイングロードの上で、互いを見合つ。

「さて、どういう意味か…だったな。言った通りの意味だ」

「だからどういう意味なんですか!？」

「お前が言ったのは自分の心と想像だけだと言ってんだよ。一生懸命考えただの、ティアナに頼って欲しいだの…ティアナの言葉がないんだ」

スバルが言ったのは、ティアナに頼りたいやティアナの隣に居たいというもの。

それはつまり、自分はティアナに頼られていない、隣に居ないということだ。

「一度でもティアナがそう言ったのか？頼りにならないや隣にいるなよ」

「いんちき…」

「言っていないだろう…お前が勝手にそう思い込んでただけだ」

「いんちき」

「ティアナの言葉も聞かないで、なにがパートナーだ」

「うるさい……」

「そんなんじや……本当に隣に居られなくなるぞ」

ブチッと何かが切れる音がした。

その途端に空気がピリピリとしだし、スバルから魔力が溢れる。

これは……殺気か。

「それ以上……！言うなあああ……！」

「プロテクション」

俺とスバルの間に瑠璃色の盾が現れ、突撃してきたスバルの右拳を受け止める。

それだけで、俺のプロテクションにいくつもの罅が入った。

「あああああああつ!!」

「がつ…!?!」

スバルの前に青い魔法陣のようなものが展開される。

その直後、体に激痛が走り、プロテクションが爆発して俺とスバルの距離が離れた。

なんとか、態勢を整えることが出来たのでウイングロードに激突することは避けられたが。

「ぐ……何を……された？」

体に傷はない。

なのに…プロテクションの上から”何か”をされて”体の中に”ダメージを受けた。

「……防御不可……反則だろ」

苦笑を浮かべ、腹をさする。

あんなもん何発も受けたらショック死しそうだな…激痛で。

「（右京さん!?大丈夫!?）」

「（大丈夫じゃないが……ま、何とかなるさ）」

なのはから念話がきたのでサクツと返す。

スバルのあの一撃は、完全に殺す為の一撃だった。

それほどまでに、スバルは俺が憎いのだろう。

「右京さんさえ……お前さえいなければあああ!!」

しかも怒りで完全に理性がとんでるな……キャラ崩壊してるぞ。

殴りかかってきたスバルの右拳をしゃがむことで避け、スバルの腹に右肘を入れる。

「うぐつ!？」

スバルは腹を押さえて吹っ飛ぶが、すぐに態勢を立て直し、俺を睨み付ける。

……変だな。

スバルの瞳の色は青かったはずなんだが……今は金色に輝いている。

まるで、チンクとノーヴェミみたいな……。

「ま、今は関係ないな。……なあスバル……お前は本当にティアナがお前を頼りにしてないと思ってるのか？」

「うるさい!!」

スバルが再び右拳を振ってくるが、俺は後方に下がることで避け、

言葉を続ける。

「本当にお前の居場所がないって思ってるのか？」

「うるさい!!」

蹴り、右ストレート、左回し蹴り、右フックと攻撃してくるが、その全てを一步下がることで避ける。

「違うだろう？いつも一緒にいるじゃないか。お前が一番ティアナと長く一緒にいるじゃないか。さっきだって短い言葉で互いがどうしたいか分かったんだらう？俺には、そんな芸当は出来ない」

あれは相性がよく、互いを信頼しているからこそ出来ることだ。

まだ出会って半月程しか経っていない俺には出来ない。

「ティアナはお前を信頼している。ティアナはお前を頼りにしている。ティアナはいつだってお前の隣にいた」

スバルの動きが止まる。

顔を見て見れば、瞳の色は元の青に戻っていた。

「お前達はパートナーだろう？だったら……」

全力全開で信じろよ……自分達は最高の相棒だと。

「ごめんなさい……ごめんなさい、ごめんなさい……」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、その場に座り込んだスバル。

その姿は、以前のののを見ているようで……俺は自然とスバルを抱き締めていた。

「右京さんごめんなさい……酷い」と言っごめんなさい……」

「気にすんな。俺は気にしない」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

何度も何度も謝るスバル。

俺はスバルが泣き止むまで、その頭を撫でていた。

「ティア……なのはさん……ごめんなさい」

「もういいわよ……私の方こそ、気付けなくて……ごめん」

「私もごめんねスバル……スバルの気持ちも知らないで……」

という具合でスターズは互いに謝りあっている。

因みに模擬戦の結果は保留となり、ライティング戦の後にもう一度やるそうだ。

「さて、次は俺達か」

「はい！」

「頑張りましょう！」

子供2人はやる気満々だな。

思わず俺も笑みを浮かべてしまう。

「フフツ……負けないよ？」

「俺達が勝つ。な？」

「はい！」

フェイトと互いに笑い合い、闘志を燃やす。

フェイトと戦うのは初めてだな。

「それじゃあ、早く始め……」

つう……と、口の端から何かが伝う。

同時に、体から力が抜けていく。

「右京さ…!?!」

「右…!?!」

なんだ？何でフェイトとキャロはそんな心配そうな顔してるんだ？

「……………!?!」

なのはは…なんて言ってるんだ？

俺は突然の出来事に困惑しながら、意識が遠のいていった。

体の中で、ピシリと何かがひび割れた音を聞きながら……………。

その心、叫びを上げて（後書き）

なのは「ねえ……」

はい……

なのは「SLBとデイバインバスター……どっちを先に受ける？」

どっちがいいじゃなくて!?

なのは「タイムアップなの。デイバインバスターで気絶しない程度にダメージを与えてからSLBなの」

何という死刑宣告……さらば現世

なのは「デイバイイイイン!!バスタアアア!!の後にスタアアアライトオオオ!!ブレイカアアア!!」

ギャアアア!!

その心、安堵して（前書き）

いつの間にか10000ユニークにお気に入り件数が100件突破
していました

ソル「沢山の方に見ていただき、本当に嬉しいですね」

これは、記念番外編を書かねばなるまい

ソル「私が擬人化してマイマスターとキャツキャムフフな展開を所
望します」

いや、それはちょっと……

ソル「バラバラにしますよ？」

サーセンっしたあああ！！

ソル「それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第18話……」

右京「その心、安堵して……スタートだ」

ソル「ま……マイマスター！」

その心、安堵して

（No side）

模擬戦の同日の夕方。

隊長陣五名と右京を除くフォワード達、リイン、シャマル、ザフィ
ーラは会議室に集まっていた。

会議室の空気はとても重い……その理由は、シャマルが口にした言
葉が原因だった。

「吐血して倒れたのは体の中……内臓にダメージを受けたことが原
因……」

「更に、リンカーコアに異常が見られる……分かりやすく言うなら、
ひび割れた状態……」

「いつ目覚めるかも分からない……か」

シャマルの言葉をはやて、ヴィータ、シグナムが順に繰り返す。

それは右京の現状を示す言葉だった。

魔導師や騎士と呼ばれる存在は、リンカーコアと呼ばれる魔力の核
となるものが存在する。

このリンカーコアが魔力を生み出し、その魔力を使って魔法を使う
のだ。

そのリンカーコアに傷を負ったとなれば、魔法の行使はおろか、魔力を作ることすら出来なくなるかも知れない。

幸いというべきか、リンカーコアの傷自体は小さなものだった為に、魔力の生成や魔法の行使が出来なくなるということはないらしい。

「私の……私のせいだ……」

「スバル……」

右京やスターズと和解した直後だったスバルは、原因が自分の一撃であると分かっているため、泣き崩れていた。

今もうわごとのように自分のせいと呟き、涙をこぼしている。

そんなスバルを辛そうに見つめるティアナは、何も出来ないと自分を情けなく感じていた。

「……スバル。あの一撃は何？」

「……」

なのはは優しく、スバルに問い掛ける。

右京の状態は、模擬戦で右京にスバルが当てた一撃であることは全員が分かっている。

たった一撃で体の内部にダメージを与え、リンカーコアにも傷を負わせた一撃。

そんな危険な魔法は当然、なのは達は教えていない。

しかし、あれは魔法ではない。

あの一撃はスバル自身の存在を示すもの。

これが知られば、自分は機動六課に居られなくなる……。

そんな恐怖がスバルにはあった。

(それでも……言わなきゃダメだよな)

スバルは覚悟を決め……涙を拭いて立ち上がる。

恐怖はある。

後悔するかも知れない。

ティアナと一緒に居られなくなるかも知れない。

それでも……と、スバルは覚悟を決めた。

そして大好きな姉に通信を繋ぐのだった。

「ギン姉…今、いい？」

〔No side out〕

「右京さん、起きて下さい」

「ん……？」

妙に聞き慣れた声を聞き、目を開く。

そこは、夜明け前のような空が広がっていた。

「おはようございます、右京さん」

「ああ、おはよう……っ！？」

上半身を起こし、空を見上げていると左隣から声を掛けられた。

反射的に返事をしてしまったが、この世界に来てから一度も聞くことのないような声に驚き、左を向く。

そこには、見慣れた笑みを浮かべる……。

「みちる……？いや、違う……お前は、誰だ？」

「……流石はマイマスター……」

藍蘭島にいるハズのみちるの姿をした誰か。

だが、みちるの髪は薄紫色だ。

こいつの髪色はこの夜空にも栄えるような鮮やかな”蒼”。

そして、マイマスターという言葉…。

「お前……レイジングソウルか？」

「はい。私はレイジングソウル……あなたのパートナーのデバイスです。ここは、マイマスターの精神世界……夜明け前のような優しさ、孤独感や寂しさが溢れる世界……」

やはり、この蒼い髪のみちるはレイジングソウルのようだ。

そして、この空間は俺の精神世界……よく見れば、ここは藍蘭島で唯一、桜が咲く岬だ。

「俺はどうなった？」

「マイマスターはプロテクション越しに受けた一撃で内臓にダメージを受け、血を吐いて倒れました。今は医務室で眠っています」

ああ、あのスバルの一撃か。

流石に内臓は鍛えられないから……血を吐いて倒れるのも仕方ないか。

「スバルは凄いな。まさかあんな隠し玉があるなんてな」

「……………」

対人戦で使うには危険だが、あれはまさしく一撃必殺だ。

直撃すれば、体の中が血の海になるだろう。

「今頃はなのは達に説教でも食らってるか、説明を要求されてるだろうな」

「……なぜですか……」

くつくつと笑いながら、その様子を想像して喋っていると、レイジングソウルから疑問の声が上がった。

レイジングソウルの方を見ると、そこには悲痛そうな顔をしたレイジングソウルがいた。

「なぜマイマスターは笑ってあの娘の名前を出せるんですか？マイマスターはあの娘の……あいつのせいで死にかけました。…いえ、守りきれなかった私のせいでもあります……なのになぜ……」

あなたは笑って居られるのですか？

そう言ったレイジングソウルは泣きそうな表情をしている。

守りきれなかった、というのはプロテクションを張ったにも関わらず、俺が血を吐くほどのダメージを受けたからだろう。

はっきり言って、俺は自分で魔法を使っていない。

レイジングソウルに登録されている魔法は知っているが、それだけだ。

普段使っている魔法は、レイジングソウルが俺の声や行動で判断して魔法を構築し、それを俺が使っているに過ぎない。

「そうだな……まず、スバルだが、俺は別に怒ってはいないさ。俺は殺されかけるくらいにスバルの怨みを買っていた……それはもう済んだことだからどうでもいいんだ」

「死にかけたんですよ！？だいたい、あいつの怨みはただの逆恨みじゃないですかー！」

「スバルにとつてはそれだけのことだ。それは、俺達がとやかく言えることじゃない……スバルの言葉…行動が真実であり……追い込んだのは俺なんだからな」

優しい少女が怒りで殺意ある拳を振るわせてしまつほどに。

自分の居場所が無くなると焦るほどに。

俺という存在がそこまで追い込んでしまった。

だが、それはもう終わったことだ。

だからもう、どうでもいいことだ。

「そんなことは……」

「で、レイジングソウルだが……俺は一切怒っちゃいないぜ？むしろ感謝してる」

「…………え？」

俺は自分で魔法を使えない。

レイジングソウルのサポートがあって初めて魔法を使える。

模擬戦でも、何度もレイジングソウルのプロテクションに助けられている。

「なんでお前を怒らなくちゃいけない？お前はいつだって俺をサポートし、助けられてきた。守りきれなかった？違う、お前は俺を守ってくれた。だから感謝こそすれ、怒りも怨みもしない」

「で、でも私は…………」

「ストップだ」

まだ何か言おうとするレイジングソウルの口を右手の人差し指で塞ぐ。

なぜこいつはこうも自分を責めるのだろうか…………俺も似たようなものだな。

「俺が言いたいののは感謝の言葉だけだ。…………ありがとうレイジングソウル。お前がいるから、俺は魔法を使える…………戦える。お前は最高のパートナーだよ」

「…………はい…マイマスター…………あなたも私の最高のマスターです」

人差し指を離すと、レイジングソウルはそう言ってきた。

……なぜ、頬が赤く染まっっていて、瞳が潤んでいるのだろうか。

「ちょっと待ってレイジングソウル……なぜ顔を寄せる？」

「……ソル……」

「は？」

「レイジングソウルは確かに私の名前ですが……長いし、あんまり可愛くないです。だから、ソルと呼んで下さい」

いや、あんまり可愛くないってお前な。

まあ確かに、みちるの姿をしている今は……というかレイジングソウルというのは長いな。

それに、本人たつての希望だ。

「わかった……ソル」

「はい……マイマスター……私のただ一人の主……私の……」

ただ一人の愛しい男性ひと

そう言ってレイジングソウルは……ソルは俺に口付けた。

「つて待てやコラァ!！」

「「ひゃっ!?!」」

「レイジングソウル!!お前いきなり何した!?!」

「エへへ……マイマスターと……エへへ……」

ダメだこいつ早く何とかしないと。

と呆れながらも、俺は自分の周りに視界を巡らせる。

見たことある部屋……医務室だな。

俺は病人服を着ており、場所はベッドの上……。

「う……右京さん?」

「ん?」

声のした方……右側を向くと、そこにはびっくりした表情をしているスバルと……以前俺に尋問した紫色の長髪の管理局員がいた。

ついでに窓の外を見てみれば、すっかり夜になっている。

「お、起きてても大丈夫なんですか？」

「ん？ああ……まだ少し痛むが、動けない程じゃないさ。そっちの人は……確か、ギンガだったか？」

「覚えててくれたんですね。改めまして、スバルの姉のギンガ・ナカジマです」

ああ、スバルの姉ってギンガだったのか。

確か、ギンガは別の部隊だった筈だが……。

「そういえば、あれからどれくらい時間が経った？」

「えっと……右京さんが倒れてから大体九時間くらいです。その間に、緊急任務が入って……なのはさん達は任務に行きました」

九時間か……大分寝ていたようだな。

更に緊急任務か……スバルがここにいるというのは、謹慎的な意味合いが強いだろうな。

「……右京さん。私、右京さんに話さないといけないことがあるんです」

「話さないといけないこと？」

「はい……模擬戦の時の一撃と……」

「私達姉妹のことです」

スバル達から話されたのは、自分達の身体のことだった。

スバル達は戦闘機人という存在であり、早い話がサイボーグのようなものだという。

実際はもっと細かく話してくれたのだが、生憎と俺の頭はそれほどよくない為、理解出来たのはそれくらいだ。

そして、スバルの一撃はIS……インヒューレントスキルと呼ばれるものであり、魔力を用いない能力らしい。

スバルのISは”振動破碎”という対象の内部に振動波を送り込み、中から破壊するというものだそうだ。

人間だけでなく機械にも致命的な一撃を与える反面、自分にも少ない被害があるという諸刃の剣だという。

それを聞いた俺の反応は……

「ふーん」

だった。

「ふーんって……私は……戦う為に造られた存在なんだよ？……怖く……ないの？」

「いや、別に」

「こ、殺しかけたんだよ！？そんな力を持つてるんだよ！？」

「んなもん誰だって持つてるわ」

「え？」

俺の知り合いには、人間にしか見えないからくり人形…ロボットがいる。

妖怪だって見たことあるし、そいつらとケンカしたりした。

「ぶっちゃけた話、戦闘機人とか人間じゃないとかどうでもいい」

「ど……」

「で、殺しかけた？そんな力を持つてる？俺だって持つてる。生きているなら神様だって殺してみせる……なんてな」

もしも、俺の主力魔法である八花一閃を殺傷設定で使ったらどうなる？

ガジェットを貫けるような拳を人間に向かって全力で振り抜いたらどうなる？

刃物を持ったら、鈍器を持ったら、銃器を持ったら、兵器を持ったら

ら。

「スバルは俺が”戦闘機人だから”、”殺せる力があるから”お前を嫌いになるとか思ってたのか？」

「……………うん」

「なめんな。その程度で嫌いになんかならないさ。別にお前はお前だ、なんてことを言うつもりはない。俺にとっては、戦闘機人とかそうじゃないとかは小さなことだから、スバルとギンガの気持ちさえあればいい」

「私達……………気持ち」

戦闘機人は嫌われなければならないのか？そんなことはないだろう。どのように生まれたとか、そんなことは些細な問題だ。

「俺は、お前らを嫌わない。見捨てない。裏切らない。だから教えてくれ……………お前達はどうかんだ？」

「私は……………みんなと一緒にいたい……………」

「私だって……………戦闘機人だからって嫌われたいなんて思いませんよ」

「んじゃそれでいい」

「え？」

これがこいつらの気持ちなら、俺はそれを受け入れるだけだ。

なのは達もきつと受け入れる……あいつらそういう奴だからな。

「俺はスバルのことは気に入ってるし、ギンガのことも嫌いじゃないしな。お前らが嫌わない限り、俺はお前らを嫌わない。いや、お前らが俺を嫌っても、俺はお前らを嫌わないだろうな」

「そんな！右京さんを嫌うなんて……」

「私もいきなり嫌うなんてしませんよ」

「ありがとうよ……ま、俺が言いたいのは、戦闘機人とか気にすんなってことだ。生きてることに変わりはないんだから」

泣いて、怒って、焦って、笑って……アイスが好物で、ティアナが大好きで、なのはに憧れる……極々普通な女の子。

それが、俺の中のスバルだ。

ギンガの方はよく知らないが、後々に知ればいい。

だから……。

「これからよろしく頼むぜ？ナカジマ姉妹」

「……はい……」

「……はい。よろしくお願ひしますね、右京さん」

完全に和解した後にスバルから聞いたが、俺の元にくる前になのは達にも戦闘機人やISがどうこうという話をしたらしい。

結果は予測通り、そんなこと気にせず、今まで通りだと言っていた。

俺の体の状態のこととも言われたが、精神世界でレイジングソウル……ソルに聞いていたからさほどビックリもしなかった。

ただ、リンカーコアという魔力を生み出す核に多少の傷が付いたということだ。

よほどの無茶をしなければ傷は広がらずに自然と治る為、あんまり大きな魔法は使わないようにと言われた。

大きな魔法なんか使えないっつもの。

今日は医務室に泊まることとなり、エリオとキャロに寂しそうな顔をされてしまったが……なぜか、なのはが隣で看病することとなった。

「スバルにもティアナにも負けない……」

と呟いていたが……まさかな。

因みに、なのはは隣のベッドで眠った。

「おやすみなさい……右京兄い」

「スバル？なんか言った？」

「何でもないよティア」

その心、安堵して（後書き）

原作より早いですが、ナカジマ姉妹が戦闘機人であることが露見しました。

賛否両論で激しく怖いですが……

右京「心配してくれたみんな、ありがとな。無事だったから安心してくれ」

近い内に番外編書きますね。

右京「それじゃ、またな」

開催！機動六課タッグマッチ！（前書き）

今回は短い上に、オリジナル展開です。

右京「番外編はもう少し待ってくれな」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第19話！

右京「開催！機動六課タッグマッチ！スタートだ」

開催！機動六課タッグマッチ！

「凄い回復力ね……もう治ってるなんて……」

俺が今いるのは医務室。

今はシャマルに身体を診てもらっていたところだ。

「でも変ね……リンカーコアは治ってないなんて」

シャマルの診断では、もう身体はすっかりと治っているらしい。

俺は骨折すら二、三日で治せるからな……実績もある。

だが、リンカーコアが治ってないのはなぜだ？

スバルの話では、リンカーコアの傷は内臓よりも小さかったはず……。

「問題があるのか？」

「傷自体はごく小さいものだから、大丈夫だと思うわ。ただ、これ以上傷が広がったら、何らかの影響があるかも……」

「そうか……まあ、心配はないだろう。訓練には復帰していいのか？」

「ええ、復帰しても問題ないわ。でも、無茶はしないでね」

「了解だ。シャマル先生」

互いに笑い合い、俺は医務室から出た。

訓練復帰まで5日間か……長かったな。

その間、なのはに看病されたり、ティアナに訓練の様子を見せて貰ったり、スバルとギンガが食べ物（アイスとチョコポットという菓子）を持ってきたり、エリオとキャロが医務室で寝泊まりしたりと暇になることはなかったが。

そんな5日間の思い出を思い出して笑みを浮かべながら、俺は食堂に向かった。

時刻は11:30……昼には早いですが、訓練は終わった頃だろう。

「あ、右京さん」

「お兄さんです!」

「右京さん?体はもういいの?」

「はやてにフェイトにラインか。もう大丈夫だと、シャマルの判断をもらったよ」

食堂に来ると、数人の隊員とはやて、フェイトとリインの姿があった。

俺はおばちゃんから今日の昼飯……クリームシチューと三つのクロワッサン、カフェオレをトレイに乗せてはやて達のテーブルに座った。

因みにクロワッサンの語源は三日月……クレッセントから来ているらしい。

どうでもいいな。

「右京さん、隊には馴染んだ？」

「まあ、馴染んでは思うが……」

「右京さんならすぐに馴染んでるよね。ねえ、私と模擬戦しない？」

「また今度だな」

「お兄さん！それ一口ください！」

「分かった分かった。ほれ……っ？」

何気ない会話。

そんな会話だが……なんだ？

俺はこの会話を知っている？

「お兄さん？どうかしたですか？」

「……いや、何でもない。熱いから気を付けろよ？」

「はいです あーむ」

さっきのは単なるデジャヴ……デジャヴなんてよくあることぞ。

クリームシチューをスプーンで救い、ラインの口へと運ぶ。

ラインは美味しそうに、それを飲んだ。

俺はそれを見て、満足そうに笑みを浮かべる。

「右京さんとフェイトちゃんの模擬戦、見たいなあ……模擬戦……」

はやてが食事の手を止めて右手を顎に手を当てて、何やらブツブツと呟く。

そんなに俺とフェイトの模擬戦を見たいのか……？

順番的には、俺はまずシグナムと戦い合いたいんだがな。

「あ！右京さん！」

【右京（さん／兄い／お兄さん／お兄ちゃん）！！】

「どおおおおお！？」

食堂にやってきたのはとフォワード達は俺の姿を見つけるや否や、

勿論、そんなことは承知している。

なのはなんか、オーバーワークの中に俺の看病までしたんだからな。

「……………まあ、今回はこれくらいにしてやるぞ」

【ほっ……………】

そんなあからさまに安堵しなくてもいいと思うんだが。

そんなにきつかったのだろうか……………たかだか30分程度で。

「右京さんにフォワード達で5人と一匹……………隊長陣が5人にリインとザフィーラを入れて12人+1……………」

はやてはまだブツブツ言っている。

ザフィーラか……………またあんな熱いケンカをしたいもんだな。

ただ、六課の番犬扱いになっているのは見ていて辛いな……………。

「これや!…」

と考えているとはやてがテーブルをバンツと叩いて勢いよく立ち上がった。

何やら両手を強く握り締め、目はやる気に満ちている。

「はやてちゃん?どうしたの?」

「なのはちゃん！午後の訓練予定変更や！！ちよつとこつち来て！
フェイトちゃんもシグナムもヴィータもや！」

「「ちよ……はやて!?!」」

「主!?!」

「「にゃあああ〜!?!」」

なのはははやてに右手を掴まれて連れ去られ、他の隊長陣三名は後を追っていった。

隊員達は我関せずを貫き、残された俺とフォワード達とリインは……。

「……さて、飯食って午後の訓練に備えとけ。なんかやるっぽいから」

【はい】

さて、食事の続きをしますか。

流星はおばちゃん……冷めてもクリームシチューは美味かった。

午後の訓練の時間、俺達は訓練場であるバーチャルフィールドにい

た。

バーチャルフィールドはいつもの廃墟や森ではなく、闘技場……コロシアムだった。

そしてここには俺達フォワード達、隊長陣、リイン、ザフィーラの計12人+1がいる。

そしてはやてが言ったことを要約すると……。

「俺達全員で殺し合いをしろと」

「誰がバト　ロワイアルをしろ言うた！？トーナメントやトーナメント！！この12人で二人一組になってトーナメントする言うてんの！！」

ということらしい。

改めて説明すると、はやてが午後の訓練の代わりにしようとしたのは今言った通り、トーナメントだ。

12人で二人一組の計6チームを作り、優勝目指して戦うのだとか。キヤロとフリードはセッター

因みに、チームは既に決まっているらしい。

「という訳で、チームの発表や」

まず一回戦、第一試合を戦うチームの発表だ。

Aチームは……スバルとティアナ。

「頑張ろっね！ティア！」

「そうね、やるからには優勝を目指すわよ！」

対戦するBチームは……キャラ+フリードとはやてだ。

「よ、宜しくお願いします！」

「ん、よろしゅうなキャラ」

はやては広域魔導師であり、キャラは完全な補助、援護型。

対するAチームのスバルはフロントアタッカー……フォワード随一の突破力と機動力を持ち、ティアナは視野が広がったし、援護も上手い、バランスの取れたチームとなった。

第二試合を戦うCチームは、リインと俺だ。

「お兄さんですね！リインも頑張るです！」

「ああ、頼りにしてるぞ」

対するDチームは、フェイトとエリオ。

「やった……右京さんと模擬戦が出来る　頑張ろっね、エリオ」

「はい！フェイトさん！」

Dチームはスピード型の親子チーム……スピードで翻弄されないよ

うにしないとな。

対するCチーム……俺達のチームは……。

「どうなんだ？リイン」

「大丈夫です！リインにお任せです！」

だ、そうだ。

一体、リインがどのように戦うのか分からないが、このトーナメントに選ばれるくらいだし、戦闘力は高いと見ていいだろうな。

第三試合を戦うEチームは、なのはとシグナム。

「右京さんと組みたかったなあ……でもシグナムさんとなら、優勝も充分狙えますね」

「無論だ。戦うからには勝つ！」

対するFチームは、ヴィータとザフィーラ。

「最初はなのはとシグナムか……油断できねえな」

「俺はもう一度右京と戦いたいのだな、誰であろうと負けるつもりはない」

Eチーム……なのはとシグナムは、先のAチームのようにバランスの取れたチームだ。

なのはの砲撃とシグナムの剣撃には要注意だろう。

対するFチームは、全チーム中でもっとも防御力の高いチームだ。

盾の守護獣（異名か？）たるザファイラと鉄槌の騎士（異名だろうか？）ヴィータ……優れた盾と矛を持つチームだな。

尚、三回戦の勝者は決勝まで直行できる。

「で、優勝したらなんかあるのか？」

「当然あるで」

そいつは楽しみだな。

しかし、このコロシアムの周りにいる観客……よく見たら六課の隊員じゃねえか。

仕事しろ仕事。

「優勝したチームには……このミッドチルダで一番人気の遊園地、”エデン・サンクチュアリ”のペアチケット贈呈や！」

【ペアチケット！？】

エデン・サンクチュアリってどこやねん。

因みに、ペアチケットに反応したのはなのは、スバル、ティアナ、キャラだ。

「更に、優勝したチームは明日の1日だけ、特別休暇も贈呈するで！」

大盤振る舞いだな。

優勝すれば、休暇を貰えて遊園地にも行ける。

負ければ、普段通り仕事か。

「ねえ、はやてちゃん。一緒に行きたい人が仕事だったら、ペアチケットの意味がないんじゃない？」

「なのはちゃんが言いたいことも、一緒に行きたい人も分かる。だから、一緒に行きたい人にも特別休暇を出すで」

【よし!!】

分かりやすいくらいやる気が上がったな。

しかも、なのはもスバルもティアナもキャロも俺を見ている。

ガン見だガン見。

隣のラインなんか震えてるぞ。

「それじゃ、ルール説明や」

一試合につき、制限時間は30分。

隊長陣はリミッターを付けたまま試合を行う。

隊長陣のリミットブレイク、フルドライブも当然使用不可。

ステージは一回戦が森、二回戦が廃墟、決勝戦はコロシウムとなる。

カートリッジの使用に制限はない。

チーム二名が戦闘不能、あるいは降参で決着。

タイムアップの場合は、互いの消耗やダメージの具合を見て判断する。

以上がルールだ。

つまり、飛ばうが召喚しようが後は何でもありってわけだな。

「質問は……なさそうやな。準備はええな？」

【おうー！】

「それでは！！機動六課タッグマッチ……開催や！！」

狙うは当然優勝だ。

やるからには……勝つー！！

開催！機動六課タッグマッチ！（後書き）

このまま原作通りに進めると早くに終わってしまいそうなので……
姑息ながら時間稼ぎを

ソル「本当に姑息ですね……バラバラにしますよ」

すみません、8分割は勘弁して下さい

ソル「せっかく私が擬人化をしてマイマスターと……エへへ……」

ストーリーが浮かばなかったもので……やるなら藍蘭島のような短編をいくつか練り込んだものを

ソル「スラッシュスタイル」

ソルさん？なぜセカンドフォームに……ちょっとなぜ魔力刃が作られ……アッー！！

ソル「見せられないよ」 看板

タッグマッチ、第一回戦（前書き）

やっぱり戦闘シーンは楽しいですね〜書くのが。

右京「イキイキとしてたな」

だって楽しいじゃん。ただ、最近体調不良なので、書いてると頭痛かった。

右京「こんな作者だが、これからも宜しく頼む。勿論、俺も頼むぜ？」

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！第二十話！

右京「タッグマッチ、第一回戦：スタートだ」

タッグマッチ、第一回戦

「始めました、機動六課タッグマッチトーナメント！司会は私、シャーリーことシャリオ・フィニーノです！そしてゲストはこの方！」

「108部隊から来ました、スバル・ナカジマの姉のギンガ・ナカジマです」

「宜しくお願いします！」

【うおおおおおおっ！！】

いつやってきたんだギンガよ。

そしてノリノリだな機動六課隊員共。

とまあこんな感じで始まったのは先ほどシャーリーが言った機動六課タッグマッチトーナメントだ。

二人一組の全6チームがトーナメント方式で戦い、優勝したチームにはエデン・サンクチュアリという聞いたこともない（ミッドチルダでは人気らしい）遊園地のペアチケットと、明日1日限りの特別休暇が授与される。

……変だな、つい先日似たような説明をしたようなされたような気がする……気のせいだな。

今から始まるのは一回戦の第一試合……スバル&ティアナのチーム

対はやて&キャロのチームだ。

一回戦の試合のステージは全て森で統一される。

「両チーム、初期位置に出揃いました！この対戦はどうなると思いますか？ゲストのギンガさん」

「そうですね……Aチームは遠近が揃い、息も合っているバランスの良いチームです。対するBチームは圧倒的な攻撃範囲を持つ空戦魔導師とフルバックのポジションであるフォワード隊員……チームの構成だけを見るなら、Aチームに分があると思います」

ゲスト？解説の間違いじゃないのか？

因みに試合のない俺達は、控え室となっている訓練場付近の一室でモニターで見ている。

観客（六課隊員）は食堂においてモニターで見ている。

司会とゲストの二人は訓練場を見渡せる高台のような場所（原作でシャーリーがコンソールをいじっていた場所）にいる。

「両チーム、準備は宜しいですね？」

「……はいっ！」「」

「きゅー！」

「ん、ええよ」

4人とも既にセットアップを終えて臨戦態勢に入っている。
準備は万端なようだ。

「それでは！」

「タッグマッチトーナメント第一試合！」

「スタンバイレディ？」

【GO!!】

ホント……ノリノリだな。

〈5分後〉

「勝者、Aチーム！」

「やったあ！」

「ちょ……ちょっと待ってください……」

「さ……流石に戦闘描写がないんは酷ないか……？」

はやては何を言っているのだろうか。

モニターに映っているのは全くもって無傷と言っているいいAチーム……スバル&ティアナと、対照的にボロボロなBチーム……はやて&キヤロの4人+1だ。

短時間で決着が付いてしまったが、なんとなく、簡単に何があったのか説明しよう。

開始直後、ティアナはクロスファイアシュートをはやて達の足元に撃ち込み、土煙を巻き上げて視界を遮る。

はやてはすぐに土煙から逃れるべく上昇するが、既に眼前にはスバルがウイングロードの上を走りながら砲撃魔法を撃つ準備を終えており、はやてはプロテクションを張る間もなく直撃して撃墜……流石は一撃必倒と自負するだけはあるな。

如何に隊長陣といえども、砲撃魔法の直撃を受ければ倒れる……だって人間だもの。

その後はティアナがクロスファイアシュートをキヤロに撃ち続け、キヤロもプロテクションで防いでいたもののやがて限界が来てプロテクションは割れ、直撃を受けて撃墜された。

「侮った……まさかスバルがあそこまで速くなってたなんて……」

さっきまで訓練場にいた両チームが控え室に入ってきた。

「八神部隊長が広域殲滅型というのは知ってましたから……真つ先に撃墜させて頂きました」

「私達強くなってるね！ティア」

「えと……ごめんなさい、何も出来なくて……」

「あはは…キャラは何にも悪うないよ」

スバルは確かに速くなったが、それでもエリオよりは遅い。

だが、さっきの戦法はなかなか厄介だな……飛び上がったら目の前に砲撃魔法を撃つ寸前の敵が居ました……笑えねえ。

「あの戦法には要注意だな」

「もう二回戦の心配？気が早いんじゃないかな」

俺の言葉に返してきたのはフェイト。

既にセットアップを終えているそのバリアジャケット姿を見たのは、出張任務以来になるだろうか。

「気が早いこともないさ……勝つのは俺とリンだからな」

「その冗談は笑えないよ右京さん……勝つのは私とエリオだから」

一触即発というような空気が控え室に充満する。

嗚呼……楽しみだ。

「もうすぐ始まる第二試合、両チームは既にセットアップを終えて準備は万端！この試合はどうなると思いますか？」

「そうですね……すみませんが、Cチームに関しては全くの未知ですね。Dチームは、二人ともスピードタイプ……フェイトさんは管理局最速とも聞きます。六課隊長陣がそう簡単に負けるとは思いませんが……個人的には、右京さんを応援します」

ギンガは俺を応援してくれてるらしい……なぜスバルじゃないんだ？

まあそんなことは今はどうでもいい。

フェイトと戦うのは楽しみだ。

うずうずするね。

「それでは――」

「タッグマッチトーナメント第二試合！」

「スタンバイレディ？」

【GO!!】

「リイン！エリオを頼むぞ！」

「はいです！」

俺は棍を両手で持ち、フェイトに向かって跳躍する。

フェイトも同時に俺に向かって飛び、互いのデバイスをぶつけ合う。

勢いの乗った一撃は重い。

フェイトは飛ばずに、地上で俺と切り結んでいる。

右上から左下、左からの横風ぎ、上から縦一閃。

俺は受け流し、下がって避け、右に少しズレて避け、腹に向かって突く。

「うっ！…っ……」

まず、ファーストアタックは俺が取ったが、フェイトは上空に上がってしまった。

チラッと、リインの方をしてみる。

「フリジットダガー！！」

「うわっ！…っ！」

リインの眼前に氷の小剣が複数現れ、エリオに向かって飛ぶ。

エリオはしゃがむことで避け、足下に飛んできた小剣を跳んで避ける。

「跳んじゃダメですよ？エリオ。凍てつく（フリーレン）……」

「させない！」

「つてのをさせない！」

リインが何かやるのを見てフェイトがデバイスを構えてリインに飛ぶ。

当然、俺がさせる訳もなく、フェイトの横から棍で突こうとする。

「くっ！」

流星はフェイト、すぐに体を止めて俺の攻撃を受け止めた。

その場所は空中の為、俺はすぐに落下し、着地する。

「フェッセルン
足枷！」

「うわあっ!?!」

「エリオ!?!」

突然エリオの着地点に水色の魔法陣が展開し、エリオが着地した瞬

間エリオの両足が凍ってしまった。

氷付けにする魔法か……おっかないねえ。

「いつまでも惚けてるフェイト!!」

「くう!!」

俺はフェイトに向かって飛び上がり、フェイトに向かって右足で回し蹴りをする。

フェイトはデバイスで防いだものの、少し体が下がる。

俺の体はすぐに落下を始めるが、二度も無事着地させてくれるほどフェイトは甘くなかった。

「空中なら避けられないよね!!フォトンランサー……ファイア!!」

フェイトの周りに4つの尖った黄色い魔力弾が現れ、俺に向かって飛んできた。

その速度はティアナのクロスファイアシュートより速い……このままでは直撃する。

「だが、以前の俺とは違うぜ?」

「エアリアルムーブ」

俺は空中にいながら、フェイトの魔力弾を”跳んで”避けた。

俺の行動にリイン、フェイト、エリオの三人が驚いているのがよく分かる。

今、俺はフェイトよりも少し高い位置にいる。

「ソル！カートリッジロード！！」

「ロードカートリッジ」

両手の手甲から二発ずつ、薬莖が排出される。

すると、両手が瑠璃色の魔力に包まれる。

「行くぞフェイトオオオ！！デバイスィィィン……っ！！」

「エアリアルムーブ」

俺は右手を振りかぶり、フェイトに向かって”跳ぶ”。

フェイトはデバイスを鎌のように変形させて黄色い魔力刃を形成して振りかぶり、迎え撃つ構えだ。

「アーク……」

「フィストオオオオ！！」

「セイバー！！」

フェイトはデバイスをスイングするように振り抜き、魔力刃をブー

メランのように回転させて飛ばしてきた。

俺の砲撃とフェイトの飛ばした魔力刃がぶつかる。

「な……めんなあああ!!」

俺の砲撃はフェイトの魔力刃を消し飛ばした。

しかし、先ほどまであったフェイトの姿がない。

「トライデント……」

声が聞こえたのは後方。

振り返ればフェイトがいて、左手を顔の右側に持ってきており、何やらバチバチと電光が見える。

「砲撃です」

「いいねえ!!ソル!!」

「エリアルムーブ」

俺は再び空中を跳び、フェイトに向かいながら左手を振りかぶる。

フェイトは左手を俺に向かって突き出し……砲撃を放った。

「スマツシャアアア!!」

「セカンドインパクトオオオ!!」

フェイトの砲撃は三つ又の槍のような形で俺に襲いかかってくる。

俺は砲撃に突っ込む形で左手を突き出し、砲撃を出した。

一瞬の拮抗……しかし、すぐに押される。

「クソっ!!」

仕方なくまだ砲撃が続いている間に射線から外れる。

やはり、隊長陣の砲撃はまだ、相殺すら出来ないようだ。

「キヤアアア!!」

「リイン!？」

突然、後方から聞こえたリインの悲鳴。

振り返ってみれば、リインがボロボロの状態で目を回して気絶していた。

「……フェイト、てめえ……」

「リインの氷結魔法は厄介だからね」

ニツコリと笑うフェイト……どうやら、本命は俺ではなくリインだったようだ。

……まあ、俺も同じようなもんだが。

「いたあ!?!」

「エリオ!?!」

フェイトがエリオの方を振り向く……間に俺は悠々と着地する。

エリオを拘束していた氷結魔法は砕けており、エリオは頭にタンコブを作って気絶していた。

その傍らには……俺の棍が落ちていた。

「いつのまに……」

「砲撃を撃つ前にな」

俺が棍を手放したのはカートリッジをロードした瞬間。

棍はずっと上空にあり、今になってエリオに落ちてきた……というわけだ。

出来過ぎだつて?正直、俺も驚いてる。

俺は一步で棍の所まで跳躍し、棍を回収する。

「セカンドフォーム」

「スラッシュスタイル」

両手の手甲から一発ずつ薬莢が排出され、手甲と棍が斧へと姿を変

える。

それを見た瞬間、フェイトの顔が笑顔になった。

「それだよ！！私はそれと戦いたかった！！バルディッシュュ！！」

「ザンバーフォーム」

フェイトのデバイスが変形し、まるで大剣のように姿を変える。

大剣の刃は魔力刃であり、その輝きは見惚れてしまうほど。

「カートリッジロードオ！！」

「ロードカートリッジ」

斧から二発、薬莖が排出され、刃が魔力刃によって巨大化する。

フェイトのデバイスからも、二発の薬莖が排出され、魔力が増大する。

「八花……」

「スプライト……」

お互いにデバイスを振りかぶる。

フェイトの顔は笑顔……きっと俺も笑っていることだろう。

「一閃！！」

「ザンバー!!!」

俺の瑠璃色の魔力刃とフェイトの金色の魔力刃がぶつかる。

バチバチと飛び散る魔力の光は幻想的と言う他なく、俺自身、目を奪われている。

だが、それにも終わりが近付く。

俺の魔力刃が押されてきているのだ。

「ちっ……魔力刃同士じゃ刃は通らないか……」

むしろ、俺の魔力刃にフェイトの魔力刃がめり込んでいる。

これ以上やっても俺が負けるのは明白。

なら……。

「ソル!!!盛大にやれ!!!」

「イエス、マイマスター。スラッシュバースト」

「キャアアアア!!!」

「ぐう!!!」

俺がソルに命じた瞬間、俺の魔力刃が強く発光し、盛大に爆発した。

その爆発のせいで俺も少くないダメージを受けるが、フェイトにもダメージを与えて距離を取ることができた。

「いたた……ダメだよ右京さん、そんな危ないこと」

「うるせえ、負けるよりマシだ」

フェイトは言葉こそ、俺を窘めているが、その口調は楽しそうだ。

やはり、俺はバトルマニアだな……戦っている今この瞬間が、とてつもなく楽しい。

「勝つたらもつと楽しいだろうなあ！！ソル！！」

「フラッシュムーヴ」

速度強化の魔法を使い、フェイトへと跳んで斧を振るう。

フェイトは大剣で受け止め、そのまま弾いて距離を取る。

「ソル！！」

「エアリアルムーヴ」

「バルディッシュュ！！」

「ソニックムーヴ」

俺は空中を跳んで、フェイトはエリオと同じ速度強化魔法を使って、互いに再び切り結ぶ。

空中で数回剣撃を交わし、再び距離を取る。

「ソル！！もっと速くだ！！」

再び空中を跳び、フェイトも速度強化魔法を使って近付き、再び切り結ぶ。

フェイトの顔は、楽しげだ。

楽しくて愉しくてたのしくて仕方がない……そんな顔だ。

いや、それは俺の方が……。

数回剣撃を交わし、再び距離を取る。

「ソル！！もっと速くだ！！」

「バルディッシュュー！！」

接近、剣撃、離脱。

「もっと速くだ！！」

接近、剣撃、離脱。

「もっと速くだ！！」

接近、剣撃、離脱。

「もっとだ！！もっと！もっと！！」

不思議と魔力が尽きない。

まだまだ速度は上がる。

フェイトも速度を上げ続ける。

まだだ……もっと……もっと！

「もっとだあ！！もっと！！もっとお！！」

「バルディッシュ！！私達も！！」

ぶつかつては離れ、速度を上げてぶつかつては離れ、更に速度を上げてぶつかつては離れる。

周りの景色なんて気にならない。

俺に見えているのはフェイトだけで、フェイトに見えているのは俺だけ。

「もっと……もっと、もっと！！もっと！！」

「もっと……もっと、もっと！！もっと！！」

気分は最高。

速度の限界なんて知るか。

今、この瞬間が全てだ。

「「もつと速くー!」」

「「ライトニングムーヴ」」

くなのはside

「綺麗……」

呟いたのは私。

フェイトちゃんの金色と、右京さんの瑠璃色が何回もぶつかる。

ぶつかったら離れて別の場所に移動してまたぶつかる。

いつしか2人の姿はそれぞれの光でしか分からなくなり、気付いたら離れて気付いたらぶつかっている。

もう、いつぶつかっていつ離れているのか私の目には分からない。

ただ、光の軌跡が残っていて、その光の路が本当に綺麗で。

「……悔しいな……」

一瞬見えた右京さんの表情はフェイトちゃんしか見えていなかった。
今の右京さんには私なんて見えていないし、私のことなんて頭にな
い。

当たり前と言えば当たり前。

だって私はあそこにいないし、戦闘中に戦闘以外のことなんて考え
てる暇はない。

だけど……理屈じゃないんだ。

私だけを見て欲しい。

私のことだけ考えて欲しい。

でもそんなこと言えなくて……切なくて……辛い。

「なあ高町」

そんな気持ちになっているとシグナムさんから声を掛けられた。

「なんですか？シグナムさん」

「テストロツサが使っているザンバーフォームだが……あれは、フ
ルドライブではないのか？」

「はい。フェイトちゃんのザンバーフォーム、それから私のエクセ
リオンモードもフルドライブですけど……それがどうかしました？」

「いや、その……だな……確か、隊長陣のフルドライブ、リミットブレイクは使用不可のハズだが……」

……あ。

〈なのは side out〉

「楽しいなあフェイトお!!」

「そうだね右京さん!!」

俺達の速度は音速？光速？もはや分からない。

ずっとフェイトとぶつかっている気もする。

「うおあ!!」

「きゃあ!!」

不意に、俺の速度がガクンと落ち、フェイトの攻撃をモロに受けてしまい、地面に激突する。

フェイトも自分の速度を制御しきれなかったのか、そのまま俺を下敷きにするように地面に突っ込んだ。

「ぐっ……ソル……どうした？」

「魔力切れです。プロテクション一枚展開出来ないほどに空っぽです……かろうじてバリアジャケットは展開していますが……」

これ以上は無理か……速度強化魔法……いや、魔法もなしで倒せるほど、フェイトは弱くない。

つまり……詰みだ。

「いたた……あ……」

フェイトが左手で頭を抑えながら、体を起こす。

そして俺と目が合い……真っ赤になった。

因みに、俺はフェイトにマウントポジションを取られているので動くことが出来ない。

……完璧に詰んだな。

「悪いなソル……負けた」

「謝る必要はありません。マイマスターは全力を出して、そして負けました。誇りこそすれ、何を謝ることがありますよう」

「そうだな……フェイト、お前の勝ちだ」

目の前のフェイト……もう本当に目と鼻の先にフェイトの顔がある。

吐息のかかる距離……というの言葉が正しいだろう。

フェイトは目を見開いて俺を凝視している。

凝視する前に離れて欲しいんだがな……。

「フェイト？」

「え……あ……う……」

「フェイトー？」

「ひゃ、ひゃいー!？」

いや、驚くくらいなら離れてくれ。

さて、一回戦で終わりか……強くなったスバルとティアナ、果てはなのは、シグナム、ヴィータ、ザフィーラと戦いたかったんだが……。

「そこまで!勝者、Cチーム!!」

シャーリーの声が響く。

ああ、Cチームが勝者……ん?Cチーム?

「……はい?」

俺とフェイトの言葉が重なる。

ていつかフェイトは早く降りてくれ……頼むから。

「なるほど、フェイトは使用禁止であるフルドライブを使ったから反則負けと」

なんともしょうもない理由だ。

戦闘の高揚感が一気に冷めたぞ。

「うう……」

「フェイトさん、元気出して下さい」

「そうですね。それに、フェイトさんもお兄ちゃんもスゴくかっこよかったです！」

フェイトは恥ずかしさからか、顔を赤くして俯いている。

子供2人はそんなフェイトを慰めている。

結局、勝者は俺達Cチームとなり、二回戦ではスバルとティアナのAチームと当たる。

反則負けの判定が最後まで出なかったのは、シャーリーとギンガが俺とフェイトの戦いに見惚れていたからだそうだ。

魔力と体力はシャマルに回復してもらい、いつでも戦える。

まあ次の戦いはなのはとシグナムのEチームとヴィータとザフィーラのFチームだ。

控え室のモニターには、既に両チームが出揃っている。

「次の試合はEチーム対Fチームの対戦です！この戦いはどうなるでしょうか？ギンガさん」

「Eチームは非常に火力に優れたチームです。対するFチームは防御に優れたチーム……正直、どちらが勝つなんて予想が付きません」

因みに、ザフィーラは人型になっている。

この戦い……実力は拮抗しているようだし、案外長引くかもな。

どっちのチームも戦いたいものだ……早く戦りたいな。

（なのはside）

目の前にいるのはヴィータちゃんとザフィーラ。

お互いのチームはもうセットアップしてある。

「シグナムさん」

「なんだ？高町」

シグナムさんの顔は笑っている。

きっと、今から始まる戦いに心を踊らせているんだと思う。

私もそうだけど……私は、右京さんと向き合いたい。

全力全開でぶつかりたい……だから。

「絶対優勝しましょう」

「無論だ」

「それではー！」

「タッグマッチトーナメント第三戦！」

「スタンバイレディ？」

【GOー！】

先手必勝……すぐに終わらせるよ。

私は……右京さんと……。

「なのはside out」

「そこまで！勝者、Eチーム！」

シャーリーの声が控え室に響く。

試合時間僅か一分……まさに瞬殺だった。

まず、シグナムが剣の形をしたデバイスを一旦鞘に納め、居合いのように引き抜くとまるで鞭のようになってザフィーラ達を囲む。

2人を一カ所に固めて動けなくしたところではがアホみたいに巨大な魔力球を作り出し、それをザフィーラ達に放って決着した。

隣でフェイトがガタガタ震えているのはなぜだろうか。

「はやて……アレはなんだ？」

「アレはなのはちゃんの最凶収束魔法……スターライトブレイカー 星光殲滅魔砲や」

最強の発音やスターライトブレイカーの当て字がハンパなく危険な感じがしたな。

なんでも収束砲というのは自分の周囲の魔力を集めて再利用し、そこに自分の魔力を足して放つ魔法だとか。

なんとこの魔法だ……今の俺では到底防ぐことなど出来ないだろうな。

「おもしれえ……」

防げないなら避けるか打ち破る。

今から戦うのが楽しみで仕方ないな。

まあ、その前にスバルとティアナと戦って勝たないといけないんだがな。

「え、訓練場に若干不備が出た為、二回戦は一時間後に始まります」
シャーリーの言葉が聞こえた瞬間、控え室にいる全員の視線がなのはに向かう。

勿論、俺も見ている。

「あ……あはは……」

【笑って誤魔化すな（ささないでください）】

「はい……ごめんなさい……」

はあ……一時間後か……。

その間に、ラインと作戦を寝るとしよう。

タッグマッチ、第一回戦（後書き）

右京「今回俺が使った魔法の説明だ」

名称：エリアルムーブ

飛行魔法ではなく、短時間空中跳躍魔法。

その名の通り、空中を跳ぶことが出来る魔法。

魔力消費量自体はプロテクションを下回るが、一回跳躍する毎に一回発動しないといけない為に、総合的に見ると魔力消費量は決して少なくない。

今回の話から右京の魔力量が増えた為、解禁した魔法。

名称：ライトニングムーブ

フェイトと互いに速度強化魔法を使ってぶつかり、離れて加速してぶつかつてを繰り返していく内に段々と速度が上がっていき、自分達も気づかぬ内に他者が光の軌跡しか視認出来ない速度まで強化した魔法。

生まれたこと自体は偶発的なものであり、なぜか1人では発動出来ないという不思議な魔法。

発動条件は、フェイトと右京が速度強化魔法を用いて何度もぶつか

ること（他の人物とは不可能の模様）。

右京「なぜか魔力量が上がっていて、俺の魔法の威力が上がっていったな……今なら、キャラの強化付きなら、なのはのプロテクションも八花一閃でスパッといけそうだ」

タッグマッチ、第二回戦（前書き）

いろいろとやりすぎました。

右京「あれは……やりすぎだな」

何がやりすぎかは見て確かめて下さい。

そして、やりすぎだなと感じたら感想の悪い点に”やりすぎWWW”
”と書いて下さい”

右京「そんじゃ、タッグマッチ、第二回戦……スタートだ」

タッグマッチ、第二回戦

（ティアナside）

右京さんとリイン曹長との戦いまで一時間。

その間、私とスバルは対Cチームの対策を練っていた。

正直、リイン曹長の戦闘力は高い……ユニゾンデバイスだからといって侮ってはいけない。

「かと言って右京さんをフリーにするわけにはいかないわよね……」

「私が右京兄いを抑える！」

「無理無駄無茶無謀」

「ティアアが酷い……」

フェイト隊長と渡り合えるスピードと戦闘力を持つてる右京さんにスバル1人で渡り合えるわけないでしょうに。

リイン曹長と右京さんを同時に相手をするって結構厳しいわね……。

一回戦は接近戦の心配がなかった八神隊長とキャロだからなんとかなっただけ。

「一回戦みたいな作戦は？」

「一応試すわよ。でも、多分通じないわね……」

土煙を巻き上げて視界を遮って、出てくるところにスバルの一撃。

あれは相手が飛び上がることを前提にした作戦……一度使ったんだし、きつと通じない。

やはり、幻影を使って翻弄しながら……という私達の基本となる作戦しかない。

「ねえティア」

「何よ」

「私ね、試したい魔法があるんだ」

「試したい魔法？」

スバルからその試したい魔法を聞く。

その魔法は、きつと右京さんがビックリするであろう魔法だった。

……試す価値はあるわね。

〈ティアナside out〉

「やっぱり、お兄さんの魔力が上がってるです……ランクに換算すると、Bランクくらいですね」

試合中に不意に感じた俺の魔力量の増加。

ラインに確認してもらおうと、やはり増えていたらしい。

シャマルにも確認して貰ったが、シャマルの見解では、リンカーコアが傷付いたことによって魔力量が上がったか、死の淵から蘇ったことによる戦闘力上昇ではないか、ということ。

どこのサ ヤ人だ。

「そうか……まあ増えて悪いことはない。ライン、さっきの試合、良かったぞ」

俺の右肩に座るラインの頭を左手で撫でる。

今のラインは小人サイズ……少し力を入れたら首が折れてしまいそうだな。

「ありがとうございます！お兄さんもすごかったですよ？」

「ありがとよ。そういえば、ラインはユニゾンデバイスだったな……ユニゾンって、俺とでも出来るのか？」

「ユニゾンですか？適性というか相性さえ合えば、できると思うですよっ。」

ふむ、ユニゾン自体は可能なようだ。

問題は俺とラインの相性が……。

「不思議と出来ない気がしないな」

「ラインもそう思うです」

どうやらお互いに、ユニゾンは出来ると思っているらしい。

試合中に試してみるか……？

「右京さん！」

「ん？」

「あーギンガです！」

突然ギンガがやってきた。

今更になるが、俺とラインのいる場所は訓練場付近である。

因みに、ラインとギンガは俺の見舞いをしている間に仲良くなったらしい。

「さっきの試合、スゴくかつこよかったです！」

「ありがとうよ」

「ラインも頑張ったですよ！」

「あはは、リインもかつこよかったよ」

ギンガが俺だけ褒めたと思ったのか、リインが両手を上げて怒り出す。

それを見たギンガは苦笑しながらリインの頭を撫でた。

すると、リインは嬉しそうな顔になり、大人しくなる……微笑ましいな。

「次の試合はスバルとティアナが相手ですね」

「ああ……ティアナの幻影とスバルの一撃は厄介だが……負けるつもりは一切ない。リインもいるしな」

「リインにお任せです」

「あはは、頑張ってください」

その後、俺達三人は試合が始まる10分前まで談笑していた。

因みになのはだが……試合のある俺達とティアナ達を覗いた七名に控え室で説教を食らっている。

自業自得だな。

（40分後）

「お待たせしました！」

「訓練場の整備が終わりましたので、第二回戦を戦うチームは訓練場が上がって下さい！」

司会のシャーリーとゲストだか司会だか解説だか分からないギンガの声に従い、ティアナ達Aチームと俺達Cチームが訓練場上がる。

二回戦のステージは戦い馴れた廃墟。

障害物と隠れる場所の多いこのステージは、ティアナの幻影がフルに活用できる……気をつけないとな。

「両チーム出揃いました！第一試合を勝ち抜いたAチーム対、反則という結果ながら奮闘したCチーム！この試合はどうなると思いますか？ゲストのギンガさん」

ギンガはあくまでもゲストらしい。

「両チームバランスが取れているので、後は知恵と行動、連携が勝利の鍵ですね。右京さんもスバルも頑張ってください！」

お、スバルのやる気が上がったな。

こりゃ楽しくなるだろうな。

「それでは！」

「タッグマッチトーナメント第二回戦！」

「「スタンバイレディ？」」

【GO！】

どうでもいいんだが、なぜ食堂にいるハズの隊員達の声がここまで聞こえるのだろうか。

本当にどうでもいいんだが……これも魔法か？

「クロスファイアシュート！！」

そんなことを考えているとティアナから魔力弾が飛んできた。

魔力弾は俺達の足下に着弾し、土煙を上げて視界を遮る……はやて達に使った作戦だな。

俺はリインを左手で掴み、後方に跳躍する。

「……スバルが来ない？」

スバルが来ると思ったから後方に下がったんだが、スバルが現れな

い。

やがて土煙が晴れると……眼前には誰もいなかった。

「やられたな……」

「ですね……」

はやて達と同じ行動をしたのは、俺達にスバルの砲撃が来ると予想させて土煙から前に出させない為。

本命は姿を隠すことか……。

「リイン、頼んだ」

「はいです！エリアサーチ！」

隠れたなら探し出す。

俺一人なら苦勞するだろうが、生憎、俺にはリインがいる。

リインの魔力探知魔法の精度は、出張任務で知ってるしな。

「見つけました……あのビルと……右です！」

右側を見ると、スバルがこちらに向かって爆走している。

ということは、ビルの方はティアナか。

「ソル、カートリッジロードーリインはティアナのところへ！」

「ロードカートリッジ」

「はいです！」

両手の手甲から二発ずつ薬莢が排出され、両手に瑠璃色の魔力が宿る。

リインはティアナの元へと飛んだ。

さあ………来い！スバル！

（スバルside）

目の前にいる右京さんはもう、魔力を溜めている。

だから、私も魔力を溜める。

「行くよ！マツハキヤリバーー！！」

「all right」

右手のリボルバーナックルから三発のカートリッジがロードされる。

私は両手を曲げて引き………両手の前に私の魔力光である青色の魔力

球が現れる。

右京兄いは私の動きを見てビックリした表情をした後に楽しげな笑みを浮かべた。

今から使うのは、私の憧れのなのはさんと……私が尊敬する右京兄いの魔法を組み合わせた私の魔法。

だから……見てて右京兄い。

「二撃決倒！！ダイバイイイイン……っ！！」

「来いスバル！！ダイバイイイイン……っ！！」

これが私の……全力全開！！

互いに右手を引いて……突き出す！！

「バスタアアアア！！」

「フイストオオオオ！！」

私の青い砲撃と、右京兄いの瑠璃色の砲撃がぶつかり合う。

それは、最初に模擬戦した時と同じ状況。

「くっ……！！」

「ぐっ……！！」

押し切れない……以前は打ち勝てたのに。

右京兄いは強くなってる……でも私だって!!

「強くなっただんだ!!」

パァンと、砲撃の光が弾けた。

どうやら相殺したらしい。

相殺したなら……次の一撃を使うまで。

だって私と右京兄いのこの魔法は……

「セカンドオオオ!!」

二発で一回の魔法だから!!

「バスタアアア!!」

「インパクトオオオ!!」

再び、青と瑠璃がぶつかった。

〈スバルside out〉

「リイン side」

「フリジットダガー！」

ビルの中で発見したティアナに向かってフリジットダガーを飛ばす。しかし、ダガーはティアナをすり抜けて……ティアナは消えてしまった。

「幻影……やっぱり移動してましたか」

私がここに来るまでにティアナは移動したようだ。

再び、エリアサーチを使って探そうか……と考えた時、後方に魔力反応を感じた。

「くっ！！」

すぐにビルから離れる。

すると、私が一瞬いた場所に向かってオレンジ色の魔力弾が沢山飛んできた。

「外した！？でも！！」

さっきのビルの向かい側のビルの一室にティアナの姿を確認する。

ティアナは私に向かって再び、大量の魔力弾を飛ばしてきた。

しかし、体の小さい私を捉えることが出来ないでいる。

「くっ……当たらない！」

「フリジットダガー!!！」

「クロスファイアシュート!!！」

私がダガーを複数飛ばすと、ティアナが同数の魔力弾を飛ばして相殺してきた。

一瞬の判断力や魔力弾生成のスピードが遥かにレベルアップしてる。

なのはさんの教導はちゃんと力になっている。

「まだまだ行くですよ！フリジットダガー！」

「負けない!!クロスファイアシュート!!！」

（リイン side out）

「はぁ……！」

「せあー!!」

俺とスバルの右ハイキックがぶつかり合い、パンと音を鳴らして距離が離れる。

先の砲撃は相殺という形で終わり、今はこうしてインファイトを行っている。

さっきのスバルの魔法は間違いなく、なのはと俺の魔法を組み合わせたものだろう。

以前の魔力量なら、やられていたかもしれないな。

因みに棍だが……初期位置に起きっぱなしだ。

「っ!!ウイングロード!!」

「なっ!?!」

スバルは突然ウイングロードを展開し、俺の頭上を走り抜けていった。

まさか逃げた?と思いつながらウイングロードの下を走って追いかけていくと、スバルの向かう方向はラインがいる場所。

「まさか、挟み撃ちか!?(ライン!!スバルが行ったぞ!!)」

「(ええっ!?!)」

俺はラインに念話をしながら、途中で棍を回収する。

そして、リイン達がいる場所を確認すると……まずいな、もうスバルがリインのところに辿り着くぞ。

「ソル!!」

「フラッシュムーブ」

俺は速度強化魔法を使ってすぐにリインのいる場所に向かう。

一気に近付くことで、リイン達の様子が見えた。

ハッキリ言っマズい。

リインはティアナの魔力弾を相殺し続けて動けず、スバルは既に右手を振りかぶり、魔力球も発生している。

「ソル!!最速で跳ぶぞ!!」

「イエス、マイマスター。フラッシュムーブ。エリアルムーブ」

フラッシュムーブで加速して跳び、エリアルムーブで加速を維持しつつ、空中を跳んでリインの元に向かう。

今の俺に出来る最速だ……俺はスバルを追い越し、リインを抱き締める。

「デイベインバスター!!」

「クロスファイアシュート!!」

「ぐううう!!」

「マイマスター!？」

「お兄さん!!」

ティアナの魔力弾とスバルの砲撃が俺に直撃する。

直撃した俺はビルの中にぶち込まれた。

「お……お兄さん?大丈夫ですか?」

「ぐ……正直厳しいな……」

なんとか立ち上がるが……正直フラフラだ。

ある一定以上の魔力ダメージを受けると気絶すると聞くが……どうやらそこまでのダメージではなかったようだ。

「リイン……2人を相手に出来るか?」

「正直厳しいです……」

だろうな……さて、どうやって勝つ?

なのはみたいな砲撃が撃てれば、一発なんだがな……砲撃か……。

「なあリイン……収束するのは難しいのか?」

「収束魔法の難易度は高いです……ユニゾンしても、私一人では……」

万事休すだな……。

手持ちの魔法では厳しく、俺も満足に動けない。

どうする……。

「私がサポートします」

「ソル？」

「私とこのチビがサポートすれば……」

「チビじゃないです！でもそれなら……」

これは……光明が見えたな。

なのは……シグナム……どうやら、対戦相手は俺達のようにだ。

「なのはside」

「右京さん!？」

「ありゃあ直撃したな……流石の右京も厳しいか？」

試合の様子を見ていた私は、スバル達の攻撃を受けた右京さんの姿を見て思わず声を上げる。

隣でヴィータちゃんも厳しい表情を浮かべている。

確かに、大量の魔力弾と砲撃を受けたら、いくら右京さんでも……。

「ううん、大丈夫……だって右京さんだもん」

私は右京さんを信じる。

試合に目を向けると、ビルの屋上に右京さんとラインの姿があった。

「右京さん！」

「すげえタフだな……」

そうだよね……まだだよね！

まだ負けてないよね！

「頑張つて……右京さん！」

「え？何この空気？別に生死をかけた戦いじゃないのに、なのはちやんの纏う雰囲気はなんなん？」

はやてちゃんうるさいの。

「なのはside out」

「行くぞ……ソル、リイン」

「イエス、マイマスター」

「はいです…」

「「ユニゾン・イン…」」

俺の身体にリインが溶け込む。

自分の身体の中に、別の存在を感じる。

魔力が増大し、体の痛みも和らいだ。

暖かい。

体の奥が暖かい。

「これがユニゾンか……」

(ユニゾン適合率98.27%……予想以上の数値です)

頭の中でリインの声が直接響く。

随分数値が高いが……今は気にしないでおくか。

「今なら何でも出来る気がするな……」

本当に、何でも出来る気がする。

それ程に、力がみなぎっている。

「ソル……サードフォーム」

「ガンズスタイル」

両手の手甲から一発ずつ葉莖が排出され、手甲と棍が消える。

変わりに現れたのは……2丁の拳銃。

ティアナのクロスミラージュに似た銀色のリボルバーの短銃、その短銃の銃口の下に銀色の刃渡り10cmのナイフが付いている。

ガンブレイド……というべきだろうか。

「ソル…リイン…収束開始」

「イエス、マイマスター」

(はいです！)

↳ No side

「ユニゾン……？どうして右京さんがリイン曹長と？」

リインとユニゾンした右京さんの姿を見たティアナはそう呟いた。

ユニゾンした右京は茶髪のポニーテールだった髪は鮮やかな水色に染まり、腰まで長い髪を下ろしており、瞳の色は茶から水色に変わり、バリアジャケットは白いアンダースーツがキャロのような黒いアンダースーツへと変わり、その上半身を隠している。

そのアンダースーツの上に藍色のジャケットを羽織っており、腰回りには長い銀色の布が前後左右にはためいている。

それは、控え室にいるはやて達に一人の人物を思い浮かべさせた。

「リインフォース……」

はやてが涙を一筋流し、そう呟いた。

右京の姿は、今はいない最初のリインフォースの姿とよく似ていた。勿論似ているだけであり、違うところなんかいくらでもある。

それでも……重なってしまった。

祝福の風……リインフォース。

はやてが名付け、今も受け継がれしその優しき名前。

「リインフォース……っ……」

はやてが再び名前を呟く。

それと同時に、右京の持つ双銃の先に魔力が集まり始めた。

それは、序盤で右京とスバルが放った砲撃の魔力や、ティアナの撃った魔力弾の魔力を集めていく。

「まさか……収束砲!？」

「右京さんが!？」

なのはとフェイトが驚きの声を漏らす。

右京の魔力ランクと技術では、収束砲なんて撃てるはずがない。

へタをすれば、集めた魔力が暴走し、暴発するかもしれない。

「やめさせないと！」

「大丈夫や」

やめさせるべく立ち上がったフェイトを制したのははやて。

涙を流しつつも試合に目を向けるその姿には、なぜか慈愛を感じられた。

「右京さんなら大丈夫や……右京さんには、祝福の風が吹いてる」

一見、何の根拠にもならないはやてのセリフ。

しかし、その場にいる全員が納得した。

念の為に言っておくが……これは、別に世界の命運をかけた戦いで
もなければ、命をかけた戦いでもない。

あくまでも、はやてが思いつきで始めたイベントである。

〈No side out〉

「魔力収束率87%……」

（魔力安定……お兄さん！）

「了解だ！」

双銃を前方の2人に向ける。

すると、俺の眼前になのは程ではないが、巨大な瑠璃色の魔力球が現れた。

「カートリッジ全弾オールロードオー！」

「オーライマイマスター。フルロードカートリッジ」

ガシャンガシャンという音を立てながら、双銃から六発ずつ葉莖が排出される。

すると、魔力球が更に巨大化し、なのはに匹敵するほどになった。

「魔力収束率99.95%」

（魔力完全に安定……いつでも撃てるです！）

ソルとリインの言葉にニヤリと笑みを浮かべる。

これだけの魔力だ……どれほどの威力になるかなんて分からない。

「いくぞティアナにスバル!!」

「イヤアアア!!」

「（これが俺（私）達の魔法!!絶対零度!!アブソリュウウウ
ウトオ!!ブレイカアアアアアア!!）」

刹那、ティアナ達は全ての廃墟の建物ごと氷付けにされ、建物は全て雪と散り、ティアナ達は気絶で済んだ。

後にティアナ達は声を揃えて語った。

あれは人が人に使っていい魔法じゃないと。

タッグマッチ、第二回戦（後書き）

右京「今回俺が使ったフォームと魔法の紹介だ」

名称：サードフォーム”ガンススタイル”

デバイスが刃渡り10cmのナイフが付いた銀色の双銃になる（見た目はforceのトーマが持つディバイダー）。

ガンブレイドによる接近戦と魔力弾による遠距離戦を行えるフォームで、バルカンシフトを使うにはこのフォームになる。

基本的に射撃魔法はこのフォームで使用。

名称：ユニゾン

リインフォース?とユニゾンした状態。

見た目がリインフォース?とよく似ており、バリアジャケットもよく似たものになる。

この状態だとなぜか氷結魔法の使用が可能となり、ユニゾン適合率が八神家並みに高い。

名称：アブソリュートブレイカー

ユニゾン状態かつ、サードフォームでのみ使用可能となる氷結収束砲。

ソルとリインが自身の演算能力と魔力運用能力をフルに活用してようやく撃てる。

カートリッジ六発ロードという自殺行為に等しいことをしながらもそれを完全に制御しながら撃った魔砲は訓練場の廃墟全てを凍結させて雪と散らせた。

威力はなのはのブレイカーを下回るが攻撃範囲や余波は大きく上回る。

威力AAA

右京「うん……まあ……イベントで撃つような魔法じゃないよな……」

タッグマッチ、決勝戦（前書き）

戦闘書いてテンション上がった

右京「戦闘ばかりだったな……楽しかったから俺はいいが」

嘘みたいだろ？タッグマッチの話、全部同一日なんだぜ？

右京「1日に何度も模擬戦が出来て俺は嬉しいがな」

更に、ソルが……それでは流れ着いて！ミッドチルダ！

右京「タッグマッチ、決勝戦……スタートだ」

タッグマッチ、決勝戦

「リインフォース〜！！うああん！！」

……さて……今の状況を説明するのでしょうか。

ユニゾンしたまま控え室に戻ってきたらはやてに泣きつかれた。

「……………はあ……………」

仕方ない……と俺ははやてを安心させるように抱き締め、はやての頭を撫でる。

俺が原因っばいからな……。

さて、俺達の試合の結果だが、俺達Cチームが勝利した。

ティアナとスバルはすぐに目を冷ましたが、ユニゾン状態の俺を見るや否や「寒い冷たい怖い」と呪文のように呟き、ガタガタと震え

だした。

今はお湯に両足を浸し、毛布を体に羽織り、俺作のホットココアを飲みながらエリオとキャロにメンタルケアをしてもらっている。

なぜ俺が作れたか？いや、控え室になぜかあったんだ……カップもミルクもココアの粉も電子レンジも。

話しは戻るが、俺は先程も言った通り、はやての頭を撫でている。

気になったのはリインフォースという名前だが……俺とユニゾンしているリインとは違うのかとリインに聞いたところ、自分の姉リインというような母というような元となる存在……初代リインフォースの姿と今の俺の姿がよく似ているらしい。

その初代リインフォースは十年前、とある事件の最後に消えてしまったそうだ。

ヴォルケンリッター達の俺を見る目がどこか懐かしそう……それについて辛そうなのは、そういう理由からだろう。

「はやて……俺は……」

「分かってる！分かってるから……お願いや……今は……今だけは……」

「……ソル……次の試合は？」

「一時間後です」

ああ…俺達の魔法のせいで一時的にシステムがフリーズしたから（さっきシャーリーが嘆いていた）だろうな。

シャーリー……すまん。

「……10分だけな……」

「ありがとうな……右京さん……うう……」

それから、俺は20分ほどはやての頭を撫でて続けていた。

長くなったのは……ご愛嬌ってな。

さて、試合まで後30分。

ユニゾンを解いた俺は控え室で椅子に座って休憩していた。

不意に、その隣に、なのはが座った。

「右京さんがユニゾンするなんて……驚いちゃったよ」

「したのはあれが初めてだがな」

二回戦が始まる前にユニゾン出来るか聞いて、出来ない気がしなくて、やっただけきた。

収束砲を撃つ時も……ユニゾンする前は魔力や俺の魔導師としての経験を言い訳に出来ないかもしれないと思っていたのに、ユニゾンしたら失敗する気がしなかった。

ユニゾンは決勝戦の俺達の切り札になる。

「決勝戦は俺達が勝つ」

「私達だって全力全開で戦うから……負けないよ」

お互いの顔を見合い、勝つのは自分達だと自信満々に断言する。

しばらく見つめ合い……やがて、どちらからともなく小さく吹き出した。

そして、何となく控え室にあるテーブルを見つめる。

そこには待機状態のソルとリインがいる。

「マイマスターと合体とは羨ましい妬ましい真似をしてくれましてねこのチビ！」

「リインはチビじゃないです！大体合体じゃなくてユニゾンです！それに、ユニゾンして勝てたんだからいいじゃないですか！」

「黙りなさい青ちび。ユニゾンしなければならぬ状況に陥ったのはあなたのせいでしょうが。はっ！まさかユニゾンしたいが為にワザと……」

「確かにリインのせいかもしれないですけど、リインはそんなつもりはありません！大体青ちびでもないです！」

「ユニゾンして内心では”気持ちいい”とか”とろけそう”とか言
ってたでしょう！マイマスターと一つに……一つ……ハアハア……」

「言っていないです！！ていうかハアハア言わないでください」

「ハアハア言うなと！？一万年と二千年前からマイマスターのこと
あいし　てるうううう！！私にマイマスターの情事を妄想し
てハアハア言うなと！？あなたのようなチビにそんなこと言われる
磐余いわれはありません！！」

「ムキイイイ！！”じょうじ”が何かはしりませんがリインはチ
ビじゃないですうううう！！」

……まあ……その……なんだ。

小人とビー玉（蒼）がケンカしてる様子ってシユールだよなあ……。

このケンカ……実は最初はデバイス同士の反省会だったんだぜ。

「止めなくていいの？」

「……もう少し激しくなったらな」

俺の雷が落ちたのは、この数分後のことだった。

「うう……また訓練場がどうにかなる気がします……グスッ……」

「げ……元気を出して？シャーリー」

【ごめんなさい（すまん）……いや本当に】

俺達がいるのは訓練場でステージはコロシウム。

障害物の類は一切なく、周りの観客席には六課隊員や試合を終えて
いるはやて達が座っている。バーチャル

そしてシャーリーが俺達4人の姿を見て……泣き出した。

まあ……物理的被害とシステムフリーズが立て続けに起きて、その
元凶が並んでいるとくれば……な。

しかもシャーリーは他の隊員と一緒に訓練場を急ピッチで修理して
くれたのだ。

今度、甘いものでも奢ることにしよう。

「グスッ……両チーム出揃い、セットアップも終えております。こ
の試合はどうなると思いますか？ゲストのギンガさん」

「そうですね……前回の試合でユニゾンという切り札が出来たCチームには悪いですが、Cチームの勝率は低いでしよう。Eチームは遠近両方のエキスパートですので、どちらかを落とせば、勝機はあると思います」

ま…確かに、ギンガの言うことは正しいだろう。

俺がユニゾンした場合の魔力量はA+(シャマル情報)……リミッターを付けたなのはよりも僅かに低い。

ユニゾンしなければ更に低いのだ。

俺達が取れる戦法はあまり多くない……だが…まあ。

「それでも勝つのは俺達だ」

「イエス、マイマスター」

「はいです!」

「言ってくれるね右京さん……」

「勝つのは我々だと言わせてもらう」

「言ってる」

互いに好戦的な笑みを浮かべ、バチバチと火花を散らす。

ああ、楽しみだ。

楽しみで楽しみで仕方がない。

「両チーム、既に火花を散らしております……それでは！」

「タッグマッチトーナメント決勝戦！」

「スタンバイレディ？」

【GO!!】

「リイン！」

「はいです！」

「ユニゾンイン！」

試合が始まった瞬間、俺達はユニゾンする。

ポニーテールの髪を下ろして茶髪から水色に変わり、バリアジャケットも黒いジャケットに白いアンダースーツから黒いアンダースーツに藍色のジャケットへと変わり、腰からは前後左右に銀色の布が伸びる。

「いきなり!？」

「ユニゾンだと!？」

「ソル!サードフォルム！」

「ガンズスタイル」

両手の手甲から二発ずつ薬莢が排出され、棍と手甲は刃渡り10cmのナイフが付いた銀色の双短銃剣へと姿を変える。

さあ……速攻で片方を片付ける！！

「リイン！ソル！」

（はいです！フリジットダガー！）

「イエス、マイマスター。ブラストファンク」

カートリッジを使っていないのにも関わらず、俺の眼前に氷の小剣が20現れ、瑠璃色の魔力弾が10現れる。

……正直、魔導師っぽいことが出来て感動している。

「制御は任せた！全弾なのはに飛ばせ！！」

「（はい（です）ー！）」

小剣と魔力弾がなのはに向かって飛び、俺はシグナムへと走る。

最初に落とす標的は……シグナムだ。

（ No side ）

「ふっ！」

なのはは空中に飛び上がり、飛んできた小剣を避ける。

しかし魔力弾は誘導弾だったのか、小剣のように真っ直ぐ飛ばずになのはに向かって誘導してきた。

（速くないけど……誘導性が高い……）

魔力弾の速度は決して速くはなかったが、なのはの後方を的確に追尾してくる。

ならば……となのはは思い、一旦停止して振り向き、レイジングハートを魔力弾に向ける。

「デイベイン……バスター！」

なのはは逃げることを止め、相殺することを選択した。

レイジングハートの先に桃色の魔力が集まり……砲撃として放たれた。

「え！？ウソツ！？」

しかし、放たれた砲撃は魔力弾を掻き消すことはなかった。

魔力弾がなのはの砲撃を避けたのだ。

魔力弾は数を減らすことなく、なのはを追いかける。

「な、なんで？なんでー！？」

なのはは疑問に思いながら、再び逃げ始めた。

なのはが逃げ始めた時を同じくして、地上では右京とシグナムが双短銃剣対剣という武器で異色の剣舞を行っていた。

「うおおおおー！！」

「ハアアアア！！」

双短銃剣の刃でシグナムの剣と剣舞を繰り広げる右京。

そんな右京と、その相手であるシグナムは、互いに似た笑みを浮かべている。

戦いが楽しくて、闘いが愉しくて仕方がない、バトルマニア共通の笑み。

そして、右京は双短銃剣をクロスさせた状態で、シグナムはその間に剣を入れる形で鏢迫り合いになった時のことだった。

「やはり…俺とお前は！」

「ああ…私と貴様は…」

「…間違いなく……同類だ！！」

ギイン！！と高い金属音を立てた後、二人は一度距離を取る。

それは互いの技……魔法が最大の威力が出せる距離。

「レヴァンティン」

「エクスプロージョン」

ガシャンと音を立て、シグナムのデバイス……レヴァンティンから一発の薬莖が排出され、その刃が炎に包まれる。

「ソル、カートリッジロード。リインも力を貸してくれ」

「ロードカートリッジ」

「はいです！氷結付加……冷氷剣！」

右京の持つ双短銃剣から二発ずつ薬莖が排出され、その双刃に冷気が宿る。

シグナムは炎で、右京は冷気……相反するような互いの属性に、二人は更に笑みを深くした。

「受けてみる！！これが古代ベルカの騎士の基礎にして奥義！！」

「だったらお前も受けてみな！！俺達の三位一体の魔法をなあ！！」

シグナムは剣をしっかりと両手で握り締め、刃を地面と水平に、右向きにして構える。

右京は両手を広げて構え、体をかがめる。

「紫電……っ！！」

「（氷華……っ！！）」

獰猛な笑みを浮かべながら二人は互いに向かって跳躍する。

そして、シグナムの炎が。

右京の冷気が。

最大までその力を引き上げた。

「一閃！！」

「（双刃^{そうじん}！！）」

シグナムの炎を纏った綺麗な横一文字と、右京の冷気を纏った×字の斬撃が衝突する。

瞬間、二人を中心に魔力による爆発が起きた。

「アクセルシューター」

「シュート!!」

下方で爆発が起きる少し前、なのはは再び止まって魔力弾を放ち、右京の魔力弾を相殺しようとしていた。

直線の砲撃は当たらない……ならば、魔力弾を操作して相殺しようと思ったのだ。

そして、魔力弾同士がぶつかるまさにその瞬間だった。

「いやあ!？な、なに!？」

下方で突然爆発が発生したのだ。

魔力弾の相殺には成功した為、なのはは少し安心しながら爆心地を見る。

やがて、爆発によってできた煙が晴れる。

その爆心地でなのはが見たのは……。

「……凄い……」

バリアジャケットをボロボロにしながら戦う、右京とシグナムの二人だった。

〈No side out〉

さっきのぶつけ合いでは決着が付かなかった。

それはつまり、まだシグナムと戦えるということだ。

「まだ貴様と戦える！！これほど嬉しいことはない！！」

「敢えて言わせてもらう！！同感だ！！」

さっきの衝突で互いに大きなダメージを負った。

シグナムのバリアジャケットはところどころボロボロだし、俺も似たようなものだ。

しかし、そんなことでは俺達は止まらない。

「オラァ！！」

「ハアッ！！」

右の銃剣を右上から左下に振るう。

シグナムはその刃に沿うように体を回転させてかわし、遠心力を用いた右側からの横一閃を繰り出す。

俺は体を後方に反らしてかわし、両方の銃剣で連続突きを行う。

シグナムはそれを数回かわした後に後ろに跳躍し、距離を取り剣を

鞘に納める。

来る……一回戦でザフィーラ達を一網打尽にしたあの技が。

「飛竜……一閃!!」

シグナムが剣を居合いのように引き抜いた瞬間、まるで鞭のように刀身が伸びてきた。

連結刃……蛇腹剣とも言うな。

「こっちは銃剣!! 剣だけじゃないんでな!!」

(フリーズバレットスタンバイ!)

「撃^てえ!!」

俺が双銃を前方に構えると俺の前に円を描くように氷柱が現れる。

そして、俺の掛け声で一齐に飛んだ。

「温い!! ハアツ!!」

シグナムは蛇腹剣を操り、円の形を作って氷柱を全て破壊する。

しかし、俺はもう既にシグナムの懐の中だ。

なんてこたあない、刃の形が円になった瞬間に速度強化魔法を使い、円の中心を跳んだだけだ。

「くっ!!」

「くらいな!!」

(ブリザードバスター!!)

「あああっ!!」

シグナムの腹に右の銃剣を添え、そこから砲撃を放つ。

螺旋を描きながら飛ぶ砲撃はシグナムの体を回転させながら、観客席まで吹き飛ばした。

シグナムの周辺は凍り付き、シグナムは……意識はあるが、動けないようだ。

「シグナム副隊長起き上がれない!! よって、撃墜と見なします!」

「くっ……無念」

司会なシャーリーから撃墜判定が出たシグナムはがっくりと頭を垂れた。

時間はかかったが、目的は達した。

後はなのはだ。

「マイマスター!! 上空から砲撃が来ます!!」

「ちいっ!?!」

ソルの言葉を聞いて即座に前方に跳ぶ。

すると、一瞬前に俺がいた場所に桃色の光が襲来した。

後ほんの一瞬跳ぶのが遅ければ、直撃していたことだろう。

「クソツ……なのはを後回しにしたのは失敗だったか？」

なのはなら、接近戦に持ち込めばいいと思っていたが……疲労した今の状態では厳しいか。

そう思いながら上を向いた瞬間、俺は啞然とした。

なぜなら……

「……冗談キツいぜ」

（あわわわわ……）

「あんの駄猫……なんという魔力……」

なのはが既にスターライトブレイカー星光殲滅魔砲をスタンバっていたからだ。

その大きさは一回戦に比べれば小さいが、それでも多大な威力を誇るだろう。

「ちっ……ならこっちもブレイカーを……」

（む、無理です！周囲の魔力は全部なのはさんに持っていかれまし

た！例え撃てたとしても、相殺すら出来ないです！)

「それに、魔力量もさっきの戦いでかなり減りました。とてもブレイカー一発分の魔力を集めることは……」

クソッ……やっぱり先になのはを倒すべきだった。

どうする……魔力は…半分くらいか……カートリッジをロードすれば……いや、氷華双刃とブリザードバスターでもう四発ずつ使ってる(ブリザードバスターはシグナムに近付いた瞬間にロードした)から二発ずつしかない。

……まあ、所詮これはお遊びの模擬戦だ。

負けてもいいか。

「なんて思うワケねえだろ……やるからには勝つ……！」

ソルは形態ごとにカートリッジの場所が変わる。

そして、カートリッジの補充は別々で行う。

つまり……

「まだ使っていないフォルムのカートリッジは満タンってワケだ！セカンドフォルム……！」

「スラッシュスタイル」

双銃から一発ずつ薬莢が排出され、その姿を斧へと変える。

俺は居合いのように構え、しっかりと両手で握り締める。

「ソル！！カートリッジ全弾オールロード！！」

「フルロードカートリッジ」

ガシャンという音が六回響き、六発の薬莖が排出される。

増大した魔力はその全てを刃へと変化させ……魔力刃はなのはのブレイカーの魔力球より一回り小さい大きさとなった。

「いくよ……右京さん！」

「行くぞ……なのはあ！」

「これが俺（私）の全力全開！！」

「スタアアアライトオオオオ！！」

「一撃ひっさあつ！！八花……っ！！」

「フラッシュムーブ」

なのはが杖を俺に向ける。

俺はなのはに向かって跳ぶ。

「ブレイカアアア！！」

迫り来るは強大なる桜色の星の光。

俺はそんな鮮やかな桜色を見て一瞬、頭に愛蘭島の風景が浮かぶ。

あの綺麗な桜は永久に忘れることはないだろう。

そして、願わくば……

「一閃!!」

光に向かって斧を振るう。

刃が少しでも通れば、俺達が勝つ。

通らなければ、光に押しつぶされて俺達は負ける。

「通れ……通れ、通れ!!」

ここまで来て敗北はいらない。

「通れ……通れ、通れ!!」

例え遊びの模擬戦だろうが、勝利が欲しい。

(通れ……通れ、通れ!!)

そのために、今この瞬間、俺達は頑張っているのだから。

「(通れえええ!!)」

ピシリと……軽く、小さく。

目の前でそんな音がした。

願わくば……もう一度。

あの海を、あの茜色を、あの桜を。

あの横顔を……もう一度見れますように。

タッグマッチ、決勝戦（後書き）

右京「今回俺が使った魔法の説明だ」

名称：ブラストファンゲ

弾速は並だが、誘導性がハンパなく高い誘導型魔力弾。

魔力弾の操作は主にソルが担当する為、対象の迎撃をかわすくらいは楽勝。

右京に近づく虫には恐るべきストーキング能力を発揮する。

なのはチニアナなせ

名称：氷華双刃

ユニゾン状態かつ、サイドフォルムでのみ使用可能な魔法。

銃剣の剣部分に冷気を纏わせ、x字を描くように切り裂くというものの。

ユニゾン状態で放つ為、基本威力は高い。

名称：フリーズバレット

魔力弾を氷柱にしたもの。

フェイトのフォトンランサーを氷柱に置き換えると分かりやすいか？
誘導性は全くなく、ユニゾン状態でしか撃てない。

名称：ブリザードバスター

螺旋を描きながら飛ぶ砲撃魔法。

その螺旋はさながら竜巻のようであり、受けた対象はキリモミ回転をしながら吹き飛ばすこととなる。

着弾後、対象とその周りを凍結させる。

シグナムが動けなかったのは、キリモミ回転による三半規管の異常と、両手足が凍結して客席にくっついていた為。

右京「今回使ったブラストファングは俊さんが提案してくれた名前だ。ありがとな」

優勝者…そして休息（前書き）

戦闘ないとテンション上がらない……

右京「お前もバトルマニアか？」

自分は戦闘を書いたり見たりするのが好きなんだ。批判になるけど、擬音だけで戦闘や動きを書く作品はいただけないね。

右京「そこは単純に好みだと思っただがな……」

突然ですが、右京に対する質問を受け付けたいと思います。感想やメッセージに質問を書いて頂ければ、右京がお答えします！！

右京「っていうことをやってみたいだけなんだよな……質問なんてそんなにないだろうに」

やってみたいと思うことは悪いことではない！それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！

右京「優勝者…そして休息……スタートだ」

優勝者…そして休息

(綺麗ですね)

(そうだな)

懐かしい声が聞こえ、俺は目を開ける。

その目に映ったのは、茜色の空とオレンジがかった海を背景に存在する一つの桜。

そして隣にいるのは……もう会えないかもしれない俺の家族の少女。

(また、見にきましょうね)

(ああ……また、みんなで)

(えっと……できれば……その……)

少女は恥ずかしそうに頬を淡く染め、もじもじと体をくねらせる。

そして、俺を上目遣いに見上げ……

(今度は……2人きりがいいです)

はにかみながら、そう言った。

桜吹雪にはためく髪を左手で抑えながら言った少女は……桜に負けないほど美しく思えて。

(また来年な……みちる)

俺は少女を……みちるを見つめながら、そう呟いた。

そんな懐かしい記憶はやがて……桜吹雪で埋め尽くされた。

「う……？」

「あ……気がついた？右京さん」

桜吹雪で埋め尽くされた視界が再び広がる。

最初に視界に入ったのは……なのはの顔だった。

「……俺は……そうだ……戦いはどうなった？」

「右京さんは私の収束砲に真っ向勝負して……」

真っ向勝負して……どうなった？

体が全く動かない……どうやら、ユニゾンも解けているようだ。

俺は……なのはのスターライトブレイカーに八花一閃を挑んで……。

「ああ……そうだ……俺は……負けたんだな」

魔力刃はなのはのスターライトブレイカーに耐えきれなかった。

最後に聞いたピシリという音は、魔力刃にヒビのいく音だったんだろつ。

「うん……私の勝ち。まだまだ右京さんには負けないんだから」

「言ってる……次は勝つ」

ニコツと優しい笑みを浮かべるなのはに、俺も小さく笑みを浮かべる。

空は晴天……それを背景にしたなのはの笑みに。

俺は少しだけ懐かしさを覚え……その笑みに見入っていた。

「そこまで!! 右京さんと、ユニゾンしていたリイン曹長、共に撃墜とみなします!!」

「よって、機動六課タッグマッチトーナメントの優勝チームは!!」

「なのはさんとシグナムさんのEチームに決定致しました!!」

【ワアアアアアアア!!】

ギンガとシャーリーが告げたのは、ハッキリとした俺達の敗北。

……また……俺の魔法チカラはなのはに届かなかった。

それが堪らなく……悔しい。

「こんのクソアマアアア！！」

「にゃ！？」

「ん？」

俺となのはが同時に、ソルの声がした方を見る。

俺はユニゾンどころかセットアップすら解けていたらしく、ソルは待機状態だった。

因みに、ソルは俺から少し離れた場所にあり、リインもそこに目を回して気絶していた。

「マイマスターに膝枕など……何を羨ましい妬ましい真似をしてくれてるんですかコラア！！」

ソルに言われて初めて、俺はなのはに膝枕されていることに気付いた。

ああ、なんか妙に柔らかい感触が頭にあると思ったら、そういうことだったのか。

「べ、別にいいでしょ？ 訓練場だと、寝違つかもしれないし……」

「だったらこのチビにもするべきでしょうが！！なぜマイマスターだけなんですか！？」

「あう……」

いや、なのは舌戦弱いなオイ。

まさか、もう反論出来ないとは。

「ソル……口が悪いぞ」

「す……すみません、マイマスター」

「……まあいいわ」

ソルに手を伸ばし、自分の体の上に持ってくる。

リンにも同じように手を伸ばし、自分の体の上に持ってくる。

「なのは」

「なあに？右京さん」

「もう少し、このままでいいか？」

「……うん」

頷いたなのはは……また、優しい笑みを浮かべていた。

場所は変わって食堂。

優勝者であるのはとシグナムには、はやてからエデン・サンクチュアリのペアチケットが贈呈された。

ただ、シグナムはこういったものに興味がないらしく、ペアチケットははやてに渡した。

現在PM18:02……食堂はさながら立食パーティーのような状態だ。

「ん……美味しいな」

オムライスやパスタ、フライドチキンにシーザーサラダ、デザートには一口サイズのケーキやアイスクリーム……くらいしか名前がわからん。

他にも沢山の料理が並んでいる。

因みに、俺が今食べているのはボンゴレスパだ。

「右京さん」

俺に声をかけてきたのはギンガ。

その隣にはスバルとティアナもいる。

スバルはアイスを片手に持って、もう一つの手にもアイスを持って

いる。

「よう、ギンガにスバルにティアナ。お疲れ様」

「「「お疲れ様です！」「」」

しかし、スバルは冷たさと寒さにトラウマが出来たクセにアイスを食べられるとは。

なんとという胆力。

「お一人ですか？」

「いんや、2人だ」

「私を数に入れないとはいいい度胸ですね……バラバラにしますよ？」

「あ……あはは……」

ソルの言葉に、ギンガが苦笑する。

本当にコイツは……最近、過激発言というかネタ発言というか……そんな感じの言葉を連発するな。

「スバルとティアナはもう、冷たいのや寒いのは大丈夫か？」

「まあ……なんとか……」

「大丈夫です！」

ティアナが若干不安だが、だいぶ軽減されたようだ。

キャロとエリオと一緒にアフターケアした甲斐があったな。

「にしても……予想はしていたが……」

「ええ……姉妹揃ってなんです……」

「「？」」

ギンガとスバルの周りに積み上げられた皿。

立食パーティーみたいな雰囲気の中で、こいつらだけ回転寿司のよ
うな雰囲気醸し出している。

マジでどんだけ食うんだこの姉妹は。

立食パーティーは何事もなく進んでいき、そのまま何事もなく終わ
った。

ギンガはなのはやはやてやフェイト達に挨拶をし、108部隊に帰
っていった。

PM20:00……俺とエリオ、キャロとスバルとティアナは風呂
に向かっていた。

機動六課の風呂は、大浴場である。

当然、男女で分けられている。

「それじゃ、また後でな」

「「「はい!」「」」

女子三名と別れ、男2人で風呂に入る。

機動六課は夜遅くまで仕事をする為、基本的に入浴時間はPM21:00……つまり、九時以降となる。

そのためか、今は俺とエリオの貸切状態だった。

「誰もいませんね」

「そうだな……ま、たまにはゆったり入るか」

「はい」

エリオと2人、広い湯船に浸かる。

ここの大浴場は防音機能が高いらしく、隣合っているハズの女湯からは、何も聞こえて来ない。

以前、ヴァイスや他男性隊員が嘆いていた……理解できなかったが、だから、聞こえて来ないイコールこちらの音も聞こえないと考えて

いた。

そう……考えていた。

（No side）

「ホラ、エリオ、背中流してやる」

「あ、お願いします」

「いいなあ……エリオ君」

こちらは女湯。

大浴場を使用する男性隊員達は、女湯から音が一切漏れないから、男湯の音も一切漏れないと思っているが、実際は違った。

実は、女湯からは音は漏れないが男湯から音がただ漏れるのである。

しかも、男湯から音が聞こえるか聞こえないかは女湯からON、OFFが可能という理不尽極まりない構造だった。

「やっぱり、私も……」

「ダメだつてば」

「いい加減諦めなさい」

「ううゝ…」

キャラは右京とエリオが流しつこをするという声が聞こえてくる度に、男湯へ突撃しようとするのだ。

まだ幼いキャラは羞恥心が薄い為、一切の躊躇いなく男湯に向かう。それを危惧した右京は予め、スバルとティアナにストッパーを頼んでいるのだ。

「あれ？スバルにティアナ？」

「キャラもいる」

「なんや、三人で貸切か？」

やってきたのはなのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータの5人。

女湯も普段より時間が早かったせいか、ティアナ達三名以外に人の姿はなかった。

「なのはさんに八神部隊長！」

「フェイトさん！」

「シグナム副隊長にヴィータ副隊長まで…」

八人となった女性陣は湯船に浸かりながら、互いのタッグマッチの話をしていた。

その間、キャロの視線が他七名の胸にいていたのは、はやて以外気付かなかった。

まさかはやてが瞬殺されるとは思わなかった、ティアナの作戦はよかった、右京ともう一度戦いたい。

そんな会話をしている最中に、それは聞こえた。

「お兄さんはスバルさん達やフェイトさん達のことをどう思っていますか？」

唐突に聞こえたエリオの言葉にピクリと反応したのは……全員。

中でも過敏に反応したのは四名。

「なんだ？エリオクンは思春期か？」

「そういう訳でもないんですが……お兄さんはどんな風に思っているのか気になって」

「ふむ……誰が聞きたいんだ？」

壁越しに聞こえる右京とエリオの会話に女性陣は興味津々である。

なのははソワソワと、スバルはキョロキョロと、ティアナはチラチラと、キャラは壁を凝視する。

分かりやすいくらい興味を示している四名に、他の四名は苦笑を浮かべた。

「それじゃあ……僕達フォワードのことを」

「フォワードってことはエリオ、キャラ、ティアナ、スバルのことだな……まあ、妹と弟って感じだな」

右京の言葉にティアナとスバルがガツクリと頭を垂れ、キャラは嬉しいような悲しいような不思議な気持ちになった。

そんな三人の様子を見て、なのはは湯船の中で小さくガツポーズを取る。

「それじゃあ、シグナム副隊長とヴィータ副隊長はどうなんですか？」

「シグナムは……全力で戦いたい相手だな。ヴィータは……まだ関わりが少ないからどう、とは言えないが……強いて言うなら、信頼に値する奴だ」

右京の言葉に喜んだのはシグナムだ。

「トーナメントの時のような好戦的な笑みを浮かべ、如何にも”私も

戦いたい”という雰囲気醸し出している。

逆にヴィータは少し複雑そうだった。

一緒に訓練してはいるが、普段はなのはが主体であり、自分は見て
いるだけである。

右京はデスクワークで分からないところがあれば、ティアナやなのはに聞くので自分に聞くことはない。

つまる所、マトモな会話をしたことがないのだ。

他のヴォルケンリッターが右京と仲がいいのに自分は……と考えていたヴィータに右京は信頼していると言ったのだ。

自分は本当に、信頼関係を結べるようなことをしただろうか……と
考えたところで、一つの案が浮かんだ。

(あたしも右京と模擬戦しよう……シグナムもザフィーラも右京と
戦って仲良く(?) なったんだし)

そんなことを人知れず誓うヴィータ。

そんなヴィータを、はやては優しい瞳で見ている。

「それじゃあ、フェイトさんはどうですか？」

ピクリとフェイトの肩が跳ね、フェイトは湯船から出ようとした。

しかし、はやてとキャロに両手を掴まれ、湯船にリターンした。

「は、離してはやて！ていうかなんでキャラまで!？」

「ええやんええやん。フェイトちゃんも聞こうや」

「みんなで一緒に聞きましょう？フェイトさん」

顔を真っ赤にして、バシャバシャと暴れながら逃げようとするフェイト。

しかし、しっかりと両手を掴んでいるはやてとキャラがそれをさせない。

フェイトがここまで逃げようとするのには理由があった。

自分が反則負けとなったあの試合で、フェイトは右京の顔を間近で見た。

あまり男性との交流がなかったフェイトはその時から妙に右京を意識してしまっているのだ。

更に出張任務の時に行ったスーパー戦闘で偶然混浴してしまったことも思い出してしまい、顔の熱は冷めることなく上がっていく。

今のフェイトは右京の言葉を聞くことが恥ずかしくて恥ずかしくて仕方がないのだ。

「フェイトか……」

「っ!?!」

右京の声が聞こえた瞬間、フェイトが暴れる。

しかし、はやてがフェイトを羽交い締めにし、キャロが腰回りにしがみついているので全く動けない。

そんな三人の様子を見て5人は全く同じことを考えていた。

【（なんでそこまでするんだろう……？）】

「フェイトはシグナムと同じく、もう一度戦いたい相手だな。あの戦闘の高揚感……俺は二度と忘れない」

「……………」

当たり前と言えば当たり前だが、あんまりと言えばあんまりな答えにフェイトは絶句する。

そして、こんなに暴れて恥ずかしく思っていた自分が馬鹿らしくなったと同時に、異性どころか対戦相手としか見られていないことに

対して僅かに怒りを感じた。

「た……確かに、模擬戦は楽しかったけど……あ、あんなことがあったんだから、少しくらい意識してくれてもいいんじゃないかな……？」

「フェイトちゃん、どうどう」

真っ赤な表情から一転、ムスツとした表情になったフェイト。

なのははそんなフェイトの頭を撫でて、宥めていた。

「それじゃあ……なのはさん……と見せかけて八神部隊長！」

「なんでフェイント入れたんだよ。はやては……そうだな……妹みたいな感じだな」

「私は妹か……右京さんをお兄ちゃんって呼ぶのもええかもな」

はやては純粹に喜んでいた。

右京を機動六課に入隊させた時から思っていたことがある。

元は天涯孤独の身だったがゆえの感情だった。

今でこそヴォルケンリッターという家族がいるが、はやてはふと考えた。

兄というのはこういう感じだろうか……と。

リンやスバルやエリオ、キャラが右京を兄と呼び、接する姿を見て、日頃から微笑ましく思いながらも羨ましく思っていたのだ。

そんなはやてにしてみれば、右京から妹みたいと言われたのは、嬉しいことこの上なかった。

「それじゃあ、最後はなのはさん！」

「なのはか……」

「……………」

なのははドキドキと胸を高鳴らせながら、壁を凝視する。

恐らく、この八人の中で一番右京の自分に対する想いが知りたいのはなのはだ。

自他共に認めるほどに、なのはは右京に好意を抱いている。

十年間抱き続けた少女の”憧れ”は、今は女性の”好き”へと形を変えた。

機動六課で共に過ごす内に、その”好き”は更に深くなった。

だからこそ、なのはは考えた。

だからこそ、なのはは聞きたい。

（あなたは……私のことどう思っていますか？あなたは……私のことを想ってくれていますか？）

しかし、その答えが得られることはなかった。

なぜなら……

「あ、おい！エリオ！？……… ったく、なんかテンションが高いと思えば……… のぼせてやがる」

バシャア！…となのはが湯船に体を沈めるようにずっとこけた。

そんななのはを、七人は憐れみの目で見ていた。

そこから男湯から声が聞こえることはなくなった。

右京がエリオを連れて、上がったのだろう。

「い……… いいもん……… 明日、右京さんと遊園地に行くからその時に………」

「ま、そう思っただけは右京さんとなのはちゃんはお休みにしてあげるよ」

「ありがとっちはやてちゃん！」

優勝したチームであるのはは明日1日休みであり、ペアチケットの相手（断定）である右京もまた、休みである。

なのはと同じチームであるシグナムも本来は休みとなるのだが、本人の希望で休みはなかったことになった。

ペアチケットははやてに渡している。

「明日は……右京さんとデート……」

今から楽しみなのはであった。

さて、のぼせたエリオと同じ年のキャラは、果たして無事なのか？

答えは……

「キャラアア！！キャラ！？しっかりして……！」

「あかんのぼせとる！シグナム！！早くシャルのところへ！！後、メンテナンス受けてるラインも呼んで……！」

「はい……！」

キャラとエリオは無事でした。

二人は今日一日医務室で眠ることになり、右京とフェイトが付き添

って眠るのだった。

優勝者…そして休息（後書き）

という訳で、優勝したチームはEチーム……なのはとシグナムのチームとなりました。

右京「次は俺が勝つ！」

だ、そうです。最近また右腕が痛くなってきました……そんなに酷使したかな……

右京「無理して書けなくなった、なんてことになるなよ……応援沢山貰ってるんだからな」

頑張ります。

エデン・サンクチュアリ（前書き）

短く書くつもりが、いつの間にかこんな長さに。

ギャグありネタありシリアスあり。

ただ、甘くない……かな。

それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！

ソル「エデン・サンクチュアリ……始まります」

エデン・サンクチュアリ

「ん……」

医務室の窓から入る日の光を浴びて目が覚める。

そして、俺が一番最初に見たものは……

「くう……すう……」

気持ちよさそうに眠る、フェイトの寝顔だった。

「……俺はエリオと寝ていたハズなんだがな……」

そのエリオは今、隣のベッドでキャロと一緒に寝ている。

昨日の夜はエリオと俺で一つ、キャロとフェイトで一つの計二つベッドを使っていた。

しかし……だ。

なぜか、エリオとフェイトの位置が変わっている。

まさか、フェイトが自分で入ってきた……まさかな。

「ん……う……」

どうやら、フェイトが目覚めるようだ。

少し経つとフェイトはくしくしと目をこすり、ゆっくりと目を開いた。

寝ぼけているのか、ボーっとしているフェイト。

その表情が面白いので、しばらく見ていることにする。

「……………っ!？」

お、顔が真っ赤になった。

昨日といい今日といい、何やらフェイトの真っ赤な顔を見る機会が多いな。

「あ、あれ? な、なんで右京さんが私となのはの部屋に?」

「アホか……ここは医務室だ。昨日、エリオとキャラロがのぼせたから、俺達が2人に付き添って寝たんだろうが」

「あ、そっか……………あれ? じゃあ、なんで私と右京さんが……………い……………一緒に寝てるの?」

「それは俺が聞きたい。なぜ、俺の隣で寝ている?」

俺は一切動いた覚えがない。

ならば、可能性としては、フェイトがエリオと自分の位置を変えた。
もしくは、誰かが入れ替えた……ぐらいか。

まあどうでもいいが。

「わ、私はそんなことしてないよ!？」

「分かった分かった……ていうか恥ずかしいなら出ればいいのに」

「え……えっと……」

フェイトは恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながらも、ベッドから出ようとはしない。

なぜだ?と考えたのも束の間、フェイトはこんなことを言い出した。

「その……もう少し、このままじゃ……ダメ？」

「別にいいが……」

「それじゃあ……もうちょっとだけ」

そう言ってフェイトは目を閉じ、すうすうと寝息を立て始めた。

その寝顔は幸せそうな、心地良さそうな……そんな寝顔だった。

「すげえ人……」

「あはは、ミッドチルダで一番と言ってもいいほど有名な遊園地だから仕方ないよ」

俺となのはがやってきたのはミッドチルダにある遊園地、エデン・サルクチュアリのゲート前。

今日はバリバリ平日なのだが、恐ろしい程人が多い。

因みに、俺の服装は青い長袖の上着に黒い半袖Tシャツ、灰色のジーンズ……以前、ノーヴェが選んでくれた服装だ。

なのはは、白いワンピースのような服に青い半袖のジャケット（漫画リリカルなのはStrikerS?参照）という服装だ。

出かける前、機動六課隊社の前で似合っていると言うと、なのはは少しはにかんでありがとうと言っていたことを思い出す。

まあ、思い出したところで何もないがな。

なのはと二人でゲートに向かい、ゲートの係員にペアチケットを見せる。

「ペアチケットですね。どうぞ、ごゆるりとお楽しみ下さい」

係員の言葉に軽く会釈してパンフレットを貰い、ゲートを通り過ぎ

る。

中に入り、最初に目に入ったのは……” ようこそ！楽園の聖域へ！”と書かれた文字がミッドチルダらしき惑星の周りを回っているプログラムだった。

「さて……どのアトラクションに行くんだ？なのはの行きたいところでもいいぞ」

「うーんと……これが気になるかな」

なのはがパンフレットを指差す。

そこには、”ゼロ・ハンティング”と書かれていた。

……確かにこれは気になるな……楽園も聖域も関係ないし、楽園でハンティングって……。

「……それじゃ、行きますか」

俺はそう言ってなのはの右手を左手で握る。

すると、なのははビックリしたように顔を上げ、俺の顔を見る。

「デート、楽しもうぜ」

「……うん」

満面の笑顔を浮かべるなのは。

そんな笑顔を見た俺は、可愛い奴…と考えていた。

ゼロ・ハンティングと書かれた看板を見つけ、その場所に向かう。

その場所に辿り着くと、何やら人だかりが見えた。

「なんだこりゃ？」

「なんだろっ…？」

なのはと二人で人だかりを掻き分け、内側へと進む。

やがて内側へ辿り着いた時、俺達が見たのは……教会のような建物と、異常な数の白いハトが山のように積み重なっていた……生きたまま。

【……………】

あまりの光景に言葉を発せない人達（俺となのは含む）。

しばらくハトの山をジーツと見てみると、そこから声が聞こえた。

「なあ……人は死んだら……何処へいく？」

バサバサと一斉にハト達が飛び去っていく。

ハトの山から現れたのは……瓦礫の上に座った、くすんだ銀髪を首の後ろで結んだ、屈強な体つきの男性だった。

「……いらつしゃい。ここはゼロ・ハンティング……あんた達は今より、とある動物を狩るハンターとなってもらおう」

係員（だと思つ）の概要を聞いた後、ここにいる全員が係員の案内の下、教会の扉をくぐる。

くぐった先に広がるのは……リンゴの生っている一本の木と、どこまでも広がる草原だった。

この場にいる全員にハンドガンが配られ……もとい、ハンドガン型のデバイスが配られた。

そして再び、男性係員が語り出す。

「……その昔……人は楽園^{エデン}の園にいた……だがある日、一匹の蛇が人をそそのかし、知恵の実を……りんごの実を食べてしまった……こ

うして人は善悪を知る者となり……神はそれに怒って……人を楽園の園から追放した……あんだ達が狩るのはその一匹の蛇だ。あんだ達は総勢百名、内何人かはペアだな。一匹の蛇を狩れるのは1人か1ペア……早い者勝ちだ」

なんという体力を使うアトラクションだ。

乗り物に乗って付属の銃か何かでの宛するかと思えば、まさか自分から動かなければならないとはな。

「注意しておくが、デバイスに入っているのは一発分の魔力のみ……デバイスの魔力しか使えないから、自分の魔力を撃ち出すことは出来ない。見事蛇を狩った奴には、レストラン”イヴ・マクラン”の無料食券を贈呈だ」

無料食券か……こういう場所の食事どころはやたら高いからな。

是非とも欲しいものだ。

「さあ……得る者以外はゼロとなるゼロ・ハンティング……始まりだ」

「行くぞ、なのは！」

「うん！」

係員がハンドガンを上に向け、発砲する。

ドオン……という銃声を合図に、この場にいる全員は走り出した。

決して、係員が怖かった訳ではない……と思う。

「お待たせしました おいしいおいしいはんばーがーですー ほったぶるぶるですよー」

そう言ってハンバーガーと、牛丼の乗ったトレイを持ってきた店員。

その店員に無料食券を手渡し、店員は去っていく。

薄いオレンジのショートヘアに白い帽子を被り、オレンジのスカートと白いトップスという制服を着たその小柄な容姿は、見る者に可憐な少女という言葉を思い浮かばせさせるだろう。

だが男だ（情報提供ご本人）。

俺達がいるのは、イヴ・マクランというレストランの外にある二人用のテーブルで、今から少し早めの昼食を取る。

早い話、ゼロ・ハンティングは俺達が蛇を狩った。

……なぜか俺の足下にいたから……撃ったら当たって、そこで終わった。

所要時間、僅か16秒。

「……………」

「なのは？どうした？」

「え？えつと……………」

チラチラと自分の足下と目の前のハンバーガーを見るのは。

足下に視線を送ると……………なのはが持ってきたバッグが一つ。

……………ふむ。

「いただきます」

「あ……………いただきます……………」

俺は牛丼を、なのははハンバーガーを食べ始める。

お、この牛丼なかなか美味しいな。

なのはもハンバーガーを食べている内に、笑顔になってきた。

……いつもより、暗い笑顔だったがな。

「さて、動くか」

「……うん」

食べ終わった俺達は、レストランから出て適当に歩く。

なのはは笑顔を浮かべているが……やはり、どこか暗い。

「……あつちにベンチがあるから、少し休憩していくか」

「え？私は別に疲れてなんか……」

「俺が疲れたんでな」

キョトンとしたなのはの手を引き、近くにあったベンチに向かう。

そして二人で隣あつて座り、俺は足を組む。

「なあなのは」

「なに？右京さん」

なのははバッグを自分の膝に乗せ、抱き締めるように抱えている。

そのバッグの口から見たのは……四角い箱が一つ。

俺の予想通りなら……。

「俺さ、牛丼程度で膨れるような腹してないんだわ。だから、なんか食い物持ってないか？」

「……あはは、右京さんは食いしん坊さんだね。仕方ないなあ……」

なのはは苦笑しながら、自分のバッグの口を開く。

そして、バッグから一つの箱を取り出して……蓋を開けた。

中には黄色や緑や赤といった色とりどりの具を挟んだサンドイッチ。

「私の手作りだけど、良かったらどうぞ」

「んじゃ、ありがたくいただきますよ」

なのはの差し出す箱から赤い具……トマトを挟んだサンドイッチを取り、食べる。

ふむ……美味しい。

サンドイッチやおにぎりと言った料理は一見、お手軽で簡単そうに見える。

だが、料理する人によって味は違う。

それを踏まえて上で、なのはのサンドイッチは美味しい。

「美味しいな」

「本当？」

「ああ」

「良かった」

なのは本当に嬉しそうな、花の咲くような笑みを浮かべた。

その笑みには暗さなど微塵もなく……可愛らしい笑顔だった。

それから、俺達は遊び倒した。

「ブラボートマス！！ブラボートマス！！お前は無敵だ！！イエエ
エエ！！」

怖いくらい綺麗な笑顔を浮かべる係員の案内の下、トロツコのような乗り物に乗って裁判官であるトマス（仮）の出す有罪無罪の間違いを、手元のボタンで選択する間違い探し（管理局基準）をした。

なのはがいたので割と正解率は高かった……なんてことはなく、直感で押してたら当たったという……。

「万物はいずれ、滅びの運命をたどるもの……美しい花もやがて……朽ち果て……汚れてゆく……だったら産まれたままの 無垢な姿こそ麗しくはないかい？」

指揮者のような動きをする係員の案内の下、時間が進んだり戻ったりするように、急加速やゆっくりと動く、バックなどを繰り返すジェットコースターのようなものに乗った。

「うう……気持ち悪い……」

「大丈夫か？なのは」

なのはが10分ほどダウンするほどのジェットコースターだ。

逆さまで止まったりしたからな……。

「これより誕生祭イスターをとり行う。…ハレルヤハレルヤ……」

見事なまでのスキンヘッドをした筋肉もりもりな係員の案内の下、メリーゴーランドに乗ったりもした。

このメリーゴーランド、最初は子馬だったのだが周回を重ねる度に少しずつ大きくなり、最後には立派な白馬になるというものだった。

因みに、このエデン・サンクチュアリには百を大幅に越えるアトラクションがあるのだが……1日でなんて乗り切れるハズがない。

俺達はこの他にも幾つか乗ったんだが……全て、係員のキャラが濃かった。

そして楽しい時間はあっという間に過ぎていき……時刻はPM20:04。

もう空は真っ暗なのだが、エデン・サンクチュアリは煌びやかな光に包まれている。

もう帰るか……と呟いたところ、なのはが最後に観覧車に乗りたいと言ってきた。

なので、観覧車までやってきた。

まあ……王道っちゃ王道だな。

くなのはsideく

右京さんのデートもこの観覧車で終わり。

凄く楽しかったけど……また明日からは忙しい日々が続いて、こんなに右京さんに触れ合える時間は少なくなる。

そんな未来がやってくる……それが少しだけ……寂しいかな。

いざ観覧車に乗ろうとした時、私は係員の人に呼び止められた。

「お客様……あなたに一つ問いたい」

「……?なんででしょうか?」

「あなたが過ごす日々は……あなたの望むものはありますか？」

その問いに、私は答えられない。

私がこのまま過ごしても、私が望むものはきつと手に入らない。

だって、望むもの（右京さん）はいつか消えて（還って）しまうのだから。

「……私は……」

「愛は決して滅びない」

びくりと肩が跳ねたのが自分でも分かった。

一体何を……と思い、係員さんの顔を見る。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。愛は決してねたまない。愛は決して不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。それゆえ愛は 決して……滅びない」

右京さんはきつと……元の世界へと還る。

じゃあ右京さんが還ったら……私の気持ちは終わるの？

違う。

この人の言つとおり、私の気持ちは……想いは変わらない。滅びない。

「お客様。しよつと思つことを……今日しておきなさい」

「……はい」

しよつと思つじや。

私は……。

〈なのはside out〉

なのはが係員に何かを言われた後、すぐに観覧車へと乗り込んだ。

そして、4分の1ほど進んだ時、なのはが口を開いた。

「右京さん……今日のデート……楽しかった？」

「楽しかったよ。たまにはこういうのもいいもんだな」

これは紛れもない本心だ。

遊園地なんか何年振りか……自分一人より、2人の方が楽しいもんだ。

「私も楽しかった。だから、また……右京さんとデートしたい。これからもたくさんデートしたい」

「……なのは？」

なのはの顔が、言葉が真剣味を帯びる。

何か覚悟を持って、なのはは俺に何かを伝えようとしている。

「……私ね……小さい頃から負担の大きい収束砲を撃つたり、たくさん無茶したりしたんだ。そんな無理がたたって……ある時……大怪我をした」

なのはが言うには、その大怪我のせいで一時は魔導師として空を飛んだりするどころか、歩けるかどうかも絶望的だったとか。

……なんで無茶をしていたのかとか周りの奴は止めなかったのかとか色々言いたいことはあるが、今は抑えておこう。

「聞いた時は怖くなった……もし私が魔導師じゃなくなったら……歩けなくなったら、みんなが離れていくんじゃないか……また独りぼっちになるんじゃないかって思った」

思い出すのは、俺が初めてなのはを夢で見たこと。

あの時、幼いなのはは独りぼっちで泣いていて……周りに誰もいなかった。

そんな記憶があるからこそ、なのはは独りぼっちになることを恐れているのかもしれない。

「でもね？そんな時に思ったんだ……また空を飛びたい。また元気な姿で右京さんに会いたって……そう思ったんだ」

なのはが笑みを浮かべて俺を見つめる。

少し恥ずかしそうに頬を淡く染めているが、俺を見る目は真っ直ぐだ。

「私はもう大人になりました。人を好きになるということが、こんなにも大切で、こんなにも苦しいことだって知りました……右京さん……私はあなたが好きです」

「なのは……俺は、この世界にずっといるつもりはない。元の世界と一緒にいると約束した家族がいる。だから……」

「それでも……私の気持ちは変わらない。右京さんが還るとしても、私の前からいなくなるとしても……私の気持ちは変わらない」

真っ直ぐ。

ただただ真っ直ぐ……なのはは想いをぶつけてくる。

子供のように真っ直ぐ……大人のように深く。

彼女は本当に成長した……大人になった。

「私は右京さんが好き。この気持ちは……絶対に消えない。右京さんは……私をどう思っていますか？私のことを……想ってくれますか？」

「……俺は……」

なのはの何をどう思っているか。

妹のように……違う。

友人や親友……しっくりと来ないな。

イマイチ、これと言える言葉が見つからない。

だが、これと似た気持ちを俺は知っている。

それは、みちるに思ったこと。

側にいたい。

これを恋と呼ぶかは分からないが、俺は確かにみちるに思ったこと

をなのはに思っている。

「……俺はなのはの側にいたい。いてやりたいではなくいたい。だが……」

「……うん、分かっている。元の世界にいるんだよね……私に思うよりも先にそう思った相手が」

「……ああ」

なのはは微笑を浮かべたまま、目を伏せる。

泣くでもなく、嘆くでもなく……なのはは微笑を浮かべている。

その姿が窓から入り込む外のライトに薄く照らされて……少し、儚く見えた。

「いいんだ、それでも……私は、私の気持ちを伝えたかったから。それに、右京さんの気持ちを私に向ければいいだけだもん」

「……やれるもんならやってみな」

なのはの言葉に、俺は小さく笑う。

もし、この気持ちが恋だとして……それがなのはに向いたならば。

俺は藍蘭島とミッドチルダ……どちらの世界を選ぶだろうか。

「うん、やってみるよ……私の全力全開で。だから……」

これは私の挑戦状。

そう言っただのはは……俺の頬に口付けた。

迫り来るは選択の時。

選ぶのは不屈の魂。

不屈の心は魂と共に在ることを願う。

その願いが叶うか否かは……。

その答えは……いずれ……。

エデン・サンクチュアリ（後書き）

ソルは今回は機動六課でお留守番でした。

ソル「あんの駄猫……マイマスターとデートなど羨ましい妬ましい真似を……バラバラにします」

今回の話はなんか批判来そうで怖いですね……次回は原作沿いになる予定です。

ソル「作者が頑張りますので、生暖かい目で見守っ……」

なんで止めたの！？続きは！？

ソル「……フッ」

お出かけと少女（前書き）

遅れて申し訳ないです……オリジナルよりも原作が難しいと感じ始めた今日この頃。

右京「見捨てられていないといいんだがな」

本当に見捨てられていないといいんだけどね……見捨てられないように頑張ります。

右京「それじゃ、お出かけと少女……スタートだ」

お出かけと少女

「はやく side」

それは、右京さん……心の中では兄ちゃんと呼んどじ。

兄ちゃんとなのはちゃんが掛けた日の昼の話。

私はフェイトちゃんと2人で、食堂で昼食を取っていた。

「なあフェイトちゃん」

「なに？はやく」

「右京さんと一緒に寝た感想はどうだった？」

ガン！！とフェイトちゃんが顔をテーブルにぶつけた。

顔を上げたフェイトちゃんの額は赤くなっていて……それと同じくらい、フェイトちゃんの顔は真っ赤になっていた。

パクパクと口を開いたり閉じたりして、キョロキョロと周りを見て……随分と落ち着きがない。

「な、な、な、なんではやくがそれを」

「だってフェイトちゃん運んだん私やし」

「はやくだったの!？」

「うん。で、どうやった？」

「うう……」

真っ赤にした顔を俯かせるフェイトちゃん……かわええなあ。

でも、兄ちゃんと一緒に……かあ。

きっと安心感と満足感に包まれて、幸せな気持ちで眠れるんやろな……。

「は……恥ずかしかったけど……」

「けど？」

「……なんだか幸せな気持ちだった」

そう言ったフェイトちゃんは、スゴく幸せそうな……綺麗な笑顔をしていた。

そんなに幸せな気持ちになったんやったら……私も一緒に寝てみようかな。

その夜、フェイトちゃんはレイジングソウルさんに言葉で泣かされたらしい。

「好きでおっきくなったんじゃないもん……」

そう言っつて自分の胸を見ながら悲しそうに……というか子供のよ
うに泣きそうになっていたフェイトちゃんの姿を見たとか見なかつた
とか。

くはやてside outく

「はい！今朝の訓練はここまで！」

【あ……ありがとうございます……】

なのはに告白されたデートから数日が経ったある日の早朝。

俺達フォワード達は早朝訓練を今し方終えたところだ。

今日の早朝訓練はいつもよりハードだったな……体力のあるスバル
が立てないほどに。

それに、フェイトとヴィータも参加している……珍しいこともある
もんだ。

「今日の訓練はいつもよりきつめにしたんだけど……みんなへ口へ
口だね。右京さん以外」

「流石に少し疲れたがな」

「あの訓練を少し……」

「右京さん何者……」

スバルとティアナが驚愕の声を漏らし、なのはとフェイトは苦笑、エリオとキャラロには羨望の眼差しを向けられ、ヴィータはフツと小さく笑った。

しかし、本当に今日の訓練はキツイ……というか厳しかったな。

何かあるのだろうか。

「さて……何気に今回の訓練が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど……」

「……ええっ!?!」「」「」

第二段階クリアの見極めテストねえ。

そういえば、ティアナ達のデバイスにはリミッターが掛けられていたんだっとな。

このテストが合格なら晴れて一段階、リミッターが解除される訳だ。なのははフェイトとヴィータに視線を向け、小さく笑みを浮かべる。

「どうかな?フェイト隊長」

「うん、合格」

「「はやっ!?!」」

フェイトの即答に再び驚愕の声を上げたスバルとティアナ。

スバルとティアナだけでなくエリオとキャロもびっくりしている。

「ま、こんだけみっちりやってて問題があるなら、大変なことだな」

【あ、あはは………】

ヴィータの言葉に苦笑しか返せないフォワード陣（俺を除く）。

なのははそんなフォワード陣を見て、一度俺を見てから口を開く。

「私もいい線いってると思うし、これにて第二段階終了!」

なのはの言葉にフォワード達は一瞬ポカンとし、次の瞬間には喜びの聲が上がる。

その喜びように、俺も小さく笑みを浮かべているのが分かった。

「デバイスリミッターも一段階解除するから、あとでシャーリーのところに行ってね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練するからな」

【はいっ……!】

ふむ、セカンドモードか……戦ってみたいな。

一体どんな形状をしているのか、どう変わるのか、どういう戦略に繋がるのか……楽しみだ。

……ん？

「明日？」

ティアナと俺のセリフが被る。

聞き違いでなければ、ヴィータは”午後から”ではなく”明日から”と言った。

なぜ、明日からなのだろうか。

「ああ、訓練は明日からだ」

「今日は私たちも隊舎で待機する予定だし」

「最近みんな訓練漬けだったしね」

ヴィータは両手を頭の後ろで組んでニヤリと笑みを浮かべ、フェイト、なのはと言葉を続ける。

この言葉から予想すると……

「今日は午後から訓練はお休み。街にでも出て、遊んでくるといいよ」

ニツコリと笑って、なのは俺の予想通りの言葉を言った。

さて、休みか……何をして過ごすそうかね。

「キャロside」

なのはさんから午後からはお休みと言われた私は、エリオ君とお出かけすることになった。

今は、フェイトさんに選んでもらった洋服を着ているところ。

「うん、よく似合ってる。可愛いよキャロ」

「ありがとうございます」

フェイトさんに可愛いって言ってもらっちゃった……嬉しいな。

エリオ君と……お兄ちゃんも可愛いって言ってくれるかな。

「それじゃあエリオが待ってるし、ロビーまで行くかうか」

「はいー」

今日は……エリオ君とお兄ちゃんと楽しもう。

「キャロサイドアウト」

さて、今俺がいるのは六課の隊舎前。

この場にいるのは俺とエリオとなのはの三人であり、エリオは珍しく私服を着ている。

かく言う俺もいつもの訓練着や藍蘭島から着てきた服、制服とは違ってオレンジのパーカーに黄緑のTシャツ、青いジーパン……早い話、以前セインが選んでくれた服装だ。

「遅いですね」

「女の子ってのは色々と時間がかかるもんなんだよ」

段差になっている部分にエリオと仲良く腰掛けてキャロを待つ。

知ったようなことを言っているが、よく聞く程度の知識なので確証は一切無い。

エリオと二人で両手で頼杖をつき、なのはが俺の隣に座る。

そんな状態から経つこと約10分後、ようやく待ち人が現れた。

「すみません！遅くなっちゃって……」

後方から聞こえたキャラの声に反応して、俺達は顔だけ後ろを向いた。

そこには制服姿のフェイトと……可愛らしい私服姿のキャラがいた。

俺達は立ち上がり、キャラとフェイトを迎える。

「どうかな？エリオ君」

「う、うん……よく似合ってる……」

「ありがとう」

小さく首を傾げながら、エリオに感想を求めるキャラ。

エリオはポーツとして顔を赤らめ、頭をかきながら普段より少し小さい声で呟くように言った。

似合ってると言われたキャラはご満悦だ。

「お兄ちゃんも……その……似合ってると思いますか？」

「ああ、よく似合ってる。可愛いぞキャラ」

「えへへ……」

俺が褒めると照れたように笑ってくるんっっ一回転するキャラ。

長い白桃色のスカートがふんわりと浅く浮き、エリオがまた少し顔

を赤くした。

「さて、それじゃあそろそろ行くか」

「はいっ!!」

俺はエリオ、キャロと手を繋ぐ。

俺達は今から休日となった今日を利用して、三人でクラナガンの街に遊びに行くのだ。

「それじゃあなのは、フェイト、行ってくる」

「行ってきます!!」

「はい、行ってらっしゃい」

子供2人が手を振り、なのはとフェイトが手を振り返したことを確認する。

俺はそんな4人を微笑ましく思いながら、握った2人の手を引いてクラナガンに向かった。

クラナガンに向かう列車の中。

座席に座って景色を見ている俺の前にはエリオが、隣にはキャラロが座っている。

「そういえば、キャラロの竜ってもう一匹いるんだよね？」

「うん、ヴォルテールっていうの。アルザスの古い竜でスツゴく大きいから気軽に呼べないんだけどね……」

「ほお、フリード以外にもねえ……いつか見てみたいな。な？エリオ」

「はい」

「いつか会ってくれと思います」

そんな会話をしながら、緩やかに時間が過ぎていく。

やがてクラナガンへと到着した俺達は列車を降りて駅から出る。

久しぶりに見た街並みは変わらず人で溢れ、俺に別世界にいるという実感を湧かせる。

「お兄さん！」

「お兄ちゃん！」

「なんだ？エリオ、キャラロ」

「「楽しましようね」「」

「……そうだな」

年相応の輝かんばかりの笑顔を浮かべる2人の頭を撫でる。

2人は撫でた頭を両手で抑え、嬉しそうな表情をした。

……まただ……以前、はやてとフェイトとリインと食事した時に感じた感覚。

俺は、この会話を、この笑顔を知っている。

…まあ、デジャヴなんてよくあることだな。

「さて……どこに行きたい？お前達の行きたいところを言ってい
ぞ」

「いいんですか？それじゃあ……」

エリオが何か言おうとした瞬間にぐうぐう……という音が鳴り響き、
言葉が止まる。

俺とエリオは音源……キャラ口に視線を向ける。

キャラ口は恥ずかしそうに俯いており、顔も火が出そうな程に真っ赤
だ。

「…先に腹ごしらえだな」

「そうですね」

「二人とも笑うなんてヒドいです！」

思わず笑いながら言う俺と同じく笑ってしまったエリオ。

そんな俺達を見てキャラは両手を上げてプンスカと怒っていた。

そんなキャラを見て、俺達は謝りながらもまた笑ってしまった。

やってきたのは以前、俺がセイン達と一緒に食事をしたデパート内にあるファミレスだ。

他にも沢山食事どころはあったんだが……やっぱり一度行ったことのある場所の方が安心出来るからな。

「ご注文はお決まりですか？」

「俺はサンドイッチで。お前らはどうする？」

「私も右京さんと同じでお願いします」

「僕はこのボリュームたっぷりハンバーグで……」

「かしこまりました」

注文を聞いた店員はにこやかに店の奥へと去っていった。

俺とキャラが選んだのは俺が前に頼んだもの、エリオはこのファミレスで一番量が多いものを選んだ。

「飯食つたらどこへ行くのか。エリオはさっき、なんと言おうとしたんだ？」

「僕はゲームセンターに行ってみたいです！スバルさんとティアナさんから聞いて、楽しそうと思ってたので……」

「なるほどね……キャラはどつだ？行きたいところはあるか？」

「私はお兄ちゃんとならどこでも……じゃなくてその……あう……」

「あつはつは、そいつぁ嬉しいねえ」

キャラがまた真つ赤になり、嬉しいことを言ってきた。

なので、笑いながら頭を撫でてやると、可愛らしい笑顔を浮かべた。

「お待たせしましたー」

そんな時、店員がサンドイッチ2つとハンバーグを持ってきた。

いや、だから早くないか？

10分も経ってないと思うんだが……サンドイッチはともかく、ポリュームたっぷりハンバーグとかどうやってこんな短時間で……。

ミッドチルダ……恐るべし。

「それじゃあ……」

「「「いただきます!」「」」

両手を合わせて料理に向かって一礼する。

そしてそれぞれ口へと運んだ……なのはサンドイッチの方が美味しいな。

「ここがゲームセンター……」

「お、音が大きくて耳が……」

ファミレスで食事をした後に俺達がやってきたのはエリオの希望であるゲームセンターだ。

……実は、俺もゲームセンターに来たの……初めてなんだよな。

旅してたからゲーム買ったたりゲームセンターで遊んだり、なんていう余計な出費は出せなかったしな。

「さてと……どうやって遊ぶんだろうな」

「「え?」「」

「え?」

「「「……………」」」

沈黙。

誤解がないように言うておくが、金を入れることくらいは分かっている。

問題は……いろんなゲームがあり、それぞれボタンやら銃やらハンドルやらレバーやらがあつて、俺はそれをどのように操作するのが分からないってことだ。

銃はあれか？引き金を引いたらいいのか？

ハンドルは……足元に何やら銀色のプレートみたいなものが……アクセルとブレーキか？車みたいにすればいいのか？

「…………とりあえず、色々触ってみるか」

「「はい！」」

「よし、ショットガンゲットだ。エリオ、そこに回復薬があるぞ」

「ありがとうございます。あ、ボスですね」

「お兄ちゃんエリオ君頑張れー」

あれから俺達は色々なゲームをした。

格闘ゲームやレースゲーム、太鼓を叩くゲームやギターを弾くゲーム、クレーンゲームにパズルゲームなどなど。

今はタイ ・ クライシスとかいうシューティングゲームをやっている。

最近のゲームは初心者用にチュートリアルが用意されているようなので、操作方法が分からないということはなかった。

「っし倒した。…これでクリアか」

「みたいですね。僕達のスコアは……27位……低いんでしょうか？」

「さあな」

因みに、一位の欄にはS・N&mp;T・L……まさかな。

「これ可愛いです！」

「あ、これフリードに似てる」

ゲームセンターを出て次に俺達がやってきたのは、ぬいぐるみなどが売っているファンシーショップ。

女の子のキャラはともかく、男の子であるエリオが楽しめるかどうか不安だったが、存外楽しんでいるようだ。

俺も割と楽しんでいたりする。

「お………?」

不意に、一体の猫のようなぬいぐるみが目に付いた。

ふわふわとした蒼い毛並みに同色の瞳……どことなく、ソルを思わせる。

「……そういえば、ソルにプレゼントって贈ったことないな」

「マイマスター………」

「ぬいぐるみは好きか？」

「マイマスターが選んで下さったものなら何でも………」

何でもいってというのが一番困るんだがな。

だが……まあ……喜んでくれるならいいか。

蒼い毛並みの猫のぬいぐるみを手にとってレジに向かい、その途中で一体のフリードによく似た竜のぬいぐるみを凝視しているキャラの姿を見つけた。

「それが欲しいのか？」

「え？あ、えつと……」

チラチラと竜のぬいぐるみを見て、俺を見るキャラ。
どうやら欲しいらしい。

俺はキャラの見ていた竜のぬいぐるみを取る。

「これが欲しいんだな？買ってやるよ」

「え？でも……ご飯もゲームセンターでもお金を出して買ったの
に……」

「気にすんな。今は子供なんだから大人に甘えとけ」

「……それじゃあ……お願いします」

「はいよ」

というわけで、猫と竜のぬいぐるみをレジに持っていき、購入した。

……ぬいぐるみって……高いんだな。

「お兄ちゃん……本当に良かったんですか？」

「僕達だってお給料は頂いているんですから自分の分は自分で……」

「いいんだよ。俺は別に買うものなんてないから金は使わないし……
……」

将来的に考えて、俺にミッドチルダ（この世界）の通貨はあまり必要ないだろうからな。

俺は……”今のところ”この世界に残るつもりはないのだから。

「次はどこへ行きましょうか？」

「この先に広場があるみたいだし、休憩していこうよ。私、疲れちゃった」

「そうか。じゃあ休憩がてら広場に……ん？」

エリオに俺の荷物を、キャロが自分の荷物を持った状態で手を繋ながら街の外を歩く。

そんな時、俺の耳に何かを削るような、引き摺るような音が聞こえた。

「今、何か聞こえなかったか？」

「何か？」

「引き摺るような、削るような……そんな音だ」

地下から聞こえたようだが……それもすぐ近く。

俺は2人から手を離し、音が聞こえた方向に向かって走る。
たどり着いて場所は……暗い路地裏だった。

そして、そこにいたのは……

「お兄ちゃん！急に走り出さないでください……っ！？」

「2人ともどうし……！？」

「キャロ、エリオ……すぐに六課全体に連絡と……アレの確認だ」

「「はい！」」

ボロボロの布を纏い、足が黒いケースと鎖で繋がれた金髪の少女だった。

お出かけと少女（後書き）

ようやくヴィヴィオとの邂逅を果たしました。

ここから、また展開が難しくなっていくんですよねえ……2、3日
内には投稿したいです。

召喚士と烈火の剣精（前書き）

大変長らくお待たせしました。

言い訳にしかありませんが、個人的な事情故に更新が止まっていた……申し訳ありません。

右京「活動報告にコメントをくれた”読むのはいいけど書くのは”と”Mr・Kk”……ありがとうな。お前達の言葉、確かに俺達の心に響いた。」

時間はかかると思いますが、絶対に完結させます！

右京「そんじゃ、召喚士と烈火の剣精……始まるぞ」

召喚士と烈火の剣精

「なのはside」

ここは機動六課の中にある食堂。

フォワードのみんなと右京さんは出掛けいて、私達隊長陣は隊舎で待機。

そんな私達は今、昼食の真っ最中……なんだけど。

「ハア……」

私も右京さんとお出かけしたかったなあ。

あのデート以来、私は右京さんとお出かけ出来ていない。

まあ、仕事でそれどころではないのは分かってるんだけど……。

「私も右京さん（達）と一緒にきたかったなあ……え？」

一緒にテーブルでご飯を食べていたフェイトちゃんと言葉が被り、驚いてフェイトちゃんを見ると目が合った。

……フェイトちゃんってライトニングの2人の保護者なんだよね。

つまり、フェイトちゃんはお母さんのような存在で……もし、エリオとキャラが右京さんを”お父さん”なんて呼んだら……。

それに、フェイトちゃんもこの間のお風呂の一件から右京さんを意識してるし……。

……あれ？ひよっとして……ライバル？

むむ、負けられない……恋は戦争なの。

いくらフェイトちゃんでもこれだけは絶対に譲れない。

「負けないよフェイトちゃん!!」

「え!?!な、なに!?!」

フェイトちゃんがびっくりしてるけど気にしない。

右京さんの心を射止めるのは私なの。

絶対に負けない……右京さんの元の世界にいる名前も知らない誰かにも絶対負けない!

「な……なのはが燃えてる……なんで?」

フェイトちゃんは終始困惑していた。

そこから数時間後……キャロから緊急通信がきた。

内容は……”レリックと、レリックの入ったケースに繋がれた少女を発見した”というものだった。

くなのはside out

「うん……命に別状はないわ。疲労から眠っているだけ」

「そうか……よかった」

キャロの通信から数十分が経ち、スバルとティアナが合流した後にヘリがやってきた。

中から現れたのはなのはとフェイトとシャルであり、シャルはすぐに少女の容態を調べてもらった。

結果はシャルが言った通り、命に別状はないそうなので安心だ。

だが、一つ問題がある。

この少女の足に鎖で繋がれたレリックの入ったケースは一つ。

だが、鎖の形を見るにもう一つケースがあったようなのだ。

この少女を発見したのは今いる路地裏のマンホール付近。

そしてそのマンホールが開いているところを見ると、十中八九、この少女は地下水道を歩いてきたのだろう。

となれば、レリックの入ったケースは地下水道のどこかにある可能

性が高い。

「俺達フォワード陣は下水道でレリックの搜索」

「私達はこの女の子とレリックをへりで搬送するね」

やることが決まり、俺達フォワード陣はセットアップをする。

そしてなのは達がへりに向かった時、シャーリーから通信が入った。

『ガジェット来ました！下水道に16……20……まだ増えます！更に海上方面にも12機単位で5グループ！』

「……どつちも多いな」

「そつだね……海上方面は私とフェイト隊長が抑える」

「俺達は変わらず地下水路だ。新技とシフトを試すいい機会だしな」

【はい！】

と、思わずなのはと同じように仕切ってしまったが、俺の階級は三等陸士。

階級はスターズの2人よりも下なんだがな……まあ誰一人気にしてないし、いい…のか？

『ロングアーチへ、こちらスターズ02』

そんなことを考えているとヴィータから通信が入った。

『海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。それからもう一人……』

『108部隊のギンガ・ナカジマです』

通信の相手はギンガだった。

なぜギンガが通信を？と考えたが、その答えはすぐに出た。

『別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうですね。参加してもよろしいですか？』

『うん、お願いや』

どう考えても手が足りないから助かるな。

はやてが改めて俺達の配置を決定していき、ギンガは俺達と合流してレリックの捜索に当たることになった。

ギンガの戦闘力は知らないが、スバルが言うにはスバルより強いらしいし、心強いな。

へりの方に誰か残して起きたいが、俺達は飛べないしなのは達も数が多い空のガジェットの制圧をしなければならぬ。

シヤマルも守護騎士と呼ばれているんだし、大丈夫だろう。

「さて……短い休みは堪能したな？こっからはお仕事の時間だ……行くぞ！」

【はいっ！】

元気のいい返事を返してくれた三人を見て笑みを浮かべる。

その後、俺達はすぐに地下水路に向かうのだった。

「ギンガさん、お久しぶりです」

『うん、ティアナ。現場リーダーはあなた？それとも右京さん？』

下水の通路の走りながら、ティアナがギンガに通信を繋げる。

ギンガがティアナに問いかけると、ティアナは俺の方を見てきた。

恐らく、俺に判断を促しているのだろうか……。

「リーダーはティアナだ。だから、ギンガはティアナの指示に従ってくれ」

『わかりました』

さっきも言ったが、俺はティアナとスバル、ギンガよりも階級は下だ。

現場の指揮は基本的に階級が上の者が担当するものなんだがな……。

「ひとまず、南西のF194区画を目指して下さい。途中で合流しましょう」

『F194……了解！』

どうやら、話はずいたらしい。

因みに、ギンガはスバルの使う格闘技、ストライクアーツSAの先生であり、階級も2つ上の二等陸尉だ。

「そういえば、ギンガは別件の捜査の途中って言ってたな。別件ってのはなんなんだ？」

『それは……』

「ちょっと待って下さい。私のデバイスでロングアーチと独立回線を開きます」

『うん、わかった』

ティアナが何やら空中に現れた画面を操作する。

ロングアーチと独立回線を開く………ということをしたらしいな………全く理解できんが。

「お願いします」

『わかった。私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残

骸と壊れた生体ポットなんです。丁度、5、6才の子供が入るくらい。近くには、何か重いものを引きずったような跡があって、それを辿っていこうとした最中、連絡を受けた次第です』

ギンガは別件の詳細を語ってくれた。

その生体ポットとやらの中にいたのは、あの少女だろう……見た目の年齢も5、6才くらいだったしな。

重いもの、というのはレリックの入ったケースだろう。

ギンガがいるのは俺達のいる場所からかなり離れた場所だから……あの少女は、あんなに小さい体でかなりの距離を重り付きで歩いてきたことになる。

そして、ギンガは言葉を続ける。

『それと、この生体ポット……少し前の事件で似たような物を見たことがあるんです』

『私も……な』

ギンガとはやての声に陰りが混じる。

生体ポットなんて日常では使わない言葉だ……それを見たことあるなんてロクなことじゃないだろう。

『人造魔導師計画。その素体培養機』

【!?!】

人造魔導師という単語に、俺を除く全員が息を呑んだ。

人造魔導師……名前から想像するに、人工的に作られた魔導師……
つてところか……。

『これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔導師の素材として創り出された子ではないかと』

「人造魔導師つて……」

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで後天的に強力な魔力や能力を持たせる……人間の手で天才を生み出そうって計画だよ」

キャロの呟いた言葉に答えるようにスバルが言葉を紡ぐ。

スバル自身、自分が戦闘機人であるがゆえに、思うところがあるのだろう……或いはスバルも同じ存在なのかも知れない。

「倫理的な問題は勿論、今の技術じゃどうやってもあちこちに無理ができるし、コスト的にも割に合わないから、狂人か金持ちでもない限り手は出さない筈なんだけど……」

スバルの言葉に続くようにティアナが話す。

そんな時、キャロのデバイスである”ケリュケイオン”から警告が発せられた。

「動体反応確認。ガジェットドローンです」

「来ます！小型ガジェット、6機！」

キャラの言葉を聞いて、俺達は戦闘態勢に入る。

次の瞬間に現れたのは、カプセル型のガジェット6機。

「一気に突っ切るぞ！」

【了解！】

「クリティカルブレード！！」

カートリッジなしで斧の刃に薄い魔力刃を纏わせ、横一閃に振り抜いて魔力刃を飛ばす。

やはりカートリッジなしでは威力が格段に落ちるのか、一機たりとも破壊出来なかった。

が、魔力刃はガジェット達に当たり、その体を一瞬止めた。

「クロスファイア ！！シユ ト！！」

ティアナはその一瞬を見逃さずに、すぐさま複数の魔力弾を放ってガジェットを4機破壊する。

……今のガジェットで大体20機くらいか。

思った以上に数が多い……途中で聞こえてきた通信だと、なのは達
が向かった方にはかなりの敵が現れたらしい……数の暴力つてのは
厄介だな。

そんなことを考えながら進んでいると更にガジェットと遭遇した。

その数……8……内一機はあの丸い奴だ。

「スバルは俺とあの丸い奴!!残りは任せたぞ三人とも!!」

【はいっ!!】

さあてと……新技の御披露目といこうか。

「ソル、ファーストフォーム。スティックオフ」

「ノーマルスタイル」

斧から一発の葉莢が排出され、その姿を両手を覆う手甲へと変える。

俺はスバルと横に並び、丸いガジェットを見据える。

「行くぞ!」

「はい!」

俺はスバルが頷いたことを確認し、丸いガジェットに突っ込む。

俺は右腕を後ろに引き、左足を踏み込ませながら右ストレートをガジェットにぶつける。

ガジェットはその巨体を浮かせ、後ろへ吹っ飛ぶ。

「はああああ!!」

吹っ飛んだ先にいるのはスバル。

俺と同じように両手両足に青い光を灯らせ……俺と同じように殴る蹴るをひたすら繰り返す。

「右京さん!!」

「よしてきたあ!!」

スバルがガジェットを蹴り飛ばし、俺は接近して再びガジェットを殴り、蹴る。

「スバル!!」

「はい!!」

今度はスバルも加わり、前後からラッシュの嵐を食らわせる。

「はああああ!!」

殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る殴る蹴る。

「これが俺（私）達の合体技！！」

2人で同時に右足を振り上げ、ハイキックをして魔力をぶち込む。

「殺！！」

今度は同時に左足を振り上げてハイキックをし、同じように魔力をぶち込む。

「劇！！」

今度は同時に左手を前に突き出して突撃し、ガジェットにダメージを与えながら俺とスバルが背中合わせになるように位置が変わり、ガジェットの巨体が浮いた。

「舞皇拳！！」

最後は2人同時に右腕を浮いたガジェットに向かって突き出し、デインフィストとデインバスターをぶち込んでフィニッシュだ。

数多の数の打撃と砲撃魔法二発を受けたガジェットはその堅い体を無惨にへこませ、バチバチと漏電している。

「これが！！」

「私達の！！」

「殺劇舞皇拳！！」

2人でガジェットに背を向け、腕組みをして凜々と決める。

瞬間、ガジェットは俺達の背後で盛大に爆発した。

「か……かつこいい……」

「ホント……むちゃくちゃね」

子供2人からは尊敬の眼差しを向けられ、ティアナには苦笑された。

因みに、ティアナ達はしっかりとガジェットを破壊し終えていた。

この直後、俺達は壁を壊して現れたギンガと合流し、レリックを目指して先を進むのだった。

下水通路を抜けた先……レリックのある場所と推定されるこの広い空間。

俺達は手分けしてレリックの入ったケースを探し始めた。

全体的に暗く、決して視界が良いとはいえないものの、柱に備え付けられている電灯による灯りのおかげで全く見えない訳ではない。

とは言ってもこの場所が広いことに変わりはない為、小さなレリックケースを探すのは骨が折れるだろう。

「さて、俺もさが「あ、ありました!!」……早かったな」

「コラア!!今マイマスターの言葉を遮ったピンク髪のチビはどこ
のどいつですか!!見つけて夜にマイマスターの隣に寝た瞬間にバ
ラバラにしてあげます!!」

「ひっ!?!」

「やめい」

「あふんっ!!」

どこのどいつとか言いながら明らかにキャラロに向かって過激なこと
を言ったソル……右手の手甲のコアに左手で手刀を入れる。

ソルが黙ったことを確認し、キャラロに近付く。

キャラロは両手で黒いケースを抱えている……少女の足に繋がれてい
たケースと同じものだし、間違いなく目当てのレリックケースだろ
う。

「良くやったなキャラロ。偉いぞ」

「あ…えへへ」

キャラロの頭を帽子越しに撫でると、キャラロは嬉しそうな声を上げる。

かなり時間を費やすと予想していたから、キャラロの発見は快拳と言
える。

「それじゃあ封印して、その後は地上に上がってなのは達の援護に……?」

キャラに話していると、不意に何かの音が聞こえた。

こう……ガツガツと何かを蹴っているかのような音だ。

それと同時に俺達以外の別の気配を2つ感じる。

そして、それは唐突に現れた。

「「っ!?!」」

突然俺達の現れた”黒い異形”。

その異形の前に現れた4つの漆黒の魔力弾……これはマズい!!

「キャラ!!」

「え……ひゃ!?!」

キャラの名前を呼びながらキャラを抱きかかえ、その場から右へと跳んで魔力弾を避ける。

避けた魔力弾は地面に着弾し、煙を巻き上げて異形の姿を隠した。

「無事か?」

「は、はい。でも、レリックのケースが……」

どうやら、俺がいきなり抱きかかえたせいでケースを落としてしまったらしい。

ケースは……俺達から少し離れた場所にある。

回収……いや、先に異形を対処しないと危険か。

「でやあああつ!!」

そう考えていた時、エリオが煙の晴れた場所に存在した異形に向かってデバイスを一闪し、そのまま距離を取り、俺達の元に着地した。

「くっ……」

「エリオ君っ!」

「大丈夫!」

瞬間、エリオの左頬に一筋の傷が入り、そこから血が流れた。

それを見たキヤロが悲痛そうな声を上げるが、エリオは左手で血を拭い、その背でキヤロを庇う。

俺は二人の前に立ち、俺達の前に降り立った異形を見据える。

人型をしてはいるが、その姿は明らかに人とは違う。

全体的に黒ずくめでありながら、衣類は一切見当たらない……つまり、あの黒は地肌の色か。

目は四つ存在し、その鋭い眼光は俺達を射抜くように見据える。

こいつは……強い。

スバルとギンガもこちらに合流し、一挙手一投足を見逃さないように異形を睨み付ける。

「あっ！」

突然キャラロが驚きに満ちた声を上げ、走り出した。

キャラロの向かう先には、レリックケースと……そのケースを大事そうに抱きかかえた紫色の長髪の女の子がいた。

年齢はキャラロ達と同じくらい……って悠長に考えている場合じゃない。

「待て……!!キャラロ……!!」

「邪魔……」

俺の制止の言葉と同時にケースを持った少女が眩き、左手をキャラロに翳す。

その瞬間、少女の左手から魔力が放出され、キャラロに襲いかかった。

「きゃあっ……!!」

「キャラロっ……?うああっ……!!」

その魔力をプロテクション越しに受けたキャラは吹き飛ばされ、エリオを巻き込んで壁に激突した。

蜘蛛の巣状に広がったひび割れとへこんだ壁が、その威力を物語っている。

壁とキャラに挟まれる形になったエリオのダメージは計り知れないし、攻撃を受けたキャラのダメージも大きいだろう……。

……なぜ、俺はここまで冷静に状況を見ることが出来るのか……。

「……野郎……」

ちっとも冷静じゃないんだがな。

突然の奇襲、見たことのない異形、一見無害な少女からの攻撃……それらの予想外が重なって動けなかった自分が情けない。

「……ハアアアアッ……」

俺とスバルとギンガで異形に突撃する。

スバルが飛び蹴りを繰り出すが異形は体を少し逸らして避けた。

「せえい……」

「カートリッジロード……」

「ロードカートリッジ」

すぐさまギンガが異形の懐へと入り込み、スバルと同じリボルバーナックルがはめられた左手でアップパーを繰り出す。

異形はその拳を両手をクロスすることで防いだものの、両手は打ち上げられ、態勢は崩されている。

俺は両手の手甲から二発ずつ薬莢が排出され、右手に瑠璃色の光が灯る。

そのまま右手を引き、ギンガと入れ替わるように異形の懐に入り込む。

「吹き……………とべえええつ！！」

「デイベインフィスト・ストライク」

デイベインフィスト両手分の魔力を宿した右拳は異形の腹にメキツという音を立ててめり込み、宿した魔力を一気に放出する。

異形は瑠璃色の光にその体を飲み込まれ、遠くの壁に叩きつけられた。

次は少女からケースを……………と思いながら少女の方を見ている。

その少女はケースを持ったまま、どこかへ行こうと歩き出していた。

「嬢ちゃん、それは危ないものなんだ……………渡してくれないか？」

なるべく優しく言ったつもりなんだが……………少女は俺を一瞥し、僅か

に目を開いたかと思えば、また背を向けて歩き出した。

「ごめんね、乱暴で。でもね、これ、本当に危ないものなのよ？」

その少女に今まで姿を消していたティアナがクロスミラージュから発生したオレンジ色の魔力刃を少女の首筋に押し付けた状態で現れた。

それでも、少女はケースを大事そうに抱えるだけで手放しはしない。

……何か事情があるのかも知れないな。

俺は少女の前に移動し、しゃがんで視線を合わせる。

「嬢ちゃん、もう一度言うぞ？それを渡してくれないか？」

「……ダメ」

「それはなぜだ？」

「……必要だから……」

嘘を言っているようには見えないな……やはり、何か事情があるのだろう。

キャラに攻撃したことは許せないが、叱るのは事情を聞いてからでもいいか。

「なんで必要なんだ？」

「……………」

「話せないか？」

ふるふると少女は首を横に振る。

話せるが、話さないということだろうか……………さて、どうしたら話してくれるのか。

そんな時、頭上から声が聞こえた。

「スターレンゲホイル！！」

【っ！？】

反射的に少女とティアナを両脇に抱えてその場から飛び退く。

しかしそれは意味を成さず、強烈な閃光と凄まじい爆音が空間内を支配した。

閃光弾……………フラッシュグレネードでも投げ込まれたかのような。

やがて閃光と爆音が収まり、空間内が静寂に包まれる。

「……………全員、大丈夫か？」

【は…はい…】

もう回復した視界で状況を確認する。

スバルはキャロとエリオの元において、2人も無事。

ギンガは、運良く俺達の近くにいた。

俺の両脇にはティアナと……反射的に抱えてしまった少女がいた。

「……離して」

「あ、悪い」

という感じでついつい離してしまった。

少女はタタタツと走り、俺達から離れる……ってなぜ離してるんだ俺は……！

「待つ……！」

少女に向かおうとしたが、少女と俺の間にあの異形が立ちふさがった。

更に、上から声が聞こえてきた。

「ったくもー。あたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ？ルールーとガリユーム」

声の主はそんな言葉を放ちながら少女の元へと天井から舞い降りる。

赤い髪をツインテールにした、リンほどの大きさの影。

恐らく、ユニゾンデバイスであろう影は自身がルールーと呼んだ少

女の近くを浮いている。

「アギト……」

「ホントに心配したんだからな。ま、もう大丈夫だぞルールー。何しろこのあたし！烈火の剣精！！アギト様が来たからな！！」

空中で胡座をかいたアギトの周りに沢山の小さな花火が咲く。

そしてアギトは俺達に視線を向け、声高らかに言い放った。

「オラオラア！！お前らまとめて、かかってこいやああっ！！」

俺がアギトに抱いた第一印象は、”好戦的な奴”だった。

召喚士と烈火の剣精（後書き）

右京「今回俺が使った魔法の紹介だ」

名称：殺劇舞皇拳

右京とスバルで敵を挟み込み、魔力を込めた両手両足でひたすら敵を殴る蹴るを繰り返していき、「これが俺（私）達の合体技！！」の言葉で同時にハイキックして敵を挟み込んで纏った魔力をぶち込み、右京の「殺！！」の言葉で違う足でハイキックして敵を挟み込んで纏った魔力をぶち込み、スバルの「劇！！」の言葉で左手を前に突き出して突撃して互いの位置を入れ替えながら敵に魔力をぶち込んで浮かせ、「舞皇拳！！」の言葉と共に右手を突き上げ、デイベインフィストとデイベインバスターをぶち込んでトドメを刺すという一体の敵に対して使う技。

ポーズを決めて決め台詞を言った後に敵が派手に爆発するのは仕様です

名称：デイベインフィスト・ストライク

単純に本来両手に纏う魔力を片手に絞り、威力を底上げしたデイベインフィスト。

現威力だと、リミッター付きなのはデイベインバスターに拮抗出

来る。

右京「こんなもんだな」

現れた敵（前書き）

またまた遅くなってしまいました……ごめんなさい。

右京「しかも、今回は最長とも言える長さになっているしな」

更に、右手首から先が妙に痛い……なぜ？

右京「まあ……あんまり酷くなったら病院に行けよ」

はい。それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！

右京「現れた敵……スタートだ」

それから、この作品のタグも募集致します。

ネタや真面目どちらもカモン！！

右京「宜しく頼むぜ」

現れた敵

（ルーテシア side）

それは……私があの人達と出会う少し前の話。

ドクターのラボで、私はドクターに呼ばれ、ある人の話をされた。

「ふたつきつきょう?」

「そう、喜喜 右京だよ」

ドクターが見てるモニターを見せてくれる。

そのモニターは、知らない男の人がガジェットを殴ったり蹴ったり棒で突いたりして壊している様子を映している。

やがて、男の人は斧を持って叫びながらガジェットに切りかかり、8つに切り裂いて破壊した。

カッコイい……そう思った。

それと同時に、胸の辺りがなんだか熱くなった……なんで?

「どうだね?君から見た喜喜 右京は」

「……………この人がどうしたの?」

この気持ちをなんとなく口にしたくなくて、強引に話を変える。

すると、ドクターは肩をすくめて「つれないね……」と言って苦笑した。

「この人はね、次元漂流者で、今は管理局にいるんだ……私達は彼を仲間になりたいと思っているんだよ」

「仲間……」

「もし仲間になってくれたら、君のお兄さんになってくれるかもね」

お兄さん……ドクターの言った言葉が頭の中に反響する。

お兄さん……お兄ちゃん……自然と視線はモニターの方へと向く。

そこには、知らない男の子と女の子の頭を撫でながら笑顔を浮かべるうきようとドクターが呼んだ人。

……羨ましい。

この人に頭を撫でられると、どんな気持ちになるのだろう。

家族の温もりを知らない私には想像しか出来ないけれど、きっと……その手はあつたくて。

撫でられると、きっと……私の心もあつたくなる。

お兄ちゃん……か。

「私も……お兄ちゃんになってほしい」

「そうか……ルーテシアからも言われたし、早く仲間になりたいね」

「うん」

いつかお母さんも目を覚まして……うきょうも一緒にいてくれて。

三人でお出かけできたら……きっと楽しいと思う。

そんな未来を想像して……また、胸の辺りがあったたかくなった。

「仲間に……なってくれるといいね……ドクター」

「そうだね、ルーテシア」

この話から数日後、私はうきょうと出会った。

……敵として。

〈ルーテシア side out〉

「おらおらあー！ー」

少女がアギトと呼んだ小人が両手に火の玉を生み出し、俺達に向かって投げつけてくる。

俺は気絶したキャラコを抱きかかえて飛び退き、俺に続くように他の4人も飛び退いて二発の火の玉を避ける。

「まだまだあ！」

アギトは更に火の玉を生み出し、連続で投げつけてきた。

俺達は火の玉を避けつつアギトから離れ、柱の後ろに隠れる。

「ん……っ……」

「キャラコ……大丈夫か？」

「は……はい……」

気絶していたキャラコが目を覚ましたか……まだ痛みはあるようだが、動くことは出来るようなので、俺はキャラコを地面に下ろす。

周囲を確認すると、ティアナとスバル、エリオとギンガがそれぞれ別の柱に背を預けている。

柱越しアギト達を確認する……。

「はっ！……ビビって隠れてやんの！……」

……さて、アギトの戯れ言は放っておくとしてだ。

アギトに黒い異形……アギトはガリユーと呼んでいたな。

それから、あの少女……ルールーと呼ばれていたか？

ルールーには何か事情がありそうだ……その事情さえ教えてくれればいいんだがな。

今は、あのケースを回収することが先か……。

「（全員聞け。キャラ口を除く全員で奇襲をかけるぞ……キャラ口は隙を見てケースを回収してくれ。いいか？）」

【（了解！）】

念話で簡単に考えた作戦を伝えたと、全員が柱越しにルールー達を見る。

さて……派手に行くか。

「ソル、サイドフォルム」

「ガンズスタイル」

両手の手甲から一発ずつ薬莢が排出され、刃渡り10cmの刃が付いた双短銃剣へと姿を変える。

そして、俺は柱から飛び出し、ルールー達に向かって走る。

「やっと出てきやがったな！！食らえ！！」

アギトは再び両手に火の玉を生み出し、俺に向かって投げつけてくる。

俺はその火の玉を……双短銃剣で素早く切り裂いた。

「……へ？」

信じられないというような顔をしたアギトから間の抜けた声が聞こえた。

フリードの火球とティアナの魔力弾すら切り裂いたことのある俺には容易い芸等だがな。

「クロスファイアシュート!!！」

「うおっ!？」

双短銃剣から一発ずつ葉莖が排出され、俺の周りに4つの魔力球が生成され、そこから四発の魔力弾がアギト達に向かって射出される。

しかし、ガリユーはルーラーを抱きかかえて飛び退き、アギトは飛び上がることで避けた。

「ハアアアアア!!！」

だが、ガリユーの着地点には既にスバルとギンガの姉妹が迫っている。

ルーラーを抱きかかえているガリユーでは防御は出来ない……さあ、どうする？

「っ……」

「…………へえ」

ルルーは持っていたケースを手放し、スバルとギンガの拳をプロテクションを展開して防御出来ないガリユーの代わりに防いだ。

必要だと言ったケースを手放して、仲間のガリユーを守った…………優しい子なんだろう。

「でも…………ごめんな」

「アルケミックチエーン!!!」

「あつ…………」

ルルーがケースを手放した瞬間、柱の影から鎖が伸びてきてケースに巻き付き、そのまま柱まで引き寄せた。

それを見たルルーは悲しそうな声で、小さく声を漏らした。

「スバル!!!ギンガ!!!引くぞ!!!」

「「はい!!!」」

鎖が伸びてきた別の柱からオレンジの魔力弾が飛んできて地面に着弾し、土煙を巻き上げて俺達の姿を隠す。

その間に俺達は先ほどの柱の影に移動し、隠れた。

「(さて…………どうする?ティアナ)」

「（そうですね……任務はあくまでもケースの確保ですから、無闇に戦闘を続ける必要もありません。撤退しながら引き付けましょう）」

「（なぜ引き付けるんだ？）」

「（こっちにヴィータ副隊長とリン曹長が向かってるからだよ右京兄い。上手く合流出来れば、あの子達も止められるかも……だよな？）」

「（そうよ）」

ティアナは分かるが、スバルがティアナの言いたいことが分かるのは意外……いや、流石と言うべきだな。

そんなことを考えている時に、今話に出た人物の声が聞こえてきた。

「（よし。中々いいぞ、スバルにティアナ）」

「「っ！？ヴィータ副隊長！？」」

「（私も一緒です。2人とも、状況を良く読んだナイス判断ですよ）」

どうやらヴィータとリンがすぐ近くまで来ているようだな。

通信ではなく念話を使っているのがその証拠だ……だが、どこに？

「ルルー！何か近付いてきてる！！魔力反応……でけえ！！」

アギトの声が聞こえた為、そちらに視線が向く。

ルルーはガリユーから少し離れた位置におり、アギトがルルーの近くにいる。

「うおりゃああああああっ！！！」

気合いの入った声が空間に響き、ルルー達の近くの天井が轟音を轟かせながら崩れ落ちた。

崩れ落ちた瓦礫が地面に降り注ぎ、土煙を巻き起こす。

そして、その土煙からリインが姿を表し、左手に本を抱えながら右手をルルーに向かって翳す。

「捕らえよ、凍てつく足枷！！フリーレン…フェッセルン！！」

リインがそう言った瞬間、ルルーとアギトの周りに風が巻き起こり、2人を氷の中に閉じ込めた。

「ぶっ飛ばええええっ！！」

閉じ込められたルルー達にガリユーが視線を向けた瞬間、土煙からヴィータが異常な大きさのハンマーを持ちながら飛び出し、ガリユーに殴りかかる。

ガリユーはヴィータのハンマーを防いだものの、その圧倒的質量からなるパワーに耐えきれず、吹き飛んで壁に激突した。

……ヴィータはよく、あんなバカデカイハンマーを振り回せるな……
…デバイスなんだろうが。

ヴィータとリインが来てくれたおかげで、フォワード達とギンガの心に余裕が出来たようだし……助かったな。

「おう、待たせたな」

「皆無事で良かったです」

「過激な登場だなお二人さん」

笑みを浮かべる2人に俺は苦笑を浮かべ、氷に閉じ込められたルーラー達に近づく。

やり方は少々……かなり強引だが、これでじっくり話を聞ける。

なぜ、レリックが必要なのか。

なぜ……俺がアギトに攻撃した時に悲しそうな表情を浮かべたのか。

しかし、俺はその答えを聞けなかった。

なぜなら……

「……ちっ……逃げたか」

「こっちもです……逃げられたですね……」

壁に激突したガリユーも、氷に閉じ込められたルーラー達もいなかったからだ。

リインが氷を解除した時には、地面に穴が開いていただけで、ルーラー達の姿はない……穴から逃げたようだ……ガリユーは知らないが。

しかし、あの一瞬で逃げた挙げ句に誰にも気付かれないとは……やるじゃないかルーラー。

しかし、どこに行ったのだろうか……そう考えた瞬間、突如として空間が揺れた。

「なんだ！？地震か！？」

「……大型召喚の気配があります。多分、それが原因かと……」

俺の疑問にキャロが素早く答えてくれた。

召喚か……ルーラー達の仲間が他にもいたのか、それともルーラー自身が召喚士なのか……。

「ひとまず脱出だ！スバル！」

「はい！ウイングロード！」

ヴィータの指示を聞いてスバルが地面を殴りつけ、ヴィータとリインが通ってきた穴に向かって螺旋階段のようにウイングロードを展開し、脱出経路を確保する。

これで、仮にここが崩落しても生き埋めになることはないだろう。

「スバルとギンガが先頭で行け！あたしと右京は最後だ！」

「「はい！」」

「あいよ」

スバルとギンガが頷き、ウイングロードを走り出す。

それを見た後に次に走るであろうティアナを試してみる。

すると、ティアナはキャロと何やら悪巧みしているようだ。

……ふむ。

「ティアナ、キャロ、何企んでるんだ？」

「企んでるなんて人聞き悪いこと言わないで下さいよ」

「悪かった。……俺も一口混ぜてくれ」

「いいですけど……」

さて、あれはまだ服の中に入っていたはず……。

悪いな、ルールー……レリックはやれないんだ。

（アギトside）

あいつらから逃げる事が出来たあたし達は、地上に出て、高いビル
の屋上にいた。

屋上から下を見てみると、地上には巨大なカブトムシのような生物
がいる。

その生物……ルールの召喚虫である”地雷王”はバチバチと放電
している。

「ダメだよルール！これはマズいって！！」

ルールがやっている事は人を……あいつらを殺しかねないことだ。

管理局の奴らは嫌いだけど、死んでいいとまでは思っていないし、
ルールに人殺しなんてしてほしくない。

「それに、あいつだって……”うきょう”だっているんだろ！」

以前、ルールが言っていた”お兄ちゃん”になってほしいと言っ
ていた男性。

そいつの名前を出すと、ピクリとルールの眉が動いたのが分かる。

「それに、埋まった中からどうやってケースを……」

「大丈夫」

あたしの言葉を遮ってルーラーが呟いた。

「あの人なら……あの人達なら多分、この程度じゃ死なない。ケーヌはクアットロとセイインに頼んで探してもらえばいい」

「よくねーよルーラー！あの変態医師とかナンバーズの連中と関わっちゃ駄目だつて！ゼストの旦那も言つてただろ？あいつら口ばっか上手いけど、実際のところ、あたし達のことなんて精々実験動物くらいにしか……」

そこまで言つた瞬間、先ほども聞いたような轟音が響いた。

その音の方向に目を向けると、地雷王のいる場所が地雷王を中心に沈んでおり、地雷王の発していた電撃が消えていた。

「ああ……やつちまった」

と言いながらがっくりと肩を落とすけれど、あいつらが死んだ、なんてあたしは微塵も思つてはいない。

この程度で死ぬなら、地下の戦闘で死んでいてもおかしくないからだ。

隣にいるルーラーを見てみると、ルーラーがガリユーを戻すところだった。

ガリユーの傷は軽いものじゃない……左胸からは血を流していたし、腹なんか見るも無惨にべこつとへこんでいた。

一体誰がやったんだろうか。

そして、ガリユーを戻したルーラーは地雷王に視線を移した。

「地雷王も……っ!？」

ルーラーが名を呼んだ瞬間、地雷王の真下に桃色の魔法陣が現れ、そこから伸びた何本もの鎖が地雷王に巻きついて拘束した。

「これは……さっきの……」

あの鎖はルーラーからケースを奪ったもの……ってことはあいつら、もう脱出したのか!？」

そんなことを考えていると、青と紫の道があたし達に向かって伸びてきて、さっきの赤い騎士が迫ってきた。

「っ!！」

あたし達が動き出そうとした瞬間、向かい側のビルにあたし達にデバイスを向けている奴がいることに気付いた。

そして気付いた瞬間、そいつからオレンジ色の魔力弾が飛んできた。

「ちいっ!！」

あたし達は魔力弾を回避しながら、あたしは火炎弾を、ルーラーが紫の小剣を生み出してあいつらに飛ばす。

しかし、咄嗟に飛ばした攻撃は全て避けられてしまい、そのことを悔しく思いながら、ルールーは近くの高い位置にある道路の手摺りに着地し、あたしはルールーの近くに飛ぶ……そしてルールーが着地した瞬間に、それは聞こえた。

「悪いな」

ただ、一言。

その言葉が聞こえた時には、ルールーの胸元には赤い髪のカギに槍を突きつけられ、あたしの周りには氷の小剣が浮いていた。

そして、あたしらの前には……

「ここまでです」

「事情を聞かせてもらおうぞ……叱るのはその後だ」

あたしらにバインドをした青ちびと……”つきょう”がいた。

〈アギトside out〉

〈No side〉

右京達のいる場所から遙か離れたビルの屋上に2人分の人影があっ

た。

片方は眼鏡をかけ、白いケープを羽織って、蜂蜜色の髪を二つに束ねた女性。

もう片方はマントのような布で身を包み、自分の身長ほどの巨大な棒状の物を手にし、茶髪を首の後ろで一つに束ねたスバルとティアナほどの少女だ。

2人は身体に張り付くようなボディースーツを着ており、それぞれの首の辺りのプレートには”？”と”？”の刻印があった。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる……よく見えるよ」

？のプレートの女性にディエチと呼ばれた少女の目には、自分達の場所から遙か離れた、シヤマルと保護した少女を乗せたヘリがハッキリと写っていた。

「でもいいのか？クアットロ。撃っちゃってさ。ケースは平気だろうけど、”マテリアル”の方は破壊しちゃうかも……」

「大丈夫よ。ドクターとウーノ姉様が言うには、”マテリアル”が当たり前なら……本当に”聖王の器”なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫だそうよ」

「ふうん」

気のない声で話ながら、ディエチは持っていた巨大な物を包んでい

た布を取り払う。

すると、少女が扱えるとは思えないほどの巨大な砲身が姿を現した。

「さあて……それじゃあ早速『クアットロ』……どうしました？ウーノ姉様」

クアットロと呼ばれた女性の前にモニターが現れる。

そこには、クアットロがウーノと呼んだ女性の顔が映っていた。

『ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「ああ、そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたねえ」

何が楽しいのか、クアットロはニコニコと笑顔を浮かべている。

そんなクアットロを見たウーノは溜め息を吐いて右手を額に当てながらも言葉を続ける。

『今はセインが様子を窺っているけど……』

「フォローしますう？」

『お願い』

「了解です」

ウーノはクアットロの返答を聞いた後、モニターごと姿を消した。

それを見たクアットロは右手の人差し指と中指で眼鏡の位置を直しながら、様子を窺っている。と聞いた自らの妹であるセインへと念話を飛ばすのだった。

場所は変わり、ここは右京達のいる道路の上。

そこにはバインドではなく拘束具によって体の自由を奪われたルーテシアとアギトと、2人に質問する右京達がいた。

レリックのケースはエリオが持つており、そのエリオとキャロは一緒にいて、他の六人がルーテシア達を囲んでいる状態だ。

「それで、目的はなんだ？何でレリックを狙った？」

「教えてくれ……なぜ、レリックが必要なんだ？」

強い口調で尋ねるヴィータと、しゃがんでルーテシアと視線を合わせて優しく尋ねる右京。

ルーテシアはヴィータの方は一切見ずに、右京の顔と地面を交互に見ている。

そんな時、クアットロから念話が来た。

「（はあゝい、ルーお嬢様）」

「(……クアットロ?)」

「(何やらピンチのようで。お邪魔でなければ、クアットロがお手
伝い致します)」

「(……お願い)」

ルーテシアとクアットロとの間で交わされる言葉を、右京達は知る
由もない。

ルーテシアの表情はいたって無表情の為、気付こうにも気付けない。

そして、ルーテシアはクアットロから来る言葉を紡ぐ。

時間は少し遡り、なのはとフェイトはへりを目指して全速力で移動
していた。

その全速力が幸を制したらしく、2人の視界に無事なへりの姿が捉
えられた。

「見えた！」

「良かった…へりは無事！」

へりの無事な姿を見て安堵の息を漏らす2人。

しかし、そんな2人にロングアーチから凶報が知らせられた。

『砲撃のチャージ確認！物理破壊型、推定Sランク！』

悲鳴のようなロングアーチの通信に、2人の顔に緊張が走る。

へりまでの距離は、まだ離れていた。

「インビュレントスキルIS、へヴィバレル、発動」

ビルの屋上でディエチが静かに呟き、手にした砲身を遙か彼方を飛ぶへりに向ける。

その砲身の前には橙色の巨大な魔力の塊が浮かんでいる……間違はなく、ロングアーチの観測した魔力の元凶だった。

クアットロはディエチを見ながら、楽しげな表情を浮かべながら、ルーテシアに紡がせる言葉を呟いた。

「（「逮捕はいいけど」）」

ルーテシアの呟いた言葉を聞いて、右京達は不思議そうな表情を浮かべる。

そして、次の言葉を聞いて、全員が戦慄した。

「大事なへりは……放っておいていいの？」

【!?!】

↳ No side out ↳

なんだ？ルールーは今、なんと言った？

大事なへり？

それはつまり……シャマルとあの少女が乗っているへりが危ないということがあるか？

そう考えて、俺はへりが飛んでいる方を向いた。

へりは……よし、無事だな。

「巨大な魔力反応を確認」

「なに？」

巨大な魔力反応……それが、へりを落とすということか。

「あなたはまた」

更にルーテシアが言葉を続ける。

そしてその視線は……ハッキリとヴィータを捉えていた。

「守れないかもね」

「魔力反応、へりに向かって射出されました」

その言葉を聞いた瞬間、俺はすぐに行動を起こした。

「ソル！！フルドライブ！！」

「ドライブイグニッション」

へりは……落とさせはしない。

く No side く

デイエチが放った砲撃はドオン！！という爆音を響かせながら爆発し、へりの姿を煙の中に隠す。

『砲撃……へりに直撃……』

『そんなハズない！！確認して！！』

『ジャミングが酷い……精査できません！！』

ロングアーチの焦った声が響き、ヴィータ達は啞然としていた。

陽動という可能性は考慮していた。

それ以外の可能性も考慮していた……にも関わらず、へりは爆発の中へと姿を消してしまった。

「そんな……」

「ヴァイス陸曹とシャマル先生が……」

「……っ！！てめえ！！」

エリオとティアナが呟いた瞬間にヴィータはルーテシアに掴みかかり、怒りの表情で睨み付ける。

対するルーテシアは、まだ無表情を貫いている。

「仲間がいんのか！？どこにいる！？言え！！」

ルーテシアを揺さぶりながら、ヴィータは怒気の籠もった言葉をぶつける。

当然、ルーテシアは何も答えずにいる。

「エリオ君！足下に何か！」

そんな時、ギンガがエリオの足下を指差して声を発する。

瞬間、エリオがギンガの言葉に反応する前に”地面”から現れた人影がエリオからケースを奪い取った。

「うわっ!?!」

「いただきっ！」

その人影はケースを奪い取った後に地面に降り立つ……ことはなく、地面の中に、まるで水の中に入るように”沈んだ”。

ティアナはすぐにその場所に向かって魔力驛を放ったが、人影に当たることはなく、地面に着弾した。

「くそっ！」

「っ！」

ヴィータとティアナは人影を追ってしまい、ルーテシアから離れる。

それがまずかった。

人影はヴィータ達が離れた瞬間に、地面からルーテシアの前に現れた。

「っ！っ！」

ヴィータはすぐに気づき、慌てて捕らえようとする。

しかし、人影はルーテシアを抱き締めながら地面の中へと沈み、ヴィータの行動は失敗に終わってしまった。

更に全員がルーテシアに意識を向けていた為に、いつの間にかアギトがいなくなっていたことに気付かなかった。

「リイン！あいつらは！？」

「ダメです……反応……ロストです」

リインの言葉を聞いたヴィータは悔しそうに地面を叩く。

犯人は逃がし、仲間の居場所は吐かせられなかったとヴィータは悔やむが、せめて……とロングアーチに通信を繋ぐ。

「ロングアーチ……へりは無事か？あいつら……落ちてねえよな！？」

その答えは……

「安心しろ……へりは無事だ」

いつの間にかへりの元にいた右京が答えた。

（No side out）

「なのは、フエイト……頼んだぞ」

「「任せてっ！！」」

砲撃が飛んできた方向に2人が飛んでいったことを確認し、俺はヴィータ達の元へと降り立つ。

すると、全員がびつくりした表情を浮かべ……俺の右手を見ていた。

正確には、俺の右手に握られている日本刀を見ている。

「これか？これは俺のフルドライブだ」

そう、この日本刀……蒼い刀身に鍔の部分にはめ込まれたソルのコアに蒼い柄と全体的に蒼いこの日本刀こそが俺のフルドライブ。

どっかの死神のように、自身の速度を上げるといふことと見た目が日本刀ということ以外は、セカンドフォームとそれほど変わらない。

俺はこのフルドライブを使い、ヘリの元まで一瞬に近い速さで跳び、魔力弾は俺と同時にヘリの元に来ていたのはと共にプロテクションを張って防いだ。

「ルルー達は……逃げたみたいだな」

「ああ……レリックも奪われちゃった」

ヴィータが悔しそうに肩を落とす。

……なぜか物凄く保護欲が駆り立てられた俺は、ヴィータの頭に手を置いた。

「なっ…何しやがる…」

「まあそう落ち込むな。失敗は誰だつてするし、今回はヴィータだけの責任って訳でもないんだ。それに…レリックは心配ないし…な」

俺はヴィータの頭を撫でながら、ティアナとキャロに視線を向ける。

2人は笑みを浮かべて頷き、他は不思議そうな顔をしていた。

〈ルーテシア side〉

管理局の人達から逃げることに成功した私達は、ドクターのラボに繋がる地下通路にいた。

私とアギトの後ろにはセインと、管理局の人に捕まりそうになっていたクアットロとデイエチ、2人を助けたトーレがいた。

クアットロ達は口々につきょうのことを話していた。

「久しぶりに会いたかったんだけどなあ 右京さん」

「右京さん……ねえ……初めて見るタイプの男性だったわね」

「クアットロ…なぜ頬が赤い？」

「まさか、あんな位置から私の砲撃を防ぐなんて……」

みんな色々言ってるけど、誰が誰かは分かると思う。

そんな声を聞きながら、私はケースを開ける。

そこにはレリックはなかったけど……変わりに、文字のかかれた紙と、何かが入っている小さな袋があった。

紙にはこう書かれていた。

”レリックは渡せないんだ。変わリと言っではなんだが、今回はこれで許してくれ。ウキヨウより”

文字は、アスクレピオスが翻訳してくれた。

うきょうがレリックの変わりと言って入っていた袋の中に入っていたのは……綺麗な紫の花があしらわれたキーホルダーだった。

「……」

ケースの刻印には？と刻まれていて、私が欲しかったレリックではないことが分かった。

私にとってはいらぬレリック……その変わりに入っていたものは……。

「……許してあげる……お兄ちゃん」

敵にも優しい”お兄ちゃん”から私へのプレゼントだと。

そう……思うことにした。

（ルーテシア side out）

「ケースはシルエットではなく、間違いなく本物でした。私のシルエットは衝撃に弱いんで、偽物を作り出しても奪われたらすぐにバシマスから」

俺達フォワード陣は今、ヴィータとラインに心配ないと言った理由を説明していた。

「なので、ケースを開封してレリック本体に直接嚴重封印をして」

「中身は……」

そう言ったスバルがキャロの帽子を取る。

そこには、一輪の花が咲いているヘアバンドがあった。

「こんな感じで」

ティアナは言葉と同時にパチンツと指を鳴らす。

すると、キャロの頭にあったヘアバンドがレリックへと姿を変えた。

「敵との直接接触が少ないキャロに持ってて貰おう……ってな。ティアナの案だから、褒めてやれよ？」

「……そうだな。上出来だお前ら」

【ありがとうございます！】

意外にも、ヴィータは苦笑しながらフォワード陣を褒めた。

こうして、俺達の長い休日は終わりを迎えた。

任務の結果はビターだったがな……。

そう考えながら、俺は後ろに広がる空を見ながら、結局事情を聞けなかった少女を思い浮かべながら呟いた。

「それ（キーホルダー）は俺からのプレゼントだ。次に会ったら、
事情を聞かせてもらおうぞ？」

なぜか、ルールーが小さく笑みを浮かべている気がした。

現れた敵（後書き）

右京「今回使用した新しいフォームだ」

名称：フルドライブ

鐔の部分にソルのコアが埋め込まれた日本刀の形になる。

蒼い刀身、蒼いコア、蒼い柄と全体的に蒼く、見た目も流麗で美しい。

常時自身の速度を上げるというフェイトのソニックフォームのような能力を持つことと、見た目が日本刀ということ以外は、セカンドフォームとそれほど変わらない。

右京「今回はちょい役のような感じだったが、いつか思いっきり暴れたいものだな」

ヴィヴィオ（前書き）

久々の連日投稿です！！

右京「今回は戦闘は一切ない、日常の部分だ」

因みに、次回からはしばらく番外編が続く予定です。

ソル「それでは、流れ着いて！ミッドチルダ！」

右京「ヴィヴィオ……スタートだ」

ヴィヴィオ

「ぐ……う……」

色んな出来事があった休日の翌日……その早朝。

俺は胸に妙な痛みを感じながら目を覚ました。

目を覚ました……と言ったが、この痛みは昨日の夜からずっと続いている。

恐らくは……

「昨日のフルドライブ……か」

リンカーコアに傷が付いたあの日から割と時間が経っている。

その間、俺はシャマルに体の状態も見てもらっている。

しかし、検査の結果はいつも同じ……”リンカーコアの傷は少しも治っていない”。

むしろ以前よりも傷が広がっているらしい……とは昨日のシャマルの言葉だ。

トーナメントではブレイカーを撃つても何ともなかったのに、昨日のフルドライブを使った後には傷が広がっている。

……あまりフルドライブ、オーバードライブを使わないようにしな

ければ。

「……大分痛みが引いてきたな……」

「大丈夫ですか？マイマスター」

俺が呟いた独り言に、ソルは心配そうな声を出す。

因みに、ソルは机の上にある、俺がプレゼントした猫のぬいぐるみの首もとに吊されている。

「大丈夫だ……心配すんな」

「するに決まっているでしょう。私のマスターはマイマスターただ一人……あなたにもしものことがあれば、私は……」

「……悪かった」

すぐに謝るとソルは”分かればいいのです”と苦笑混じりに言った。

苦笑してるかは分からないが、なんとなくそう思った。

時刻は現在 4 : 39。

今日は早朝訓練がない為、いつもより遅くまで眠れる。

なら、俺はもう少し眠ることにしよう。

俺は、俺の右手を握りながら眠っているエリオの頭を撫でてから、再び眠りについた。

「ティアナ、ここはどうするんだ？」

「ここはですね……」

時間は飛んで昼。

俺達フォワード陣は昨日の事件の書類を事務室で書き上げていた。

俺はまだによく分かっていない為、ティアナに聞きながら書き上げていっている。

最近はヴィータにも聞くようになった……あいつ、滅茶苦茶教えるのが上手いんだ。

「……ん……」

唸っているのはスバル、エリオ、キャロ。

ティアナはデスクワークは優秀なのだが、スバルはデスクワークが苦手であり、子供2人は単純に不慣れなのだ。

だから、俺やティアナに比べるとどうしても遅くなってしまっ。

その都度、俺とティアナが仕方ないと苦笑しながら手伝うのが日常

……というかお約束となり、ヴィータに見つかったら全員が怒られる。

いつの間にか、そんなことが当たり前になっていた。

さて、そろそろ手伝うとするか……。

『みんな……今いいかな?』

「あつ、なのはさん」

俺が動き出そうとした瞬間、なのはから通信が来た。

さっきまで唸っていたスバルはこれ幸いとばかりに即座に通信に出る。

「どうしたんだ?なのは」

『悪いんだけど、私とフェイト隊長の部屋に来てくれないかな』

で、来てみた訳だが……。

「やあだあああ!…!いつちゃやあだあああ!…!」

……さて、現状を説明するのでしょうか。

なのは達の部屋に来たら、なのはが少女に泣きつかれていた。

「俺達にどないしろと」

「その……助けて」

なのはに苦笑しながら言われてしまった。

よく見てみれば、なのはに泣きついていいる少女は俺達が保護したあの少女だ。

「その前に……なぜ、その子がここにいるんだ？」

「その子は聖王教会の病院に運ばれたはずじゃ……」

「実は、朝様子を見に言った時に懐かれちゃって……私が預かることになったんだけど、私今から出て行かなきゃいけない……」

それを口に出したら、今の状況になった……と。

流石の機動六課の隊長も、泣く子供にはかなわないうてことか。

そんなことを思っていると表情に出てしまったらしく……。

「あーん、笑ったー」

なのはがちょっと泣きそうになりながらそう言ってきた。

因みに、こうやって会話をしている最中にティアナ達4人は少女をなのはから離れさせようと頑張っていたのだが……。

【……………】

少女に話を聞くどころか見向きもされなかった為、しょんぼりしながら扉の所まで戻ってきた。

そんな姿を見て苦笑していると、4人となのはから”なんとかして”という目で見られてしまった。

さすがにいたたまれなくなったので、泣きじゃくる少女に近付く。

「うああああん!!」

これは骨が折れそうだな。

そんなことを考えながら、俺は少女に声をかけた。

「どうした？嬢ちゃん」

くスカリエツテイ side く

昨日の戦闘は実にいいデータが取れた。

デイエチの固有武装のデータも取れたし、喜喜 右京のデバイスの新フォームも一瞬ながら確認できた。

ルーテシアと喜喜 右京を引き合わせることも出来たし、マテリアルも無事に機動六課の元に渡った。

クアットロも私や腐った管理局員とは全く違うタイプの喜喜 右京を見て、何やら思うこともあったようだし……。

自分の作品（娘達）が喜喜 右京との接触でどんどん人間らしくなっていくことが、こんなにも嬉しいこととは……。

私自身も、喜喜 右京という存在に変えられた存在だ。

自分の作品が……娘が私に意見をするのではなく、自分の意志をはつきりと伝えてきた時、私は感動で震えた。

人形と思っていた彼女達がはつきりと言ったのだ……” 喜喜 右京を仲間にした”と。

その瞬間から私は、彼女達を作品と思うことを辞めた。

私は、彼女達を生み出した理由を思い出したからだ。

そのお礼と言ってはなんだが喜喜 右京……君には、ちょっとしたサプライズを送らせて貰ったよ。

君は、どんな反応をするのだろうかね。

〈スカリエツティ side out〉

「ふえ………?」

少女に話しかけると、意外にもすぐに反応を示してくれた。

目いっぱい涙を溜めながら、少女は俺の目をじっと見つめている。

「俺はな、右京っていうんだ。嬢ちゃんの名前は……」

「パパ!」

ピシィッ！と部屋の空気が凍った気がした。

俺は少女の名前を聞こうとして笑みを浮かべながら固まってしまった。

この少女は今、なんと言った？

パパ？

「……………名前……………パパって言うのか」

【いやいやいやいや】

全員からツッコまれたが、気にしない。

そっだ、この子は名前は？という質問に対してパパと言ったんだ。

決して、俺にパパと言ったわけではない……………断じて否だ。

もう一度言う、断じて！！

「パパ！！」

……………否と言う前に、少女に抱きつかれた。

どうしろと言っんだ。

「はぁ……嬢ちゃんの名前は？」

「ヴィヴィオ」

「よし、ヴィヴィオ……まず、俺はお前のパパじゃな……」

そこから言葉を続けることは出来なかった。

なぜなら……ヴィヴィオが今にも泣きそうな目をして俺を見上げて
いるからだ。

こんな目で見られてしまっっては……流石の俺も何も言えない。

どうやら、泣く子に弱いのは隊長達だけではなかったようだ。

この子……ヴィヴィオにとって、俺は父親なんだ。

なら、俺が取る行動はただ一つ。

俺はしゃがんでヴィヴィオと視線を合わせ、ヴィヴィオの頭に右手
を置いた。

「ヴィヴィオ……なのはは今からお仕事に行かなくちゃいけない。
分かるな？」

「……うん」

「だから、ヴィヴィオは俺達と一緒になのはに”行ってらっしゃい”って言おう？そんで、帰ってきたら”お帰り”って言うんだ。それが守れるなら、パパと一緒にいてやるぞ？」

「……本当？」

「本当だ。パパは嘘はつかないぜ」

ヴィヴィオの頭を撫でながら、優しく、優しくを心掛けながら言葉を紡ぐ。

ヴィヴィオは涙は引っ込んだものの、まだ納得がいかないのか俺となのはの顔を困ったように交互に見る。

もう一押しといったところか。

「パパ達はこれから、おやつの間なんだけどなあ……ヴィヴィオがここでなのはを困らせていると、ヴィヴィオの分が無くなっちゃうかもなあ……」

「うう〜……すぐにかえってくる？」

「うん、すぐに帰ってくるよ。だから、晩ご飯と一緒に食べようね？」

「うん……」

おやつで落ちるとは……やはり、子供は食い気というところか。

俺はなのはの言葉に頷いたヴィヴィオを抱き上げ、なのはと目を合

わせる。

「行ってらっしゃい。ほら、ヴィヴィオも」

「……行ってらっしゃい」

「うん、行ってきます」

行ってらっしゃいと言った俺達になのは手を振り、いつの間にか来ていたフェイトと一緒に部屋から出ていった。

それを見たヴィヴィオが不安そうな顔をしたので、俺はヴィヴィオと額同士を合わせる。

「う?」

「よく、行ってらっしゃいって言えたな……偉いぞヴィヴィオ。こ褒美に、ヴィヴィオが食べたいおやつを作ってやるからな」

「本当?」

「パパは嘘はつかないぜ」

「じゃあ……ケーキ」

はい、了解ってな。

くスバルsideく

時刻は15:26……私達フォワード陣は、食堂で右京兄いの作ったショートケーキを食べていた。

右京兄い作のイチゴタツプリのショートケーキは、市販のケーキよりもずっと美味しい。

そりゃあ高級店なんかよりは味は下回るだろうけど、私は、私達は右京兄いの作るケーキが大好き。

ケーキだけじゃなくて、右京兄いが作ったものはみんな好きだけど。

因みに、食堂のテーブルはみんな円卓で、右回りに右京兄い、キャロ、私、ティア、エリオ、右京兄いという順番。

ヴィヴィオはどこにいるのかって？それは……

「ほれ、ヴィヴィオ。あーん」

「あーん」

右京兄いの膝の上にいる……ちょっと羨ましいかな。

キャロとエリオなんて、私以上に羨ましそうな顔をしてる。

ヴィヴィオは右京兄いにケーキを食べさせてもらい、満面の笑みを浮かべている。

さっきまで泣いていたなんて信じられないね。

「ヴィヴィオ、口の周りにクリームがついていますよ」

「んー」

「こらこら、服で拭いたらダメだろう。拭いてやるから」

ソルさんが教えて、ヴィヴィオが服の袖で拭こうとしたところで右京兄いが素早く腕を掴んで止め、取り出したハンカチでクリームを吹いた。

そんな動きが、流れがスゴく自然で……本当に家族みたいだった。

「よし、取れた」

「えへへー」

右京兄いがヴィヴィオに笑みを向け、それを見たヴィヴィオが笑みを浮かべる。

そんな2人を見て、みんなが笑顔になった。

……なんかいいよね……こっぴうの。

くスバルside outく

「ティアナside」

「まずはそこ押して」

「……?」

「そうだ。次はそこな」

「……」

「そうそう。じゃあ次は?」

「……!」

「よく出来ました」

「えへへー」

右京さんを含めた私達フォワード陣は右京さん作のケーキを食べた後、事務室で書類作成の続きをしていた。

最初は右京さんの分は私がやると言ったのだけど……右京さんは自分の分は自分ですと言って聞かなかった。

なので、右京さんはヴィヴィオを膝の上に乗せながら事務仕事をしている。

しかも信じられないことに、ヴィヴィオにコンソールを触らせている。

「右京さん…あんまり触らせない方が…」

「大丈夫さ。ヴィヴィオは賢いから俺がちゃんと教えてやれば、勝手にボタンは押さない」

「ポチッ」

「「あっ」「」

ヴィヴィオが何かのボタンを押し、右京さんのコンソールの画面に映ったのは……送信の二文字。

「「こ」……じゃなかった？」

「いんや、正解だ。だけど、勝手に押しちゃダメだぞ？」

「はい」

「いい返事だ」

どうやら押しても問題ないボタンだったようで、右京さんは怒ることとはしなかった。

なんだが、本当の親子に見えてしまう。

……ヴィヴィオが少し羨ましいな。

私も、あんな風に右京さんに頭を撫でられてみたいものね。

〈ティアナside out〉

〈なのはside〉

お仕事が終わったのが大体5時くらい。

私とフェイトちゃんが隊舎に帰ってきた時は既に6時を回ってしまっていた。

もしかしたら、ヴィヴィオが遅いって泣いちゃってるかもしれない。

そんなことを考えながら隊舎の扉をくぐる。

すると、扉の先には右京さんとヴィヴィオがいて。

「お帰り、なのは、フェイト」

「おかえりなさい」

笑顔でお帰りと……そう言ってくれた。

ただそれだけがとても嬉しくて。

フエイトちゃんと顔を見合わせながら、笑みを浮かべながらこう言った。

「「ただいま」」

「なのはside out」

さて、夕食を終え、入浴を済ませ、後は寝るだけなのだが。

ここで、一つの事件が発生した。

それは……

「パパも一緒に寝よう?」

というヴィヴィオの一言だった。

ヴィヴィオはなのはが預かっている形になっている為、寝る場合はなのはとフエイトの部屋になる。

俺はエリオ、キャロと同室の為、必然的にヴィヴィオとは一緒に寝られなくなる。

しかし、ヴィヴィオはなのはの服の裾と俺の服の裾を掴んで離さない。

フェイト一家はオロオロとしてしまい、正直使い物にならない。

「右京さん……どうしよう」

「どうしようたってな……」

どないせえと。

こればかりはヴィヴィオの我を通させる訳にはいかない。

ヴィヴィオの言う通りに一緒に寝ることになれば、俺はなのはとフェイトとも一緒に寝ることになるからだ。

だが、一緒に寝ないとなれば、ヴィヴィオは間違いなく泣くことになる。

なぜなら、もう目に涙が溜まり始めているからだ。

さて、どうしようか……。

「ん？右京さんになのはちゃんにフェイトちゃんに……エリオにキヤロやないか。それにその子は……」

困っているところにはやてがやってきた。

はやてはヴィヴィオと俺となのはを見た後に顎に右手を添え、思案顔になる。

そして、添えていた右手を下ろして……苦笑した。

「……どういう状況や？これ」

「なるほどなあ……ふむ……」

はやてにこうなった理由を説明すると、はやては再び思案顔になった。

さて、我らが部隊長はどんな解決策を考えつくのやら。

「……よし、フェイトちゃんと右京さんの寝る場所を変えようか！」

「ちよつと待ったあ！？」

待ったをかけたのは俺とフェイト。

ていうかこの部隊長は……新米の俺が隊長陣の近くの部屋になるのはマズいって言ったのはお前だろうが。

「なんかダメやった？その子はなのはちゃんと右京さんと一緒に寝られて、フェイトちゃんは家族で寝られて。ええこと尽くしやん」

「……た、確かに……」

「納得すんなのはとフェイト一家!!」

「パパは……ヴィヴィオと寝るの……イヤ？」

「いや、そういうワケじゃ……」

ヤバい、ヴィヴィオが本格的に泣きそうだ。

しかも周りは、はやての意見を通す勢いだ。

「右京さんは……私と一緒に寝るのは嫌？」

「そうじゃなくてだな……ハア……分かったよ。但し、今日1日だけだからな」

「はい」

なのはとヴィヴィオは両手をパンツと合わせて喜んだ。

……まあ本人と部隊長公認なら問題ないか。

ソルも、俺がソル首にかけて寝るなら問題ないと言っていたしな。

時刻は22:42……場所はなのはとフェイトの部屋。

俺となのはは既にベッドの上において、ヴィヴィオは俺達の間で眠っ

ている。

「…………ふふっ」

すやすやと眠るヴィヴィオの髪を撫でていると、なのはが小さく笑みを零した。

「…どうしたよ」

「なんか…………こういうの、いいなって」

なのはがヴィヴィオの髪へと手を伸ばし、俺と同じように優しく撫でる。

すると、ヴィヴィオはふにやりと幸せそうな顔をした。

「右京さんがいて…………私がいて。ヴィヴィオくらいの子供がいて…………こんな風に川の字になって…………とても幸せな気持ちになるんだ」

そう言ったなのはの表情は本当に幸せそうでした。

幸せそうな2人を見た俺も、なんだか幸せな気持ちになって。

俺となのはは互いを見て…………小さく笑った。

「お休み、なのは」

「お休みなさい…………右京さん」

いつか…………いつか俺も家庭を持つとして。

こんな風に家族で川の字になって眠る。

そんな幸せな未来を想像して……その未来と今のこの状況を重ねて。そうなってもいいかなと。

なのはとヴィヴィオを見ながら……俺はそう考え始めていた。

「お休み……2人が幸せな夢を見れますように」

そう呟いて、俺は瞳を閉じた。

その日、俺は夢を見た。

俺と、なのはと、ヴィヴィオと。

三人で食卓を囲んで食事を取る。

ヴィヴィオが学校の話をして、俺が相槌を打って、なのはが俺とヴィヴィオを見ながら笑って、ソルがヴィヴィオに服を汚さないように優しく注意する。

そんなありふれた……だけど幸せな。

そんな…尊い夢を見た。

ヴィヴィオ（後書き）

番外編の予定ですが

右京が九才児に！

右京が女性に！？

ソルが擬人化！

というのを考えております。

ソル「ようやく私が……」

右京「オイ、女性に！？ってなんだ女性に！？って」

あくまでも可能性です。

それでは、また次回に！

右京「答えろやあああ！！」

番外編 右京に降りかかる災難 その1（前書き）

修正いたしました

本当ならば、昨日の内に投稿する予定だったんですが……眠気に負けてしまいました。

ソル「マイマスター……マイマスター……ハアハア（*、*、）」

……えー、今回はソルがこのような内容となっております。

なるべくギャグ風にしてます故に、キャラ崩壊が起きております。

注意しながら読んで下さい。

ソル「それでは、私に起きた幸福……始まります」

いや、違うから。

右京に降りかかる災難 その1……始まります。

番外編 右京に降りかかる災難 その1

とある日の夜、俺はシャマルに呼ばれて医務室に来ていた。

シャマルは、机の引き出しから一つの何やらおどろおどろしい色…
濁った虹色をした液体の入ったビンを取り出し、俺に手渡した。

「さあ右京さん……飲んでください」

「説明も無しにこんな薄気味悪いもん飲めるかあ!!」

「薄気味悪いなんて酷い!!私が右京さんのリンカーコアを治す為に、寝る間を惜しんで調合に調合を重ね、ようやく作り出すことが出来たお薬なのに!!」

「リンカーコアを治す薬?」

こんな薄気味悪……おどろおどろし……濁つ……虹色の液体が……
ねえ。

これが薬ってんなら、俺はコレを飲まないといけない訳だが……。

「それを飲めば、リンカーコアは治るハズです。材料は禁則事項です
味の保証は一切出来ませんが、良薬口に苦し、です」

「納得できるかあ!!……でも、飲まなきゃダメだよなあ……」

「さあ、早く飲んでください。そうすれば、もうリンカーコアの傷
を気にすることはなくなるハズですから」

正直飲みたくない……飲みたくないのだが。

シャマルが寝る間を惜しんでまで、俺の為に作ってくれた薬だ……その事實は、本当に嬉しい。

俺が少し……いやかなり……物凄く我慢すればいいだけだ。

「……わかった。シャマル、ありがとな」

「いえいえ」

俺はシャマルに礼を言いながら、ビンのフタを開けた。

ギヤアアアアアア……

俺はすぐにフタを閉めた。

俺は何も聞いていない。

ビンの中から悲鳴が聞こえた、なんてことはない。

「……………」

シャマルの顔を見てみると、シャマルは変わらずニコニコと笑みを浮かべている。

そうだ、気のせいだ。

ただの幻聴だ……そう考えながら、もう一度フタを開けた。

助けグチャツへぶああオボオオオオ……………

……………。

なんだこれは。

只でさえおどろおどろしい気味の悪い虹色の液体が悲鳴を発しているという異常自体が起きているのに、臭いが一切しないのが更に俺の中の恐怖心を刺激する。

しかも、目の前のシャマルは変わらず笑みを浮かべている……なんだこの異常空間。

「さあ、右京さん。グツと」

「……………」

しかも笑顔のまま薬（？）を進めてくる。

オイ、本当に飲んだら治るのか？むしろ、間逆の結果にならないか？

しかし、シャマルの目の下のクマを見れば、本当に時間をかけて作ってくれたのだとわかる。

……腹を……括ろつ。

「い……逝たきます」

「はい、どうぞ」

俺はビンの中身を一気に口に入れ、味わうことなく飲み込ん……。

いてえ！！口の中噛まれたぞ！？

なんだ！？喉から下に行かない！？

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！胃が焼ける！！ただれる！！

体が異様にあつ……頭が……割れるっ！？

「おい……シャマル……薬……試したこと……あるんだ……るつな……?」

得体の知れない嫌悪感、寒気、虚脱感、頭痛、吐き気、その他諸々の不快な感覚を身に受けながらシャマルに問いかける。

そして、シャマルから返ってきた言葉は……。

「……………てへっ」

殺意を沸かせる誤魔化しの言葉だった。

……ソル……ヴィヴィオに預けなかったらよかったな。

そんな考えを最後に、俺の意識は途切れた。

〈キヤロside〉

日が上り、部屋の中を太陽の光が明るく照らす早朝。

昨日の夜、お兄ちゃんは医務室に行っただま帰ってこなかった。

……昨日は私が一緒に寝る番だったのに。

私とエリオ君は服を訓練着に着替え、医務室に向かっていた。

ヴィヴィオはお兄ちゃんと一緒に眠れない代わりにソルさんをお兄ちゃんから借りて眠っている。

だから、お兄ちゃんはヴィヴィオ……フェイトさんとなのはさんの部屋にいる可能性は低い。

だから、医務室にいたと思った私達は医務室に向かっているのだ……今、ついたけれど。

「失礼します」

そう言っただけ私達は医務室の中に入る。

最初に目に飛び込んできたのは……机に伏して眠っているシャマル先生。

珍しいなーと思ったけれど、肝心のお兄ちゃんの姿がないことに気付いた。

「いないね……」

「うん……お兄ちゃんどこに……」

「……ん……」

「……?」

不意に、私達以外の小さな声が聞こえた。

声のした方を見てみると、ベッドの上にある布団がもぞもぞと動いていた。

「もしかして……」

「うん……お兄さんかも」

あのベッドにいるのはお兄ちゃんかも知れない。

そう考えた私達はベッドにゆっくりと近付く。

そして、布団を取……ろうとしたら、眠っていた人が起きた。

「ん……ふ……あ……ん？ああ、キャラとエリオか。おはようさん」

その人……いや、その”子”は私達を見ながら、気さくに挨拶をした。

……こんな子、機動六課にいたかな？

〈キャラ outside out〉

起きたら目の前にキャラとエリオがいたので挨拶をしたら、2人が

キョトンとしてしまった。

なんというか……誰だコイツ、という顔をしている。

そういえば、いつもよりも自分の声が高かったような気もするなあ……。

そんなことを考えながら、ふと、自分の手を見てみると……。

「……誰の手だ？」

「誰のって……君のでしょ？」

「何を言ってるんだエリオ。俺の手がこんな子供みたいな手をするワケないだろ？」

「えーっと……僕、君に名前言ったっけ？」

「は？」

エリオの対応はなんだ？まるで初対面のような……。

キャラも似たような反応をしているな……何がどうなっているのやら。

とりあえず、ベッドから降りて目線を合わせながら話してみるか。

そう考えた俺はベッドから降りる。

すると驚いたことに、しゃがむことなく、2人とほとんど目線があ

ってしまった。

更に、服はダボダボであり、手足は短くなっていて、髪は……変わらず腰当たりまでである。

これはつまり……。

体が縮んでしまっていた!!

「どろろしてこうなっ……」

額に右手を当て、なぜ体がエリオ達位まで縮んでしまったかを考えようとした俺の目に、机に伏して眠っているシャルルが映る。

俺の記憶では、シャルルが作った見た目最悪無味無臭……但し激痛や数えるのも面倒なくらいの様々な嫌悪感がある薬を飲んだところで終わっている。

おまえがげんいんか。

「起きろやシャルマルウウウー!!」

「い、いきなりどうし……待って!?なんでシャルマル先生を叩くの!?」

「ちょ……フェイトさん!!なのはさん!!」

「シャルマル先生の作った薬を飲んで気を失って……」

「朝起きたら……」

「子供の姿になっていた……と」

上からなのは、はやて、フェイト。

俺達がいる場所は会議室であり、この場にはなのは達隊長陣+リインと守護騎士4名、フォワード陣4名+フリードがいる。

因みに、ソルはヴィヴィオから回収済みだ。

この身体で俺だと説明し、分からせるまでにやたら時間がかかった。

因みに、一番最初に信じてくれたのは……シャルだ。

そのシャルの頭には、5つほどのタンコブが出来ているが。

「こんな身体じゃ、事務仕事も訓練もし辛いな……」

「私はいいと思うよ!」

「私も!」

「アカン、なのはちゃんもフェイトちゃんも母性本能がやられとる……」

小さくなった俺の姿を見るのはとフェイトの目が怖い。

スバルとティアナも似たような目をしている……身の危険を感じるな。

因みに、俺の見た目は普段の俺をそのまま少年にしたような姿であり、エリオよりも5センチほど背が高い。

服はエリオの私服を拝借している……この姿だと、大体10歳前後といったところだな。

「ところでお兄さん。肝心のリンカーコアは治ったんですか?」

「……いや、治っていなかった」

シャルは起きてすぐに、俺のリンカーコアを調べてくれた。

結果は今言った通り、少しも治っていなかった。

つまり、シャマルの薬は失敗だったのだ。

「はぁ……仕方ない。薬の効果が切れるまで、このままで過ごすか」

「え？薬の効果っていつ切れるんですか？」

【え？】

「え？」

【……………】

シャマルの奴が爆弾発言をしやがった。

効果っていつ切れるんですか？の言葉はつまり、いつ効果が切れるか知らない、ということになる。

最悪の場合……

「俺はずっとこのまま……ってことか！？」

「…………それもまた良し！！…………」

「よくねえよー！！」

ヴィータを除くスターズとフェイトがサムズアップしながら、いい笑顔で言い切った。

因みに、ソルはずっと俺の胸元で「小さいマイマスター……小さいマイマスター……」と繰り返している。

そんな感じで1日が始まった……はぁ……。

早朝訓練の時間。

「さて、今日も訓練頑張りますかね」

「あ、右京さんは今日は訓練お休みだよ」

「は？なんでだよ」

まさか、訓練着を着てないから、なんて言わないだろうな。

エリオが予備の訓練着を持っていなかったから、着れなかったんだよなぁ……。

「なんでって……それは……」

なのはは一度、俺以外のフォワード陣を見た後に頷きあい、俺を見ながら、全員で理由を言った。

【右京さん（兄い／お兄さん／お兄ちゃん）が怪我でもしたらどう

するの（んですか）！！】

「よし、てめえら全員そこになおれ。ケンカだケンカ」

その後、フェイトとはやてがこいつらの言い分に加わり、俺は今日一日訓練を休むことになった。

見学はしていたが。

朝食の時間。

訓練を終えた俺達（俺は何もしていないが）は食事を取る為、食堂に来ていた。

そんな時、ザフィーラの背に乗ったヴィヴィオが食堂に現れた。

ヴィヴィオは何度かキョロキョロとした後に俺の方をじっと見つめ

……

「パパ！！」

笑顔を浮かべてザフィーラから飛び降り、俺の方に突撃してきた。

俺はそれを受け止めようとしたのだが……

「うおあっ!!」

受け止めきれずに後ろに倒れてしまった。

……まさか、体格の違いでここまで差が出るとはな……分かったつもりだが、分かっていなかったな。

「……あれ？パパ？」

「ああ、パパだぞ。ていうか、よく分かったなヴィヴィオ」

俺を押し倒したままキョトンとしたヴィヴィオの頭を撫でてやる。

俺の今の見た目は子供な訳だし、分からないと思ったんだがな……。

「んふふ　パパはパパだもん」

……正直、グツときた。

ヴィヴィオの笑顔は俺の心を癒やし、言葉は俺を笑顔にし、周りには気まずそうに目を逸らした。

「ヴィヴィオ……今日はずっと一緒にいてやるぞ」

「本当？」

「ああ。今日は訓練はないし、事務仕事はなのはとティアナとスバルがやってくれるからな」

「……えっ!?!」「」

「やってくれるよな…?」

「「「は……はい!」「」」

よし、これで今日1日丸々俺はフリーだ。

今日は一日中ヴィヴィオと一緒に遊ぶことにしよう。

「その前に飯だな」

「ごはんー」

朝飯は、俺とヴィヴィオとなのはとフェイトで食べた。

時間は昼。

俺はなのはとフェイトの部屋でヴィヴィオとテレビゲームをしていた。

テレビゲームだけでなく、ボードゲームや人形遊びなど、様々な遊びを一緒にした。

なぜ、こんなにも遊び道具があるのだろうか……なのはかフェイトが揃えたんだろうな。

「えーっと……確か、こうすれば……ヘルズファンクー！」

「あっ！！負けないもん！！」

「ちよっ！？どっから出てくんだその虫は！？」

今やっているのは格ゲーである。

俺は赤服銀髪のキャラを使っており、ヴィヴィオは黒いつねつねとしたキャラを使っている。

「あ！まてまて！なる、バースト！」

「てい」

「あ……また負けたか。ヴィヴィオは強いな」

最後はまさかのAボタン攻撃で負けることになったが……。

因みに、この格ゲーの戦績は全敗である。

……テレビゲームとか苦手なんだよな……ボードゲームは大丈夫なんだけだ。

「ヴィヴィオの勝ち」……ふあ……」

「眠いのか？」

「うん……」

両手を上げて喜んだヴィヴィオだが、そのまま大きなあくびを一つした。

そのままうつらうつらと船を漕ぎ始めたヴィヴィオ…相当眠いようだ。

「んじゃ、寝る前に片付けような。ほら、頑張れ頑張れ」

「ん〜……」

眠そうに目を擦りながらも使った遊び道具を片付け始めるヴィヴィオ。

俺も一緒に片付けていき、作業は数分で終わった。

が、ヴィヴィオが限界になってしまい、途中で眠ってしまった。

「……あふ……俺も結構限界なんだよな……」

どうやら小さくなったこの身体は、子供と同じように昼寝を欲しているようだ。

俺はヴィヴィオを抱きかかえ、ベッドまで行く。

そしてヴィヴィオをベッドの中に入れて布団を被せ、俺も隣に入り込む。

「おやすみヴィヴィオ……幸せな夢を見れますように」

幸せそうな顔で眠るヴィヴィオの髪を一撫でし、俺は眠りに落ちた。

くなのはsideく

今日の訓練を終えた夕方、私とフェイトちゃんは右京さんとヴィヴィオの様子を見る為に、私達の部屋に向かっていた。

……今更だけど、右京さん、ずっと私達の部屋にいたんだよね……。

一度、一緒に寝たことあるけど……やっぱり恥ずかしいな。

「見た目は子供でも、右京さんは右京さんだから……部屋を見られるのは恥ずかしいね」

フェイトちゃんが私の考えたこととおんなじことを口にした。

私はフェイトちゃんの言葉に「そうだね」と苦笑しながら返す。

そんな会話をしていると、いつの間にか私達の部屋の前についていた。

「……なんだか、静かだね」

「そうだね……ヴィヴィオが寝てるのかも」

ヴィヴィオが眠っている可能性を考慮して、部屋の扉をゆっくり、静かに開く。

部屋の中に入ると、ベッドの上にある布団が僅かに膨らんでいるのが見えた。

ゆっくり、ゆっくりと近付き、眠っているであろうヴィヴィオの顔を確認する。

「あ………」

「どうしたの？なのは……あ………」

眠っていたのはヴィヴィオだけではなく、右京さんも眠っていた。

右京さんとヴィヴィオは互いに向かい合っていて、お互いの右手と左手を繋ぎながら、穏やかな寝顔を浮かべていた。

「……ちよつとだけ、見てようか」

「そうだね……ちよつとだけ」

私達はなんだか幸せな気持ちになり、幸せそうに眠る2人の寝顔を見ていた。

思えば、右京さんの寝顔を見たのは、これが初めてかもしれない。

初めて見た好きな人の寝顔は……可愛らしい少年の寝顔だった。

「幼いマイマスター、幼いマイマスター……ハア……ハア……」

私は何も聞こえなかったの。

〈なのはside out〉

時刻は夜。

風呂に入って歯を磨けば後は寝るだけ……なんだが。

「エリオと右京さんも一緒に入らない？」

「寝言は寝て言え」

風呂の前でエリオと2人、フェイトから一緒に風呂に入ろうと誘われていた。

フェイトの後ろにはなのはとはやてとヴィヴィオ、スバルにティアナにキャロまでいる。

しかも、はやて以外が期待の眼差しを俺とエリオに向けていた。

「あのな、年頃の女の子が子供とはいえ男と一緒に入りたいなんて言うんじゃない」

「大丈夫だよ。私とフェイトちゃんとはやてちゃんは右京さんと混浴したことあるし」

「大丈夫じゃねえよ」

「それから、右京さんにお問い合わせがあるんだ」

「聞けやコラ」

なのはは俺の言葉を聞いてないかのようにスルーする。

そして、フェイト達は顔を見合わせて頷きあい……全員で俺の顔を見た。

【お姉ちゃんって呼んで下さい！！】

「ソル、セットアップ」

「スタンバイレディ」

目の前に広がるのは死屍累々とした状況。

なのは達はまるで、焼かれたかのように黒こげになっていた。

「さて、エリオ。俺達は男湯に行くぞ」

「はい！」

元気よく返事をしたエリオは、安堵の表情を浮かべながら男湯に入っていた。

……フェイト達への心配の言葉がないほど嫌だったんだな……女湯に入るの。

まあ俺も同じだが。

【ちよっとした……冗談だったのに……】

「積み重なって奴だ」

なのは達の言葉にそう返し、俺は男湯に向かう。

しかし、俺はこの身体を少しだけ活用し、なのは達へイタズラしてやろうと考えて足を止めた。

「言い忘れてた」

【…？】

「また明日な。……お姉ちゃん」

【がふっ……】

なのは達は息絶えた。

フェイトとキャロは鼻を押さえ、はやてとスバルとティアナは吐血し、なのはは床に倒れ伏して床に血文字で”萌”と書いていた。

……こんな日常は嫌だなあ。

この日、俺はキャロと一緒に眠った。

あれだけ昼寝したのに九時過ぎから眠くなるとは……子供の身体は不思議だな。

明日には、元に戻ってますように。

「マイマスター」

「なんだ？ソル」

「よろしければ、私も是非、お姉ちゃんと呼」

「言わせねえよ」

番外編 右京に降りかかる災難 その1（後書き）

という訳で今回のお話は

薬を飲み、目が覚めたら………身体が縮んでしまっていた!!

というお話でした。

もう今回のお話、シリーズ化しようかなあと考えています。

あなたの考えた事象が右京に降りかかるかも？

チビ右京「何ナメたこと言ってるんだあああ!!」

げふあっ!!……ふっ……子供と化しても……右京は右京……ナイ
スキック……ガクツ

番外編 右京に降りかかる災難 その2（前書き）

修正しました。

遅れて申し訳ないです……なんとか更新できました。

チビ右京「で……まだ続くんだな」

後、1、2話続きます。

チビ右京「マジで!?!」

マジで。それでは、番外編 右京に降りかかる災難 その2……始まりません。

チビ右京「始まらないでくれ……」

番外編 右京に降りかかる災難 その2

〈キャラコside〉

小さくなったお兄ちゃんと一緒に眠った翌日の早朝、私はお兄ちゃんと寝られなかった昨日とは打って変わって気持ち良く眠ることができた。

やっぱり、小さくなくてもお兄ちゃんはお兄ちゃんだった。

手を繋いで、空いてる手で頭を撫でられながら、暖かな安心感と共に眠る……次の日には、幸せな気持ちで起きることが出来る。

小さくなくても、その安心感は変わらなかった。

普段なら、お兄ちゃんが起こしてくれるのだけれど、今日は私の方が早く起きたらしく、隣からは寝息が聞こえる。

「……………ちよつとだけ」

そう口にしながら、私はお兄ちゃんの寝顔を見ようと頭を体ごとお兄ちゃんに向ける。

そこには、元の大きさに戻っていて、私の方を向いて眠っているお兄ちゃんがいる。

……………普段着ている寝間着を着るというお兄ちゃんの判断は正しかった……………あのままエリオ君の服を着ていたら、ピチピチになっていたかもしれない。

「…………ふふっ…………」

そんなことを考えて小さく笑い、またお兄ちゃんの寝顔を見る。

八神部隊長と同じ茶色の髪はまとめられておらず、顔や首に掛かっている…………そんな姿は、女の人のようにも見える。

「…………お姉ちゃん…………」

何となく、そう呟いてみる。

フェイトさんが優しくカッコいいお姉さんだとしたら…………なんてね。

有り得ない現実を想像してしまった自分に苦笑する。

その後、私はお兄ちゃんにぴったりとくっつく。

あったかくて、安心できて、いい匂いがして、満たされた気持ちになる。

それに両手に当たる胸が、なんだかぶにぶにと柔らかくて気持ち…………

「…………えっ?」

なんだか信じられないものを触った気持ちになり、私はお兄ちゃんから離れて壁に背をつける。

その衝撃でお兄ちゃんと私の体を覆っていた布団が足元の方にいっ

てしまい、お兄ちゃんの全身が露わになる。

腰くらいだった茶髪は膝の方まで伸びていて、胸がフェイトさんくらいにまで膨らんでいて、腰、太もも……女として羨ましいスタイルだ。

簡単に言つと。

「お兄ちゃん……次はお姉ちゃんになっちゃったんだ……」

私があり得ない現実と思っていた事が、今日の前に起きていた。

〈キャロside out〉

【……………】

早朝、昨日と同じメンバーで会議室に集まっていた。

理由は……私が……女になっていたからだ。

しかも、なぜか口調がこんな感じになっている……なぜだ。

「シヤマル……私はなぜ、元に戻るところか女になってしまったんでしょうか？」

「えー……………っと……………」

シヤマルに向かつてなるべく優しく微笑んでやると、シヤマルは気まずそうに視線を横にズラす。

よく見れば冷や汗もかいている……………私は優しく微笑んでいるだけなのに。

勿論、内心は怒りで今にも殴ってしまいそうだが。

「……………ハア……………とりあえず、今日はこのまま訓練と事務仕事をすることにします」

「そうだね…流石に、2日続けて休ませる訳にもいかないし…」

私の言ったことに、なのはが自分の顎に右手を添え、頷きながらそう言った。

いや、昨日はあなた達が勝手に休ませたんでしょうが。

「でも、右京さんは大丈夫？体とか……………」

「ええ、大丈夫ですよフェイト。少し胸が重いですが……………ハア……………」

「分かるぞ喜喜……………」

女になったことで大きくなってしまった胸を見ながら溜め息を吐くと、シグナムに共感された。

因みに、私はいつもの普段着を着ているのだが、胸の辺りが非常に

キツイ……女物の服や下着を持っていないので仕方ないのだが。

流石に女性陣から服や下着を借りるのはマズいし。

ところで、シグナムとフェイトを除く女性陣から私の胸に熱視線が向けられているのはなぜだろうか。

はやてからは特に、熱い視線が送られており、両手がワキワキと怪しい動きをしている。

「なあ右京さん」

「……………なんでしょうはやて」

「その立派な胸……是非、私に揉ませて!」

「ソル、セットアップ。リイン、ユニゾンお願いします」

「スタンバイレディ」

「はいです。はやてちゃん、少し頭を冷やしてください」

場所は変わって訓練場。

先ほど、私達がいた会議室が”突然”氷付けになり、”たまたまはやてだけが”氷付けになってしまい、シヤマルによって医務室に搬送された。

「それじゃあ、予定よりも少し遅いけど、早朝訓練始めるよ!!」

【はいっ!!】

「了解です」

私達フオワード陣は一度部屋に戻って訓練着に着替えている。

その際、いつも通りエリオと一緒に着替えようとしたらエリオに悲鳴を上げられてしまったけれど……ウブですなぁエリオクンは。

「それじゃあ訓練……始め!」

さて、今日も1日頑張るとしましょう。

……男用の訓練着だから、少し胸がキツくて息苦しいですが。

「はい、早朝訓練はここまで!みんな、お疲れ様」

【お疲れ様でした！】

「お……お疲れ様……です」

ようやく早朝訓練が終わりましたか……訓練で息切れしたのは久しぶりですね。

ずっと息苦しい状態で激しく動いていたから、当たり前と言えば当たり前ですが。

「右京さん大丈夫？顔色悪いよ？」

「大丈夫ですよ。息苦しいまま訓練したから、息切れしただけです。さっさとこの訓練着を脱ぎたいです……」

そしてこの口調を早く辞めたいです。

こんな口調、自分のキャラではないし、ソルと被ってしまいます。

「あはは……それじゃあお昼まで解散！」

【はいー】

場所は変わって食堂。

訓練着から普段着に着替えた私は、朝食を食べる為、この場所にきていた。

因みに、髪はなぜか膝くらいまで伸びていた為、首の後ろで束ねるのではなくポニーテールにしている。

さて、昨日はこの時間にヴィヴィオがザフィーラに乗ってやってきました。……と考えながら通路の方に視線を送る。

すると、丁度良いタイミングでザフィーラに乗ったヴィヴィオが現れた。

ヴィヴィオは昨日と同じように食堂の中をキョロキョロと見回し、その視線が私で止まる。

ヴィヴィオはしばらくじーっと私を見て首を傾げたり、目をパチパチとしたりしたがやがてニパツと笑った。

「パパ!」

【なんで分かるの!?!】

既に食堂に来ていたフォワード陣と隊長三名のツッコミを受けながら、ヴィヴィオはザフィーラごと突っ込んできた。

ザフィーラは私のすぐ近くで急停止し、その反動でヴィヴィオが私に向かって飛んできた。

「パパー」

「おっと……」

昨日とは違い、ヴィヴィオをしつかりと抱き止める。

ヴィヴィオは私の胸に頭をこすりつけながら、「パパー」と笑顔
を浮かべている。

この子は本当に……子供になっても、女になっても、私をしつかり
と見つけてくれるんですね。

「……あれ？」

不意に、ヴィヴィオが私の顔を見てキョトン……と不思議そうな顔を
した。

そして、何やら考える仕草をした後に、驚愕の表情を浮かべた。

「パパがママになってる!？」

【今更!？】

これには私も一緒にツツコミを入れてしまった。

「ママ」

「はいはい」

あの後、私はいつものようにヴィヴィオを膝の上に乗せながら食事をしていた。

今日はスバルとティアナと一緒にテーブルで食事している。

それと……ヴィヴィオの私への呼称がママに変わりました。

かなり複雑ですが……ヴィヴィオが嬉しそうなのでよしとしましょう。

「右京姉え、大変だね」

「そりゃあもう……って右京姉え？」

「うん。ヴィヴィオがママって呼んでるから、私も右京姉えって呼ぼうと思って」

ダメ？と聞いてくるスバルには、苦笑しながらも構わないと言っておく。

「ヴィヴィオー、口元にケチャップが付いてるわよ」

「んー」

ふと、ティアナの方を見ると、ハンカチを取り出してヴィヴィオの口を拭いているところだった。

ヴィヴィオも随分と機動六課のメンバーに馴染んだ、というか馴染んだもので、今ではエリオ、キャロ、リインに続く六課のマスコット

として、仕事で疲れた隊員達の心を癒やしている。

「はい、取れた」

「ありがとーティアお姉ちゃん」

「どういたしまして」

ティアナに笑顔でお礼を言ったヴィヴィオと、笑顔を返すティアナ。ティアナはフォワード陣のリーダー役でもある為か、面倒見のいい姉のようなポジションに自然と収まっている。

フォワード陣の中で一番早くヴィヴィオと打ち解けたのも、実はティアナだったりする。

「さてと……朝ご飯を食べたら訓練まで少し時間が空きますし……ヴィヴィオと少し遊びましょうか。みんなで」

「いいですね」

「私も大丈夫！」

「わーい」

この後、私達フォワード陣とヴィヴィオは訓練が始まるまでの間、鬼ごっこやかくれんぼといった遊びをしていた。

但し、鬼ごっこは私が離れるとヴィヴィオが泣き叫ぶので、私はずっとヴィヴィオと一緒にでしたが。

かくれんぼは……なぜかヴィヴィオにだけ見つかってしまいました。

午後の訓練を終えた私達は、訓練着を着替えて事務室に向かっていった。

午後の訓練はバリアジャケットを着て訓練していたので、息苦しくなることはありませんでした。

ただ……

「すごかったよね……右京姉えのバリアジャケット」

「ええ……ソルさん、いい仕事してるわ」

「まさかのミニスカートでしたからね……下着まで……」

「……………」

上からスバル、ティアナ、キャラ、エリオ。

スバルとティアナは良いものが見れたという嬉しそうな表情をしており、キャラとエリオの顔は赤い。

今の会話に出た通り、私のバリアジャケットは長ズボンからミニス

カートに変わっていた……スカートなんて初めて履きました。

そのミニスカートのせいで普段通りに動けず、後半は射撃ばかりしていました。

……朝にセットアップした時はミニスカートじゃなかったのに。

「女性となったからには女性らしいバリアジャケットにしないといけません。よく似合っていたでしょう？」

【そりゃあもう】

「よし、一人ずつ頭を出しなさい。ソル、あなたは洗濯機の中に入れます」

「マイマスター！？それだけは！！それだけはああああ！！」

「ヴィータ、こんな感じでどうでしょう？」

「ん？あ、ここ間違ってるじゃねえか」

事務室にて、ヴィータに書き上げた書類を持っていくと間違いを指摘された。

やはり、機械から離れて長い私がこのミッドチルダの機械に慣れる

のは、まだまだ先のことになりそうだ。

「ここはこうだ。簡単だろ？」

「流石はヴィータ……説明がわかりやすく覚えてやすいですね」

「……………うっせ」

間違った箇所を説明しながら直してくれたヴィータ。

そんなヴィータを誉めると、彼女はそっぽ向いてしまった……僅かに見える頬が赤くなっていることを私は見逃さないけれど。

「ふふっ……お礼にアイスを作りましたよ。何味がいいですか？」

「……………前作ってくれたチョコバナナ味」

はい、了解ってね。

恥ずかしそうに言うヴィータはとても可愛かった。

ヴィータにお礼としてチョコバナナ味のアイスを振る舞った夕食後。

夕食後となれば、お風呂に入って、歯を磨いて、後は寝るだけ……
という訳でお風呂に入りに行ってきたわけですがここで問題が発生

しました。

「私は男湯と女湯……どちらに入るべきなんでしょうか」

「その姿で男湯に入るといふ選択肢があることに、私は驚きです」

胸元のソルから、そんなツツコミが飛んできた。

確かに、私は今は女の姿をしているけれど、中身まで女になっているわけではない。

なので、心情的にはいつも通りに男湯に行きたいのだが……それでは色々と問題があるだろう。

かといって女湯に入るのも、中身が男のままである私が許せない。

もういつそのこと、風呂好きの身には辛いけれど、今日は風呂に入ることには止めておこうか。

「あ、右京さん」

「ママー」

「なのは……それにヴィヴィオも」

風呂場の前をウロウロしていると、なのはとヴィヴィオがやってきた。

ヴィヴィオは私を見付けると手を上げながら走ってきたので、私は

しゃがんでヴィヴィオを抱き止める。

「右京さんは今からお風呂？」

「いや、今日は止めておこうかと……男湯も女湯も入るに入れませんかから」

ヴィヴィオを抱き上げながらなのはに苦笑しながら言うと、なのはは納得したように頷いて苦笑した。

「ママはお風呂に入らないの？」

「ええ、今日は止めておこうかと」

「じゃあヴィヴィオと一緒に入る」

「えっ？」

「痒いところはないですかー？」

「ない」

私は今、女湯でヴィヴィオの頭を洗っている。

どうしてこうなった。

唯一の救いといえば、女湯にいるのは知り合いの隊員達……ティアナ達フォワード陣（エリオ含む）四名となのは達隊長陣二名だけということくらいだろう。

もともと、なのはとはやとキャロ以外のメンバーは全員顔を赤くして俯き、体にはしっかりとタオルを巻いていて恥ずかしそうにしているけれど。

エリオは……道連れです。

「泡を流しますから、目を瞑っててくださいねー」

「んー」

シャワーからお湯を出して、ヴィヴィオの頭に付いている泡を流す。

流した後は、タオルでヴィヴィオの髪から簡単に水気を取る。

「はい、終わりましたよ」

「ママありがとうー」

「どういたしまして」

お礼を言ってきたヴィヴィオの頭を撫でて、一緒にみんなが入っている湯船に浸かる。

因みに、私もちゃんとタオルを巻いています。

「お…お姉さん。僕、早く上がりたいんですけど…」

「私上がるまでダメ」

「そんなぁ……」

エリオが泣きそうな声を出すが、私を残して行くなんて、そうはいきません。

もう少し、エリオにもこの男が居づらい空間にいてもらいます。

と言いつつも、私は全然平気なんですがね……羞恥や性欲という感情は薄いので。

むしろ、周りが恥ずかしくて死ぬんじゃないかと。

「私は恥ずかしくないんだけど……地球でもっと恥ずかしいことだし、今後の予行演習と思えば……えへっ」

「なんの予行演習ですかなの」

最近、なのはの頭は沸いてるんじゃないかと真剣に心配です。

愛されているのは悪い気はしません。

「私は右京さんの胸を拝めるなら!」

「はやて。本当に自重しなさい」

こんなのが部隊長で大丈夫なのだろうか。

今のところ問題はないようですが……そういえば、なのはがはやては揉み魔だと言っていましたね。

「……恥ずかしいです……」

じゃあ、なんで一緒に入ったんですか、ティアナとスバルとフェイト。

エリオは私が巻き込んだのでカウントしません。

「それじゃあ、私はそろそろ上がるとします」

「だから右京さん。こんなに綺麗どころと一緒に風呂入ってるんやから、もうちょい反応してくれてもええんちゃう？ エリオみたい」

「そういう反応を求められても困るんですがね。私にそういうことは期待しないで下さい」

はやての言ったことに苦笑しながら、私は風呂を後にした。

「マイマスタアアア！ー出して！ー！ここから出してええええ！ー！」

……洗濯機の中らなにやら叫び声が聞こえましたが、気のせいです
すね、きつと。

さて、今日は順番的にエリオと一緒に眠る日なのですが。

エリオが恥ずかしがって”今日はいいです!!”と言ってきた為、
今日もキャラと一緒に寝ます。

「えへへ……」

今日も一緒に眠れるからか、キャラは御満悦だ。

今も、私の手を握りながらニコニコとしている。

「お姉ちゃん」

「なんですか？キャラ」

「……何でもない。おやすみなさい、お姉ちゃん」

「はい、おやすみなさい」

眠りに付こうと目を閉じたキャラの頭を撫でながら、空いている手で体をポンポンと叩く。

少しすると、隣からはもう寝息が聞こえてきた。

本当に……子供は寝るのが早い。

「おやすみ……あなたが幸せな夢を見れますように」

最近口癖になってきた願いの言葉を呟く。

これを言うと、自分も相手も本当に幸せな夢を見られる気がするのだ

「明日は……元に戻れますように」

そんな切なる願いを胸に、私は眠りに落ちた。

「マイマスター……助けて下さい……目が……目は無いですが目が
回ります……マイマスターアアア……」

番外編 右京に降りかかる災難 その2（後書き）

女右京「……………」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい。

女右京「…………性別反転はギリギリ許します。ですが、口調まで変える意味はないですよね？」

いや、その方が女体化したという事実がはつきり分かるかと…………

女右京「ソル、セットアップ。ライン、ユニゾン。収束開始」

「「わかりました」」

え！？収束！？

女右京「少し…………頭を冷やしましょうか」

「（絶対零度！！アブソリュートブレイカー！！）」

ギヤアアアアアアア！！

番外編 右京に降りかかる災難 その3（前書き）

やっと右京の災難が終わるかも。

女右京「やっとですか……もうこんなのはごめんです」

でも割と好評（？）だからまたやるかも。

女右京「……………」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

女右京「……………それでは……………右京に降りかかる災難 その3……………始まります」

番外編 右京に降りかかる災難 その3

朝起きた俺は、洗濯機に入れっぱなしだったソルを回収しにきた。

「ソル、生きてるか？」

「……………この世全ての悪を取り込むというのは、こんな感じでしょうか……………何とか生きてます。プログラムに不備も見当たりません。というか、この程度で壊れるようなヤワな造りはしてません」

「そうか……………なら、これからのお仕置きは洗濯機の中にぶち込む形を取る」

「ごめんなさい、本当にそれだけは勘弁して下さい。というか、マイマスター……………その姿は？」

ソルの言うその姿とは……………まあ、具体的に言っとだ。

髪は腰くらいの長さに戻っていて、胸も平たい……………訳ではなく少し膨らんでいて、身長はエリオくらい、着ているのは女になっている時に着ていたTシャツ一枚で……………男の象徴はない。

まあ、簡単に言っとだ。

次は少女になりました。

「いつ戻るんだコラ」

「い、今解毒薬を作っているところで」

「絶対飲まねえ。作ったらまず自分で試せよ」

「……………」

「目をそらすなあああ!!」

もうお約束になりつつあるが、場所は会議室で、フォワード陣と隊長陣と守護騎士が集まっている。

三回目となれば、流石にみんなウンザリして……

「右京さん可愛いいいっ!!」

「な、なのは!私も抱きしめさせて!!」

「あかんでフェイトちゃん。次は私や」

「」「可愛い……………」

「……………」

ねえな、全く。

なのは俺に抱きついて頬摺りしてるし、フェイトとはやては順番待ちしてるし、ティアナとスバルとキャラは愛玩動物を見るような目で見てるし、エリオは……なぜかポーツとしてるな。

守護騎士達は静観……シャルは頭にタンコブを一つ作ってるが。

「ええい、離れなさい駄猫！！こんなにも小さくて可憐なマイマスターに抱きついて頬摺りするとは何事ですか！！」

「好きな人には抱きつきたいし、こんなに可愛いなら頬摺りしなきゃ！！」

「それには激しく同意します！！敢えて言いますよう、激しく同意します！！大事なことなので二回言いました」

「いい加減離れろやあああ！！」

因みに、今の俺の声はソル曰く、ヘラクレスを従える銀髪のロリっ子のような声らしい。

ヘラクレスを従える銀髪のロリっ子って誰だよ。

なのは達によってたかって抱き締められて頬摺りされ、抱きついてきた奴らを断罪（拳骨）してから数十分後。

俺達はお約束のように訓練場に来ていた。

「念の為聞いておく。俺は早朝訓練に参加出来るのか？」

【ダメです！！絶対ダメです！！】

なるほど、これが四面楚歌という状況か。

俺の周りには敵しかいないんだな……ソルも敵側だし。

「万が一ケガでもしたらどうするんですか！！」

「いや、エリオ。お前はなぜそこまで熱くなってるんだ？」

「うえ！？いや、あの、その……」

俺がなんとなく聞いて見ると、エリオは真っ赤になって慌てだした。

そのエリオの様子を見たキャラロは、なんだか面白くなさそうな顔をしている。

もしか……とは思うが。

「エーリーオークーン。なんで熱くなってるのかナー？」

「あ、あ、あのですね！？お兄さんは今は僕達くらいの可愛い女の

子なワケでして！！そんなお兄さんがケガをする姿を見たくないと言いますか！！」

からかい半分でエリオの腕に抱きついてみると、面白いくらいに慌てた。

この様子と言葉から察するに、エリオは今の俺の姿を見て意識しているようだ。

中身が男だと分かっていても、見た目が可愛い女の子（周りの意見だと、異性として意識してしまう）ようだ。

「俺は男なんだけどなあ？」

「それは分かってるんですが、どうしても意識してしまうんです……
……ていうか離れて下さい！！」

「いいなあエリオ……」

「ていうか本当に可愛いわね右京さん……」

「む……」

「「右京さん（マイマスター）……可愛過ぎるよ（ますよ）……」」
「シャマルの激薬を飲んでから三日目の今日も、こんな感じで始まるのだった。」

「八花……一閃!!」

瑠璃色の魔力刃を纏った斧をしつかりと握り、体を独楽のように回転させながらのはに向かって振るう。

なぜこんなことをしているかと言うと、俺は早朝訓練を受けることが出来たから……というか乱入したからだ。

結果、基礎訓練こそ受けられなかったが、締めของシュートイベイションを受けることが出来た。

「甘いよ右京さん!!」

「は? いいっ!?!」

魔力刃がなのは張ったプロテクションにぶつかった瞬間、俺はなぜか吹き飛ばされた。

そのまま地面に激突……する前にウイングロードを走るスバルに受け止められ、事なきを得た。

「大丈夫? 右京さん」

「ああ……」

スバルに返事を返しながら、なぜ弾かれたかを考える。

この少女の体になってから地力……自分の基礎能力が落ちたことは分かっていた。

だから、自分の力だけでなく、遠心力を使って一撃を放ったわけなんだが……。

「うーん……単純に力が足りなかったのか？」

「ちっちゃくなつたから？」

「……悔しいが、多分」

だとすれば、俺はなのはプロテクションを抜くことは不可能に近い。

八花一閃は俺が使う魔法の中でも最大級の威力を誇る魔法だ。

それが通じないとなれば……

「ティアナと一緒に射撃をするか……あ、使えそつな魔法があつたな」

「本当？右京兄い」

「ああ……ってスバル！！前！！」

「え？うひゃ！？」

俺の声に反応してスバルがウイングロードから飛び降りる。

その瞬間、スバルが今まで走っていた場所を、桃色の魔力弾が通っていった。

「お兄ちゃん危ない!!」

「は？おわあ!？」

「え？きゃあああああ!!」

いきなりキャロの声が聞こえたかと思えば、俺はビルの屋上から鎖が伸びてきて俺の体に巻き付き、引っ張られた。

直後、引っ張られた俺を見て呆けたスバルに一筋の桃色の光が直撃した。

『はい、スバル被弾。もう一度20分間逃げるか、私に一撃を当てるかしないと終わらないよ?』

なのはから通信が入る。

このシュートイベションという訓練は、なのはの攻撃を20分間逃げ切るか、なのはに一撃当てるまで終わらない。

シュートイベション自体は何度もやっているが、割と被弾するのだ……主にスバルが。

場所は廃墟で固定されている為、今回も当然廃墟だ。

因みに、俺の服装だが……キャロサイズの訓練着を着ている。

そんなことを考えている内に、ビルの上へと着地する。

そこには、ティアナとキャロがいた。

「大丈夫ですか？お兄ちゃん」

「あゝ……俺”は”な」

「「あ、あはは……」」

三人で屋上から顔だけ出して、下を見下ろす。

すると、エリオに肩を貸してもらいながらなのはの攻撃から必死に逃げるエリオとスバルの2人の姿が見えた。

……なぜキャロは俺だけ助けたのだろうか。

「さて、どうしようかね」

「今のスバルは、火力に数えられないですね……」

「エリオ君もスバルさんのフォローで動きづらいでしょうし……」

2人が冷静な判断を下す。

一度被弾したスバルは機動力も攻撃力も低くなっているし、エリオはそのスバルのフォローで思うように動けない。

なのはの攻撃を避け続けることはかるうじてできそうだが、長くは続かないだろう。

「何か使えそうな手は？俺は一つ手がある」

「私は……あまり使えそうなものは……せいぜいシルエットで攪乱するくらいです」

「えっと……補助するくらいしか……」

「充分だ」

さあ、御披露目というか。

このセカンドフォームのもう一つの姿を。

くなのはside

スバルは被弾しているから攻撃に転じる可能性は低い。

エリオはスバルのフォーローに入っているから、こちらも攻撃に転じる可能性は低い。

ここからだと言までは確認できないけれど、魔力反応を見る限りは、右京さんとティアナとキャロはさっきの場所に一カ所で集まって動いていない。

……ちっちゃい女の子になった右京さん……可愛かったなあ。

また、ギョツてしたいなあ。

そんなことを考えていると、右京さん達に動きがあった。

「ソル！！モードチェンジ！！」

「ブレイドモード」

右京さんが屋上の隅に姿を現し、斧を構えて高らかに叫ぶ……声も可愛いなあ。

なんかこう……” やっちゃえ！バーサーカー！” とか言いそうな…。

それはさておき、右京さんの斧の形が代わり始めた。

190cmほどの片方の刃が長く、下向きに刀のように反りがある不思議な形状をした両刃の斧。

その斧の短い方の刃が右京さんの手元にまで下がり、反りがある刃は短い刃の方に回転して刃が上下逆さまになり、そのまま下がって短い刃にくっついて一つの長い刃となった。

棒の部分は刃くらいまで短くなり、右京さんは刃を私に向ける。

その姿は、一本の大剣。

スゴいよ右京さん……まだそんな隠し玉があったんだね。

「キャラー!!」

「はい!! トリプルブースト…… アクセル、スラッシュ、ストライク!!」

キャラが強化魔法を使い、右京さんを強化する…… 名前から察するに、速度と魔力刃と威力かな。

右京さんの大剣の刃には、桃色の魔力刃が発生しているし。

「ティアナ!!」

「はい!!」

右京さんがティアナを呼ぶと、返事と共に私の後方から魔力弾が飛んできた。

私はその魔力弾に自分の魔力弾を操作して当てて相殺する。

「クリティカル…… ブレード!!」

今度は前から…… オレンジ色の魔力刃が回転しながら飛んできた。

この魔法は…… 右京さんの魔法だ。

「でも、威力はないみたいだね!!」

「ディバインバスター」

ビルの屋上にいる右京さん達目掛けて砲撃を放つ。

放った砲撃はティアナの魔力刃を容易く破壊し、屋上へと突き刺さった。

「でも…あれはシルエット!!」

「うえっ!?!」

すぐに視線を下に向けると、私にデバイスを向けるティアナとキャラクターを見つけた。

私は二人にレイジングハートを向け……

「デイベイイイイーン……バスタアアア!!」

「アルケミックチェーン!!」

砲撃を放った。

しかし、私の砲撃が当たる前にキャラがアルケミックチェーンをビルから召喚し、自分達の体に巻きつけて引き寄せ、回避する姿が見えた。

上手い……今まで捕獲にしか使わなかったキャラのアルケミックチェーン。

そのアルケミックチェーンを操作することで、キャラ自身や仲間が素早く離脱することが出来る。

今みたいに相手の攻撃をしっかりと見れば、咄嗟の判断で避けるこ

とも出来る。

「二人とも被弾せずかあ……二人？」

下にいたのはティアナとキャロの二人だけ。

じゃあ、右京さんはどこに……？

「後手必殺……！！」

「っ!？」

未だに巻き上がっている屋上の土煙から聞こえた声。

私は自分の直感に従って、屋上に向けてプロテクションを張った。

「ステイクマータ聖魂の傷跡!!！」

「くあうっ!!！」

瞬間、私のプロテクションに亀裂が走り、とんでもない衝撃が体に走った。

私の目の前には……今にも大剣でプロテクションを切り裂こうとしている右京さんの姿。

「これでも無理なのか!? 九回叩き込んだぞ!？」

あんな一瞬で九回も攻撃されていたことに驚きだよ。

ただ、右京さんの表情は苦しそう……そりゃあ一瞬で九回攻撃なんて離れ業をしたんだし、反動くらいあるよね。

「残念だったね右京さん？」

「ああ、本当に残念だよ……俺が決めるつもりだったのに」

「えっ？」

右京さんがニヤリと笑う。

瞬間、私の背中にトン……と軽い衝撃がきた。

後ろを振り返って見るとそこには……

「ナイスだエリオ」

「ありがとうございます、お兄さん」

ストラーダのフォルムツヴァイの状態で私の背中に切っ先を当てるエリオの姿があった。

〈なのは side out〉

俺は今、食堂で困ったことになっていた。

さっきのシュートイベイションは、俺達の勝利で終わった。

その後、俺達はいつものように着替え、いつものように食堂で朝食を取る……のだが。

「腕が上がらん……」

この体でステイグマータを使った反動か、腕が全く上がらない。

これでは食事を運ぶどころか、食べることもままならない。

そんな俺の姿を見たなのは達は……

「私が食べさせて上げるよ右京さん!!」

「黙りなさい駄猫!! くっ、私に体があれば……」

【私が食べさせてあげます(るよノるで)!!】

……とまあこうなっているワケだ。

正直、ため息しか出てこない。

「えっと……お疲れ様ですお兄さん」

「ありがとうエリオ……はあ……」

唯一労いの言葉をかけてくれたエリオの存在が本当にありがたい。

もういつそ、エリオに食わせてもらおうかな……。

「パパは食べさせてもらうのイヤなの？」

「イヤってわけじゃないが、なのは達の熱意が怖い……ん？パパ？」

「じゃあヴィヴィオが食べさせてあげる……！」

いつの間にか、ヴィヴィオが俺に抱きついてた。

体の大きさがそれほど変わらないからか、ヴィヴィオは俺の腕ごと抱き締めている。

ていうか。

【だからなんで分かるの!?!】

いや、本当になんで分かるんだ。

周りのツッコミを一身に受けながらも、ヴィヴィオは笑顔を浮かべていた。

「パパ、あーん」

「あーん」

ヴィヴィオからクリームシチューが口へと運ばれ、味わって飲み込む。

うん、美味しい。流石はおばちゃんだ。

「おいしい?」

「ああ、美味しいよ」

「エへへ……」

俺が美味しいと言うと、ヴィヴィオは嬉しそうな顔をした。

こういうのも、親子の触れ合いというものだろうか。

因みに、俺はヴィヴィオとエリオとキャロと一緒にテーブルで食べている。

【いいなあ……】

周りから嫉妬の視線が俺……というかヴィヴィオに向けられている。

本人は全く気にしていない……というか全く気付いていないようで、嬉々として俺にシチューを食べさせている。

「はいパパ、あーん」

「自分の分のピーマンを食べさせようとしな。しっかり食べなさい」

「うー……苦いのやー」

泣きそうな顔でピーマンを拒否するヴィヴィオ。

しかし、この年から好き嫌いしては、ずっと嫌いなままだ。

「たーべーなーさーいー」

「いーやー!」

「それじゃあおやつ抜き」

「いただきます!」

伝家の宝刀”おやつ抜き”。

主にフォワード陣（特にスバルとキャロ）に使われる魔法の言葉だ。

これを使えば、事務仕事を嫌がるうが人參を残そうとしようが、やるし食べる。

それはヴィヴィオも入り、嫌がりながらも目の前のピーマンを食べた。

「苦い」……「」

「ちゃんと食べられたな。偉いぞヴィヴィオ」

頭を撫でる代わりに、額に額を当てながら誉める。

するとヴィヴィオはえへへ……と笑った。

そんなヴィヴィオを見て、俺も吊られたように笑う。

笑いあう俺達を見た周りも笑い……朝の食堂に笑顔が溢れた。

こんな日常が続けばいいのにな……と、俺はそんなことを考えていた。

腕が上がらない為、午後の訓練は見学のみとなり、事務仕事をやる頃には腕は治っていたので、事務仕事はやった。

ヴィヴィオ含むフォワード陣にはロールケーキを振る舞い、夕食を終えた。

風呂は、人が少ない時間帯に入った……にも関わらず、なのはとヴィヴィオがいたけどな。

三人で洗いつこしたり、ヴィヴィオがなのはのことをママと呼んだり、なのはとヴィヴィオが俺に抱きついてきたりと、風呂に入っていた約30分間の間に色んなことがあった。

なんでも、なのははヴィヴィオの母親代わりとなり、フェイトは二人の後見人となったそうだ。

つまりヴィヴィオは、父親一人、母親二人ということになっている。

「このまま家族になるつよ」

なんてなのはが言った時には思わず「バカなこと言うな」なんて言
って苦笑してしまった。

本心では、それもいいかもな……なんて考えていたが、絶対教えな
い。

風呂から上がった俺は、今日もキャロと一緒に眠った。

エリオは、俺のこと意識して眠れなさそうだからな。

今は真つ暗な静寂の中に、二人分の寝息が小さく響いている。

その寝息に促されるように、俺のまぶたも段々下りてくる。

明日には戻っているといいなあと考えながら、俺は眠りに落ちた。

朝起きると、俺の姿は元に戻っていた。

その俺の姿を見た奴らは、安心しながらも残念そうな表情をしていた。

そんな表情を見てかなりイラツときたが、ヴィヴィオだけは変わらない笑顔で”パパ”と言って抱きついてきた。

本当に、ヴィヴィオには癒されるなあ…。

「さて、次の薬の製作に取りかからないと！」

「ソル、セットアップ。ラインもユニゾン」

「了解です」

今日も機動六課で、どこかの部屋が氷付けになった。

番外編 右京に降りかかる災難 その3（後書き）

ロリ右京「今回俺が使った魔法の説明だ」

名称：セカンドフォーム”ブレイドモード”

普段使用しているのはセカンドフォームのアクスモード。今まで使
用していなかったブレイドモード……大剣形態が今回初登場。ぶっ
ちやけた話し、モンハンのスラッシュアックスです。切り裂くアッ
クスモード、叩き斬るブレイドモード、という感じ。

名称：聖魂の傷跡

ステイクマータ

セカンドフォームのブレイドモードでのみ使用可能。魔力刃を纏っ
た大剣で一瞬にして九回もの攻撃（斬撃）を加えるという魔法。今
回はキャラに強化をしてもらい、威力を底上げしたが、体が少女に
なっていたせいか、なのはのプロテクションを貫くには至らなかつ
た。

ロリ右京「今回はこんな感じだな。ていうかこのロリ右京ってなんなんだコラアアアア！ステイグマータの名前はニョロロからの提供だ。ありがとな」

自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない(前)

PV220000アクセス!!ユニーク25000人!!ありがとう
うございます!

右京「本当にありがたいことだな……読んでくれた人、感想くれた人、お気に入り登録をしてくれた人、その全ての人に感謝だな」

感想もこの数字も自分の励みになっています!

これからも流れ着いて!ミッドチルダ!を宜しくお願いしますv)
^^^) /

自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない

「そこまで！フォワード陣四名の撃墜を確認しました。よって、右京さんの勝ち！」

なのはの声が森に設定されている訓練場に響く。

ついさつきまで、俺達フォワード陣は早朝訓練の締めとして、ついでに元に戻った俺の体のチェックの為、俺対フォワード陣四名の模擬戦をしていた。

結果はなのはの言った通り、俺の勝利。

無傷の俺の前には、泥だらけで大の字になってへばっている4人がいた。

「右京さん……一撃も当てられないなんて……」

「もぉー手加減してよー」

ティアナが悔しそうに呟き、スバルが若干泣きそうな声でそんなことを言ってきた。

「バーカ。手加減したら訓練にならんだろうが」

不意に、三回目となるデジャヴを感じた。

そして、このデジャヴの意味を、俺は今理解した。

デジャヴ（これ）は、俺が藍蘭島にいた時に見た夢だ。

僅かな違いこそあるものの、俺はこの場面を確かに夢で見た。

そつだとするならば、俺が見た場面はもう一つ残っているが……思い出せない。

「まあ……思い出せないなら仕方ないか」

「右京さん？何か言った？」

「いや、なんでもない」

なのはに声をかけられたが、俺はなんでもないと首を横に振る。

藍蘭島……か。

俺が帰るべき場所であり、いるべき世界。

（なあ、みちる……お前は今、どうしてる？）

そんな俺の疑問が空に消えたと同時に、なのは達の地球に行った時以来感じていなかった孤独感が、俺の心に少しだけ入り込む。

まるで、世界から拒絶されるような感覚に一瞬、吐き気がした。

「右京さん!!」

突然なのが大きな声を上げて俺の右手を掴んだ。

俺を含めたフォワード陣はみんな、なのはの行動にびっくりしていた。

「……………どうした？なのは」

「え？あ…えつと…あ、朝ごはん…一緒に食べよ？」

「それぐらい別にいいが……………ヴィヴィオも一緒にな」

「うん」

少し冷や汗をかきながら、なのはは嬉しそうな笑みを浮かべる。

そんななのはを少しおかしく思いながら、俺達は食堂へと向かった。

「……………うん……………きっと……………気のせいだよ……………」

小さななのはの眩きは、俺には聞こえなかった。

「じゃあ午前の訓練はここまで。お昼休みにしよう」

【ありがとうございました!!】

ヴィヴィオと朝食を食べ、再び訓練を開始した数時間後の今、ようやく午前中の訓練全てが終了した。

午後から俺達フォワード陣は、ギンガのいる108部隊に出向研修に向かう為、それまでは隊舎内で待機となる。

「さて……どうやって時間を潰そうかね」

「その前にお昼ごはんでしょ?」

「それもそうだ。今日はどんな飯が……ん?」

訓練着から制服に着替える為に全員で隊員寮に入る。

その中をなのはと話をしながら歩いていると、ロビーでテーブルの上に表示されている画面に見入っているヴィヴィオを見つけた。

「あ、ヴィヴィオ」

「あ……パパ!ママ!」

なのはの声を聞いてヴィヴィオは顔を上げる。

ヴィヴィオは俺達を見つけると嬉しそうな顔をしてこちらに向かって走ってきた。

そのまま俺となのはの腰に両手を回し、抱きついてきたので俺となのははしっかりと受け止める。

「もうお昼休み？」

「うん」

「だから、昼飯も一緒に食べような」

「うん」

俺が抱きついてきたヴィヴィオを抱き上げ、なのはがヴィヴィオの頭を撫でる。

本当に……こつこつっていいもんだな。

「ヴィヴィオ、ママ達のビデオ見てたの？」

「うん」

「教材用のビデオだ」

キャロとエリオがヴィヴィオの見ていた画面を見ながらそう言うてくる。

画面を見ると、なのはとフェイトが飛び回り、時にターゲット

らしきのを破壊し、その都度ナレーションが流れている。

「なのはママもフェイトママも強くてかっこいいでしょー」

「うん！」

スバルが教材用のビデオを見ながらヴィヴィオに問いかける。

すると、ヴィヴィオは満面の笑みで頷いた。

そして、次に発したヴィヴィオの言葉がきっかけとなり、ちょっとした騒ぎになることになる。

「なのはママとフェイトママ、どっちがっよいの？」

（No side）

右京を除くフォワード陣はロビーで飲み物を飲みながら、先ほどのヴィヴィオの言葉……”なのはとフェイトはどちらが強いのか”を考えていた。

「やっぱなのはさんじゃない？」

というのはスターズ側の意見。

航空戦技教導隊の教導官であり、事故による負傷ブランクがあったとはいえ10年飛び続けた歴戦の勇士。

何より、”エースオブエース”の名は伊達ではない、というのがスターズ側たるスバル、ティアナの言い分である。

対するライトニング側の意見は……

「でも、フェイトさんだつて事件の現場に向かい続けて、手荒な現場でも陣頭に立って解決してきた一線級の魔導師ですよ！」

「空戦ランクはなのはさんもフェイトさんも同じS+ですし」

というのがライトニング側たるエリオとキャロの意見である。

どちらもなのはさんが、フェイトさんがと自分達の隊長を主張する。

「でも、ホントにどっちが……つてか六課で一番強いのかって誰なのかしらね。八神部隊長や副隊長達……それに右京さんもかなりのもんなんだし」

「……あー……」「」

ティアナの言葉により、三人の思考が”どちらが強いのか”から”誰が一番強いのか”へとシフトする。

やがて、この”誰が一番強いのか”という談義はフォワード4人から他の隊員へと広がっていき……

「とうとうわけです！」

「第一回！機動六課で最強の魔導師は誰だか想像してみよう大会
くっくっ！！」「くっくっ！！」

【おおおお〜！！】

という大会が機動六課の駐機場にて始まったのであった。

進行役を担っているのはスバルとアルト・クラエッタ二等陸士。

アルトは機動六課のロングアーチ所属であり、通信スタッフをしている。

「鉄板の最強候補は6人！」

「近接最強！古代ベルカ式騎士！ヴィータ副隊長とシグナム副隊長
！」

「六課最高のSSランク！超長距離砲持ちの広域型魔導師騎士、リイン曹長とのユニゾンって裏技もある八神はやて部隊長！」

「六課最速のオールレンジアタッカーフェイト隊長と、説明不要の大本命！エースオブエースなのは隊長！」

「そして近接最強たるシグナム副隊長とタイマンできて、フェイト隊長と速さで渡り合え、更にライン曹長とのユニゾンも可能な機動六課最強の新人の右京さん！」

「最強は誰だ　っ!?!」

【わあああつ!?!】

スバルとアルトの2人の言葉で、駐機場にいる隊員達のボルテージは上がり続ける。

さて、先ほどティアナも言っていたが、なぜここで右京の名が上がっているのか？

それは、以前行われた機動六課タッグマッチトーナメントが原因である。

このトーナメントで右京はなのは、フェイト、シグナムの三人の隊長各と戦った。

その時の戦闘は六課隊員全てが見ている。

この時から、隊員達の右京への印象は”新人隊員”から”隊長陣と渡り合えるヤバイ新人”となっていた。

しかも、一部の男性隊員からはこっそりと兄貴と敬われ、女性隊員

からはお兄さんと慕われていたりする。

「あわわ、なんだかおおごとに……」

「アルトさんとスバルはホントにもー……」

ボルテージが上がり続ける駐機場の片隅で、ティアナの呆れる声が小さく響くのだった。

場所は変わり、なのはとフェイトの部屋。

この場には右京、なのは、フェイト、ヴィヴィオの4人が存在し、フェイトはヴィヴィオの髪を結び、なのはは食後のキャラメルミルクという飲み物を作っており、右京はフェイトとヴィヴィオのやり取りを眺めていた。

「はいお待たせ。食後のキャラメルミルク」

「ありがとなのは」

「お、いい匂いだな」

やがて、なのはは出来上がった四人分のキャラメルミルクを持って、右京達のいるベッドまで歩いて来る。

そんななのは目に、フェイトに髪を櫛で梳いてもらっているヴィオの姿が入った。

「ヴィオ、髪の毛結んでもらってるの？」

「うん」

「リボンもあるし、いろいろ試してみようかって」

「結んでいると動きやすいしな」

「そうだね。ヴィオはどんな髪型にしたい？」

なのはの問い掛けに、ヴィオはうーんと唸りながら、なのはの作ったキャラメルミルクを口へと運ぶ。

そこでフェイトがなのはとお揃いにしてみる？と提案した。

そして、フェイトはヴィオの髪をなのはと同じサイドテールにしたのだが……

「おもしろい」

「あはは、コレはもうちょっと大人になってからかな」

幼い身には重かったらしく、結んだ髪の方へと傾いてしまった。

右京はそんな光景を見ながら、キャラメルミルクを口へと運ぶ。

「……美味しいな」

「良かった」

右京が素直に感じた感想を口にする、なのは嬉しそうな笑みを浮かべる。

右京の目に、そのなのはの笑みがあるとある人物と重なる。

(みちる……)

それは、藍蘭島にいる、なのはに想うよりも先に”一緒にいたい”と想った少女。

みちるも今のなのはと同じ笑みを浮かべていたな……そう考えながら、キャラメルミルクを飲み干す。

「ヴィヴィオ。次はパパとお揃いにしてみるか？」

「うん！」

「それじゃありボンもお揃いにしようか」

「いいね、それ」

右京が、なのはが、フェイトが、ヴィヴィオが笑みを浮かべる。

血の繋がりにこそないが、暖かな家族の繋がりが確かにそこに存在した。

〈No side out〉

〈ティアナside〉

あの駐機場の騒ぎの後、私達フオワード陣が実際に隊長達に個人での戦闘能力を聞いてみる事になった。

私はケーキを持って八神部隊長とライン曹長に話を聞いてみた。

「個人での戦闘能力？私は弱いよ。せやからランクも空戦やのーで総合で取ってるんやし」

「はいです」

「でも総合SSって言ったら、単純な魔力だけでも凄いんじゃない……」
SSランクの魔力量なんて私には想像することしか出来ない。

そんな私の言葉に対して八神部隊長から返ってきた言葉は”魔力だけはな”というもの。

八神部隊長は高速運用は出来ないし、並列処理も苦手らしい。

「大魔力と高速・並列処理は衝突するんが普通や。せやから、私の魔力運用は”立ち止まって展開・発射”だけなんよ」

「私もそのお手伝いだけです」

ああ、八神部隊長とリイン曹長がなんだかユルい表情になってる。確かに、後方支援専門に殴り合いのスキルなどは無意味だ。

適性の低いスキルを鍛えても効率が悪いだけだし。

「ぶつちやけ六課の前線メンバーで私がガチンコで勝てるのなんてキャロくらいとちやうか？」

「もちろん、フリードやヴォルテールは使用禁止ですよ」

「いや、最近のキャロは高町教導官仕込みやし、魔法の応用力もあるしなあ……あかん、勝てへんかもしれん」

ズーンと暗くなる八神部隊長とリイン曹長……コロコロ表情が変わるわね。

因みに、八神部隊長の懸念は当たっていたりする……キャロ、随分体力も付いたし。

「そやけど、なんで急に？」

「あ、いえその……勉強のためにと」

〈ティアナside out〉

「エリオside」

「個人戦技能？個人戦ってたっているあんだろ」

僕が話を聞いた相手はヴィータ副隊長。

ティアナさんと同じくケーキを話を聞くきっかけにして聞いてみた。

「えーと、とりあえず平均的な”強さ”ってことで……」

「”平均的な強さ”ア？」

どうやら僕の言葉が副隊長のかんに障ったというか、何かに触れてしまったようで呆れを含んだ言葉が返ってきた。

「追跡戦か決闘か、戦闘状況や相性の違いにだって左右される。どんな状況でも平均的に強いってのは要はなんでも屋ってことだが、マルチスキルは対応力と生存率の上昇のためであって、直接的な強さとは関係ねえぞ」

なぜだろう、ヴィータ副隊長が輝いてみえる……こんなに沢山喋る副隊長は初めてじゃないかな。

そんなことを考えていると副隊長に睨まれてしまった……なんで？

「……ひとりの人間がその時できるのは、いつだってひとつのことだけだ。それが通用しなきゃ、強いとは言えねえだろ」

「あ、はい……」

そう言っつてヴェータ副隊長はケーキを口へと運ぶ。

口の中のケーキをお茶で胃に流し込んだ副隊長は、僕の方を見てこう言った。

「エリオ。お前は強くなりてーのか、便利ななんでも屋になりてーのかどつちだ？」

くエリオside outく

「っつていう話が広まってるらしいな」

「ああ、私も聞いている」

今機動六課の中で話されている”機動六課の中で誰が一番強いのか”。

隊長陣五名となぜか俺までが話に上がり、この中で誰が一番強いのかを隊員同士で話し合っているらしい。

「なんで新人隊員の俺まで話に上がるかねえ」

「まんざらではないのだろう？ 実際、お前は十二分に隊長陣と渡り合っているではないか」

「リミッター付きと渡り合ってもな……で、シグナム的には誰が一番強いんだ？」

俺の言葉に苦笑した後、シグナムは自分の顎に右手を添え、考える仕草をする。

見た目が良いから絵になるな。

「主はやてとお前を除く隊長達4人でトーナメントでもすれば、試合条件にもよるが、やった回数だけ優勝者は違っただろうな」

「確かに、お前達の力はそれくらい伯仲してるな」

実際戦ったから分かるが、なのは達の力は拮抗している。

話を聞けば、シグナムは戦技披露会なるものの中でのとはと試合をしたらしいが、決着が着かなかったという。

「あれは心が踊った。だが、それ以上にお前との戦いは魂がたぎるものだった。次は私が勝たせてもらおうぞ」

「抜かせ……次も俺が勝つ。ユニゾン状態ではなく、俺とソル自身の力でな」

「抜かせ」

俺達は今、互いに似たような笑みを浮かべているだろう。

戦いが楽しみで、戦いが楽しいバトルマニア共通の笑みを。

また、シグナムと戦いたいもんだな……シグナムだけじゃなく、ザフィーラや……大牙とも。

そう考えた瞬間、また孤独感が僅かに心に入り込んだ気がした。

〈キャラオside〉

「フェイトさんの個人戦？戦闘訓練は結構好きだよねえ」

私がお話を聞いたのは、フェイトさんではなくシャーリーさん。

「戦うの自体は間違っても好きじゃないと思うけど、シグナムさんとは仲良く訓練してるし、結構負けず嫌いで、見てるとちょっとかわいかったり」

以前のお兄ちゃんとの戦いを見ると、フェイトさんは凄く楽しそうな顔をしてたから、きつと試合や訓練は好きなんだと思うな。

あのお兄ちゃんとフェイトさん、スツゴくかつこよかったなあ……。

「なのはさんと試合とかされてないんでしょうか？」

「昔は軽い練習くらいはしてたそうだけど、とある事故以降は一度もやってないって」

シャーリーさんの言うところある事故というのは、多分、以前なのはさんがお兄ちゃんと遊園地に行った次の日に私達に話してくれた事件だと思う。

その時に初めて、私達はなのはさんの口から日々の訓練の意味を覚えてもらったのだ。

「まあ来月あたりから分隊単位での模擬戦とかやるそうだし、その時にお二人の対戦も見られるかもね」

「その時は、自分たちが生き延びるので精一杯そうです……」

怪しく笑いながら言うシャーリーさんに、私は苦笑するしかなかった。

〈キャロside out〉

〈スバルside〉

「えーと、高町なのは一尉、戦闘記録、映像データ検索……」

私が取った方法は、なのはさんに直接聞くのではなく、過去の映像データを探すことだった。

もしかしたら、他の隊長達との模擬戦などの映像データがあるかも……という考えに至ったからだ。

「スーバル」

「うひゃあっ！！あわわわ、ななな、なのはさん！！」

「そんなにびつくりしなくても……」

映像データを探していると、突然後ろから名前を呼ばれた。

びつくりして後ろを見てみると、そこにいたのはなのはさんだった。

「隊舎の中で聞いたんだけど……隊長達と右京さんで誰が一番強いかに興味があるんだって？」

「あの……すみません。その、休み時間中のちょっとした雑談で……」

悪いことをした気持ちになった私は、なのはさんに謝った。

けれどもなのはさんは怒っていたワケではなかったらしく、”よく聞かれることだから”と笑った。

「ねえスーバル。こんな問題を聞いたことない？」

「はい？」

「自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強いといかない」

なのはさんの口から紡がれた言葉は、私が聞いたことのない言葉だった。

「あ、えと、聞いたことない……です」

「ふむ、そっか。じゃあ問題。」この言葉の矛盾と意味をよく考えて答えなさい”。みんなで相談して考えてみて”

答えが出たら、訓練の時にでも聞かせてもらおうから。

そう言っただけなのはさんは立ち去っていった。

私はしばらく1人で今の言葉の意味を考えていたけれど……当然ながら、答えは出なかった。

この後、ティア達と話し合ってみたけれど、やっぱり答えは出な

った。

ただ、右京兄だけは「なるほどねえ……」と言って感心したように笑っていた。

そのまま私達は108部隊に先行することになったのだけれど……。

私達はその途中で、とある事件と遭遇することになるのだった。

くスバルside outく

自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手より強くないといけない(後
今回のお話ですが、マンガ版リリカルなのはStrikerS2巻
に収録されている話を元にしております。

興味のある方は、お買い求め下さい。

あれ？宣伝？

問題の答え、迫り来る選択（前書き）

シリアスな空気……かも。

文章がめちゃくちゃで読みづらいかも知れません。

それでは、どうぞ

問題の答え、迫り来る選択

場所はレールウェイの地下通路。

俺達フォワード陣は108部隊に向かっていたが、途中でE37地下道という場所で不審な反応が発見された為、108部隊と近隣の武装隊員達と協力しながら、地下通路に発生した不審な反応の確認及び、ガジェット殲滅という緊急任務をすることになった。

ガジェットは確認されただけでも？型27機、？型5機、更に？型は多足歩行型という新型らしい。

ロングアーチからはライトニング1と2……フェイトとシグナムが緊急出動する。

なのはからは「AMF戦に不慣れな他の武装隊員達にガジェットや危険対象をなるべく回さないように」という言葉を受けた。

『こんな時の為の毎日の訓練だよ……5人でしっかりやってみせて』

「「「「はいつ！」「」「」

「了解だ」

その言葉を最後になのはとの通信が切れる。

さて、久しぶりの任務だ……しっかりこなさないとな。

「それじゃあ行くぞ！」

「……はいつ!」「……」

【セットアップ!】

【スタンバイレディ】

全員同時にセットアップし、バリアジャケットを纏って戦闘態勢に入る。

現場はレールウェイの地下通路……狭いが、連携はしっかりしなとな。

〈セイン side〉

「あーらら……動き速いなあ」

私がいる場所は地下通路。

管理局員達の行動をモニターで確認しているが、その中でも抜きん出て動きが速い5つの反応。

「機動六課だっけ?例の部隊が出てきちゃったよ。どーしよクア姉」

『そ　おねえ〜』

何か対策はないか、ここから離れたラボにいるクア姉に通信を繋ぐ。

クア姉はラボでガジェットや私達のことを見ているので、状況も分かっている筈だ。

ただ、他の4人はどうでもいいけど、右京さんには会いたいかなあ。

『今ここでプチツと潰しちゃってもいいんだけど、まだ不確定要素が多いし。今回の作業は？型改のテストとお披露目だけなんだし、もうほとんど済んだでしょう？』

「まーだいたいのところはね」

そう、私達がこの地下通路にいて暴れている理由は、ドクターの新作である？型改のテストとお披露目のため。

個人的には右京さんに会える可能性もあるかなあとか考えていたけれど……こりゃあ無理っばいかな。

『じゃあ空からおっかなーいのが飛んでくる前に早めに退いて戻ってらっしやい』

「そーねー」

はあ……やっぱり右京さんには会えないようだ。

クア姉が言うには？型改も放っておいてもいいらしい。

量産ラインに投入するかどうかまだ決めてないから、別にどうなっ

ても構わないみたいだ。

「はい！はいはいクア姉！！」

『なーに？ウエンディちゃん』

手を上げながら通信先のクア姉を呼んだのは妹のウエンディ。

ウエンディは私と一緒に地下通路で作業をしていた為、隣にいる。

その手にはウエンディの固有武装の試作品である多機能防盾”ライディングボード”を持っている。

「せっかくお外へ散歩に出られたのに、もう帰るのはつまんねーっス〜！あいつらにちょこつとちょっかい出したり、ノーヴェ達の言ってた”右京”に会ったりしちゃダメっスか？」

お手をしながら通信画面のクア姉にすり寄るウエンディ。

こんにゃろ、私だって会いたいつてのに……。

『そーおねえ〜。これから大事なお祭りが待ってるんだし……武装も未完成なあなたがケガでもしたら大変だから、直接接触はしっちゃダメよ？右京様に会うのもダメ』

但し、見学と遠隔ちよっかいくらいなら良しとしましょ、というのがクア姉の言葉。

ウエンディは嬉しい半分残念半分の表情ながらも喜んでいた。

やれやれ、好奇心旺盛な妹だね。

〔セインside out〕

〔No side〕

「ハアアアアツ!!」

スバルが叫びながら、ガジェット? 型改に向かって砲撃を叩き込む。

その巨体に叩き込まれた青い砲撃は? 型改の装甲を貫き、鉄くずへと変える。

「ハアツ!!」

エリオはその速度を生かして一瞬の内にガジェット? 型が固まっている場所に飛び込み、ストラダを円を描くように横一閃に振るう。

振るわれたストラダは三機の? 型を切り裂き、沈黙させる。

「キャラ! 強化だ! ティアナ行くぞ!」

「はいつ!!」

「バルカンシフト……ファイア!!」

右京とティアナは双短銃を構え、キャロの強化を受けたクロスファ
イアシュートを撃つ。

放たれたオレンジと瑠璃色の魔力弾は目に見えるガジェット達を？
型？型改問わずに破壊していった。

「は……速エ……」

「というか、改めて凄いな機動六課」

その戦い振りを見ていた108部隊の隊員達や他の部隊の隊員達は
機動六課隊員であるフォワード陣を絶賛している。

右京が入る前のフォワード陣を知る者は特に、驚いた表情を浮かべ
ていた。

『？型改の反応、新規に出現！機動六課フォワードチーム、G12
へ！』

【了解！】

シャーリーの通信を受けた5人は他の隊員達に敬礼し、指定された
場所へと進む。

他の隊員達は、フォワード陣を見送るしかなかった。

場所は変わり、ウエンディとセインがいる場所。

2人はこの場から動くことなく、ガジェットを通じてフォワード陣の動きを見ていた。

「へ、右京さんはともかく、こんなに動けるんだねこの子達。つてなんだよウエンディ、その楽しそうな顔は」

「え、そーっすか？」

セインが言ったとおり、ウエンディはなぜか楽しそうな笑顔を浮かべている。

その理由は本人の口から紡がれた。

「こいつらの担当、あたしやNo.9（ノーヴェ）になるんスよね」

「多分ね」

「こーゆー連中をどーやって叩き潰そうかなとか、どうしたら攻撃を喰らわずに済むかなとか、考えるとなかなか楽しいんスよ」

ウエンディは楽しそうな表情を浮かべたままそう告げる。

今もウエンディの頭の中では、フォワード陣との戦闘がシミュレートされているのだろう。

「ふーん……ウエンディならどう戦う？」

「こいつら単体でも魔導師ランクでAはありそうっすけど、それぞれの特化技能はAA級じゃないっすかね」

「ばいね。別々の特化技能を連携させることで総合力を高めてる。右京さんはソロでもいけるみたいだけど」

そう言ったセインの目にガジェットを通して映ったのは、魔力刃を飛ばして多数のガジェット？型を一度に両断する右京の姿。

「セインと同じくそれを見たウエンディが出した結論は、”分断して叩くのが適切”というものだった。」

「ま、連携戦だろうが単体戦だろうが、右京って人以外の奴に負ける気はねえっすけどね」

そう言ったウエンディは片膝をつき、ライティングボードを通路の遥か向こうに向けて構える。

その通路の先には、ガジェット？型改と戦闘を行っている右京達が出た。

「シッポ掴ませるとウー姉やトーレ姉に怒られっからさ、一発撃つたらすぐ引っ込むよ」

「了解っす」

「アルケミックチエーンツ！」

ウエンディ達から離れた場所でキャロが鎖を召喚し、ガジェット？型改を捕まえることに成功する。

捕まえた！と喜んだのも束の間、そのガジェット？型改に何か撃ち込まれた。

「なんだよ貫通してないじゃん。不発かー？」

「冗談、これでも一応射撃型つスよ？」

右京達からは姿が確認出来ないほどに離れた場所で、ウエンディとセインは軽い調子で会話をする。

ウエンディのライティングボードから硝煙が上がっており、撃ち込まれた何かはウエンディが放ったものだと分かる。

「今のは”反応炸裂弾”。チンク姉に教わった狭所でのエネルギー運用理論。金属とエネルギーの塊である？型に撃ち込んで、狭い通路内を一瞬で満たす爆散破片に変える。これならあたしもディエチヤチンク姉に匹敵する破壊力が出せる……はずっス」

ウエンディがパチンツと指を鳴らす。

その瞬間、反応炸裂弾が撃ち込まれた？型改はキィィィィンという甲高い音を発し、凄まじい爆発を起こした。

その爆発は一瞬で通路内を炎と破片で満たし、フォワード陣達の姿を隠した。

「えげつねーなあ。ちょっとやりすぎだぞ？右京さんが怪我したらどうすんだ」

「えっへっへえ〜 右京って人なら大丈夫っすよ。連中が5人セツトなら防いじゃうだろうからねえ〜」

通路内の爆煙が晴れる。

そこには無傷のスバル、ティアナ、キャロが佇んでいた。

フォワード陣はウエンディの言った通り、爆発を防ぎきったのだ。

しかし、明らかに人数が足りていない……その理由は……

「甘く見たなウエンディ。5人じゃないぞ、3人で防いだんだ」

「ふえ？」

右京達は爆発直後、ウエンディ達の居場所を特定し、速度のある右京とエリオがフリードとティアナの誘導弾を引き連れて向かった。

「クア姉とディエチが向こうの隊長達に落とされかけた時とおんなじパターンだね」

「んん、こいつらもなかなかやるもんスね」

「ま、ちゃんと遊んで満足したろ。交戦しないうちに帰るよ」

「はいっ」

セインは自らのES”ディープダイバー”を発動し、ガジェットと共に床に沈んでいく。

ウエンディも共にいこうとしたが何か閃いたのか、どこからともなくマジックペンを取り出した。

「でも、その前に……」

「あ、あたしも」

〈No side out〉

エリオと共に走り、敵が攻撃してきたと思われる場所へと到着した。

ここまで一切の攻撃がなかったが……もしや、逃げたのだろうか。

その考えは当たっていたらしく、敵はどこにもいなかった……ただ……。

「（悪い、逃げられた。だが、壁に書き置きが残ってた。バイバイ

だだよ」

「（了解。合流して対策を続けましょう）」

壁に書かれていたのは”またね、バイバイ”という言葉と……もう一つ。

”また会おうね、右京さん”という言葉だった。

敵は…俺のことを知っているのか？

警戒が解かれたのはそれから数時間後のことだった。

今回の事件はなにが目的だったのかははっきりしていないが、はやくて達隊長陣の見解では、戦闘機人や新型ガジェットテストのテストか何かかもしれないという。

俺達フォワード陣は108部隊の好意で、持ってきてくれた弁当で夕食を済ませることになった。

そんな訳で俺達は、応援としてきていたギンガと共に夕食を食べている。

「自分より強い相手に勝つためには、相手よりも自分の方が強くないといけない」？」

「そうなんだよ。なのはさんが出してくれた問題でさ、その言葉の矛盾と意味をよく考えて答えなさいって」

「そっかー」

ああ、まだ考えてたのかその問題。

ていつかスバルとエリオとギンガ……弁当食い過ぎだろ。

弁当の箱が山と化してるぞ……今更な感じもあるが。

「その問題の答えはわからないけど、私としてはそれは否定するべき言葉だと思うなあ」

ギンガはそう言って左手を握り締め、その手を見つめる。

そして、ギンガは母から聞いた言葉を話し始めた。

「母さんが言った。刹那の隙に必倒の一撃を叩き込んで終わらせるのが打撃系のスタイル」

出力がどうか、射程や速度や防御能力がどうか、自分と相手のどちらが強かろうが、そんなのは関係ない。

「相手の急所に正確な一撃」……狙うのはただそれだけ」

ギンガは一瞬のうちに左手をスバルの首もとへと突き付ける。

その衝撃でスバルは持っていた弁当を落としてしまった。

「私はそう思ってる」

「うん……」

ふむ……相手の急所に正確な必倒の一撃……か。

それはある意味での到達点。

それをする事が出来たなら……本当の意味で倒せない敵はいなくなる。

さてと……良い話も聞けたことだし……今回は軽めにしておこう。

「ギンガ」

「なんですか？右京さん……あれ？なんで右手を振りかぶって……あの……笑顔が怖いんですけど……」

「弁当」

俺はギンガの行動によってスバルが落としてしまった弁当を指差す。

中にはまだご飯やらおかずやらが残っていた為、地面にそれらが広がっていた。

それを見たギンガは顔を真っ青にして、俺の方を見た。

「あ……あはは……」

「ギンガ……食いもん粗末にしてんじゃないかねぞおおお!!」

「ごめんなさ い!!」

ギンガに説教してから数10分後、俺達は隊舎に帰ってきた。

「で、結局答えはなんなんだろ」

帰って早々にスバルはそんなことを言い出した……まだ悩んでんのか。

ちよつとばかり、ヒントでもやろうかね。

「スバル。お前、なのは勝てるか？」

「え？今の私じゃ、まだまだなのはさんには勝てないよ」

「それじゃあ、なのはに勝つためにはどう動く？」

「どつって……なのはさんは砲撃が主体の射撃型魔導師だから……狙われないように動き回って、近付いて一撃……かな」

まあ、そうなるだろうな。

なのはは中遠距離タイプだから、勝つには近づくしかない。

一人じゃ勝てないのなら、仲間と一緒に戦えばいい。

”自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手よりも強くないといけない”。

それはつまり……。

「あ、なんかわかった」

「私もです」

ティアナとキャロは分かったようだ……後は自分達でなんとかするだろう。

さてと、俺は外に出て風に当たるとしますかね。

という訳で外に出た俺は、海が見える場所に来ていた。

今頃ティアナ達は、なのは達に昼間した質問を再び聞いていることだろう。

「自分より強い相手に勝つためには、自分の方が相手よりも強くないといけない”……その答え……か」

思い浮かべるのは、この世界にはいない弟分と、そのライバルのよ

うな少女の決闘。

互いが互いの強い部分を生かし、戦った……結果は引き分けだったが。

俺よりも弱かった弟分は、俺に一度勝った。

それは、そいつが俺よりも強い部分があったからだ。

つまり、あの質問の意味は……

「自分より”総合力で強い相手”に勝つためには、自分が持っている”相手より強い部分で戦う”……そのために自分の一番強い部分を磨き上げて、これなら誰にも負けないって自信と気概を持って戦いに当たる……スバルがそう言ってきたよ」

ゆっくりと、俺は後ろを振り返る。

そこに立っていたのは……なのはだ。

「それで、答えは合っているのか？隊長さん」

「さあ……？明日の朝練で分かるかもね」

クスリと笑いながら言うのは……その表情だけで、当たりかハズレか言っているようなものだな。

なのはは俺の横を通り過ぎ、俺に背を向けたまま海の前に立つ。

「ねえ右京さん……こっちの世界はどうかかな？」

「こっちの世界か……楽しんでるさ」

そう、俺はこっちの世界……ミッドチルダを楽しんでいる。

未知の経験、未知の世界、未知の魔法……楽しくないワケがない。
チカラ

仲間も出来て、同類も見つけて、なのはとヴィヴィオがいて。

それでも……

「寂しいんだよね」

「……どうしてそう思う？」

「分かるよ……大好きな人ことだから」

寂しい……間違っではない。

俺は孤独感を感じているし、何よりも藍蘭島の奴らと話せないことが……会えないことが苦痛だ。

たった4ヶ月いただけなのに、藍蘭島で過ごした日々はこんなにも俺の心に刻まれている。

だが、この世界にもそれなりに愛着は湧いてきているのも事実だ。

「……一緒にいたいと思った奴がいる」

「うん」

「一緒にいると約束した奴がいる」

「…うん」

「お前が見せる笑顔と同じような笑顔を見せる奴がいる」

「……うん」

みちる。

なのはが俺に笑顔を向ける度に、その笑顔と重なる少女。

なのはと同じくらいに一緒にいたいと思っている少女。

藍蘭島にいる俺の家族……だが、この世界にも家族が出来てしまった。

だから、今の自分の気持ちがはつきりしなくなった。

元の世界に戻りたいという気持ちと、このままこの世界で過ごすのもいいという気持ち。

その2つの気持ちがぶつかって苦しくなる。

「ねえ右京さん」

「…なんだ？」

「右京さんは……元の世界に帰りたい？」

ドクンと心臓が跳ねる。

俺は、この場面を知っている。

俺は……夢の中でこう答えた。

（なんでそんなこと聞くんだけ……帰りたいさ、あそこが俺のいるべき世界だからな）

そうだ、あの世界こそが俺のいるべき世界だ。

だが…それを口にしていいのか？

喉が乾き、心臓がバクバク言っている。

なのは俺の言葉を待っているのか、体を海に向けたまま微動だにしない。

（俺は……）

そして、俺が出した答えは……

「……帰りたいさ。あそこが、俺のいるべき世界だからな」

夢と同じ言葉だった。

この言葉を言った瞬間、俺は後悔した。

言ってから気付いたのだ……俺は、こんなにも……こんなにもなのはと離れたくないと感じている。

同時に、みちるに会いたいたいとも感じている……俺は、こんなにもダメな奴だったんだな。

なのはとみちるの間で勝手に揺れて、勝手に後悔して、勝手に落ち込んで。

どちらとも一緒にいたいなんて……叶わない現実なのに。

「そう……だよね……それでも私は……ねえ……右京さん」

「……なんだ？」

「あなたは……」そこ”にいますか？」

そこ、とはどこを指すのか俺には分からない。

だが、俺は今、この世界にいる。

故に、俺は自信を持って断言しよう。

右手の親指を立てて自分の心臓がある場所を指差し、はっきりと言
つてやる。

「ああ……俺は、”ここ”にいる」

「良かった」

なのはがそう言って振り返る。

栗色のサイドテールがふわりと舞い、月を映す水面に栄える。

振り返ったなのはの顔は……嬉しそうで。

それなのになぜか悲しそうで。

きつと……本当に辛さを隠す時の笑顔とは、こつこつ表情を言うの
だろう。

「私は……諦めないよ」

なのははそう言って隊舎の方へと走っていった。

残っているのは俺とソルのみ。

「マイマスター」

「なんだ？」

「あなたには……元の世界と一緒にいると約束した人がいるのですか？」

「ああ……いる。今も一緒にいたいと思っている……大事な家族がな」

「……………そうですか」

それ以降、ソルは喋らなくなった。

俺は一人、孤独感を感じながら海を見る。

この海が、この空が、瑠璃色に染まるにはまだまだ時間が掛かるだろう。

「…………俺はお前と同じくらい……もしかしたらそれ以上に、一緒にいたい奴が出来てしまった。そんな俺を……お前はどう思うんだろうな」

なあ…………みちる。

今は無性に…………お前の声が聞きたい。

「ありがとうございます……右京さん」

その声は、俺の耳には届かなかった。

くなのはside)

「諦めない……私は絶対に……」

私は右京さんに元の世界に帰らないで欲しい、なんて言えない。

右京さんが帰ることを選んだなら、私が右京さん元の世界の人に負けただけ。

離れたくないなら、右京さんの気持ちを私に向けさせるしかない。

だから……今まで以上に頑張らないと。

「右京さんは”ここ”にいる……いるんだ」

早朝訓練の時に私だけが気付けた右京さんの異変。

その異変に気付いた時、私は怖くなった。

心をグチャグチャにされたような嫌悪感と、体の一部を失ったかのような喪失感を感じた。

きつと、右京さん本人は気付いていない。

そう……気付いていない。

だから気のせいだと思った。

気のせいだと……それでも頭から離れてくれない光景。

「右京さんは”ここ”にいる……」

何度も確かめるように呟く。

あの光景が白昼夢であると願いながら。

きつと気のせいだ。

私の掴んだあなたの右手が。

一瞬透けていたなんて。

きつと……気のせいだ。

問題の答え、迫り来る選択（後書き）

今回のお話はいかがでしたでしょうか？

切ない感じと言いますか、右京やなのはの苦悩が書けてるといいのですが……

いなくなったりしないよね？（前書き）

遅れてしまっでごめんなさい。

今回はとても短いです……orz

内容も薄いかも……

と、自信なく言うことは簡単ですので……

短くても楽しんで頂けるように書いたつもりです。

それでは、本編をどうぞ

いなくなったりしないよね？

それは早朝訓練が始まる時の話だった。

木々が生い茂る森林と化した訓練場にいるのは俺達フォワード陣となのは、ヴィータに加えて今回はフェイトと珍しくシグナムがいる。横に整列した俺達とその前に並ぶ隊長陣四名と、更にもう2人。

「今日は早朝訓練の前に連絡事項があります」

なのはが前に出て、2人の横に並ぶ。

そして、一人の前に左手を出し、ニッコリと笑った。

その一人とは……

「108部隊より、ギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらくの間、機動六課に出向となります」

「108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹です。宜しくお願いします」

「……宜しくお願いします！」「」「」

「宜しくなギンガ」

なのはの説明の後に簡単な自己紹介をして敬礼するギンガ。

そのギンガに俺達は敬礼を返す。

そして視線はギンガの隣にいるメガネを掛けた白衣の女性へと移る。

「もう一人、10年前から隊長達のデバイスを見てきて下さっている、本局技術部の精密技術官の……」

「マリエル・アテンザです。気軽に声をかけてね？」

「……宜しくお願ひします！」「」「」

「宜しくな」

フェイトに紹介を受けた女性はマリエルというらしい。

10年もなのは達のデバイスを見ているということとは、その道ではかなり頼りになるみたいだな。

今度、ソルを見てもらおうか。

ギンガとマリエルの紹介を終えると、当然ながら訓練が始まる。

その訓練中、なのはの提案でスバルとギンガの模擬戦が行われたらしい。

らしい、というのも、俺は遠目からしか見ていないからだ。

俺はヴィータから防御魔法の個人訓練を受けていた為、模擬戦が終わる瞬間しか見ていない。

結果は……なんと、引き分け。

スバルとギンガは互いにウイングロードを使って空を駆け、拳や蹴りをかまし合い、最終的に互いの目前に互いの拳が止まっている、という状態で決着した。

「スバルがこんなに強くなってるなんて……私もうかつかしてられないね」

ギンガはそう言って笑っていた。

その笑顔からは妹の成長を喜ぶ姉としての顔と、もっと強くなろうとする向上心が伺えた。

「はい、みんな集合！」

その後も訓練は続き、今は早朝訓練の締め時間。

なのはの号令と共に、俺達フォワード陣+ギンガなのは達隊長陣の前に集合する。

前回はシュートイベイションだったが、今回は何をやるのだろうか。

「それじゃあせっかくだし、ギンガも入れてチーム戦やろうか。フオワード陣6人対、隊長陣4人のチーム戦！」

「……………えっ？」

なのはの言葉とやる気満々の隊長陣四名を見たギンガは、信じられないというような声を出した。

そんなギンガに俺を除くフオワード陣は、今から始まるチーム戦のコツを説明している。

実はこのチーム戦…………回数こそ少ないが、割とやるのだ。

普段は、ティアナの幻術でなのは達を攪乱しながら少しずつ攻めていき、俺がなのは以外の三人の内の誰かを請け負い、残りの三人は4人掛かりで倒すという戦法を取る。

まあ…………今のところ、八回くらいやって二回しか勝ったことないんだがな。

「ギンガはスバルと同じくデバイス攻撃ね。左ナツクルが蹴り、どちらかが当たれば撃墜判定」

「……………はいつ!!」

なのはの言葉に、ギンガは気合いの入った返事を返す。

さてと…………今回は勝たせてもらおうとするか。

「今回はギンガも入ったし……どう攻めるか……」

「いつもどおりに幻術で翻弄しつつ、各個撃破でしょうか……」

「フェイトとなのはの砲撃が飛んで来そうだから止めておこう。俺がフェイトとタイマンして……」

「ヴィータ副隊長は私とギン姉が止めるよ!」

「だとすれば、シグナムは……」

今は作戦会議中だ。

ギンガも入ったことで作戦も変わり、どのように動くかを話し合う。

と言ってもやることはあまり変わらず、幻術使って俺が止めて……となるだろうがな。

もうすぐチーム戦も始まるし、そろそろ切り上げないといけないな。

「よし、そろそろ行くか……今回は勝つぞ?」

【はいっ……!】

うん、いい返事だ。

今回は勝てるかもな。

悔しいが勝てなかった。

まず、開幕直後にスバルが地面を殴りつけて土煙を巻き起こし、姿を隠す。

その後すぐにティアナがシルエットを作り出して四方八方に動かし、俺達もそれに紛れて散る。

そうしてなのは達の意識を逸らした後に俺がフェイトへと突っ込み、タイムマンを始める。

その俺に他の三人が意識を向けた瞬間にティアナ達がそれぞれの目標目掛けて攻撃し、短時間での決着を目指した。

が、やはりそう簡単にはいかないのが隊長陣だ。

ヴィータに向かってスバルは不意を突くことには成功したが撃墜することは出来ずに返り討ちに合った。

この瞬間にティアナが魔力弾を飛ばし、ヴィータを撃墜することに成功した。

シグナムにはエリオとギンガが向かったが、攻撃する前になのはから砲撃が飛んできてエリオが撃墜、ギンガはシグナムと交戦するも、その力量差からシグナムに敗北。

但し、キャラがアルケミックチェーンを使ってシグナムを捕獲。

その後すぐにティアナとキャラが合流し、なのはに向かったがシルエットごとなのはの砲撃を受けて撃墜された。

この時、俺はフェイトと交戦していたが、一旦距離を置いた瞬間になのはから砲撃が飛んできた。

その砲撃は避けたものの、フェイトから砲撃が飛んできてこれに直撃、撃墜となった。

クソ……もう少しでフェイトを落とせそうだったのにな。

「くっ……あそこで砲撃さえ避けていれば、まだ何とかあったのに……」

「くーやーしーい……」

「フォロー出来なかったね。ごめんね」

「いえー！」

「そんなことは……」

ギンガとエリオとキャラは互いにフォローしあっており、ティアナ

とスバルはかなり悔しそうだ。

かく言う俺も、もう少しでフェイトを落とせそうだったからかなり悔しい……。

「惜しかったな」

「動きや内容は悪くなかったしな……後でその悔しい気持ちや戦闘の内容をレポートに纏めておけよ」

【はい……】

レポートか……面倒臭いというのが正直な気持ちだが、やらないといけないか。

そう考えていると、なのはとフェイトが俺に近づいてきた。

「お疲れ様、右京さん」

「惜しかったね」

「そっちこそお疲れさん。なのはの砲撃さえ来なければ、フェイトを落とせそうだったんだがなあ……」

「まだまだ右京さんには負けないんだから」

苦笑しながらフェイトに言ってやると、フェイトは得意気に笑った。

……いつかタイマンで落とす。絶対落とす。

「パパー！ママー！」

「「ヴィヴィオ？」」

そんなことを考えていると聞き覚えのある声が聞こえた。

声のした方を見ると、ヴィヴィオが俺達に向かって手を伸ばしながら走ってきていた。

「ヴィヴィオー！あんまり走ると転ぶ」「ふみゆ」「ぞ……遅かったか」

俺が注意する前に、ヴィヴィオはすてんと転んでしまった。

しかし、訓練場は今では森林に設定されている為、地面は柔らかく、ヴィヴィオも綺麗に転んだ。

恐らく、怪我はしていないだろう……という俺の考えと同じ説明をなのはが慌てたフェイトにしていた。

「……ふ……ええ……」

「大丈夫だよな？ヴィヴィオ……ほら、自分で立ってみよう？」

転んだヴィヴィオは顔を上げ、泣きそうな顔で俺達を見る。

なのははそんなヴィヴィオの元には行かずにその場でしゃがみ、ヴィヴィオに立つように促す。

「ママ……」

「うん、ママはここにいますよ」

「いるよじゃねえだろ」

「あいたっ」

あくまでもヴィヴィオ自身に立たせようとするなのは頭を軽く小突き、なのは手を引く。

そしてヴィヴィオの前まで行き、俺はヴィヴィオに向かって手を差し出す。

「パパ…？」

「手を握れば引いてやるさ。手を伸ばすのはヴィヴィオ……お前だ」

俺の手と顔を交互に見るヴィヴィオ。

やがてヴィヴィオはゆっくりと手を伸ばし……俺の手を握った。

俺はそれをゆっくりと引いてやる……すると、ヴィヴィオはゆっくりと立ち上がった。

「怪我は……ないみたいだね」

「よく立てました……偉いぞヴィヴィオ」

「あ……えへへ」

なのはが怪我の有無を確認し、俺がヴィヴィオの頭を撫でる。

ヴィヴィオは嬉しそうにニッコリと笑い、ギュッと俺の手を握る力を強くした。

……なんか、ゆきのを思い出すな。

あいつともこんな感じで手を握って歩いたっけな。

そう考えた時、俺の心にまた、孤独感が入り込んだ。

「パパ」

「なんだ？ヴィヴィオ」

「パパ……いなくなったりしないよね？」

その場の空気が静まり返った。

誰も一言も発さないのは、ヴィヴィオの言ったことがあまりにも突然だったからだろう。

だが……なぜだ？

なぜなのはそんなに驚愕の表情を浮かべている？

なぜ……俺は何も言い返せない？

「……………」

「パパ？」

「……ああ、俺は……どこにもいかないさ」

「本当？」

「パパは嘘つかないぜ」

そう言つてヴィヴィオの頭を撫でてやると、ヴィヴィオはニッコリと笑みを浮かべた。

俺は……嘘をついたのかもしれない。

俺は次元漂流者……俺には帰るべき世界と、待っている仲間達と、一緒にいると言つた家族がいる。

いつかは離れる運命なんだと……俺は改めて自覚する。

それでも……今は。

「さてと……朝飯……食いに行くか。なのはとヴィヴィオと俺でな」

「わーい」

「う、うん」

この大事な我が子と、共にいたいと想った相手と。

「では、私達も食事にするのでしょうか」

「だな」

「うん」

【はいっ！！】

このかけがえのない仲間達と過ごす日々を。

この幸せの日々を………過ごしてもいいだろうか？

いなくなったりしないよね？（後書き）

消化話……というのでしょうか？

今回のタイトルは読んでくださっていると分かる通り、ヴィヴィオのセリフです。

次回からは原作通りに進んだり進まなかったりして、更新速度が遅くなると思います。

ご容赦下さい m (_) m

それぞれの心（前書き）

遅れてしまい、本当に申し訳ありません（スライディング土下座

今回は短編形式の内容になっております。

右京「それじゃ……それぞれの心、どうぞ」

それぞれの心

くティアナの心く

最近、右京さんとなのはさんの様子がおかしい。

おかしいと言っても、食事を三食必ず右京さんと食べるようになった程度だ。

この六課内には知らない人はおらず、本人も認めるほどの右京さん好きなのはさんにしてみれば、当たり前にも思える。

しかし、私にはそう思えなかった。

私には、なのはさんが何か、焦っているように思えるのだ。

ただ、その”何か”が私には分からない。

右京さんの方は……これは、私の勝手な思い込みかもしれない。

それでも感じたことを言うと……最近の右京さんはよく、寂しそうな、苦しそうな顔をする。

何か悩みがあるのだろうかと考えたけれど、よくよく考えてみれば、右京さんは次元漂流者。

元いた世界に残した恋人や家族がいるのかも知れないし……ホームシックのようなものになっているのかも知れない。

だから、本当の理由を知る為にさりげなく聞いてみることにした。

私は休憩所にある自動販売機で缶コーヒーを2つ買い、一つを一緒に来ていた右京さんに渡す。

「どうぞ、右京さん」

「ありがとよ。……別に缶コーヒー代くらい出すぜ?」

「缶コーヒー代くらい奢りますよ」

「そうかい」

右京さんは苦笑を浮かべ、缶コーヒーを開けて口へと運ぶ。

その姿を確認して、私はさりげなく聞いてみた。

「右京さん最近、表情が暗いですよ?……何か悩み事でもありますか?」

「って何でドストレートに聞いてるのよ私はああああ!!」

「大事なことだからさりげなくって二回考えたのにいいいい!!」

「……悩みねえ……」

缶コーヒーを飲みながら、右京さんはそう呟いて考える仕草をする。

そして、次に紡がれた言葉は……

「あるにはあるが……なに、ティアナに話すほどでもないさ。悪いな、心配させて」

だった。

それを聞いた時、私の胸がズキリと痛んだ。

それでも、私はそんなことは面に出すことはしない。

「……そうですか……悩み事……早く解決するといいいですね」

「ありがとよ……缶コーヒーご馳走さん。今度、何か奢らせてもらうな」

「楽しみにしてますね」

右京さんは飲み干した缶コーヒーをゴミ箱へと捨て、笑って手を振りながら去って行ってしまった。

私は右京さんの背中が見えなくなるまでその姿を見つめて……見えなくなってから壁に背中からもたれかかった。

「私に話すほどでもない……か……」

それは頼るとか頼らないとか、そういうことではなく、”私に話すべき内容ではない”ということだろう。

私ではその悩みを解決することは出来ない……そういうこと。

「でも……結構キツイわね……」

キツイ……辛い。

話してくれなかったことがキツイ。

私では力になれないことが辛い。

私では、右京さんの悩みを聞くことすら出来ない。

「……右京さん……」

あなたの力になれないことがこんなにも辛い。

私に話してくれない事実が胸が痛い。

そんな痛みを耐えながら、買った缶コーヒーを開けて口へと運ぶ。

「苦……」

口の中に広がる苦味と……コーヒーとは違う僅かなしょっぱさを舌に感じる。

甘さなんて欠片もない……そんな味。

「……こんなに辛くて苦しいなら……」

あなたを好きにならなければよかった。

くスバルの心く

今、目の前で右京兄いとギン姉がとある特訓をしている。

その特訓というのが……

「これが!?!」

「私達の!?!」

「『殺劇舞皇拳!?!』」

右京兄いとギン姉が横に並んで仮想敵であるガジェットに背を向け、両腕を組んで稟つと決める。

すると、仮想敵のガジェットが盛大に爆発し、二人の周りを赤く染

めた。

というわけで、二人がしている特訓とは、私と右京兄いの協力技である”殺劇舞皇拳”の特訓。

私と似た戦闘スタイルを持つギン姉なら出来るのではないかと、いう考えから始まったこの特訓。

……と言っても三回目で出来てしまったけど。

「これ気持ちいいですね」

「だろ？」

楽しそうに話す二人……私もいるのに。

ちょっとだけムスツとして、二人の間に強引に割り込む。

「きゃっ……ちょっと、スバル」

「おっと……どうしたよ？」

「二人だけ楽しそうでズルイー。私も入ーれーてー」

我ながら子供っぽいかなーと思った。

だけど右京兄いもギン姉も苦笑しながら右手と左手を繋いでくれた。

「……あれ？」

「どろした？」

「…ううん、何でもないよ」

右京兄いと繋いだ左手が感じた違和感。

そんなちよつとした違和感は気のせいだと思って首を横に振っておく。

「ところでギン姉……さっきの魔法……」

「ふふっ、びっくりした？」

「びっくりした」

「俺もびっくりしたよ……まさか、ディバインフィストを使うとはな」

殺劇舞皇拳はまずは一方が攻撃し、相手を吹き飛ばしてもう一方が攻撃、また吹き飛ばして最初の一方が攻撃し、二人で相手を挟んで前後から攻撃し、同時に右ハイキック、左ハイキック、左拳で相手突き上げ、最後に右手で砲撃を放つというもの。

因みに、ギン姉の場合は右手と左手の順番が逆になっていた。

私を知る限り、ギン姉が砲撃魔法を使ったことはない……ハズ。

それでもギン姉は最後、ちゃんと右京兄いと一緒に砲撃を放っていた。

しかも右京兄いと言った通り、ディバインフィストを。

「タッグマッチの時に見てからこっそり練習してたの」

「やるじゃねえか」

「うん！凄いやギン姉！」

本当に凄いと思う。

まさか見ただけの右京兄いの砲撃魔法を使えるようになってるなんて。

「これなら、殺劇舞皇拳もお前達二人でも出来るかもな」

「私達二人？」

「右京さんと三人じゃ出来ないんですか？」

「出来なくはないが……今はお前達二人で練習した方が現実的だな。俺といつもいる訳じゃないし、二人だけになる時だってある……ケースバイケースって奴だ」

言われてみれば……と思うけど、そうだと私だけとか右京兄いだけって時もあるような……。

あ、二人じゃないと出来ないからか。

それに、確かに右京兄いだっていつでもいる訳じゃ……。

「っ!？」

「ん?どうした?スバル」

「な、何でもないよ。ね、ね、アイスあるからみんなで食べない？」

「あ、いいわね」

「そうだな……行くか」

「うん!」

私は二人の手を引いて隊舎に向かって走る。

後ろで二人が何か怒鳴ってる気がするけど、そんなことは気にしない。

この心を感じた恐怖と左手に感じた違和感から逃れるかのようだが、私は走るのだった。

……着いたら怒られたけどね。

考えてしまったんだ、あなたがいない未来を。

感じてしまったんだ、私の握ったあなたの右手に一瞬……。

握られた感触も……握った感触もなかったことを。

くキャロの心く

お兄ちゃんの腕の中で眠った翌日、私は幸せな気持ちで目が覚めた。

しかし、その気持ちも一瞬で消え失せた。

「お兄ちゃん……？」

隣で眠っていたハズのお兄ちゃんがそこにいない。

いつもなら、いた証としてベッドに温もりがあるのにそれもない。

途端に私の心に喪失感が溢れる。

「お兄ちゃん……どこ……？」

部屋の中をキョロキョロと見回す。

下のベッドも見てみるけれど、エリオ君が寝ているだけで、お兄ちゃんの姿はない。

……嫌だ。

お兄ちゃんの温もりや姿がないだけで、こんなにも不安になる。最近ではその不安が本当に強くなっているのが自分でも分かる。

「無くしたくない……」

不安で怖くて泣きそうになる。

同時に、以前のヴィヴィオの言葉が頭に過ぎる。

(いなくなったりしないよね?)

「いなくなったりしない……」

ずっと共にありたいと願う。

強く強く、心の不安を拭うように。

けれども……涙が溢れてきた。

「おい、そろそろ起き……つと……?」

そんな時、扉が開き、探していた姿が見えた。

その姿を見た次の瞬間には、私はその姿に抱きついていった。

その姿とは……お兄ちゃんのこと。

「キャロ…？どうしたんだ？涙なんか流して」

「ど…ここに行つてたんですか…？いなくて…びっくりしたんですから…」

「ど…いつもより早く起きたからちよつと自主トレをな。悪かったよ、びっくりさせて…ごめんなキャロ」

ぼすつと、温かな温もりが頭の上に乗る、何度も頭を撫でる。

それだけでこんなにも心が満たされて、幸せな気持ちになる。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「…何でもないです」

「そうかい」

ゆっくりと優しく頭を撫でられる。

ずっと撫でられていたい…でも、もうすぐ訓練の時間。

お兄ちゃんは撫でることを止めて、エリオ君を起こし、着替えてから三人で訓練に向かう。

私とエリオ君の少し前を歩く姿を見て、私はお兄ちゃんの服の裾を握る。

「ん？どうしたんだ？キヤロ」

私の方を振り返って不思議そうな顔をするお兄ちゃん。

こんなにも近くにいる……それなのに感じるこの不安。

「えへへ……このまま訓練に行きませんか？」

「あ、僕もいいですか？」

「歩きづらいな……手じゃダメか？」

「手がいいです」

私とエリオ君の手が握られ、三人で集合場所に向かって歩く。

集合場所についたら、ティアナさんもスバルさんもなのはさんもヴ
イータ副隊長もいて……時々だけど、フェイトさんもいて。

一緒に訓練して、ご飯を食べて、眠って、たまに任務を頑張って。

そんな毎日が……ずっと続いたらいいな。

くはやての心

今朝の会議中、私はフラついて倒れてしまった。

倒れた、と言ってもペタンとへたり込んでしまったただけなのだけど、それでも隊員達から休むように言われた為、改めて自分の役職の重さや責任を感じる。

今はシャマルのいる医務室で身体検査を受けているところだ。

「……風邪や病気ではないみたい。疲労が溜まっているのね」

シャマルが私の体に当てていた聴診器を耳から外して首に下げ、安心した表情を浮かべる。

疲労……ここしばらくは十分な睡眠も取れていないのは確かだけど、そこまで疲労が溜まっていたのはちょっと予想外だった。

「念の為、今日1日はここで休んでいて下さい」

「別に寝るんやったら、私の部屋でも……」

「仕事しないと断言出来るならどうぞ」

シャマルの言葉に私は苦笑を浮かべるしかなかった。

シャマルの指したベッドに横になり、目を瞑る。

その瞬間、医務室の扉が勢い良く開かれた。

「主^{はやく}！倒れたと聞きましたが（って聞いたけど）無事ですか（

か)！？」「

入ってきたのはシグナムとヴィータだった。

その慌てた様子に心配させたなあと悪く思いながらも、心配してくれた2人に感謝する。

「大袈裟やなあ、ちょっと気い抜けただけや。でも、今日1日は寝かせてな？」

「無事でしたらいいのですが……分かりました。ゆっくりとお休み下さい」

「後でお見舞いに来るからな」

「ん、ありがとうな」

2人が医務室から出て行く姿を見届けてからベッドの周りのカーテンを閉め、横になる。

すると、疲労感と眠気が襲ってきた。

「思ってたよりも疲れとるんかな……」

そんな咳きを最後に、私は眠りに落ちた。

夢を……悲しい夢を見ていた。

小さかった時……まだ車椅子で生活している時の夢。

騎士達がいて、私がいる生活が壊れる。

私の体を抱く”あの子”が流す涙。

私の元から去っていく大切な家族達。

少しずつ……少しずつ消えていく……私の失った大切な家族。

(主……)

リインフォース。

(これは、あなたが見ている夢です)

それでも、リインフォースが消える姿は見たくない。

(夢はもうすぐ覚めます)

例え夢でも、この悲しみは本当だ。

(私は……)

リインフォース……

(あなたが主で、あなたの魔導書で良かった)

それは、祝福の風と名付けた、私の家族からの言葉。

その家族も……消えていく。

(嫌や……)

また独りになってしまふ。

(嫌や！)

十年前のクリスマスに感じたあの絶望が蘇る。

(消えんといてえ!!)

必死に……必死に手を伸ばす。

けれども、その手は誰の手も掴むことはない。

(嫌やあ!!)

それでも……必死に手を伸ばした。

誰の手も掴めず、誰にも手を掴まれない。

やがて……私が諦めて手を下ろそうとした。

その手を……誰かが取ってくれた。

(誰……?)

力強く、大きなその手。

この手から伝わる安心感は……。

ハッと目が覚める。

「夢……」

悪夢と呼べる嫌な夢だった……冷や汗をかいているのが自分でも分かる。

不意に、私の左手が誰かに握られているのを感じ、顔をそちらに向けて。

そこには、椅子に座りながらリインを肩に乗せて一緒に寝ている右京さんの姿があった。

右京さんの右手は、私の左手をしっかりと握っている。

「……夢の中で私の手を取ってくれた人は右京さんやったんか……」
外を見ればもう夕方……随分と眠っていたようだ。

右京さんは訓練着を着ているから、もしかしたら訓練が終わつてすぐに来てくれたのかもしれない。

でも寝てるということは……訓練が早く終わったということだろうか。

「……………」

あの夢は、きつと私の不安。

今あるこの幸せな時間が失われるかもしれないという不安。

誰の手も握れず、誰からも手を引かれないという不安。

その不安は昔も今もあった。

(それでも……不安な時はいつも誰かが手を引いてくれた)

前はなのはちゃんとフェイトちゃん……沢山の人が手を差し伸べてくれた。

今回は右京さんが……兄ちゃんが悪夢から助け出してくれた。

「……………」ありがとうな……………」兄ちゃん

眠っているからか、兄ちゃんから返事はない。

それでも私には……どういたしましてと言っている気がした。

さてと……………」もう一眠りしよう。

この安心感の中で眠るなら、きっと悲しい夢は見ないから。

「フエイトの心」

今、食堂で昼食をエリオ、キャロと三人で取っている。

三人で楽しく食事をしながらも、私の視線は一つのテーブルに向けられている。

そのテーブルにいるのは、右京さんとなのは、ヴィヴィオの三人。

その三人の食べている様子は、まさに家族の団だん樂らく。

微笑ましいと思う反面、なのはが羨ましいとも感じてしまう。

もし……もし、右京さんが私達と一緒に食べていたら……私と右京さんが一緒にいたら。

家族（そんな風に）に……見えるのだろうか。

「フエイトさん？」

「……………」

「フェイトさん！」

「ふえ！？あ……なに？エリオ」

「フェイトさん、少し悲しそうでした」

悲しそう……エリオにそう言われてしまった。

でも……悲しいと言われればそうなのかもしれない。

私は、右京さんを少しだけ疎ましく思っていた。

私よりもエリオとキャラコと長くいられて、なのはとも一緒にいて。

そんな右京さんを疎ましく思っていた……そんな感情に気付いた時には、酷く自己嫌悪したものだ。

けれども、今はなのはに嫉妬している自分がある。

右京さんとなのはが一緒にいると、胸が少し苦しいんだ。

右京さんがなのはに向けて笑顔を見せると、私にもその笑顔に向けて欲しいと思うんだ。

いつも右京さんの隣でご飯を食べるのはが羨ましいんだ。

(だけど……)

今、右京さんは笑っている。

私ではなく、なのはの隣で。

私に見せる笑顔よりも幸せそうな笑顔で。

きつと、右京さんは気付いていない……私よりも、エリオよりも、キャロよりも、他の誰よりも。

なのはと……ヴィヴィオと一緒にいる時が、一番幸せそうで、楽しそうな笑顔カオをしているんだ。

「……悲しくなんかないよエリオ」

悲しいよ。

「キャロとエリオといられて、私は幸せなんだから」

あなたと一緒にいられないことが。

それでも……

「だから……悲しくなんかないよ」

なのはとあなたが幸せになるように思うことを……貴方を想うことを。

貴方となのはと……共に笑うことを。

願っても……いいですか？

それは……とても大切に。

だけど……とても切なくて。

叶わない……私の初恋。

それぞれの心（後書き）

という訳で、自分の作品のキャラ達の心の内でした。

いかがでしたでしょうか？

次回辺りにもうワンクッション置いて、原作の負け戦に入り……た
いなあ

機動六課遊び大全！？（前書き）

今回は、リリカルなのははあんまり関係ないかもです。

右京「突然だが、みんなにアンケートだ」

仮に続編を書くとした場合、何を希望しますか？

vividなら、このまま同一作品として続けるかもしれません。

forceなら、別作品扱いでしょうか……作者の頭では、右京が
トーマ君の立ち位置に成り代わってます

まあ、まだまだ先の話ですけどね。

右京「そんじゃ、軌道六課遊び大全！？……スタートだ」

機動六課遊び大全！？

これは、機動六課の中で行われたゲーム大会の話である。

「ゲーム大会？」

「そうや。今日は私ら隊長陣三名とフォワード五名とギンガはお休みで、あの子……ヴィヴィオと目一杯遊ぼう思てな」

早朝、はやてからメールが送られてきた俺達フォワード陣となのは、フェイトは会議室に集まっていた。

中にははやてとリインがいて、ゲーム大会をする、といきなり言われたのだ。

「はやて部隊長、仕事は休みって……聞いてないよ？」

「それに、私達まで休みって……」

「理由を言え理由を。いきなり今日は休みだからゲーム大会をしようって言われて納得出来るわけないだろ」

なのは、ティアナ、俺という順番で不満……というか疑問を述べる。

すると、はやてはどこか遠くを見つめ（視線の先には壁があるが）……ふっと小さく笑った。

「……他の隊員達がな……昨日から私らが働き過ぎや言うて……今日1日休まないなら仕事をポイコットするっていう内容のメールが来たんや……隊員全員分」

【うわぁ……】

思い切ったことをしたな隊員共……その中にはヴァイスやシャリオも含まれているんだろうな。

しかし、そんなことを認めて通してしまっただけでは部隊長としてもダメだろうし、組織としても成り立たないだろうに。

「で、通したのか？」

「あはは、流石に1日全部はあかんよ。せやから、朝は普通に訓練に仕事。午後から夕方までヴィヴィオとゲーム大会って感じやね」

以前にも午後からは休みってことはあったし、それならまだ納得出来る。

しかし、なぜ”ゲーム”大会なのだろうか。

ヴィヴィオと遊ぶなら、別に外で遊んでもいいと思うんだが。

「ところで、フォワードの皆はゲームは好き？」

「私達ですか？私はまあ……よくスバルとゲームセンターには行っ

てましたし、ガンシューティングは好きですが」

「私も好きですよ！テレビゲームもしますが、最近はエリオとキヤロともカードゲームもします！」

「遊 王カードですね」

「戦略を練る力や状況を判断する力を強くする訓練のつもりでしたが、いつの間にかハマっちゃったんですね」

あゝ、そう言えばキヤロとエリオはよくカードを弄ってたな。

遊戯 カードって言ったか……実は俺もキヤロとエリオに誘われてやってたりする。

「ギンガはどうなんだ？」

「私は、あんまりゲームはしないですね……スバルとパーティーゲームをするくらいです」

「ふむ、皆ゲームはするんやな」

「私達も子供の頃やってたね」

「なのはとアリサが全く手加減してくれなかったよな……」

俺はゲームはしないんだが……以前ヴィヴィオとやったが、テレビゲームの類は一つも勝てなかった。

特に格闘ゲームはダメだったな……マジでどっから飛んでくるんだ、

あの虫共は。

というかなのは達もゲームするの……子供の時くらいする……のか？

「まあゲーム大会言うてもテレビゲームばかりする訳やないし、目的はあくまでも皆でヴィヴィオと遊ぶことやから」

「まあ……いいか。ところで、シグナムとヴィータは休みじゃないのか？ていうか、どこに行ったんだ？」

「2人は隊員達を叱りに……な。」その思いは嬉しいけど、やり方はいただけない”って。それに、2人は昼から外されへん仕事があるから」

シグナムとヴィータの気持ちはよく分かる……確かに休ませたい、休んで欲しいという気持ちはありがたい。

が、ボイコットするなんて脅迫を手段にするのはダメだ。

2人が叱りに行ったと聞かなかつたら、俺が説教しに行くところだ。

「でもまあオーバーワークはこないだ倒れて自覚してるし……丁度いいから同じくオーバーワーク気味のスターズ、ライトニング両隊長と訓練漬けのフォワード陣にも休んでもらうよ。ええな？」

【了解！】

まあイマイチ納得出来てはいないが……ヴィヴィオとの時間が作れるからいいか。

……テレビゲームは苦手なんだがな。

朝の訓練と昼食を終えた俺達はなのはとフェイトの部屋にいた。

そこで早速、ゲーム大会と称されたヴィヴィオを含めて遊び始めたワケなんだが……。

「パパー頑張れー」

「キャロー頑張ってー」

ヴィヴィオは俺に、フェイトはキャロに声援を送る。

俺とキャロは一体何をしているのか……それは……。

「私のターン！私は未来融合ーフューチャーフュージョナーを発動します！対象にFGDを選択し、デッキから伝説の白石三枚とメテオ・ドラゴン、紅眼の黒龍を墓地に送ります。更に、墓地に送られた伝説の白石の効果により、デッキから青眼の白竜を三枚手札に加えます！」

キャロの言葉で分かる奴もいるだろう……俺達がやっているのは戯王カードだ。

因みに、参加者はフォワード陣五名とギンガであり、このデュエルが決勝戦となっている。

ヴィヴィオと遊ぶのが目的なのに、ヴィヴィオを入れないのはどうなんだ？

そう考えていたが、ヴィヴィオは俺がデュエルする姿を見るだけで楽しいらしく、終始笑顔だ。

尚、ホログラムを使っている訳ではない為、普通にテーブルデュエルだ。

尚、LPはソルの強い希望で4000となっている。

「なぜ……なぜソリッドビジョンではないのです！！デュエルと言えばソリッドビジョン！！闇のデュエルでしょう！！」

「ソルお姉さん、静かにしなきゃダメ！」

「HANA SEE！！」

因みに、ソルはヴィヴィオに預かってもらっている。

「手札から融合を発動します！手札の青眼の白竜三枚を融合し、青眼の究極竜を融合召喚！更に、手札から竜の鏡を発動し、伝説の白石三枚とメテオ・ドラゴンと紅眼の黒竜を除外してFGDを融合召喚扱いで特殊召喚します！！更に、青眼の究極竜をリリースして、青眼の光竜を特殊召喚！！そして800LPを払って再融合を発動し、墓地の青眼の究極竜を特殊召喚してこのカードを装備します！カードを一枚伏せ、私のターンは終了します」

やっと終わったか……キャロの場にはFGDと青眼の光竜と究極竜。墓地には青眼の白竜が三枚の為、光竜の攻撃力は3900……伏せは一枚。

俺のデッキにはモンスター除去のカードはないんだがな……。

手札こそなくなったが、伏せは一枚……さて、どうしたもんかね。

「パパー負けないで!!」

「あいよ!!」

まあ、ヴィヴィオに応援して貰ったからには、頑張りますかね。

それに、全く手が無い訳でもないんだ。

「俺のターン!!俺も未来融合を発動!対象はE・HEROエリクシラーだ。よって、クレイマン、バブルマン、バーストレディ、フェザーマンを墓地に送る。俺は手札の沼地の魔神王を墓地に送り、デッキから融合を手札に加える。手札から融合を発動!!俺は手札のスパークマンと沼地の魔神王を融合し、E・HEROアブソルトZeroを融合召喚!!更に、融合解除を発動!アブソルトをエクストラデッキに戻し、墓地の沼地の魔神王とスパークマンを場に特殊召喚。更にアブソルトの効果により、キャロのモンスターを全て破壊させてもらう!!」

「そんな!?!」

アブソルートの効果は、”このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する”。

それは当然、エクストラデッキに戻った時も発動する。

キャロのフィールドには伏せカードが一枚のみ……除去カードならマズいが、今はたたみかける。

「残り一枚の手札は融合！！俺はスパークマンと沼地の魔神王をもう一度融合する！！現れる……シャイニング・フレア・ウイングマン！！」

現れたのは、シャイニングの名に相応しい輝きを放つ一体のヒーロー。

ま、テーブルデュエルだから別に、モンスターが立体的になっている訳ではないんだが………つついっ叫んでしまうな。

「シャイニング・フレア・ウイングマンは墓地のE・HERO一枚につき300ポイント、攻撃力が上がる。墓地のヒーローは五枚………よって1500ポイントアップだ」

この効果により、ウイングマンの攻撃力は4000………充分キャロのLPを削りきれぬ。

伏せカードが気にはなるが、俺に手札はない………ここは攻める。

「バトルだ！！行け！シャイニング・フレア・ウイングマン！！」

「この瞬間、畏カードを発動します！！リビングデッドの呼び声！

「私は墓地の青眼の究極竜を特殊召喚します」

「チツ……攻撃は中断して、ターンエンド」

攻められなかったか……予想通りと言えば予想通りなんだがな。

こちらのLPは4000……除去カードを引かれたらマズいな。

「私のターン！！……すみません、地割れを発動します……」

「あー……俺の負けだな」

「パパ負けちゃった……」

まさか、本当に除去カードを引くとは……ま、楽しかったからいいか。

ヴィヴィオは悲しそうな顔をしていたが……頭を撫でるとすぐに笑顔になった。

さて、次はヴィヴィオも一緒に遊べることにしないとな。

「これが私の全力全開！！」

「ちよっ！なのはさん容赦なさすぎー！！」

「ティアがやられてる間になのはさんを……」

「てやつ」

「……あつ!?」「」

上からなのは、ティアナ、スバル、ヴィヴィオ。

今やっているのは、大乱闘?とかいうゲームだ。

なのはが赤いパワードスーツを着たキャラ、ティアナは二足歩行の狐、スバルは炎を纏った拳を繰り出す男性で、ヴィヴィオはピンク色の丸い生物。

状況を説明すると……なのはがティアナをボコボコにし、スバルがその間になのはに攻撃しようとして近付いた瞬間に、ヴィヴィオが足のついた爆弾を投げつけ、三人一度に吹っ飛ばした。

「ま、まだ負けてないよ!」

「何この親子……なんでこんなにゲームが強いだよ」

「ティ、ティア……まだ負けてないよ!」

「どーん!」

「……あーっ!」「」

ああ、また爆弾を食らったか。

因みに、この大乱闘はストック制というルールであり……なのは達三人は最後の一機だ。

ヴィヴィオはまだ五機も残っている。

その後も大乱闘は続いたんだが……状況は覆らず、ヴィヴィオの勝利となった。

因みに、この4人以外のメンバーも大乱闘をしたのだが……全員ヴィヴィオかなのはにボコボコにされた。

本当に容赦なさすぎだろあの親子。

因みに、俺が使っていたキャラは、軍服を着た、バンダナの渋い男性キャラだ。

「ヴィヴィオ、運転変わってくれ」

「はい」

次に始めたのは、リオカートブルッシュというレースゲームだ。

キャラは、俺が緑色の恐竜(?)であり、ヴィヴィオはキノコみた

いな帽子を被った女の子(?)だ。

そして、対戦相手のチームが……

「八神部隊長!!!八位ですよ!!!」

「大丈夫や。雷や青パタ甲羅、スターがくれば……」

ギンガ、はやてのコンビだ。

ギンガはピンクのお姫様のようなキャラを、はやては白い幽霊のようなキャラを使っている。

「よしきた雷!!!」

「あっ!?!」

「ちっさくなつた……嫌なもん思い出した……」

はやてが使った雷ははやて達以外に落ち、キャラを小さくしてカーブの速度を遅くする。

その間にギンガはCPUを抜いていき、一気に四位まで浮上した。

因みに、俺達は現在一位だ……ヴィヴィオ上手すぎるだろ。

「よし、戻ったな。このまま突っ走れ!!!」

「うん!!!」

「させへんで！必殺の赤甲羅！！」

はやて達の周りに3つの赤い甲羅が現れる。

その内一つを飛ばして三位のCPUを攻撃し、そのまま抜き去って三位に浮上し、もう一つ甲羅を飛ばして同じように二位に浮上する。

「ふふふ……ゴールまでもう少し、充分射程圏や。赤甲羅発射や！
！ギンガ、頼むで！」

「任せて下さい！！！」

はやて達から最後の赤甲羅が発射される。

これが当たれば、はやて達に逆転を許すことになるだろう。

「ヴィヴィオ、チェンジだ」

「うん！」

ヴィヴィオと前後を入れ替え、ヴィヴィオは取っていたアイテムを使った。

そのアイテムとは……

「ば……」

「バナナ……やと……」

それは、一つのバナナの皮。

バナナの皮は見事に俺達の身代わりとして赤甲羅を受け、砕け散った。

俺達はその犠牲を無駄にはせず、そのまま一位でゴールしたのだった。

その後もゲーム大会は続いた。

格闘ゲームにパーティゲーム、人生ゲームにトランプに、果てにはカルタをした。

その途中で力尽きたのか、ヴィヴィオ、エリオ、キャロの三人はいつの間にか眠ってしまっていた。

「そろそろお開きやね」

「そうだね……ヴィヴィオも寝ちゃったし」

「まだご飯を食べてないんだから、後で起こさない」と

時刻は17:28……晩飯には早いし、起すのはもう少し後でも構わないだろう。

にしても……楽しかったな。

「さて、俺達は片付けをしようか」

「そうですね」

「楽しかったねー」

「ふふ……本当にね」

俺、ティアナ、スバル、ギンガが遊んだ道具を片付けていく。

なのはとフェイトはそれぞれヴィヴィオ、キャロとエリオの頭を膝に乗せていた。

「はは……」

思わず笑みがこぼれる。

この慌ただしくも楽しく、楽しくも幸せな日々。

今日は本当に楽しかったな。

「なのは」

「?なあに?右京さん」

「……何でもないさ」

「気になるよ」

なのはがムスツとした表情をする。

俺はそれを見て小さく笑い、なのはの口に右手の人差し指を当てながらこう言った。

「幸せだなんて……思ったんだよ」

なのはの顔が赤くなったのは、想像に難くないだろう。

↳ No side ↳

ここはどことも知れないラボの広い一室。

その一室の中存在する12の人影。

それは、ジェイル・スカリエッツィと…… 11体のナンバーズだった。

スカリエッツィは自分の前に並ぶ11体のナンバーズを見て、小さく笑みを浮かべた。

「もうすぐだ……もうすぐ、私達は自由を手に入れられる」

それは、無限の欲望と呼ばれた存在が今、最も欲するもの。

「先行組は明日から潜入準備の開始だ。ドゥーエは別行動だが、姉妹11人協力して事態に当たってほしい」

スカリエッツィの言葉に、11人はゆっくりと頷く。

それを見たスカリエッツィも満足そうに頷いた。

「例の特殊部隊襲撃と”聖王の器”……いや、ヴィヴィオの確保。地上本部の制圧、そして……喜喜 右京の引き入れ……君たちなら、きっとできる」

スカリエッツィは信頼を持って断言した。

ナンバーズも、その信頼に応えるかのように頷いた。

そして、スカリエッツィは部屋の中にあるスクリーンに写された時空管理局の本部を見ながら両手を広げ、静かに、だが力強く言うのだった。

「始めよう……私達の自由への序曲を」

機動六課遊び大全！？（後書き）

ギャグを……ギャグを入れたいんです。

シリアスも笑いも恋愛もアリな作品にしたいです。

笑い……あるのだろうか。

始まる序曲（前書き）

ようやく更新出来ました……今回は学校からお届けします。

右京「遅れてしまつてすまないな」

なるべく原作沿いにしながらもテンプレ化はしたくなく、オリジナルも交え……られているといいですね

右京「それでは、始まる序曲……スタートだ」

始まる序曲

（ドゥーエ side）

私の足下に広がる液体と部屋の中に充満する異臭に顔をしかめる。

不意に、異臭の原因である床にある3つの脳髓が私の視界に入った。

「本当に……汚らわしいですね」

このようなモノに踊らされていた時空管理局も、このようなモノが時空管理局最高評議会である事実も……どちらも汚らわしい。

このようなモノにドクターは……私達は自由を奪われ、ドクターは望まぬ人体実験を余儀無くされた。

沸々と再び怒りがこみ上げてきて、この脳髓共をグチャグチャにしたい衝動に駆られる。

「……止めておきましょう。こんなゴミに触れたら、私の方が汚れてしまいますわ」

右肩にかかった金髪をかきあげ、臭いが付かない内にこの部屋から出ようと歩き出す。

予定ではもう少し後に始末する予定だったけれど……私達の目的は変わったのだから仕方ない。

私達の目的は……。

「さてと……私も妹達の元へ行きましようか……？」

不意に、管理局の中を確認する映像の中に、気になる人物を見つけた。

それは、妹達をどこか見下していたクアットロが一見ただけで良い方に変わった原因の人物。

「ちょうどいいわね」

作戦までもう少し時間がかかる。

それまでの間、暇潰しがてら彼を見ておくのもいいかもしれない。

妹達がこぞって仲間になりたい、お兄さんみたいと慕う敵側の男性を。

「喜喜 右京……ちょっと観察させてもらっわよ。IS……ライアインコーポレントスケル
「ズマスク発動」

くドゥーEs side outく

『パー』

「なんだ？ ヴィヴィオ」

『いつ帰ってくる?』

「そうだな……夜には帰るさ。だから、いい子で待ってるよ?」

『うん!!待ってるね』

ヴィヴィオの笑顔を最後に通信が切れる。

俺が今いるのは……時空管理局の地上本部とかいう場所だ。

昨日の夜から現時刻の17:00まで、俺とギンガの2人はずっとここにいた。

そして、先ほどティアナ達フォワード陣となのは達隊長陣と一度合流し、はやての命令でこの地上本部の周りを見回ることになった。

なんでも、この地上本部で公開陳述意見会なるものが開催される為、テロリストやスカリエツティ達の襲撃を警戒してのことだそうだ。

で、ヴィヴィオとは昨日の夜から会っていない為か、ヴィヴィオが寂しがって通信をしてきたということだ。

なのはが出る時も不安そうな顔をしていたというし、ヴィヴィオにとっては俺も、なのはも、ソルすらいない初めての夜……心細い思いをさせてしまったな。

「こんな任務はさっさと終わらせて……ヴィヴィオとなのはと三人で飯でも食いたいな」

「私もご一緒していいですか？」

声をかけてきたのは……一緒に見回りをしていたギンガ。

ギンガも俺と同じだけこの場所で見回りをしていた為、ロクに寝ていないハズなんだが……なんでこんなに元気なんだか。

「別に構わないさ。それにしても……ギンガは疲れていないのか？」

「体力には自信がありますからね」

むんっ、と右腕を曲げて元気をアピールするギンガ。

姉妹共々体力に自信があつて何よりだ。

「だが体力と眠気は別物だろうに。ほれ」

ギンガに先ほど買っておいた缶コーヒーを投げ渡す。

ギンガは缶コーヒーを受け取ったはいいものの、なぜか開けようとはしない。

「どうした？飲まないのか？」

「え？あ……えつと……」

缶コーヒーと俺の顔を交互に見るも、やはり缶コーヒーを開けようとはしないギンガ。

もしかして、開けられない……開け方を知らないのだろうか……まさかな。

「その……どうやって飲むのでしょうか？」

そのまさかだった。

まさかこんな一般常識をギンガが知らないとは……少しおかしい気もするが、そういう奴もいるだろう……多分。

「貸してみな」

「はい」

ギンガから缶コーヒーを受け取り、プルタブを開ける。

それをギンガに手渡す。

「ありがとうございます」

ギンガはお礼を言ってから缶コーヒーを口へと運ぶ。

すると、ギンガはびっくりとした表情を浮かべた。

一体何に驚いたというのか。

「美味しいですね……インスタントのコーヒーしか飲んだことないですが、これもなかなか」

なぜインスタントコーヒーを飲んだことがあるのに缶コーヒーの開

け方を知らなかったのか。

あれか、自動販売機は使わない主義なのか。

「そいつは何よりだ。飲んだら見回りを再開するぞ？」

「はい」

それにしても……ギンガ、なんか雰囲気変わったか？

……気のせいかな。

（なのはside）

公開意見陳述会が始まってだいぶ経った。

着々と陳述会は進んでいるけど、襲撃される様子や不穏な空気は今のところ全くない。

私達隊長陣はバラバラに別れ、それぞれが陳述会の会場内の見回りを行っている。

因みに、会場内には各世界の財政人や管理局のトップが沢山集まるため、デバイスの持ち込みが出来ない。

なので、私のデバイスであるレイジングハートはスバルに預かってもらっている。

会場内を見回る中、私はヴィータちゃんに念話で一つ、相談をしてみた。

それは、スカリエッティがなぜ管理局を襲う必要があるのか。

はやてちゃんの知り合いであるヴェロツサ・アコース捜査官の調査範囲限定だけど、クーデターの可能性は低い。

私達はスカリエッティ達が犯人だとほぼ断定して動いているけれど、イマイチ、スカリエッティ達の目的が分からない。

だけど、私は”ガジェットという自分の作って兵器の威力証明”だと考えている。

管理局の本部を壊滅出来る武器や戦力を用意出来るって証明出来れば、欲しがる人は沢山いるだろう。

と言ってみたのだけど、ヴィータちゃんに”威力証明なら他にも出来る場所は沢山ある”と反論されてしまった。

まあそうなんだけど……やっぱり、判断材料が足りない。

「私達には信頼できる上司が命令をくれる。私達はその通りに動く」

「(そうだな)」

その言葉を最後に、ヴィータちゃんとの念話が途切れる。

さてと……私も見回りを頑張らなくちゃ。

でも……この胸に渦巻く不安は。

一体……何なのだろう。

〈なのはside out〉

〈スカリエッティside〉

公開意見陳述会が始まって約四時間。

ドゥーエは脳みそ共を始末し、今は地上本部内部にいるという。

どうやら彼女も喜喜 右京に興味を抱いたらしい。

No.3からNo.12……いや、トーレからディードまでの娘達は配置についた。

後はただ、一つの言葉を口にするのみ。

ラボのスクリーンから見る地上本部の姿を見て、自分の口元がつり上がっていくのが分かる。

「ドクター……いよいよですね」

「ああ、いよいよだよーノ。私達は今こそ……今日こそ自由になれる」

長い長い道のりだった……今思えば、私が最初に欲したものは自由これだったのだ。

脳みそ共にいいように使われ、腐った管理局上層部にしたくもない実験をさせられ……かつての私なら、研究者として、技術者としてこの手で世界の歴史を変えると考えていただろう。

いや、実際考えていたのだ……彼を見るまでは。

機動六課の面々が来るということは、当然彼も来ていることだろう。

私が今欲しいのは、自由と彼……そして、かつての私の夢の実現。

「さあ、我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我等の想いと……彼等がさせた研究と開発の成果をな……さあ！始めよう！！」

両手を目一杯広げ、高らかに宣言する。

さあ、力を貸しておくれ、私の娘達よ。

出来れば、無傷で……元気な姿で帰ってきておくれ。

〈スカリエツィ side out〉

（No side）

「ミッションスタート」

スカリエツテイのラボから聞こえるオルガンのような音色を聞いて、クアットロは行動を起こす。

クアットロ以外のナンバーズの突入に先立ち、まずはクアットロが管理局地上本部の警戒システムに自身のIS、”シルバーカーテン”を使用し、強力なクラッキングを仕掛ける。

クラッキングとは、コンピュータネットワークに繋がれたシステムへ不正に侵入したり、コンピュータシステムを破壊・改竄するなど、コンピュータを不正に利用すること。

クアットロのIS”シルバーカーテン”の能力は電子戦でその真価を發揮する。

クアットロはシルバーカーテンをフルに使用し、地上本部の警戒システムを次々にダウンさせていく。

地上本部の中央管制室は突如ダウンした警戒システムを何とか維持しようとして動き回る。

しかし、その中央管制室の天井から、まるで水面から出るかのよう
に一つの手が現れる。

その手には……二つの爆弾。

「IS”ディープダイバー”……そんなじゃ、お休み」

その声の主はセイン。

セインは手にした爆弾をそのまま落とす。

すると、中央管制室を爆煙が包んだ。

その爆煙を吸い込んだ管理局員は次々と倒れて行き……僅かな時間で制圧されてしまったのだった。

場所は変わり、地上本部のシールドを発生させる機械、シールドジェネレーターの前に佇む小柄な銀髪の少女。

右目に眼帯をしたその少女は……チンクだった。

「IS……”ランブルデトネーター”！！」

チンクは両手の指の間に挟んだ計八本の小剣をジェネレーターに投げつける。

小剣はジェネレーターに突き刺さり、次の瞬間には盛大に爆発した。チンクが一機のシールドジェネレーターを破壊した為、地上本部を覆っていたシールドがその出力を軽減され、防御力を落とした。

「ルーお嬢様、お願いします」

「遠隔召喚……」

クアットロの言葉を受け、どこかにいるルーテシアが地上本部の屋上に大量のガジェットを召喚する。

屋上を警備していた管理局員達は突然現れたガジェット達に平静を乱し、逃げ腰になってしまう。

「IS発動、ヘヴィバレル」

地上本部から離れた場所で、デイエチが固有武装であるイノームスカノンを構える。

その銃口が向く先は……地上本部。

「バレットイメージ”エアゾルシエル”……発射」

イノームスカノンより、赤いエネルギー弾が発射される。

エネルギー弾は途中で三つに分かれ、地上本部のシールドを物ともせずその壁に突き刺さった。

突き刺さったエネルギー弾は内部に入り込んで爆煙を発生させ、内部の管理局員達を昏倒させる。

これほどの襲撃を受けながら、公開意見陳述会は終わりを見せなかった。

なぜなら、地上本部のトップであるレジアス・ゲイズが陳述会の続行を即断したからである。

「地上本部の防御は鉄壁だ。侵入出来る者などおらん」

「別に中まで侵入する必要はないのよね……困んで無力化しちゃえば」

レジアスの呟きにポツリと答えるクアットロ。

クアットロのクラッキングは、もうほとんどの済んでしまっていたのだった。

更に、クラッキングによって陳述会が行われていた会場の電源が奪われ、隔壁が閉じられてしまう。

更に、その内部に高濃度のAMFが展開され、魔力の圧縮すら満足に出来ない状態へ追い込まれてしまった。

魔法によって内部から隔壁を破壊することは叶わず、クラッキングによって外部へ連絡を取ること出来ないこの場所は、一種の牢屋のようになってしまうのだった。

「やられた……っ」

その中には、はやてとシグナムの姿もあった。

場所は変わり、地上本部の外部上空。

そこにいたのは、No.3トールと……桃色の長髪とヘッドギアが特徴的な少女、No.7セッテの姿があった。

「さて、お前は初戦闘だが……」

「心配入りません。伊達に遅く生まれていません」

セッテに少し心配そうな表情を向けるトール。

そんなトールに、セッテは微笑を浮かべ、両手に一つずつ持ったブーメランのような武器を構えた。

「IS発動、スローターアームズ」

「ライドインパルス」

2人の後ろには、地上本部の増援の管理局員達が大量に飛んできている。

「アクションー!!」「」

2人は躊躇いなくその大量の管理局員達に向かう。

直後、空にはいくつもの爆発が巻き起こり、管理局員達の悲鳴が響いたのだった。

〔No side out〕

スカリエッティ達の襲撃からしばらくが経った。

通信は一切通じない為、それぞれがどんな状況か、俺達に知るすべはない。

「オラア!!!」

斧を横一線に振り抜き、丸いガジェットを両断して破壊する。

今ので大体……何機破壊したか忘れてしまった。

とにかく、異常に数が多い上に連絡が取れない為、焦ってしまう。

なのは達やティアナ達が遅れを取る、なんて思わないが万が一ってこともある……合流するに越したことはない。

「右京さん、大丈夫ですか？」

「……大丈夫だ。先を急ぐぞ」

「はい」

ギンガと行動を共に出来ているのが幸いだな。

地上本部の内部構造なんて分からないし、一人だけでは無茶苦茶に走り回っていたことだろう。

「次はどっちだ？」

「こっちです」

ギンガに先行してもらい、俺は後を追いかける。

ガジェットが出てくると2人で殲滅する。

そんなことを何十回と繰り返し……やがて、開けた場所に出た。

「ここを通れば、なのはさん達と合流出来るはずです」

なんでギンガがそんなことまで知っているのか疑問だが、今はついていくことしか出来ない。

そして、この開けた場所を通り抜けようとした時……俺とギンガは足を止めた。

理由は……俺達の向かう入口の前に、一人分の人影が見えたからだ。

「待っていたぞ、タイプゼロ・ファースト。そして……」

人影がゆっくりとこちらに向かって歩いてきて、その姿が明らかになる。

低い背丈に見覚えのある銀髪。

右目の眼帯に、聞き覚えのある声。

「久しぶりだな右京」

「おいおい……」

不意に、俺の頭の中に初めてミッドチルダを観光した時の記憶が蘇る。

(む、私は綺麗なのか?)

(私はハンバーグセットを)

(昼食の礼だ、私も選んでやろう)

記憶の少女と目の前の少女が重なる。

それは、俺に取って嘘であってほしい現実を現していた。

(では右京も、私のことは……)

「どづいづことだ……チンク」

始まる序曲（後書き）

指が……右手の親指が死ぬ……

あ、アンケートの方は満場一致（？）でvividになりました。

皆様はforce、もしくは成り代わりは苦手なんでしょうか？

まあ、今はStrikersを頑張りますが……応援よろしくお願
いしますv（*^^*）ノ

ざわめく心（前書き）

シリアスって難しいですね。

読者の方々には感動や臨場感、笑いなどをお届けしたいのですが、
どうにも力量不足が目立ちます。

右京「それでは、ざわめく心……スタートだ」

今度、気分を変えて作品の人気投票でもやってみよかと思えます。

ぞわめく心

「どづいうことだ……チンク」

瓦礫が散乱している開けた場所で俺とギンガが出会ったのは……チンクだった。

チンクはボディースーツのような服を着て、白いマントを羽織っている。

そして、その両手には……数本の小剣。

「どづいうこと……とは何のことだ？」

「なぜこんなところで、そんな格好で、そんな物騒なもんを持っているのかってことだ」

「ああ、そのことか……まあ一言で片付けるなら……」

チンクは俺の言葉を聞いてクスリと笑う。

その笑顔は、この場にはあまりに不釣り合いで。

紡がれた言葉は……俺の外れて欲しい予想を現実として突き付けた。

「私は……私達は初めから敵だ」
「チンクがわ」

こちら側……チンクはスカリエッツィの仲間ということか。

それはつまり……ノーヴェとセインもスカリエッツィの仲間ということになる。

「そうか……」

「右京さん……彼女は？」

「あいつはチンク……ギンガに108部隊に連れていかれたあの日に会った奴だ」

チツ……あの日会ったことも、もしかしたら何か意図があったのかもしれないな。

「あの時は楽しかった……ハンバーグも美味しかったし、服を選んだのも初めてで新鮮だった……それは本当だ」

俺達の会話が聞こえていたのか、チンクは俺の方を見ながら真剣な表情で言ってきた。

俺は別に、あの日のチンク達の笑顔が嘘だったなんて思っていない。

「それは何よりだ……ところでチンク……そこをどいてくれないか？早く仲間達と合流したいんでね」

「それは出来ない……右京には、私とドクターの所に来てもらいた

い
「

「なんだと？」

ドクター、というのは恐らくスカリエッツィのことだろう。

敵の親玉の元にわざわざ連れていこうとするとは……どっしり
だ？

「何のつもりだ？」

「右京……私達の仲間になってくれないか？」

（No side）

地上本部がスカリエッツィ達の襲撃を受けている同時刻。

機動六課隊舎もスカリエッツィ陣の戦闘機人の襲撃を受けていた。

「IS”レイストーム”……発動」

「クラーヴイント！防いで！！」

一見男性体に見える戦闘機人、No.8オットーは右手を隊舎に向けて緑色のビーム状の光を四本放つ。

それに対して騎士服を着たシャマルは緑色の巨大な盾を隊舎の前に四枚出現させ、オットーのレイストームを防ぐ。

「僕のレイストームの前に……抵抗は無意味だ」

それを見たオットーは少しムツとした表情を浮かべ、レイストームの出力を上げる。

シャマルの盾がミシミシと悲鳴を上げ、シャマル自身も苦悶の表情を浮かべるが、必死に盾の維持に努める。

「これ以上はさせませんぞおおお！！」

狼形態のザフィーラが吼え、オットーに向かって飛びかかる。

しかし、ザフィーラの真上に光剣二刀を振り上げた戦闘機人、No.12デイドが姿を現した。

「IS”ツインブレイズ”」

デイドは自身のISで作り出した赤き刀身を持つ光剣二刀を容赦なく振り下ろす。

その二刀はザフィーラの体に直撃し、地面に向かって落とされた。

「ぐううう!!」

「きゃあっ!!」

運が悪かったのか、それとも狙ったのか、デイドに落とされたザフィーラはシャマルにぶつかってしまふ。

その衝撃でシャマルは集中力を乱してしまい、盾は砕かれ、レイストームによって隊舎の一部が破壊されてしまった。

場所は変わって隊舎の中。

非戦闘員達は一カ所に固まり、魔法を使える者達は非戦闘員達を守る為に結界を張る。

その隊員達から離れた場所で只一人、隊舎内に侵入してくるガジエツトを破壊していく人物がいた。

その人物とは、普段はヘリパイロットをしているヴァイス・グランセニツクだった。

ヴァイスは支給用のストレージデバイスをライフルのように構え、魔力弾を放ってガジエツトを次々に撃ち落としていく。

「ふう……大丈夫だ、腕は落ちてねえ」

額から流れる汗を拭い、安心したような笑みを浮かべる。

しかしすぐに表情は真剣なものに変わり、敵は一つも通さないとばかりに眼前の通路を見据える。

やがて、ヴァイスの視界に一つの人影が入る。

敵かと思い、彼は手にしているデバイスを人影に向けて狙いを定める。

しかし、その人影の主の姿を確認すると、ヴァイスは目を見開いて体をカタカタと震わせ始めた。

「あ……あ……」

その人影の主は……ルーテシアだった。

ルーテシアはキョロキョロと通路の左右を確認し、その目にヴァイスの姿を捉える。

ルーテシアと眼があったヴァイスは体の震えを激しくさせ、狙いを定めることが出来なくなっていた。

「ラグナ……」

ただ一言、ルーテシアと重なってしまった実妹の名を呟く。

すると、体の震えは自然と止まり、再びデバイスをルーテシアに向ける。

「邪魔……」

ルーテシアは左手をヴァイスに翳し、魔力を集める。

それを見たヴァイスはいつものように笑みを浮かべた。

「チビ達も右京の兄貴も頑張ってた……昔のこと（トラウマ）なんか……ビビってる訳にはいかねえよな!!」

頭の中に自分と同じような、或いはそれ以上に辛い過去や複雑な事情を持ちながらも現在を明るく生きる後輩達を思い浮かべる。

ならば、自分がトラウマに怯えて成すべきことが出来ない、などとほざくなど出来ない。

ヴァイスは気合い一発、ルーテシアに向けて魔力弾を放つ。

ルーテシアも魔力弾を放ち、両者の魔力弾は一瞬拮抗する。

しかし、魔力量の違い故か……ヴァイスの魔力弾はルーテシアの魔力弾に打ち砕かれた。

「チツ……そう簡単にはいかねえよな……」

僅かに残る震えと僅かに乱れた集中力を自覚し、小さく呟く。

その身に魔力弾を受ける瞬間……ヴァイスは悔しそうな笑みを浮かべるのだった。

（No side）

「仲間にはならない」

「……やはり……か」

俺はチンクの誘いを即答に近い速さで断った。

チンク達の仲間になるということは、なのは達と敵対するということになる……そんなことは出来ない。

「ならば力づくで連れて行く!!」

チンクから四本の小剣が俺の足下に投げられる。

投擲ミスか?とも考えたが、俺は嫌な予感を感じ、すぐに後方に下がった。

「IS”ランブルデトネイター”!!」

瞬間、チンクの投げた小剣が爆発した。

「ぐうっ!!」

「右京さん!?!」

後方に下がったものの、距離が近かった為に爆発に吹き飛ばされ、

背中から壁に激突してしまった。

そのまま落下するが、何とか両足から着地する。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ……バリアジャケットがなけりゃ、アウトだったかもな」

ギンガにそう返しつつ、内心でソルに感謝する。

しかし、爆発する小剣か……スバルの振動破碎のような能力だろうか。

やはりチンクは戦闘機人……手加減なんてしている余裕はない。

「ハアッ!!」

チンクより再び数本の小剣が投げられる。

俺は壁から離れるように、ギンガは通路に向かって跳ぶ。

「ランブルデトネーター!!」

小剣が壁に突き刺さり、チンクの言葉と同時に爆発する。

今回は爆発に巻き込まれることはなかった……が。

「ギンガ!？」

ギンガが跳んだ通路の出入り口が瓦礫で埋もれてしまった。

残る出入り口はチンクの後ろにある一つのみ。

なのは達と連絡は取れず、ギンガとも分断されてしまった。

ギンガは無事だとは思うが、孤立したこの状況はマズい。

「チツ……」

思わず舌打ちをし、斧を構える。

相手は爆発する小剣を扱う遠距離タイプ……懐に入り込めば、あの小剣は使えないだろう。

「一撃で終わらせる!!」

右足を強く踏みしめ、床を抉る強さでチンクの元へ跳ぶ。

時間にすれば一秒もない、それほどの速さで俺はチンクの懐に入った。

そして、勢いを殺さぬまま斧を左から右へ横一閃に振るう。

「甘いぞ右京!!」

しかし、その一閃はチンクに後方に跳ばれることで避けられてしまった。

そして、俺の周りには……いつの間に仕掛けたのか、幾つもの小剣が床に刺さっていた。

「しま……」

「IS”ランブルデトネイター”」

瞬間、俺の身を爆発が隠した。

（No side）

ここは地上本部のとある通路。

ここでは、フォワード陣の4名+1とスカリエツティ陣の戦闘機人、No.9ノーヴェとNo.11ウエンディが戦っていた。

通路の中にはティアナが作り出した虚像シルエットが夥しい数存在し、ノーヴェ達はそれを鬱陶しそうに見ていた。

「オラア！！チツ！また幻影かよ！」

「うじゃうじゃいて鬱陶しいツスねえ……」

ノーヴェがティアナに向かって右足を振り抜き、ウエンディが他の三人目掛けてライディングボードからエネルギー弾を放ち、一掃する。

しかし、それらは全て幻影だったらしく、手応えなく霞のように消え、再びどこからともなくわらわらと現れるフォワード陣達。

戦闘機人たる自分達の目をも欺く幻術に何度も引っかかり、ノーヴェはようやく理解した。

「あいつら……戦闘機人のことを知ってやがる」

「ふう……」

通路から少し離れた場所でティアナが息を吐く。

AMFがあるのか、魔力の結合が辛いこの環境ではいつもの実力が出せない。

今自分達が優先すべきは隊長達にデバイスを渡し、まだ姿が見えない右京と合流すること。

キャロのブーストのおかげで大量の幻影を保ってはいるが、それも限界が近い。

「ハアツー!!」

「あぐつー!!」

そんな時、スバルがノーヴェに向かって突っ込み、魔力を込めた右手を突き出す。

幻影に気を取られていたノーヴェは反応が遅れてしまい、モロに腹に喰らい、壁に激突した。

「ノーヴェ!？」

「サンダー……レイジ!！」

「うああっ!！」

ウエンディは壁に激突したノーヴェに向かって心配そうに名前を呼ぶ。

それを隙と見たエリオは高く飛び上がり、落下して床にストラーダを突き刺して周りに雷を発生させた。

雷はウエンディの体を吹き飛ばし、近くのガジェットを容易く破壊した。

「今!! 散開!!！」

それを見たティアナは大声で指示を出し、幻影達を四方に走らせ、自分達もそれに混じってこの場より離脱する。

その中には……右京と共に行動していたハズのギンガの姿もあった。

「さて……どうしようかしら」

右京と分断されたギンガの口から、ギンガではない別の声が漏れる。彼女の前には瓦礫に埋もれた通路の出入り口……ギンガならば、瓦礫を吹き飛ばすなど容易いハズなのに、彼女はそれをしない。

それもそのはず……なぜならば、彼女にはそんな力はないからだ。

このギンガこそ、スカリエツテイ達の戦闘機人、No.2ドゥーエが自身の能力で変装した姿なのである。

いつから入れ替わっていたのか、少なくとも、右京が缶コーヒを渡して時には既に入れ替わっていた。

「うげ、ファースト……」

瓦礫の前で考え込むドゥーエの後ろからそんな声がした。

ドゥーエが振り返ってみると、そこにいたのはセインだった。

「あら、セインじゃない」

「その声……まさか、ドゥーエ姉？」

「ええ」

ギンガの姿をしたドゥーエを見て身構えていたセインだが、その声を聞いてドゥーエと判断し、警戒を解く。

セインはドゥーエに近付き、瓦礫に埋もれた出入り口を見た。

「これやったのはチンク姉？それとも右京さん？」

「チンクよ。確かに右京さんも出来そうだけどね」

ここまでギンガとして右京と共に行動していたドゥーエは、セインの言葉が笑えなかった。

AMFがあるにも関わらず、むしろ魔法すら使わずにガジェットをあつさりと破壊していく右京の姿を間近で見ているのだから、その実力が分かったのだろう。

因みにドゥーエはガジェットと戦闘をするフリをしていた為、実際には戦っていない。

左手のリボルバーナックル、両足のローラーブーツはスカリエッティ作の模造品であり、リボルバーナックルに至ってはハリボテ同然である。

但し、ローラーブーツはノーヴェの固有武装の一つ、ジェットエッジの予備パーツを使っているので、本物同然の性能を誇る。

これらを僅か数時間で組んでしまう辺り、スカリエッティが如何に天才かが分かるだろう。

「今は中でチンクが戦っているわ。もうすぐNo.9と11が合流して、三人で右京と戦うそうだけど……」

ドゥーエは瓦礫の方を見ながら、クスリと妖艶に笑う。

瓦礫の向こうからは絶えず爆発音が響き、チンクが戦っている姿を容易に想像させる。

「案外、2人が来る頃には終わっているかもしれないわね」

「よく避けられたな……無傷ではなかったようだが」

チンクが驚嘆の声を洩らす。

そのチンクが見る先には……蒼い日本刀を右手に、鞘を左手に持った右京が立っていた。

右京は小剣が爆発する瞬間にレイジングソウルのフルドライブを発動し、その速度を持って爆発の直撃を避けたのだ。

しかし、やはり完全に避けることは叶わず、右足の膝から下のバリアジャケットは吹き飛んでおり、その足には酷い火傷が見られる。

「ハアツ……ハアツ……」

火傷による痛み、そして、フルドライブを発動したことによるリンカーコアの痛みが右京を襲う。

それでも、右京は刀の切っ先をチンクに向け、ニヤリと不敵に笑っ

た。

「やるじゃねえかチンク……だが、この程度じゃ俺は倒せないぞ？」
瞬間、右京の姿が消えた。

それは、戦闘機人たるチンクの目を持ってしても”消えた”と認識してしまうほどの純粋な”速さ”。

「どこに消え……くっ!!」

「よく避けたな……」

チンクは一瞬右京の姿を見失うが、己の直感に従って前へと跳ぶ。

その瞬間、チンクがいた場所に横一閃に刀が振るわれた。

最速ではないとは言え、避けられると思っではいなかった右京は内心で舌打ちを打つ。

対するチンクも、避けられたことに内心では安堵していた。

「ランブルデトネーター!!」

「チィッ!!」

チンクは右京とは反対方向に跳びながら幾つもの小剣を広範囲に投げつけ、一斉に爆発させる。

右京は爆発する前に後退し、爆発を受けることはなかったが再び2

人の距離が開く。

その隙にチンクはこの開けた場所の隅に移動しており、右京から攻撃を受ける方向を限定した。

「これで易々と接近することは出来まい!!」

「接近しなくても手段はあるんだよ!!ソル!!カートリッジロード……」

「ロードカートリッジ」

日本刀の柄より二発の葉莖が排出され、その刀身が瑠璃色の光を放つ。

チンクは右京目掛けて幾つもの小剣を投げつける……その数34。

対する右京は日本刀を一度鞘に納めた。

「シグナム……技、借りるぞ。”飛竜……一閃”!!」

納めた刀を居合い切りのように刹那の時間に振り抜く。

すると、刀身から瑠璃色の刃が鞭のようにしなりながら伸び、チンクの投げた小剣を全て尻ぎ払った。

「何っ!？」

「ぐっ……」

チンクが驚くと同時に、右京の体が地面に向かって倒れる。

飛竜一閃を放つ際に右足を踏み込んでしまった為、右足に激痛が走って立っていられなくなったのだ。

「が……ああ……」

更に魔法を行使したが為にリンカーコアに痛みが走り、右京は胸を右手で強く抑える。

日本刀は傍らに落ちており、痛みに耐えている右京はそれを手にする余裕もなかった。

「やっと見つけたツスよチンク姉」

「チンク姉！！右京兄はどうしたんだ！？」

「落ち着けノーヴェ……姉にも分からん。突然苦しみだしたのだ」

右京が声のした方に目を向ける。

そこには、ノーヴェとよく似た顔立ちをした少女……ウエンディと、右京を心配するように見ているノーヴェの姿があった。

チンクを含めてゆっくりとこちらに向かってくる三人を見て、右京は痛みから大量の汗を流しながらも苦笑を浮かべた。

（それが敵に向ける力才かよ……）

ただ、心配そうな表情を浮かべた三人の少女を見て、右京はそう思

ったのだった。

〈No side out〉

〈なのはside〉

「私達スターズとギンガは右京さんの搜索、ライトニングの皆は機動六課に向かう……いいね？」

【了解！！】

地上本部が襲撃されてしばらく経ち、私とフェイトちゃんはようやくフォワードの皆と合流することが出来た。

スバルからレイジングハートを受け取り、ライトニングとスターズで二手に分かれて行動するように指示する。

連絡が取れない機動六課にはライトニングが。

同じく連絡が取れない右京さんの搜索は私達スターズが行う。

ライトニングの皆はすぐに機動六課に向かったので、私もセットアップをして右京さんのところへ向かおうとする。

「……えっ？」

「あ……リボンが……」

その時、サイドポニーにしていた私の髪がバサツと降りた。

そして、私の目の前を舞う白い布。

それを見た瞬間、何ともいえない悪寒が私の背筋を凍らせた。

それは、小さい頃、あなたがいたという唯一の証拠。

それは、私とあなたを繋いでいた唯一の証。

それは……私の……世界で一番大切な宝物。

「右京さん……？」

なぜだろう。

私は今無性に。

あなたに会いたくなくなった。

ぞわめく心（後書き）

ソル「今回、マイマスターが使用した魔法の紹介です」

名称：飛竜一閃

シグナムとよく似た魔法。

違うのは、シグナムはデバイスの刃を使うのに対し、右京は魔力刃を用いるという点。

後はシグナムの使う飛竜一閃と同じ。

ソル「……マイマスター……私は……」

さけぶ心（前書き）

早いもので、自分が藍蘭島の小説を書き始めた日からもう半年です。

この作品も30万アクセスに3万ユニーク……ありがとうございます
す！！

今回もシリアスなお話となっております。

書いてる途中から胸と親指の付け根がズキズキと……

シリアスも恋愛も笑いも入れたいんですがね……

なのは「それでは……さけぶ心……始まります」

さげぶ心

〔No side〕

地上本部の近くの上空にて、白と金が激しく交わる。

白はリインフォース？とユニゾンしたヴィータ、金は槍型のデバイスを携えた謎の妙齢の男性だった。

「クソツ、隙がねえ……」

何度も打ち合っているが、確固たる一撃が一度たりとも当たらない事実にはヴィータは焦る。

そんなヴィータに対し、男性は焦る様子もなくヴィータと打ち合っている。

「お前らの目的はなんだ！！」

鏢迫り合いになった時、ヴィータは何度目になるか分からない問い掛けをする。

しかし、男性は無言を貫き、問い掛けに答えることはない。

ヴィータに分かっていることは3つ。

この男性がオーバーSランクの実力者であること。

以前ルーテシアの傍らにいたアギトとユニゾン出来、今まさにユニ

ゾンッているじゃ。

そして……この男性がゼストという名前であることだけだった。

ライトニングの三人は機動六課隊舎に向かっていた。

飛ぶことが出来ないエリオとキャラは本来の姿になったフリードの背に乗っている。

不意に、三人の前に2つの影が立ちふさがった。

「誰!？」

フェイトはバルディッシュを構え、油断なく影を見据える。

影はゆっくりとフェイト達に近付き、やがてその姿がはっきりと見えるようになった。

その影は……先程まで大量の管理局員達と戦闘を繰り広げていたト
ーレとセツテだった。

「……2人共先に行って」

「え!？」

「フェイトさん!？」

「早く!!」

「は、はい!!」

その姿を見たフェイトはエリオとキヤロの2人を先に機動六課隊舎へと向かうように言い、2人はそれに従って飛び去る。

トーレとセツテは2人の姿を一瞥しただけで、追おうとはしなかった。

「スカリエツティの……戦闘機人……」

「……今あなたをあの部隊に向かわせる訳にはいきません」

「あなたには、私達とここで戦っていただきます」

次の瞬間、彼女達は一筋の光となってぶつかるのだった。

場所は変わり、右京とチンク、ノーヴェ、ウエンディのいる開けた場所。

リンカーコアの痛みを苦しむ右京を、三人は心配そうな表情を浮か

べて近付く。

「右京兄……その……大丈夫か？」

ノーヴェがそう問いかけるが、右京に答える余裕はない。

以前感じた痛みよりも更に激しいリンカーコアの痛みと右足の酷い火傷。

それら2つの痛みを同時に受けている右京にそんな余裕はあるはずもない。

「心…配すんな……」

それでも、右京は声を出す。

日本刀となったレイジングソウルを右手でしっかりと握り締め、しっかりと立ち上がる。

その様子にノーヴェ達は驚いて目を見開き、近づいていた距離を少し離す。

「痛いし苦しいけどな……それでも、お前達三人を……捕まえるくらいはしてやるぞ」

右手の日本刀の切っ先をしっかりと三人に向け、不敵に笑う。

それだけでも、その身には意識を手放したいほどの痛みが走っていることだろう。

しかし、右京は笑う。

どこまでも不敵に、ニヤリと。

その中に少しの辛さを混ぜて。

「こんな形で会いたくはなかったな……」

ほんの少しの悲しみを混ぜて。

右京は三人に向かって跳んだ。

〔No side out〕

〔なのはside〕

「なのはさん！！飛ばし過ぎです！！！」

「こんな狭いところでそんなにスピード出すと危ないですよ！！！」

先ほど、レイジングハートが右京さんの反応を捉えた。

後ろからティアナとスバルの注意が飛んでくるけれど、それを気にしている余裕は私にはない。

右京さんから貰った白い布が切れた時、嫌な予感が強くなった。

今、私は切れた布を握り締め、右京さんの反応があった場所に向かっている。

「こういう屋内では私達の方が速いハズなのに……」

「なんで追い付けないの……!?!」

スバルもギンガも私の今のスピードについてこれられないのか、横にも前にも姿が見えない。

私も危ないとは思っているけど、速度は緩めない。

「速く……早く……」

もっと速くと速度を上げる。

早く会いたいと速度を上げる。

やがて、右京さんの反応があった場所が見えてきた。

「右京さん!!」

通路を抜け、その場所にようやくたどり着く。

あちこちに焼け焦げたような、何かが爆発したような跡があり、壁には切り傷のようなものもある。

そんな空間の中心に、3人分の立っている人影と、1人分の倒れて

いる人影が見えた。

その倒れている人影は……。

「右京……さん……？」

一瞬思考が停止する。

目の前が真っ暗になる。

頭が理解することを拒む。

それでもはつきりと認識してしまった。

右足には酷い火傷が見え、バリアジャケットはボロボロで、長い茶髪は無造作に地面に広がっている。

そして、その身体は……

自身の身体から流れる赤い水に浸っていた。

「あ……ああ……」

なぜ、あなたが倒れているのか。

「どう考えてもマズい出血量ツス……」

「早く戻らないと右京兄が……」

ウエンディとノーヴェが焦りを言葉にしながら戦闘体制を取る。

先ほどの戦闘で右京は多大なダメージを負い、その身体を自身の血で浸るほどの出血をしている。

チンク達が止血をしたものの、失われた血は失われたままだ。

一刻も早くドクターの元へ戻らねば……チンク達はそう考えていた。

「ねえ……」

不意に、底冷えがするような声が彼女達に向けられる。

背筋が凍るほどに冷たく。

「あなた達は……」

身を焦がすかのように熱く、なのはは言葉を紡ぐ。

そして、その表情は……

「なにをしているの？」

感情が抜けきっていた。

深く暗い闇色に染まった瞳に射抜かれ、チンク達は身動きができなくなる。

同時に、本能が激しく警鐘を鳴らす。

”殺される”

一瞬にしてその一言に脳内を埋め尽くされた。

「あ…うあ……うあああっ…！」

「よせっ…！！ノーヴェ…！」

「やめるツス…！！ノーヴェ…！」

初めて感じた死の恐怖と殺意をその身に受けたノーヴェは、取り乱したように叫びながらなのはに突撃する。

ギリギリのところまで平静を保ったチンクとウエンディは、暴走したノーヴェに静止するように呼びかける。

しかし、今のノーヴェに聞こえるハズもなく……ノーヴェはなの
は向かって右拳を全力で突き出した。

「プロテクション」

ガキン！という音と共にノーヴェの拳は桜色の盾に遮られた。

更に、盾から伸びた同色の鎖がノーヴェの右腕に絡みつき、彼女の
動きを封じる。

「な、なんだこれは!？」

「ねえ……」

慌てるノーヴェの目に、レイジングハートを自分に向けるなのはの
姿が映る。

なのはの背後には桜色の魔力球が数個作られ、レイジングハートの
先には魔力がチャージされていく。

「なにをしているのかって……」

淡々と、感情を感じさせないなのはの言葉を聞いて、ノーヴェの恐
怖は強くなる。

やがて、魔力のチャージが完了し……なのははノーヴェを睨み付け
た。

「聞いているの」

「ストライクスターズ」

「うああああああっっ！！！！！」

「「ノーヴェー！！！」」

魔力球から放たれる魔力弾とレイジングハートの先から出る砲撃を受け、ノーヴェエはチンク達の元へと吹き飛ばす。

なのはの攻撃を受けたノーヴェエは、意識こそないが生きてはいる。

非殺傷設定を解いていないところを見る限り、なのははまだ理性を失ってはいないらしい。

(AMFの中、リミッター付きで……この威力か……)

チンクは改めて、「エースオブエース」の名は伊達ではないと感じた。

同時に、ウエンディと二人がかりで戦っても、なのはに勝てるという未来図を描くことも出来なくなった。

そして、チンクは一つの作戦をウエンディに告げる。

「……ここは姉が引き受ける。ウエンディはノーヴェエと右京を連れてラボに戻れ」

「チンク姉……了解ッス。IS発動……」 エリアルレイヴ”！！」

チンクの言葉を聞いたウエンディは一度頷き、ノーヴェエをその背に

背負つ。

そして右京の身体をライディングボードに乗せて自身も乗り、自身の能力を使ってライディングボードを浮遊させた。

その瞬間、ウエンディの顔の横を桜色の光が通り過ぎた。

「……………え？」

「今……………撃つたのか？見えなかったぞ……………」

ウエンディは何が起きたのか分からずにキョトンとし、チンクはなのはが”何を”したのかかるうじて理解することができた。

早い話、なのはがウエンディに向かって砲撃を放つたのだ。

”ショートバスター”

射程と威力を犠牲にし、チャージ時間を短縮し、発射速度に特化したなのはの持つ砲撃のバリエーションの一つである。

「右京さんに触らないで……………次は……………当てるから」

片手でレイジングハートを持ち、その先をウエンディに向けるなのは。

レイジングハートの前には既に魔力がチャージされており、その言葉の中には一切冗談は含まれていないことが分かる。

チンク達が冷や汗を流す……………しかし、ここで右京を置き去りにする

ことは出来ない。

右京を仲間にするという目的が達成出来なくなる、というのもある。しかし、自分達との戦闘が原因とはいえ、大怪我をしている右京を置いていくという事が出来るほど、チンク達は非道でもない。

だが、このままでは自分達はなのはに捕らえられ、目的は達成出来なくなる。

「右京さんを……返して」

レイジングハートの前でチャージしている魔力の光が強くなる。

なのはの目からは涙が零れ……その目は明らかな憎しみを孕んでいた。

そしてなのははレイジングハートを両手でしっかりと握り締め……チンク達に向けた。

「ストラーダ！！フォルムツヴァイ！！」

場所は変わり、機動六課付近の海上の空。

機動六課隊舎に向かっていたエリオとキャロはその途中、気絶した

ヴィヴィオを連れ去ろうとしているルーテシア達を見つけた。

2人はルーテシアに近付こうとしたが、オットーとディードに阻まれてしまう。

エリオはフリードから飛び降り、ストラダを本体に幾つものブースターがついているフォルムツヴァイに変形させ、再度ルーテシアに近付こうとする。

「させません」

「ぐあっ!!」

しかし、それは再び光剣二刀を携えたディードにたたき落とされる形で失敗した。

しかし、エリオはストラダのブースターを吹かして体制を立て直し、その矛先をディードへと向ける。

「ど……けえええっ!!」

エリオはブースターを最大で吹かし、ディードに向かって突撃する。だが、空中戦に馴れていない上に直線的な動きをしているエリオの攻撃が当たるハズもなく。

「すみません……IS発動……ツインブレイズ!!」

「うわあああっ!!」

「エリオ君！？きゃあああつ！！」

一瞬悲しそうな顔をしたデイドによって再びたたき落とされてしまふ。

それを見たキャロはフリードをエリオに向かわせようとする。

しかし、いつの間にか背後にいたオットーのIS”レイストーム”によってキャロとフリードは身動きを封じられ、エリオ共々海へと落下してしまふのだった。

「なのは」

「えっ？」

背後からかけられた声で、発射寸前だったなのはの砲撃が止まる。

なのはが信じられない気持ちで後ろを振り返ると……そこには。

「右京……さん……？」

ポロポロだったハズの右京が立っていたからだ。

傷は一切見当たらず、先程見た右京の姿はなんだったのかと、なのは自問自答する。

「え……なんで……さっき……」

背後にいる右京と、チンク達の側にいる右京を見比べる。

しかし、チンク達はライディングボードに乗り、戦闘中に開いたのである。壁の穴に向かっていた。

「待つ……」

「なのは……俺は無事だ」

反射的に追いかけてよとしたのはだが、右京の言葉に動きを止める。

チンク達は穴に飛び込み、もう姿は見えない。

なのはは釈然としない様子で振り返り、目の前の右京をライジングハートにスキャンさせる。

もしかしたら、これは幻術や変装なのではないか……なのははそう考えた。

そして、ライジングハートが出した答えは……。

「99.9%、本人です」

だった。

その答えに安心したなのは、止まっていた涙を再び流し始める。

「良かった……右京さん……」

愛しい人が無事だった、その事実がなのはの心を埋め尽くす。

そんなのはを見て、右京はその体を抱き締めた。

「なのは……」

「右京……さん……」

2人の顔が少しずつ近づく。

その距離は、後数ミリで唇が重なる程に。

『スポンサーの諸君……そして、今まで散々私に望まぬ研究をさせてきた者達……聞こえているだろうか』

夥しい数のガジェットが蠢く地上本部の上空に巨大なモニターが現れる。

そのモニターには、ジェル・スカリエッティの顔が映し出されていた。

『この度の襲撃は、私の目的の達成への足掛けに過ぎない。しかし、私はこの襲撃で人命を奪うことは決してしない』

「目的……？」

「……………」

スカリエッティの言葉を聞き、今まで戦っていたヴィータとゼストの動きが止まる。

2人は互いに相手から目を逸らすことはなく、しかし耳だけはしっかりとスカリエッティの言葉に傾ける。

『私の目的は、私の科学力や戦力を見せつけることでも、スポンサーの諸君に研究成果を見せることでもない』

「いきなり何を……………」

地上本部から遠く離れた上空でトレ、セツテと戦っていたフェイトも、その言葉を聞いて動きを止める。

なのはが予測した戦力誇示は違うと否定し、更に不明になった目的にフェイトは眉をひそめた。

『私の目的は……自由になることだ。人体実験に非人道的実験……私は強要されてきたこれらの実験や研究をしたくななどない』

「強要されてきた……だと？」

「誰に……いや、きっとそういうことなんやろな」

地上本部の陳述会会場にいるシグナムが疑問を口にする。

同時に、陳述会会場の中にいる要人達が慌てたように騒ぎ出した姿を見て、はやては苦虫を潰したような表情をした。

『無論、犯罪者である私の言ったことを管理局は信用しないだろうし、邪魔もしてくることだろう。その場合、私は私の持つ全ての戦力を使って抵抗する』

スカリエッティの言葉を誰もが聞き入っていた。

スカリエッティの顔には一切の感情を見られず、その言葉には一切の嘘が感じられない。

それでも、その行動は許せない。

小さくなったフリードと気絶したエリオを海から引き上げることが出来たキャラは、地上本部の上に出ているモニターを朧気な瞳で見つめる。

「壊さないで……」

キャラの眩きと共に、キャラの背後で巨大な魔法陣が地面に描かれる。

それは、キャロの……いや、機動六課の中で最も強大な力を持つ存在が現れる入口。

『さらばだ時空管理局、及びスポンサーの諸君。願わくば、もう一度と君達とは会わないことを』

その言葉を最後に、スカリエッティはモニターごと消える。

そして、地上本部と機動六課……炎で赤く染まる双方を見て、キャロは願うように両手を組み、その名を叫んだ。

「竜騎……召喚……ヴォルテール！！！！」

桃色の魔法陣から巨大な影がゆつくりと姿を現す。

天にまで届くかのようなその黒き巨体。

その存在こそ、キャロの故郷アルザスにて守護竜と謳われし竜ヴォルテール。

「私達の居場所を……思い出の場所を……」

壊さないで。

瞬間、ヴォルテールの口から光が放たれ、地上本部上空のガジエツト達を塵一つ残さずに消し飛ばした。

「……………何のつもりだ……………なのは」

後数ミリで唇が触れるというところで、右京の動きが止まる。

その体には、桜色のバインドが3つ付けられている。

「右京さんにはね……………一緒にいるって約束した人がいるんだ」

なのはは右京の言葉に伝えることなく、右京から離れる。

少しずつ、少しずつ離れていき……………その距離はおよそ7メートルにまで広がった。

「だから……………その相手じゃない私と……………キスなんてしないんだよ。……………あなたは右京さんじゃない」

なのはの言葉に、右京は目を見開く。

そして、ニヤリと笑みを浮かべ、口から何かを吐き出した。

それは、何かの粉がカプセル。

「残念……少し眠ってもらおうと思ったのに」

「っ!？」

右京の口から出た右京以外の声になのはは驚愕し、レイジンググハートを構える。

対する右京は、ただただニヤリと笑うだけだった。

「あなたは誰!? 右京さんをどこへ連れて行ったの!？」

「私は戦闘機人No.2ドゥーエ……」

右京……いや、ドゥーエはその姿を本来の姿へと戻す。

それを見たなのは再び目を見開き、ギリツ……と強く歯を噛み締めた。

「右京さんはドクターの所に連れて行ったわ……場所は後からは分かるわ」

「場所はあなたから聞き出します」

「無理ね」

余裕そうなドゥーエの言葉を聞いて、なのははレイジングハートの前に魔力を集める。

それを見てもドゥーエは余裕ある態度を崩さない。

そして、ドゥーエの背後に突然セインが地面から姿を現し、ドゥーエの体を抱き締める。

「さようなら……」なのは」

「あっ……！……！」

「じゃあねー」

セインがドゥーエごと地面に沈み、その姿がなくなる。

なのはは魔力を霧散させ、最後にドゥーエが放った言葉を頭の中で繰り返す。

「いや……」

ドゥーエは最後にいったのだ……さようならと。

なのははレイジングハートを構えていた手を下ろし、顔を俯かせる。

「いやだよ……」

最後にいったのだ……なのはと。

なのははその場に入たり込んでしまい、ポタポタと流れ落ちる涙が地面を濡らす。

「右京さん……」

”さようならなのは”と……右京の声で、右京の姿で。

なのはの愛するその声で、その姿で。

「っ……っえ……っあ……っああああああああああああああああああああああ……っ！？」

「なのはさん！！右京兄いは……っ！？」

「なのはさん……」

「……そんな……」

スバル達がなのはの元にたどり着いたのは、それから数分後のこと。

三人がたどり着いた時には何もかもが遅かった。

三人の目に映ったのは、戦闘の痕跡。

誰かの血溜まり。

そして……子供のように泣き喚くなのはの姿だった。

愛しい人は側にはいない。

傷を負い、連れて行かれた魂は、悲しみにくれる心を癒やす術を持たない。

それでも……時は進んでいく。

終幕と選択の日は……すぐそこまで迫っている。

さげぶ心（後書き）

年末にはJ S事件が終わってる……といいなあ。

その方が、クリスマスやお正月のSSを書くとき楽なんですけど……精神的に。

ほかにイベントを色々書いてみましょうか……

始まる戦い（前書き）

クリスマスまでにゆりかご戦争終われるか!?

そもそもクリスマスの番外編を書くべきか!?

書くとしたらどんな内容にするべきか!?

考えることは多々ありますが、頑張っ て行きます!!

今回は短いです。

みちる「それでは、始まる戦い……すたーとです」

始まる戦い

「はやてside」

目の前の報告書を見て、私は顔をしかめる。

先日のスカリエッティ達の襲撃により、地上本部と私ら機動六課は甚大な被害を受けた。

まず、地上本部は小破……外見はさほど被害がないように見えるが、内部の被害が酷い。

内部で襲撃に備えていた決して少なくない数の管理局員達も、半分ほどまだ目覚めていないらしい。

機動六課は……大破。

再び隊舎を拠点として使用するには、今しばらくの時間を要する……となるだろう。

様々な願いの下に建てられた隊舎の見るも無惨な姿を見た時には、酷い目眩が起きた。

「問題は……人員の方やな……」

まず、機動六課専属のヘリパイロットである、ヴァイス・グランセニック陸曹。

彼は襲撃者の攻撃を受けて意識不明の重傷を負っており、今は病院

で眠っている。

次にザフィーラとシャマル。

隊舎を襲撃してきた戦闘機人2人と戦闘するも敗北。

ザフィーラはヴァイス陸曹と同様に意識不明の重傷を負い、シャマルも決して軽くない傷を負っている。

今は2人とも病院にいて、ザフィーラは治療を受けているがシャマルは既に復帰しており、他の隊員の治療を手伝っている。

本当はシャマルにも休んでもらいたいけど……シャマル自信が治療すると言って聞かなかった。

次にフォワード達。

ティアナとスバル、ギンガの三人には目立った外傷はない。

しかし、エリオとキャロの2人は機動六課に向かう途中で戦闘機人と接触し、その際に撃墜されている。

重傷とまではいかないものの、その傷は決して軽いものではない。

次にヴィータとリイン。

ゼストと名乗る謎の騎士と戦闘するが、敗北。

デバイスであるグラーフアイゼンは碎かれ、ユニゾンしていたリインも意識不明であり、アイゼン共々メンテナスを受けている。

ヴィータ自身は軽傷なのは喜ぶべきだろう。

フェイトちゃんとなのはちゃんは、戦闘機人と戦闘をしたものの外傷らしい外傷は見当たらない。

ただ、なのはちゃんは一見普段と変わらない様子やけど……心には、きつと誰よりも大きな傷を負っていることやろう。

その理由が……

「……………!!」

ダンッ！と力強く壁を叩く。

何もできなかった、何もしなかった私が泣く訳にはいかない。

この報告書をなのはちゃんに見せた時、なのはちゃんは何も反応を見せなかった。

”何も”……反応しなかった。

「兄ちゃんは……絶対……絶対生きてる」

報告書には、こう書かれていた。

” ヴィヴィオは敵戦闘機人によって拉致”

” 喜喜 右京は敵戦闘機人と戦闘、致傷及び拉致”

「ノーヴェ……」

ここは私のラボのとある一室。

この場には私とナンバーズの全員が揃っている。

但し、ノーヴェだけは体を拘束しているけどね。

「高町なのはの殺気をその身に受けて……」

「この有り様ツス……正直、ノーヴェが先に飛び出さなかったら、あたしがこうなったかもしれないツス」

チンクとウエンディが悲しそうな表情でノーヴェを見ている。

……高町なのはと戦うことになったのは不運と言う他にない。

しかし、私はこうなって良かったとも思う。

「ノーヴェ」

「あ……ああ……ドク……ター？」

泣き叫んでいたノーヴェの体を拘束越しに抱き締める。

娘がこんなにも取り乱す姿を見るのは、親としては辛い。

しかしだ。

「怖かっただろう……だが、高町なのは姿こそが”人”なのだよ。私達は、高町なのはに殺気を向けられる、殺される思いをする……それだけのことをしたんだ」

チンク達のメモリーから見た高町なのは。

モニター越しに見ても、この身が震えるほどの怒りを感じた。

その怒りを直接感じたノーヴェ達は、どれほどの恐怖だったのか。

そして、その恐怖を感じた娘達もまた”人”だ。

もう彼女達を戦闘機人だと道具扱いなどさせない。

「今はゆっくり休みたまえ……」

「あ……」

ノーヴェの目に手を被せ、目を閉じさせる。

そして、その場をクアットロ以外の娘達に任せ、私はクアットロと共に部屋から出た。

「ルーテシアはどうだい？」

「だあい丈夫です。洗脳はしっかり解けましたよ」

「それは良かった」

部屋から出てすぐに、私は歩きながらクアットロと話を始める。

実は、ルーテシアにはとある洗脳がしてあった。

しかし、それも今は過去の話だ。

彼女の母、メガーヌ・アルピーノも直に目を覚ますことだろう。

……本来ならば、ゼストの身体も治そうと考えていた。

しかし、彼はそれを拒んだ。

(既に失った命、友と話をするその時まで保てばいい……か)

ゼストは昔、ストライカーと呼ばれるほどの凄腕の管理局員だった。

しかし、管理局上層部と脳みそ共の命令で私の研究所にメガーヌ・アルピーノ、スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマの母であるクイント・ナカジマと共に部隊を引き連れて調査に来た際にチンクと戦闘をしたが……。

ゼストとメガーヌは高い人造魔導師としての適性を持っていた為、人造魔導師として甦らせ、クイントと部隊の人間は命を落とした。

この人造魔導師として甦らせるという行為も、脳みそ共からの”お願い”だった訳だがね……。

この命令を、ゼストは友であるレジアス・ゲイズが下したのではないかと疑っていた。

私は真相を話したのだが……これも、日頃の行いという奴かな。

そう考えて苦笑をしながら、私とクアットロはとある一室に入る。

そこには、大人一人分が入る一つの生体ポッドが横たわり……その中身を見つめるヴィヴィオの姿があった。

「……彼の様子はどうだい？」

私が問いかけると、ヴィヴィオは首を振る。

やはり、彼はまだ目覚めていないらしい。

「パパ……」

ヴィヴィオが生体ポッドの中にいる人物の名を呟く。

パパ……つまり、生体ポッドの中には、喜喜 右京。

チンク達が連れ帰ってきた右京は血まみれだったが、今では傷一つない。

しかし……目覚めない。

身体の傷が治っても、彼は目覚める気配がない。

リンカーコアにも大きな傷を負っていたが……今では七割ほど修復出来ている。

いや……七割まで”しか”修復出来ない。

それ以上はどうやっても修復出来ないのだ。

理由は分からないが……何かが邪魔をしているように思えてならない。

「……さて……ヴィヴィオ。君には少し、痛い思いをしてもらおうよ」

「……」

コクリと、彼女は無言で頷く。

彼女は、自分がどういふ存在なのか、これから自分がどうなるのか知っている。

だからこそ彼女は……こんなにも無表情なのだろう。

「……クアットロ。頼むよ」

「はい」

クアットロはヴィヴィオを連れ、部屋から出る。

私は生体ポッドの前に行き、その中で眠る喜喜 右京を見下ろす。

「君という欲しいモノが手に入ったというのに、私はちっとも嬉しくないんだ……なぜだろうね」

苦笑を浮かべ、私は喜喜 右京に問いかける。

返ってきたのは、ゴボ……という気泡の音だけだった。

＼スカリエツテイ side out＼

＼No side＼

日が沈みきる少し手前。

なのはは、右京が連れ去られた現場に足を運んでいた。

未だ痛々しい傷跡を残す現場を、なのはは虚ろな目で見つめる。

「右京さん……」

なのはの目には、血まみれの右京と、泣きじゃくる自分の姿が幻視
出来てしまう。

今も脳裏に焼き付いて離れない光景を思い出し、なのはは吐き気を
右手を口に抑えることで耐える。

「ヴィヴィオ……」

自分がない間に連れ去られてしまった娘の姿を思い浮かべる。

帰ってきたら、キャラメルミルクを作ると指切りをした。

その約束を守ることが出来なかった自分に腹が立つ。

「ここにいたんだ……なのは」

「フェイト……ちゃん……」

不意に、なのはの隣にフェイトが並ぶ。

フェイトは現場を見て辛そうな顔をするが、その顔はなのにも向けられた。

「……なのは、顔色悪いよ？あんまり眠れてないんだし、今日はもう休んだ方が……」

「右京さんはね……血まみれで倒れてたんだ」

なのはの言葉に、フェイトは途中で言いかけた言葉を飲み込む。

なのはは変わらず虚ろな目で、右京が倒れていたという場所をみつめていた。

「きつと生きてる……そう考える度に、あの血まみれの姿が思い浮かぶんだ……こんなこと考えちゃいけないのに……」

こんなこと……とは決して、なのはは口には出さない。

フェイトもなのはが何を考えてしまうのかが分かかってしまい、悲痛

な表情を浮かべる。

「ヴィヴィオも連れて行かれちゃった……あの子……きっと泣いてる」

右京とヴィヴィオという大切な宝を両方奪われ、なのはは虚ろな瞳から涙を流す。

その両手が、両肩が震えているのは怒りからか、それとも悲しみからか。

「ねえフェイトちゃん……私……どうすればいいのかな」

なのははフェイトの方に振り向き、笑った。

涙を流しながら、壊れたように彼女は笑う。

フェイトはなのはの笑みを見て目を見開き……笑みを浮かべた。

「取り返すんだよなのは」

「……………」

「右京さんもヴィヴィオも……取り返す。大切に大好きで……側にいたいから」

簡単でしょ？ そう言ってフェイトは笑う。

なのははフェイトの笑顔に魅入り……壊れたようにではなく、彼女本来の笑みを浮かべた。

簡単なことだった。

大切で、大好きで、側にいたい人達が奪われた。

だったら取り返せばいい。

何を弱気になっていたのかと、なのはは自分を叱咤する。

「そうだね……取り返せばいい」

「うん。だから、頑張ろうなのは」

「うん!!」

取り返す。

大事だから。

折れかけた不屈の心は今一度、外に出て空を見上げる。

沈みかけた日のオレンジと、藍に染まるグラデーションを美しいと感じ、似通った魔力色を持つ男性と、綺麗な虹彩異色の瞳を持つ少女を重ねる。

「待っててね……」

それは、どちらにも向けた言葉。

なのはの目には、力強い光が灯っていた。

フオワード陣達は皆、自らを磨いていた。

ティアナとギンガの2人は、切り札になる自分の魔法を万全なものへとする為に訓練をし、エリオとキャロは怪我を癒やしつつ、今まで教わってきた戦術の復習をしている。

4人の心は一つの目的を持っていた。

”絶対に右京とヴィヴィオを取り返す”

その目的は当然、スバルも持っていた。

スバルはマリエル技師の元へと足を運び、自身の相棒デバイスである”マツハキヤリバー”と2人で考えたマツハキヤリバー強化プランをマリエルに提示した。

自分をもっと速ければ、右京は連れ去られなかったかもしれない。

そう考えたスバルは、マツハキヤリバーが基礎を組んだ強化プランを実行することにしたのだ。

（私は、右京兄いに救われた……だから、今度は私が右京兄いを助ける！！）

なのはと同じ光を目に宿し、スバルは決意を固める。

その決意を感じたかのように、手元にあるマツハキャリバーも発光するのだった。

（No side out）

夢を……見ていた気がする。

長い……長い夢を。

「どんな夢だっけ……」

随分とファンタジーな夢だった気がするのだが、思い出せない。

思い出せないことは今は頭の隅に追いやるとして、今、自分がいる場所を確認する。

壊れた電子機器や、18禁を示す本、何かの衣装などがきつちりと棚などに入っており、どこかの倉庫のような印象を受ける。

「って実際倉庫だったな……片付け終わって居眠りでもしてたのか……？」

ここがちかげの家の倉庫であることを思い出し、ポリポリと頭をか
く。

そういえば、ちかげは一緒に片付けるハズが逃げ出したんだよな……
…説教だな。

そう考えながら、俺は倉庫から出る。

すると、扉の前には……

「あ……右京……さん？」

「……みちる……」

みちるがいた。

なぜだろうか……物凄く久しぶりに会った気がする。

たった数時間離れていただけなのに……なぜだろうか。

「……片付け、終わっただんですか？」

「あ、ああ……終わった。ただ、ちかげが逃げ出してな……」

「ちかげさんなら、ぱな子さんに捕まってましたよ。ちかげさんが
逃げ出したお詫びに、ぱな子さんがお昼をご馳走してくれるそう
です」

「そいつは楽しみだな」

なぜだろうか。

こんな日常的な会話が、なぜかとても嬉しく感じる。

なぜだろうか。

俺がここにいることに、妙な申し訳なさを感じる。

「右京さん」

「なんだ？ みちる」

みちるが俺の顔を見て、小さく何かを呟く。

その後すぐに、みちるは俺の手を引いて走り出したのだった。

……俺の聞き間違いでなければ、みちるはこう言った。

「お帰りなさい」

一体、どう意味だろうか。

ただ、なぜか俺には……”ただいま”と返すことが出来なかった。

（No side）

時空管理局地上本部、及び、機動六課襲撃より数日後。

未だ癒え切らぬ傷を負っている管理局の傷に塩を塗る出来事が起きた。

『見ているか？ 聞こえているか？ 管理局の諸君』

管理局全体に、モニターを通してスカリエッティの声が響く。

そのモニターに映る巨大な影を見て、一部の人間が息を飲んだ。

『これこそが、君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力……そして、私たちの自由への方舟』

役者のように両手を大きく広げるスカリエッティは、巨大な影を見て笑みを零す。

巨大な影は大地を割って現れ、今尚少しずつ天空へと上っていく。

『旧暦の時代、一度は世界を席卷し、そして破壊した古代ベルカの悪夢の叡智……』

巨大な影の姿がハッキリと露わなる。

金色に輝く、あまりに巨大なその体躯。

これこそが、古代ベルカの時代に存在した最大にして最強の”巨大空中戦艦”。

『聖王のゆりかごだよ』

管理局はすぐに戦闘準備に入り、各地からゆりかごがある場所へと向かわせる。

はやて率いる機動六課も例に漏れず、その場所へと向かう。

十年前、共に戦った戦艦”アースラ”と共に。

「行くでみんな……大事なものを取り返しに！！」

【おっ……！】

隊長陣はリミッターを外し、フォワード陣はバリアジャケットを展開する。

準備は万端、気合いは充分。

後に”JS事件”と歴史に名を残す戦いが……今、始まった。

始まる戦い（後書き）

いよいよ始まるゆりかご戦争です。

自分はアニメのゆりかご戦争は一切見たことはありません。

捏造にブレイクだらけになる気がします……。

管理局対無限の欲望（前書き）

藍蘭島に投稿するという暴挙をした自分を許して下さい（涙

遅くなって申し訳ありません。

しかも遅くなった割に、展開が早すぎだったり、全体的に微妙と思われるかもしれません。

臆気な記憶とオリジナルを混ぜたら……どうしてこうなった。

ティアナ「それでは……管理局対無限の欲望……始まります」

管理局対無限の欲望

↳ No side

ここは、聖王のゆりかごへと向かう戦艦アースラの中。

そのブリーフィングルームにて、なのはとヴィータ、フォワード四名とギンガが集まっていた。

「今回の任務は、今までとは比べ物にならないくらい難しい任務になると思う」

「あたしやなのはも、お前らが危なくなっても助けには行けねえ」

なのはとヴィータはいつも以上に真剣な表情をして5人に話す。

5人は2人の言葉を受けるも、その表情には焦りや不安といった色は浮かんでいない。

5人の顔に浮かんでいるのは、”絶対にやるんだ”という気合い。

その表情を見たなのはとヴィータは、満足気に一度頷く。

「自分で言うのも何だけど、訓練……キツかったよね」

【あはは……】

苦笑を浮かべたなのはの言葉を聞いて、フォワード達は冷や汗をかきながら苦笑する。

その訓練の様子を知るギンガもまた、苦笑した。

「けれど、みんなはそのキツかった訓練をこなして……実力もついた。誰にもでも勝てる、とはいかないけれど、どんな状況になっても負けない力がついたハズだよ」

「今のお前らなら、あたしらがいなくても大丈夫だろ……やってみせる」

【はい!!】

「なのはさん」

「ティアナ？」

激励の後、ブリーフィングを終えてアースラの転送装置に向かう通路。

ブリーフィングルームにいた全員がその転送装置に向かう途中、ティアナがなのはを呼び止めた。

なのはは立ち止まり、ティアナの方を向く。

ティアナはなのはを前にしばらく俯き……やがて、決意の光を瞳に

宿し、顔を上げた。

「なのはさん。私は右京さんのことが、一人の男性として好きです」
突然の告白に、なのはは啞然とする。

対するティアナはなのはに近付き……なのはの胸の前に右手を銃の形にして突き付けた。

「飛べない私じゃ、ゆりかご（あそこ）まで行けない。そもそも、私達の役割は敵戦闘機人の捕獲……右京さんを助けに行くことすらできない」

なのはに向けられたティアナの声は凜としていて、どこか美しさすら感じさせる。

しかし、なのははその言葉に言い知れない悲しさを感じた。

「だから……なのはさん。絶対に右京さんとヴィヴィオを助け出して下さい。失敗なんてしたら……私はあなたを撃ち抜きます」

それだけを言い残し、ティアナは突き付けていた右手を下ろして転送装置へと向かった。

残されたなのはしばらくティアナの後ろ姿を見つめ……見えなくなった時に首もとのレイジングハートを握り締めた。

「助けるよ。ヴィヴィオも右京さんも」

なのはの中で固まっていた決意が更に強固になる。

なのは教え子であり、ライバルであるティアナに心で礼を言い、自らも転送装置に向かうのだった。

なのはから離れた場所を歩きながら、ティアナはポケットから待機状態のクロスミラーージュを取り出す。

「やるわよクロスミラーージュ。私達で……みんなで」

「OK master。……master」

「なに？」

「……大丈夫ですか？」

クロスミラーージュの言葉に、ティアナは目を見開く。

しかし、すぐにまた目を細め……フツ……と小さく笑った。

ティアナは一度立ち止まり、手にしたクロスミラーージュを額に当てる。

「大丈夫よ……ただ……ううん、何でもない。行くわよクロスミラーージュ。スバル達が待ってる」

「……OK master」

額に当てたクロスミラージュを再びポケットに仕舞い、ティアナは転送装置へと向かう。

その際、一瞬クロスミラージュに映った自分の顔が泣いていたのは、ティアナは気のせいだと思ふことにした。

（勝ち目がない恋^{たにかい}だつて分かつてるのに……ね）

そう思ったティアナの表情を知る者は……ティアナを含めて、誰もいなかった。

ゆりかこの周りで様々な色をした光が走り、何度も爆音を轟かせる。

光は管理局員の魔導師が放つ魔法の色であり、爆音はガジェットが破壊される音。

ゆりかこの周りには夥しい数のガジェットが飛んでおり、管理局員達に攻撃を仕掛けている。

数で圧倒的に勝り、AMFを備えるガジェットに対し、管理局員は苦戦する。

倒しても倒しても減らない、倒したそばからゆりかごより現れるガ

ジェット。

その内の一体が、一人の男性管理局員に向けてレーザーを放った。

「うわっ!?!……え?」

直撃を覚悟した管理局員は目を瞑り、意味もなく、手にしているストレージデバイスを盾にする。

しかし、いつまで経っても覚悟した衝撃はやってこず……管理局員は恐々と目を開ける。

その目に移ったのは、桜色の盾と白い背中。

「た……高町教導官?」

「目を閉じたら負けだよ……絶対諦めないで」

管理局員にそう言い残し、なのはは戦場の空を飛ぶ。

その姿を見た管理局員もまた、ストレージデバイスをしっかりと握り、ガジェットへと立ち向かった。

「デイベイン……バスター!!」

ガジェットがいる空に、一筋の桜色の光が通り過ぎる。

光が消えて一瞬の間を置き、連続して爆発が起き、爆発の後をなのはは飛ぶ。

途中でヴィータと合流し、2人は背中合わせになってそれぞれのデバイスを構える。

「随分調子がいいな」

「ヴィータちゃんこそ」

2人は笑みを浮かべ、会話をしながらもガジェットを破壊していく。時折飛んでくるレーザーはヴィータが防御魔法を用いて弾き、なのはがすぐさま反撃して撃墜する。

「お前はあたしが守ってやる」

「ありがとうヴィータちゃん」

背中越しに会話を終え、2人はゆりかごに向かって飛ぶ。

その途中、管理局員から通信が2人に届いた。

通信の内容は、ゆりかごの中に侵入する為の入口を見つけた、というもの。

通信を受けた2人はすぐにその場所へと向かい……ゆりかごの中へと侵入するのだった。

場所は変わり、ここはとある森の中。

そこに佇むフェイトと赤紫の髪をおかっぱにした、両手にトンファの形をしたデバイスを持ち、バリアジャケットと思わしき軽装をした女性”シャツハ・ヌエラ”は目の前の岩壁……にある人工的に作られた入口を見ていた。

この入口の奥に、スカリエツティのアジトがあるという情報をヴェロツサ・アコース捜査官から受けたはやてがフェイトに伝え、先程到着したのだ。

シャツハは”聖王教会”と呼ばれる教会に所属するシスターであり、こと接近戦においてはシグナムに匹敵する実力者でもある。

2人は入口へと入り、用心しながら機械の道を進んでいく。

時折見える子供サイズの生体ポットを見て、フェイトは顔をしかめると同時に疑問を口にする。

「なぜ、生体ポットが割られているのでしょうか……」

「私には分かりかねます……」

フェイト達が見た生体ポットはかなりの数だったが、その全てが例外なく割られ、使い物にならなくなっていた。

天才科学者であり、次元犯罪者ということで知られているスカリエツティが自発的に割った、ということは考え難い。

しかし、ここでフェイトの脳裏に地上本部襲撃時のスカリエツティの言葉が浮かんだ。

(望まぬ研究……まさか、本当に?)

スカリエツティが言った言葉が本当だとすれば、この状況にも納得がいく。

聖王のゆりかごも、スカリエツティによって出現したが、攻撃を始めたのは管理局が先だった。

邪魔をするなら迎え撃つ。

スカリエツティはそう言っていた。

「フェイトお嬢様」

「お迎えにあがりました」

俯いて思考していたフェイトは顔を上げ、目の前にいる2人の人物を見据える。

シャツハもデバイスを構え、2人の人物を睨み付ける

「あの時の戦闘機人……」

「トーレと申します」

「セツテと申します」

現れたのは地上本部襲撃の日、フェイトと対峙したトーレとセツテの2人。

2人は簡単に自己紹介をし、フェイトに向かって頭を下げる。

2人の手には武器は握られておらず……フェイト達は無防備な姿で現れたことに不信感を抱く。

「迎え……と言いましたね」

「ええ。但し、フェイトお嬢様のみですが」

「あなたはお呼びではないので……消えていただきます」

シャツハの問い掛けにトーレは丁寧に答える。

その後に行くようにセツテは言葉を続け……言い終えた瞬間、シャツハの右足首を地面から現れた手が掴んだ。

「なっ!?!」

「シスターシャツハ!?!」

シャツハはその手によって地面へと引きずり込まれる。

フェイトはシャツハに向かって手を伸ばすが……その手を掴むことは叶わず、シャツハは地面へと姿を消してしまった。

「シスターシャツハ……」

「申し訳ありませんフェイトお嬢様……」

「ですが、あの方には一切危害は加えないことをお約束します」

2人の言葉を聞いても、フェイトは信じることは出来ない。

しかし、無防備な姿を晒している2人の姿と先日のスカリエツティの言葉を思い出していたフェイトは、少しだけ信じてもいいかも知れないと考えていた。

「来て……ただけますね？」

何度目かのトーレの問い掛け。

フェイトは、無言を返すことしかなかった。

場所は変わり、ここは廃墟が並ぶ市街地。

その市街地の所々崩れてしまっている高速道路の上を進んでいるのは、フォワード陣とギンガの5人。

5人は、この市街地に現れたという戦闘機人を確保するという任務を担っていた。

「あ………!!」

「キャラロ!?」

その途中、キャラロが何かに気付いたように声を上げ、進む方向を変えた。

それに気付いたエリオも、キャラロを追いかける為に方向を変える。

「キャラロ!? エリオ!?」

「キャラロはエリオに任せましょ。私達は、戦闘機人を……」

突然方向を変えた2人に向かって声を上げるスバル。

そんなスバルに対し、ティアナは冷静に対処するが、視界に入った、猛スピードでティアナに向かってくる人影を見て言葉が途切れた。

「あなたはこっちに来てもらうツスよ!!」

「キャラアツ!!」

「ティア!?」

猛スピードで飛んできた人影……それは、ライティングボードにのったウエンディだった。

ウエンディはティアナを攫うように抱きかかえ、近くの廃ビルの中へと入っていった。

スバルはすぐに追いかけてしようとするが、その前に廃ビルを緑色の結

界が囲んだ。

「すまないが、お前達にはここで足を止めてもらおう」

「誰！？……えっ？」

突然かけられた声に、スバルとギンガは戦闘態勢を取る。

2人の前に現れたのは……チンクと右京だった。

場所は変わり、スバルとギンガのいる高速道路とは違う別の高速道路の上。

そこにいるのは、キャラとルーテシアの2人。

その近くでは、エリオとルーテシアの召喚獣であるガリユールが戦っていた。

「教えて！！あなた達の目的を！！」

キャラはルーテシアに問い掛ける。

ルーテシアは左手を前に出し、いくつもの小剣を作り出す。

それを見たキャラもまた、羽の形をした魔カスフィアを作り出した。

「……私の目的は……」

呟くように、ルーテシアが答えようとする。

そして、ルーテシアの出した答えはキャロを驚愕させた。

「私の目的は……右京を”お兄ちゃん”って呼んで……お母さんと三人でピクニックに行くこと」

この瞬間、キャロの戦意がガリガリと削られていき、ガリユーは主の言葉を予想していなかったのか転けそうになり、エリオは”えっ？”という表情になったのだった。

再び場所は変わり、ここは廃ビルの中。

ウエンディによって連れ込まれたティアナは廃ビルの中心に片膝を着いていた。

そのティアナの前に並び立つ2つの人影……ウエンディとディードはそれぞれの武器を構える。

「あんたに恨みはないんすけど……ここで足止めさせてもらっつスよ」

「念話はこちらで傍受していますし、この結果はあなた達では破れません。殺しはしませんので、安心して下さい」

（足止め……？）

ウェンディの足止めという言葉を聞き、ティアナは疑問に思う。

相手の言う通りならば、念話をして相手にも筒抜けであり、脱出も援軍も期待出来ない。

しかも相手は2人で自分は1人、どう考えても自分が不利。

にもかかわらず、相手の目的は自分の足止めであり、殺すことはないという。

（私達フォワード陣の目的は戦闘機人の確保だから、こんなことをしても足止めにはならない。ということは、私達をどこかへ行かせたくない……？）

ティアナは考える……どこへ行かせたくないのか。

しかし、ウェンディとデイドが考える時間を与えてくれるはずもなく……三人は戦いを始めるのであった。

（No side out）

ちかげの家の倉庫を掃除した日から数日が経った。

その間、俺はいつもと変わらない日々を送っていた。

みちると島を散歩し、行人やすずと一緒にどこかへ出かけたり、釣りをしたり、稽古をしたり。

他の仲間達と一緒に遊んだり、学校に行って勉強をしたり、たまに仲間達を説教したり。

そんないつも過ごしていたハズの毎日が、なぜかとても懐かしく感じて。

なぜか……物足りなく感じていた。

そんないつもの朝を迎えて朝食を終え、少し時間を挟んで昼食を終え、縁側で食後の茶を啜っている時だ。

「ん……？」

ひらひらと……ぼんやりと眺めていた空に、一枚の桜の花びらが舞っていた。

瞬間、俺の頭に何かの光景がフラッシュバックする。

4人の少年少女に、青い獣、医者のような女性に、赤みの強いオレンジ色の髪の少女に、剣を構えた女性に、妖精のような大きさの少女、俺と同じ茶髪の女性に、金髪の大剣を構えた女性、そして……。

気付いた時には、俺は裸足のまま縁側から立ち上がり、舞っていた桜の花びらを右手で掴んでいた。

「……なんだ……今の記憶は……？」

手にした桜の花びらを見ながら、フラッシュバックした光景を思い出す。

あんな光景を俺は知らない。

「本当に知らないのか？」

自分から自分へと問いかける。

知らないハズ……だが、今見たものはあまりにリアルだ。

それ以前に、もう桜は散っているハズだ。

この花びらはどこから飛んできたのだろうか。

「……って決まってるわな……」

この藍蘭島に桜の木は一つしかない。

俺は、なぜかその桜を無性に見たくなった。

「右京さん？ そんな所に立ってどうしたんですか？」

いつの間にか、みちるが戻ってきていた。

俺は、手にした桜の花びらとみちるを交互に見て……なぜか余計に見たくなった。

「みちる……行くぞ」

「行くって……どこへですか？」

「北の岬に……桜を見にな」

〈No side〉

ゆりかごの中を、なのはとヴィータはガジェットを倒しながら進んでいた。

しかし、なのはよりもヴィータが前に出て率先してガジェットを破壊していく為、ヴィータは疲労の色が濃い。

「ヴィータちゃん、飛ばしすぎだよ……」

「うるせえ、後衛の魔力を温存させるのも、フロントアタッカーの

仕事なんだよ」

ヴィータの返しをなのはは嬉しく思っても苦笑を浮かべる。

そんな時、2人にゆりかご内部の見取り図が送られてきた。

その見取り図によれば、2人の位置はゆりかごの動力炉に近く、ヴィオがいると思わしき玉座からは遠い。

故に、2人は決断した。

なのはは来た道を戻り、玉座へと向かう。

ヴィータはこのまま動力炉へと向かう。

「気をつけるよなのは」

「ヴィータちゃんもね」

互いに互いの身を案じ、2人は別れる。

それぞれが、それぞれの成すべきことをする為に。

「待っててヴィオ……右京さん」

愛する人達の名を呟き、なのはは玉座へと向かう。

ゆりかご内部はAMFが展開されているにも関わらず、その速度は速い。

なのはそのまま速度を緩めることなく、進んでいくのだった。

管理局対無限の欲望（後書き）

クリスマスまでにゆりかご戦争終わる気しねえorz

番外編やクリスマス番外編のネタ募集しております。

右京に降りかかる災難も、もう一度やろうかなあと考えています。

クリスマス番外編は26日にする予定です……マジ頑張れ自分。

番外編 クリスマス（前書き）

今回はクリスマス番外編。

時系列的には、ゆりかご戦争が終わった後……ということになります。

なるべく甘くしたつもりですが……いかん、胃がキリキリと

右京＆なのは「それでは、番外編 クリスマス……始まりませう」

番外編 クリスマス

「右京さん！！今日はクリスマスだよ！！」

「ん？ ああ、もうそんな時期か」

食堂でなのは、ヴィヴィオと朝食を取っている最中になのはがそんなことを言ってきた。

今日は12月25日……クリスマスだったな。

1人旅をしていて、恋人や家族がいなかった俺にとっては縁遠い話だった。

「ミッドにもクリスマスはあるのか？」

「あるよ。昔の地球出身の魔導師が12月25日はクリスマスだつて話をして、恋人や家族と一緒に過ごす特別な日っていう解釈になつてるけど」

ああ、それで機動六課には誰もいないのか。

年末も機動六課隊員達はこの隊舎の中で待機していないといけないうと言っ割に、今日は人がいない。

しかし、クリスマスは特別な日ということで、今日1日は各々が自由で過ごしてよらしい。

っていうメールが昨日の夜届いたな……はやてから。

「クリスマス？」

「そうクリスマス。なのはママと右京パパ、ヴィヴィオのみんなです。ずっと一緒に過ごす日だよ」

普段は訓練やデスクワークでヴィヴィオと長い時間いてやることは出来ない。

だが、今日はクリスマスで1日好きなように過ごしてもいい日だ。

「ずっと一緒？」

「ずっと一緒」

「ずっと一緒だ。今日だけじゃなくて、これからもずっと」

「あ……えへっ」

俺の膝の上に座っているヴィヴィオの体を抱き締めながらずっと一緒に繰り返す。

ヴィヴィオは俺となのはを交互に見て……花が咲くような笑顔が浮かべた。

隊服から私服に着替え、それぞれロングコートとマフラーを着用した万全の体制でクラナガンへとやってきた。

広場には巨大なクリスマスツリーが配置されており、目に映る全ての店には”merry Xmas”と表記された旗やら看板が立ち並んでいる。

目に見える人はそのほとんどが家族、或いは恋人連れという状態であり、その誰もが例外なく笑みを浮かべている。

「パーママー」

「ん？」

「なあに？」

「手、つなご？」

ヴィヴィオが俺となのはに向かって両手を伸ばす。

そんな仕草も可愛らしく……俺となのはは互いを見合い小さく笑った。

「「喜んで」

「あはっ」

ヴィヴィオの右手を俺が、左手をなのはが握る。

小さく、冷たい手……しかし、温かい。

ヴィヴィオは手を握られたことが嬉しいのか、ぴよんぴよんと飛び跳ねている……いや、前で同じことをやっている子供がいるから、真似をしているだけかもな。

さて、まずはどこへ行こうか

やってきたのは以前俺がきたことがデパートだ。

なぜ来たかと言えば、プレゼントをかう為だ。

本当なら”サンタさん”が……となるのだが、ミッドチルダではクリスマスはあってもサンタはいないらしい。

なので、プレゼントは直接手渡すのが一般的なようだ。

「ヴィヴィオは何が欲しいんだ？」

「う？ ん〜…」

問いかけてみると、ヴィヴィオは困った表情をして周りを見渡す。

すると、ある一点に目が止まり……走り出した。

「っつてコレ」

「あはは……ヴィヴィオー走ると危ないよー」

走り出したヴィヴィオを、俺となのははゆっくりと歩きながら追い掛ける。

ヴィヴィオが入った場所は、ぬいぐるみなどが置いてあるファンションショップだった。

俺達が追いついた時には、ヴィヴィオは一つのぬいぐるみを抱きかえ、買って欲しそうにこちらを見ている。

「買ってあげますか？」

「愚問だなソル。その為に来たんだから」

「そうだね」

「駄猫は言葉を発しないで下さい」

「ヒドいっ!?!?」

ソルとなのはの言い合いに苦笑を浮かべながら、俺はヴィヴィオへと近付く。

俺はヴィヴィオの前まで行き、目線を合わせる為にしゃがむ。

「それが欲しいのか？」

「うん!」

ヴィヴィオが抱きかかえているのは……ザフィーラによく似た青い毛色の犬のぬいぐるみ。

ヴィヴィオはザフィーラを”ザフィー”と呼ぶ程に懐いているからな……欲しがるのも分かる気がする。

「んじゃ、買いにいきますか」

「わーい」

ぬいぐるみはヴィヴィオがレジまで持っていき、そのまま購入した。

勿論、クリスマス用の包装紙に包んでもらった。

「そろそろいい時間だね……どこかでお昼にしようか」

「そうだな。とは言っても、俺は店を知らないんだがな……」

時間は昼時。

今はデパートから出て街を歩きながら、昼食を取る場所を探している。

俺となのはの間にはヴィヴィオがぬいぐるみの入った紙袋をご満悦

の表情で抱き締めている。

さて、俺はクラナガンの昼食を取れる店なんて、先ほどのデパート階の店しか知らない。

今からデパートに戻るのモナ…。

「あ、じゃああそこにしようよ」

「あそこ？」

「なのはが指差した先には、”レストラン・エメラルド”という看板があるファミレスだった。」

店外は鮮やかな翠色をしており、入ってみると、店内は木造であり、まるで森の中にいるような錯覚さえ覚える。

「いらっしやいませー。三名様ですか？」

「はい」

「わかりました。それでは、席の方へご案内いたします」

男性店員に案内されたテーブル席へと座り、メニューを開く。

因みに、俺の前になのはが座り、なのはの隣にヴィヴィオが座っている。

メニューにはハンバーグやオムライスと言った料理名が並んでおり、ヴィヴィオはメニューを見ながらうんうん唸っている。

「今頃みんなもご飯食べてるかな」

「さあ……どうだろうな」

俺達三人はこうして休日を満喫しているが、それは何も俺達だけではない。

はやて一家は久々の休日を自宅でゆっくりと過ごすと言っていた。

フェイトとキャロ、エリオの三人は俺達と同じように今日の休日を仲良く過ごすらしい。

ティアナとスバルとギンガの三人は、昔したようにクラナガンの街を巡ると言っていたな。

八神家では、今頃ははやての作った料理に舌鼓を打っている頃だろうか。

フェイト達は、俺達と同じようにどこかの店に入っているのかもな…… 案外、フェイト自身が腕を振るっているかもしれない。

ティアナ達は、食べ歩きをしている気がするな…… スバルが片手にアイスを持っている姿が容易く浮かぶ。

「さて、ヴィヴィオは食べるものは決まったか？」

「んとな……これが食べたい」

「あ、いいね。私もそれにしようかな」

ヴィヴィオがメニューに載っている料理を指差し、なのはがそう言うのと2人の視線がメニューから俺へと移る。

何かを期待しているような目をしているが……ふと、ヴィヴィオの指差したメニューが目に入る。

そのメニューに書かれているのは……。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

丁度いいタイミングで先ほどの店員がやってきた。

俺達は互いに顔を見合わせ……同じタイミングで同じ料理名を発した。

「……あつたかクリームシチューで」「」

「ん」

ヴィヴィオがスプーンを口に入れながら、幸せそうな笑みを浮かべる。

隣にいるなのはも、似た笑みを浮かべている。

その2人の様子を見て、血は繋がっていないなくても”家族”なんだと改めて思う。

「右京さん」

「ん？」

「はい、あーん」

なのはがシチューを掬ったスプーンを俺の口元へと持ってくる。

……俺も同じものを食べているんだがな。

とは言っても、差し出されたものは食べない訳にはいかないし、イヤな訳でもない。

「あーん……んむ」

「美味しい？」

「ああ美味しいな……なのはの方が」

「っ！？」

なのはの顔が一気に真っ赤になる……可愛い奴。

なのははキョロキョロと挙動不審になっているし、ヴィヴィオはスプーンをくわえながら不思議そうに首を傾げている。

そんな2人を見て、どちらも愛おしく感じる。

「う、右京さ……こんなところで何言って……」

「なのはの作ったシチューの方が美味いって話したが？ な、ヴィ
ヴィオ」

「うんっ
」

そう言つてヴィヴィオに笑いかける俺、笑顔を返すヴィヴィオ、テ
ーブルにガンツ！！ と額を打ちつけるのは。

そんななのはを見て、ヴィヴィオはまた不思議に首を傾げ、俺は苦
笑を浮かべる。

「ナニと勘違いしたのかねえなのはママは」

「ねー」

「右京さん……ズルい……」

ヴィヴィオはきつと意味を分かっていないんだろっなあと考えてい
ると、なのはが若干涙目になつて真つ赤な顔で睨んできた。

勝手に勘違いしたのはそつちだと言つのに……ま、ワザとなんだが
な。

「悪かったよ。ほらなのは、あーん」

「むう……あーん」

「ヴィヴィオもー！」

「はいはい。あーん」

「あーんむ」

その後しばらく、俺達は互いに食べさせあっていた。

俺はなかなか楽しかったが……周りの視線がやたら生暖かく、殺気が混じっていたのはなぜだろうか。

昼食を終え、その後もしばらくブラブラと歩いていたが……気がつけば、時刻は六時過ぎ。

日はすっかり沈み、暗くなった街を飾られている色とりどりのイルミネーションが照らしている。

中でも一段と目を引くのが、今俺達の目の前にある巨大なクリスマスツリーだろう。

どこかの御神木でも引っこ抜いてきたのではないかと、という程にデカイ。

それ以上に飾り付けがスゴい。

スゴいと言いたいようがないほどに……スゴい綺麗ではある。

「わあー……」

現に、なのはとヴィヴィオの2人は魅入っている。

2人だけでなく、このツリーを見上げている人は全員魅入っていることだろう……俺も例外ではない。

それほどまでに、このクリスマスツリーは美しかった。

不意に、俺の左手を誰かに握られる。

ヴィヴィオか？ と考えたが、ヴィヴィオはプレゼントを抱きかかえている為、手はあいていない。

となれば、後は1人だけ……とクリスマスツリーに向けていた視線を繋がれている手へと向け、繋いでいる手に沿って視線を上げていく。

「……………」

その視線の先には予想通り、顔を少し赤く染めたなのはがこちらを見ている。

なのはは目が合うとはにかんだ笑顔を浮かべ……少し俺に体を寄せた。

なのはは俺の肩に頭を寄せ……いつの間にか、繋いでいた手は貝合わせのように繋がれている。

「……………綺麗だね」

「お前の方が綺麗だ……と言った方がいいか？」

「あはは……このクリスマスツリーに勝てる自信はないかな」

不思議と、自身の心臓の鼓動が速く感じる。

なのは苦笑しながらツリーを見ており……時々、何かを期待するように俺の方を一瞬だけ見る。

何を期待しているのやら……予想は出来るが。

「……私は……右京さんだけが見てくれるなら……綺麗じゃなくてもいいよ」

よくもまあそんなことを恥ずかしげもなく言えるもんだ。

……いや、滅茶苦茶恥ずかしいんだな……顔、超真っ赤だし。

それでも言葉にしたのは……本当にそう思ってくれてるからなんだろうな。

それは、本当に嬉しいことだ。

「……そうだな……なのはそのままできてくれ。着飾らなくても、背伸びしなくても……お前が隣にいてくれるなら、俺はなのはだけを見ているから」

「……本当に？」

なのはの瞳が不安げに揺れる。

案外、俺は信用がないのかもな……と内心で苦笑する。

まあ……本当に聞かれたなら、本当だと分からせるまでだ。

「ヴィヴィオは見てくれないの？」

しかし、俺が行動を起こすよりも早く、その行動は阻止された。

俺達の愛し子であるヴィヴィオによって。

俺はやれやれと苦笑しながらも、ヴィヴィオを抱き上げる。

「そうだな……右京パパはなのはママもヴィヴィオも見えないとな」

「えへへ」

「え〜なのはママだけじゃないの？」

「ヴィヴィオ」

「なのはママ」

いやはや、自分で言うのもなんだが……愛されてるねえ俺。

ま……俺も同じなんだけどな。

「両方見てるって言ってんだろぅがコラー」

「「キヤー」」

可愛らしい言い争いを続ける2人を、右手でヴィヴィオを、左手でなのはの腰に手を回して抱きかかえる。

口ではコラーなんて言ってるが、俺は全く怒っていない。

なのはとヴィヴィオも本気で言い争いをしていた訳ではない為、俺が抱きかかえるとすぐに笑顔になった。

「ほら……そろそろ帰るぞ。……隊舎に戻って晩飯食ったら、俺となのはママ合作のショートケーキが待ってるぞ」

「本当!？」

なのはの腰に回していた腕を外してなのはと手を繋ぎ、ヴィヴィオを抱きかかえたまま隊舎に続く道を進む。

帰ったらケーキだと言うと、ヴィヴィオはキラキラと目を輝かせて聞いてきた。

俺となのはは目を合わせて一度苦笑し……ヴィヴィオに向かって笑いかける。

「パパ（ママ）は嘘つかないぜ（よ）」

晩飯を終え、ケーキも食べ、風呂にも入って歯を磨いた頃には、ちらほらと隊員達が戻ってきていた。

ティアナ達も戻ってきていたが、フェイト達とはやて達は今日はそのまま外で過ごし、翌日に隊舎に戻ってくるらしい。

そのため、俺は今日1日なのはとヴィヴィオと一緒に眠ることになっている。

外で沢山歩き、お腹いっぱいになったヴィヴィオは俺からソルを預かり、一足早くベッドの中で寝息をたてている。

「ヴィヴィオ、寝ちゃったね」

「もう九時過ぎだしな……よい子は寝る時間ってな」

眠っているヴィヴィオの髪を撫で、なのはの座るテーブルまで歩き、なのはの向かいに座る。

窓際にセツティングされたテーブル席から見る窓の向こうには雪が

深々と降っており、イルミネーションの光を放つ街並みを幻想的に彩っている。

部屋は暗くしており、光源は窓から入る光だけだ。

「今日は……楽しかったか？」

「うん、すつごく。右京さんは？」

「楽しかったさ」

こんなに楽しかったクリスマスは何年ぶりだろうかね。

少なくとも、旅をしていた時には得られなかった楽しさだ。

俺は窓から見える景色を見て、視線をなのはへと移す。

なのはは右肘をつき、右手を頬に添えてこちらを見ていた。

「ねえ右京さん」

「ん？」

「来年も……再来年も……それからずっと後も。私と一緒に……クリスマスをご一緒に過ごしてくれますか？」

少しだけ、なのはの瞳が不安げに揺れた。

そんななのはの姿を見た俺はなのはの左頬に右手を添えて身を乗り出し……

「ん……」

なのはの唇へと口付けた。

壊れ物に触れるような、そんな浅い口付けを終えると、俺は席へと座る。

なのははびっくりしたように目を見開き……頬を淡い桜色に染め、照れたように笑った。

「右京さん……顔、赤いよ？」

「うるせえ……」

あはは、というなのはの笑い声を聞きながら、俺は再び窓へと視線を移す。

まさか俺が恥ずかしがる日が来るとは思わなかった。

まあ……別に悪い気分じゃあないが。

「ねえ右京さん」

「なんだ？」

「メリークリスマス」

なのはへと視線を移すと、ニコニコと笑みを浮かべている。

そういえば、今日は一度も言っていなかったな……そういう1日だったのに。

「メリークリスマス……いい子にはプレゼントがあるもんだが、プレゼントは何をこそ望んで？」

「あはは……もう一度、キスして欲しいかな」

「仰せのままに」

再び、俺となのはの唇が重なる。

深く……深く……時間も、寒さも忘れて。

啄むように、味わうように。

右手にそっと……買っていたプレゼントを忍ばせて。

今夜はクリスマス。

共に過ごす愛しい人と……最高の思い出を。

選択した答え……近づく終わり（前書き）

長らくお待ちせしました！

なんかもつ、温度差が激しくて自分が参ってしまいました。

安西先生……ギャグを上手く書きたいです……っ（切実

いつもより長めになりました。

右京&みちる「それでは、選択した答え……近づく終わり……始まり
「「

選択した答え……近付く終わり

〔No side〕

「ようこそ、フェイト・テストロッサ・ハラオウン」

「ジェイル……スカリエッティ」

トーレとセツテがフェイトの前に現れ、シャツハが地面へと姿を消した時から数分後。

フェイトはトーレとセツテの案内の元、機械の道を進み、沢山のモニターが存在する広い空間へと辿り着いた。

その中心には自身が追いかけていた広域次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティとウーノが立っており、歓迎するように声をかけてきた。

対するフェイトは、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「あなたを逮捕します」

「それは困るね……今はまだ、捕まる訳にはいかない」

フェイトはバルディッシュを構え、スカリエッティを見据える。

それに対し、スカリエッティは困ったように笑っただけであり、特に抵抗するような素振りは見せない。

それはフェイトの後ろにいるトーレとセツテ、スカリエッツィの隣にいるウーノも同じだった。

捕まる訳にはいかないと言っているわりに何の動きも見せない4人に、フェイトは疑問に思う。

そして、その疑問を口に出した。

「……ここに来るまでにみた生体ポットが全て割られていたのはなぜ？」

「必要がないからさ。もうあんな非人道的な実験はしたくないからね。機器がなくなればできないだろう」

フェイトの問い掛けにあっさりと答えるスカリエッツィ。

答えた時のスカリエッツィは辛そうな表情を浮かべており……フェイトには嘘を付いているように見えなかった。

しかし、彼が犯罪者であることには変わらない為、嘘の可能性もフェイトは持ち合わせておく。

「右京さんとヴィヴィオを攫ったのはなぜ？」

「ヴィヴィオは聖王のゆりかごを動かす為に必要だった。喜喜 右京は仲間にしたかったからだ……怪我もしていたしね。それに、私は息子も欲しかった」

フェイトは最後のスカリエッツィの言葉を聞いて、思わず「ん？」と首を傾げてしまう。

その仕草が面白かったのか、スカリエッツィはクスリと小さく笑った。

それを見たフェイトは恥ずかしさから顔を僅かに赤く染めるが、首を左右に振って平静を保つことに成功する。

「……最後に……あなた達の目的はなんですか？」

「私達の目的……いや、私の目的はね……」

スカリエッツィの表情が真面目なものへと変わり、鋭くなった目がフェイトの体を射抜く。

そんなスカリエッツィを見たフェイトは、ようやく目的が分かると思ひ、耳を傾ける。

そして、スカリエッツィの語った目的は……

「私が生み出したナンバーズ……娘達と共に暮らし、ウーノと添い遂げ、みんなでワイワイしながら幸せに暮らすことだ……!!……!!」

カツ!!と目を見開き、両手を広げ、少し恥ずかしそうに顔を赤くしながら断言したスカリエッツィ。

彼の後ろではウーノがもじもじと恥ずかしそうに、だが嬉しそうな表情を浮かべており、フェイトの後ろにいるトーレとセツテは「ドクターが父上に……？」と呟いており、満更でもないようだ。

そしてフェイトは……

「ごめんはやて……私には捕まえることなんて出来ないよ……」

左手で口元を隠し、スカリエッツィから顔を逸らしながら綺麗な涙を流していた。

今は最終決戦の真っ最中なのだが……このラボには、なんとも優しい空気が広がっていた。

場所は変わり、ここはスバルとギンガのいる高速道路。

2人は自身らの先天性の魔法であるウイングロードを作り出し、その上を走る。

「くっ、やはり当たらないか」

チンクがどこからともなく小剣を取り出し、2人へと投擲する。

しかし、ウイングロードの上を高速で移動する2人には当たらず、ダメージを与えることが出来ない。

ISを使えば、途中で小剣を爆発させることも可能なのだが……彼女の目的は2人の足止めである為、威力の高い自身のISを使うのは躊躇われた。

「2人は戦闘機人……爆発くらいでは死なない」

「それもそうだな……IS発動……ランブルデトネイター!!」

隣で腕を組みながら佇む右京の言葉を受け、チンクはスバルとギンガの進行方向に小剣を投げつけ、先程まで封印していたISを使って目の前で爆発させる。

爆炎に包まれた2人を見たチンクはやりすぎたか？ と考える。

しかしその考えは杞憂に終わり、爆炎の中からほとんど無傷の2人がチンク達に向かって跳んできた。

「はあああつ!!」

スバルは右手を、ギンガは左手に魔力を込め、チンク達目掛けて突き出す。

チンクと右京は後方へと跳ぶことで回避する。

回避された2人の拳は高速道路へと突き刺さり……凄まじい轟音と共に土煙を巻き上げながら崩れていく。

その様子を見たチンク達は冷や汗をかき、口元をひきつらせた。

「なんとという馬鹿力……」

思わずそう呟いてしまったチンクに頷く右京。

さて、2人は攻撃をかわした時からまだ上空にいる為、今は無防備な状態である。

そんな状態の敵を……なのはの訓練を受けたスバル達が見逃すだろうか？

「「デイバイイイイン……っ!!」」

「「っ!?!」」

答えは当然……否である。

煙の中からチンク達へと伸びる青と紫の道。

その道の上を、それぞれ右手と左手に魔力を込めた姉妹が行く。

片方は憧れた人の魔法を。

もう片方は好きな人の魔法を携え……同時に解き放った。

「バスタアアアツ!!!!」

「フイストオオオツ!!!!!!」

青と紫の光がチンク達へと飛び。

その光は数秒と経たずにチンク達へと迫り……その姿を覆い隠した。

「エリアルキャノン!!!」

場所は変わり、ここはティアナが閉じ込められた廃ビルの中。

ウエンディの声と共に、ウエンディが構えているライティングボードから砲撃が放たれる。

ティアナは砲撃をよく見てから右側へと体勢を低くして跳ぶことで避ける。

「ISツインブレイズ!!!」

しかし、跳んだ先には既にデイドが光剣二刀を振り上げて待ち構えていた。

だが、ティアナは焦ることなく……むしろ余裕の表情を浮かべてクロスミラージュの銃口を地面へと向けた。

「クロスミラーージュ!!!モードツー!!!」

「ダガーモード」

「えっ?」

ティアナの言葉と同時にクロスミラーージュの銃身からオレンジ色の魔力刃が発生し、地面へと突き刺さる。

突き刺さると同時にティアナの体は足から浮き上がり、デイドの頭上を飛び越えた。

デイドは振り上げていた二刀を振り下ろすも、そこにティアナはおらず、敵に背を向けるという大きな隙を晒すことになる。

「クリティカル……ブレード!!!」

ティアナはデイドに向けて魔力刃を飛ばす。

それは、右京が使う魔法だったが……右京とは違い、飛ばした魔力刃は二枚。

更に、ティアナのクリティカルブレードは魔力刃が回転している。

「させないツスよ!!!」

2人の間にウエンディが入り込み、ウエンディはライティングボードを盾にして魔力刃を防ぐ。

デイドはウエンディの背後から飛び上がり、ティアナに向かおう

とするが……

「っ！？ いない！？」

「デイドー！！上ツス！！」

2人の前方にいたはずのティアナの姿はなく、デイドーは驚愕する。しかし、ウエンディの慌てた声を聞いてデイドーはすぐに上を向く。

そこには、自分達に銃口を向けるティアナがいた。

「ハアツ！！っ！？」

「幻術！？」

デイドーは空中で体を回転させ、ティアナを切り裂く。

だが、切り裂かれたティアナは幻術だったらしく霧のように消えてしまい、デイドーとウエンディの2人は再び驚愕する。

冷静だったなら、2人は幻術だと見破れただろうし、今、どこにティアナがいるか分かっただろう。

戦闘機人である彼女達には、それを出来るだけの性能がある。

「クロスファイア」

2人の背後から声がする。

同時に、複数の魔力反応を感知する。

冷静だったなら、平静だったなら、2人はティアナに気付けたはずだった。

それでも、平静を乱し、気付けなかったのは……

「っ！！デイド！！あたしの後ろに！！」

「は、はい！！」

戦闘機人ではなく、人間である証なのだろう。

ウエンディはライティングボードを盾にし、デイドは言われたままにウエンディの後ろに隠れる。

「シュ ト！！」

そして、いくつものオレンジ色の魔力弾が2人に襲いかかった。

再度場所は変わり、ここはキャロ達のいる高速道路。

ここでは今、物凄く微笑ましい戦いが繰り広げられていた。

「私は……お兄ちゃんにプレゼントもらった」

「わ、私だつてもらったもん!! 一緒に寝てもらったことだつて
いっぱいあるもん!!」

「っ!? ……羨ましい……私も一緒に寝たい……」

そんな会話をしながらも、2人の間には小剣と桃色の魔力弾が飛び
交い、互いに相殺しあっている。

キャロと右京の繋がりを羨ましく思い、キャロの言葉を聞いて若干
涙目になっているルーテシアは、いつもより魔法の威力が下がって
いる気がするの、気のせいではないだろう。

「……………なんかごめん」

「……………」

そんな2人から少し離れて戦っていたエリオとガリユーの戦いは、
いつの間にか止まっていた。

エリオはキャロの放つ言葉を聞いて涙目になっているルーテシアを
見て申し訳ない心境に陥り、ガリユーは主の微笑ましい姿を見て、
いつの間にか戦意を失っていた。

エリオの謝罪を聞いても腕を組んだまま首を横に振り、気にするな
というような姿勢をとっている。

「私だつて……お兄ちゃんと一緒にいたい……お兄ちゃんが欲しい
……………!!」

「お兄ちゃん是谁のものでもないよ!! みんな……みんなお兄ちゃんが好きだから!!」

「私が一緒にいるの!!」

「みんなと一緒にいるんだよ!!」

母が目覚める今、ルーテシアは一人ぼっちではなくなる。

しかし、ルーテシアには欲しいものが出来てしまった。

それこそが右京……家族として、兄としての右京が欲しくなってしまったのだ。

自分だけの家族にしたい……子供故の独占欲を、ルーテシアは口にする。

それは、力として顕現することになる。

「白天王!!」

ルーテシアが口にすると同時に、ルーテシアの背後に巨大な紫色の魔法陣が現れる。

そこから徐々に現れる巨体を、キャロとエリオは見上げる。

その名の通り、天を突き抜けるかのような白き巨体。

その姿こそ、ルーテシアの最大にして最強の友……ちから白天王。

「ヴォルテール!!」

キャラロがその名を叫ぶと同時にキャラロの背後に巨大な桃色の魔法陣が現れる。

その魔法陣より徐々に現れる巨体を、ルーテシアとガリユーは見上げる。

白天王と対をなすかのような、天を突き抜けるような黒き巨体。

その巨体こそが、キャラロの最大にして最強の友……ヴォルテール。

「私が勝つたら……お兄ちゃんを家族にするから!!」

「私が勝つたら……友達になってもらうから!!」

「……………え?」

脈絡のないキャラロの”友達になってもらう”発言に、ルーテシアはキョトンとする。

対するキャラロはニッコリと笑い……ルーテシアを迎え入れるように両手を広げる。

「友達になろう?……一緒にお兄ちゃんと寝ようよ。一緒に遊んだり、お話ししたり……さつきみたいにお兄ちゃんを取り合ったり……きつと楽しいよ」

キャラロの言葉を聞いて、ルーテシアは考え込む。

さつきみたいに大声を出して誰かと言いつたのは初めてかもしれない。

きっかけは右京という存在。

その事に気付くと同時に、ルーテシアはもう一つの事実気付く。

(勝っても負けても……私は……)

勝てば、家族が増える。

負ければ、友達が増えて、一緒に右京を取り合ったり、寝たり出来る。

どちらに転んでも、ルーテシアにとっては良いこと尽くしなのだ。

勿論、捕まれば一度は留置場に行くことになるだろうが……そこまではルーテシアの頭では辿り着かない。

それでも、負けたくないと思ってしまうのが子供というものである。

「私に……勝てたら……ね」

「うん、勝つよ」

ルーテシアは小さく、キャロはニッコリと笑みを浮かべる。

そしてすぐに真剣な表情へと変わり……力強く、友の名を呼んだ。

「白天王!」

「ヴォルテール!!」

「「グオオオオオオオツツ!!!」」

二対の竜が雄叫びを上げ、友に応える為に、互いの最大の息吹ちからを放つ。

全てを破壊し尽くす二本の光線が激突しあい……その場は光に包まれたのだった。

「……………」

「……………」

その様子を少し離れた場所から、衝撃波に煽られながら見ていたエリオとガリユーは同じことを考えてながら立ちすくんでいた。

「ねえ……………僕達……………いる意味あったのかな」

「……………」

エリオの眩きが虚しく響き、ガリユーは微動だにしない。

ただ、男（雄？）達は少女達の戦いを傍観する他なかった。

「はあ……はあ……」

ここはゆりかご内部の動力炉へと続く道。

既に動力炉がある部屋が見える位置でヴィータは1人、上がっている息を整えていた。

なのはと別れてからここまでたった一人でガジェットを倒しながら進んできた為、息が上がるのも仕方がない。

ヴィータはどこからカートリッジを取り出し、その数を確認する。

グラーファイゼンの中に入っているカートリッジの数を含めると、残りのカートリッジは後1ダースほど残っている。

「よし……魔力も、カートリッジもまだある……動力炉も見えてる。……楽勝だな、こりゃ……っ……？」

笑みを浮かべるヴィータは、自身の胸にズブリと何かが刺さるような嫌な感覚を感じた。

やがてその感覚は痛みとなってヴィータの小さな体を駆け巡った。

「あ……ああ……」

突然胸に現れた刃。

その刃を見たヴィータは背後に視線をやり……刃の主を視界に捉えた。

四足であり、？型のような巨体ではなく、？型のような細身。

忘れもしないその姿は……かつてなのは落とされた敵に似ていた。

「ああああああああああっつつつ！！！！！！」

刃が背中から胸へと貫通しているにも関わらず、ヴィータはアイゼンを振り、ガジェットを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたガジェットはいつからいたのか、同型のガジェットを巻き込んで爆発した。

「ぐ……」

刃は抜けたが、刃があった場所から血が滴る。

ヴィータは痛みから崩れ落ちそうになる体を必死に奮い立たせ、眼前のガジェット達を見据える。

「お前らが……お前らがなのは……」

その目に宿るのは明らかな憎しみ。

しかし、ヴィータはすぐに頭を振り……苦笑を浮かべた。

自分がやることはここでガジェットを破壊することではない。

「あたしがやるのは動力炉をぶっ壊すことと……右京を助けることだ」

痛みを耐えながら、しっかりとグラーフアイゼンを握り締め、動力炉へと続く道の先を見る。

先程から感じ始めていた、感じたことのある魔力……その魔力の反応は、動力炉の方にある。

「悪いなのは……右京を助けるのはあたしみたいだ」

ニヤリとどこかで見た笑みを浮かべ、ヴィータはガジェット達に向かって進む。

アイゼンを振り、ガジェットをぶっ壊すその姿には、一切の憎しみはない。

あるのは、騎士として、仲間として、仲間を助けに行く誇り。

「行くぞ……アイゼンー！」

「ja!」

体を回転させながら、ヴィータは眼前のガジェットへと向かう。

痛みなんて、もはや感じてなどいない。

2つの砲撃は数秒拮抗し……エクセリオンバスターが勝つ形で終わりを告げた。

「嘘っ!?!うああっ!!」

まさか抜き打ちの砲撃に負けるとは思わなかったデイエチは驚愕に目を見開き……そのままバスターが直撃した。

なのははデイエチの隣に降り立ち、デイエチの武器であるイノーマスカノンに封印処理を施し、デイエチ自身にバインドをかける。

「ごめんね……でも、私は負けられないの」

それだけ言い残し、なのはは再び玉座を目指して飛ぶ。

その後ろ姿を見て、デイエチはこの場にはいない姉に向かって呟いた。

「ごめんクア姉……負けちゃった」

「ヴィヴィオ!」

「いらっしやい、管理局のエースさん」

なのはが玉座へと辿り着くと、そこにはぐったりとして玉座に座っているヴィヴィオと……その隣で笑顔を浮かべているクアット口の姿があった。

クアットロはなののはに向かって三歩ほど進み、右手を顎に、左手を右肘に当ててなののはを見据える。

「……地上本部襲撃に誘拐……その他諸々の容疑で、あなたを拘束します」

「今は捕まる訳にはいかないのでお断りします。それよりも、管理局のエースさん……私、あなただけはどうしても許せないんです」

許せないのはこつちだとなのはは言いたいが、クアットロの様子が変わったので言葉を飲む。

クアットロはおもむろに右手で自身の眼鏡を取り……怒りの表情を浮かべ、眼鏡を握り潰した。

「ノーヴェちゃんを……可愛い妹をあんな状態にしたあんなだけはねえ!! あんたにはしばらく、ここで戦ってもらっわ!! あんたの大事な……ヴィヴィオとね!!」

クアットロが言い放つと同時に、ヴィヴィオの体が発光する。

幼い体はグングン成長し……成人女性ほどになる。

下ろしていた髪はサイドポニーに纏められ、その体は黒いバリアジヤケットのような服装へと変わっている。

やがて発光が収まり、ヴィヴィオは閉じられていた瞳を開く。

そして……彼女の足下には魔法陣が広がり、自身の髪をためかせている。

その魔法陣の色は……虹色。

聖王の器と呼ばれたヴィヴィオが、聖王として覚醒した瞬間だった。

「ヴィ……ヴィヴィオ？」

なのはの呼びかけに、ヴィヴィオは答えない。

ただ、その瞳には悲しみの色が宿っていた。

そして……ヴィヴィオはなのはへと跳ぶ。

「なのはマ……なのはさん……今、このゆりかごを止める訳にはいかないの」

「え？ それってどういう……それに……なのは”さん”って……」
ヴィヴィオが右拳を突き出し、なのははレイジングハートを盾にして受ける。

悲しげなヴィヴィオと、困惑の表情を浮かべるなのは。

そんな2人を、クアットロは楽しげな……どこか悲痛な表情を浮かべていた。

〈No side out〉

北の岬を目指して歩くこと数時間……家を出た時間が昼だった為、日は沈み始めている。

それでも休むことなく歩いていくと……ようやく、目的の場所へと辿り着いた。

「……嘘……」

「ははっ、やっぱり咲いてやがったか」

みちるが信じられないというような声を出し、目の前の光景に啞然としている。

今、俺達の前には……桜が咲いている。

時期が過ぎ、葉桜の葉すら散っていたハズの桜が満開に咲いている。

沈みゆく日は空を茜色に染め上げ、桜吹雪が更に美しく茜空を彩る。

綺麗だと……そう思うと同時に、頭の中で声が響いた。

(右京さん)

聞いたことのある声だ。

藍蘭島ではなく、違う場所で聞いた……俺を呼ぶ声。

俺のことを好きだと……そう言ったあいつの声。

ああ、そうだ……俺は、今まで藍蘭島とは違う場所にいたじゃないか。

「……右京さん」

「ん？」

「綺麗ですね」

俺の隣で、そう言って笑顔を浮かべるみちる。

みちるは、俺がそうだな……と言うと、視線を桜へと戻した。

嗚呼……もう一度……見ることができた。

この海を、この茜色を、この桜を。

この横顔を……もう一度見られた。

「みちる」

「はい？」

不思議そうだな、それでいて幸せそうな表情を浮かべたみちると目が合う。

そんなみちるを見て、俺は、一緒にいたいと思う。

きつとこの気持ちは……この気持ちが……。

「みちる……俺はお前と一緒にいたい」

「……右京さん？」

俺はきつと、みちるのことが好きなんだ。

一緒に温泉旅行に行った時……或いはそれ以前から抱いたこの感情を……人はきつと”好き”と呼ぶのだと思う。

「だが……向こうには、みちる以上に一緒にいたいと思う相手ができてしまった」

「……………」

俺は、男として最低だ。

最初にこの感情を抱いたみちるよりも……後から出会ったあいつの方がいいと言ったのだから。

それでも……この気持ちは嘘じゃないと断言する。

「だから……俺は行く。軽蔑してくれて構わない。罵声を浴びせてくれてもいい。それでも俺は……………」

「右京さん」

「みちる？ つ！？」

急にみちるに首に抱き付かれ、口を塞がれる。

……みちるの唇によって。

口付けたみちるは顔を離し……笑みを浮かべた。

綺麗な……それでいて可愛い笑顔。

「……私よりもあの人を選んだのは悔しいですけど……それは、私が負けただけ。右京さんが悪い訳じゃありません」

「みちる……お前……何を言って……」

「ずっと見てました……あなたがソルと呼ぶ……この中から」

みちるは自分の懐に手を伸ばし、そこから何かを取り出した。

蒼く光る、ビー玉よりも大きなその球体は……俺の相棒だった。

なぜ、みちるがソルを手に行っているのか。

なぜ、ソルが今ここにあるのか。

「……右京さんがあの世界に行く瞬間の光……私は扉越しに光を受けました。気がついた時には、私はこの玉の中にいて……ずっと、

「この中から見えていました」

「そのことを……ソルは？」

「知っていました……黙っていて、申し訳ありません」

「いや、いいさ」

つまり、みちるは俺が見たほとんどを見ていたことになる。

……そういえば、洗濯機の中にぶち込んだことがあったなあ……みちるがいて知っていれば、そんなことはしなかったのに。

「……だから、右京さんがあの人とあの子をどれだけ大切に思っているか、どれだけ一緒にいたいと思つて……苦悩してくれたかを、私は知っています」

みちるはそつと、俺の手を両手で包み込み、ソルを握らせる。

そのまま俺の顔を見上げ……泣きそうな顔で笑つた。

「私は右京さんを軽蔑したりしません。ただ……私があなたの心の片隅にいることを……望んでもいいですか？」

そう言つたみちるは……泣いていた。

泣きながら……笑っていた。

「……望まなくても、お前はちゃんとここに居る」

包まれていない左手の親指を立て、心臓がある場所を指差す。

すると、みちるは泣きながらも嬉しそうな顔をしてくれた。

そのまま……みちるは背伸びをして俺に口付けた。

数秒ほど触れ合い……みちるは俺から離れ、背を向けた。

「……行ってらっしゃい……右京さん」

さよならと言わないのは、これが永遠の別れだと思いたくないからだろう。

それは俺も同じ……だからこそ、俺はみちるに背を向け、桜を見据え……こう言うのだ。

「行ってきます……みちる」

みちるの気配が遠のく。

俺はソルを持った右手を前に突き出し、最初に唱えた言葉を紡ぐ。

「我、時空を越えし者なり」

それは俺自身を指す言葉。

「選びし者の元、その力を放ち、応えよ」

それは”蒼”を指す言葉。

「過去は糧に、記憶は胸に」

今思えば、俺は最初から……ミッドチルダに残ること決めていたのかもしれない。

だから、過去（藍蘭島）を糧に……記憶は胸に残す。

「そして不屈の魂は……」

俺の体が、この世界から消えていくのを感じる……そのことに恐怖はない。

なぜなら、永久の別れではないのだから。

だから……

「「我等の”心”に。この手に魔法を……」」

行ってきます……みんな。

行ってきます……みちる。

「レイジングソウル……セエエエエット……アアアアップ……」

「スタンバイレディ」

くみちる side

桜がある場所から、空に向かって瑠璃色の光が登っていく。

その光が消えると同時に、強風が吹き、桜吹雪が舞った。

後ろを振り返ってみれば、もう右京さんの姿はなく、桜の木も、咲いていたのが嘘のように散っていた。

本当にいなくなってしまった。

寂しくないと言ったら、当然嘘になる。

悲しくない訳がない。

それでも……

「私はずっと、あなたのそばにいます……ずっと……ずっと……」

初恋は叶わないと誰かが言った。

私は、まさにそれを体現していることだと思う。

だけど……例え叶わない恋だとしても。

「あなたを想い続けても……あなたの心に居続けることを願っても……いいですか？」

答えは、当然返って来ない。

その代わりに……海の匂いが香る風が、私の髪を優しく撫でてくれる。

その風が、まるで私の問い掛けに答えてくれているように。

まるで……あなたに撫でてもらえているように。

「……………」

私は泣きながら……そう呟いていた。

選択した答え……近づく終わり（後書き）

ティアナが強く感じてしまった……こんな子だったかな。

我が作品ながら、どうしてこうなったと言いたい部分が沢山です。

愛しさと切なさとしん強さを皆様にお届けできたらなと思います（殴っ

それでは、また次回お会いしましょうv（*^^*）/

番外編 機動六課のお正月（前書き）

新年明けましておめでとございます！！

今回は新年一発目の番外編になります。

いつもよりギャグ方面に力を入れてみました！！

感動もシリアスもギャグも上手になりたいですね。

機動六課【それでは……番外編 機動六課のお正月、始まります！！】

右京&作者「今年もよろしく願います！！（つてな）」

番外編 機動六課のお正月

（No side）

「新年明けまして」

【おめでとございます!!】

食堂にて、右京を初めに新年の挨拶をする機動六課の面々。

と言っても、この場にいるのはいつものメンバー……なのは達隊長陣五名＋シャマルとリインとザフィーラにフォワード陣五名＋ギンガとヴィヴィオの総勢15名である。

他の隊員達は各々の家族や友人と共に、思い思いのお正月を過ごしていることだろう。

因みに、今この場にいる全員が着物を着ており、その着物は右京が手掛けた物だ。

流石に煌びやかな意匠や高価な布……とまでは行かず、藍蘭島の住人に少し教わった程度の知識だった為、市販の安物よりも僅かに劣る出来映えだ。

しかし、渡した人物像に合わせた色合いで、簡素ながら桜の花があらわである右京入魂の着物。

渡された本人達が喜んだのは、想像に難くないだろう。

「無事、新年を迎えられてよかったな」

そう言う右京も着物を着ている。

なのは、フェイト、ティアナ、キャラ、ヴィヴィオが選びに選んだ鮮やかな夜明けに似た色に薄紫の紫陽花あじさいがあしらわれた一品だ。

「せやなあ……色々あったけど、いい一年やったよ」

そう言ったのははやて。

右京作の夜に桜の花びら舞っているような意匠の着物を着こなし、ちやっかり右京の右隣に座っている姿は、流石子狸である。

「あはは……確かに、色々あったよね。……右京さんにもまた会えたし」

そう言ったのは、右京の左隣に座るなのは。

なのはは桜色の布に白い桜の花びらが舞っているような意匠の着物を着ており、サイドポニーの髪はリボンではなく簪で留められている。

「もう一年過ぎたんだね……忙しかったから、あつという間だなあ」

懐かしむように言ったのは、なのはの隣に座るフェイト。

勿論、右京作の着物を着ており、黒に黄色い桜の花びらという意匠が施されている。

長い金髪は後ろで一つの団子のように纏められており、簪で留められている。

「パパーお腹すいたー」

「ん？ ああ、悪い悪い」

不満の声を洩らしたのは、右京となのはの愛娘であるヴィヴィオ。

紙の色と同じ蜂蜜色の布に桜の花びらという意匠の着物着ており、座っている場所は当然、右京の膝の上。

不満気だった顔は、右京に頭を撫でられてすぐにご満悦の表情に変わる。

「んじゃ、ヴィヴィオも……他四名も我慢出来なさそうだし、食べると思いますか」

「「「「「うっ……」「」「」

苦笑する右京の言葉にビクリと反応するヴィータ、スバル、エリオ、ギンガの4人。

右京らが囲んでいるテーブルの上にはお節料理やお雑煮、唐揚げやら漬け物やらうな重やらその他諸々の料理が並んでいる。

おおよそ15人という人数を考えても多すぎる量だが……これでも足りないかもしれないのが怖い。

「そんじゃま……いただきます」

【いただきます!】

「因みに、この料理のどれか一つはシャマルが作った」

一斉に料理へと手を伸ばした全員の手が、料理の数センチ手前でピタリと止まった。

次の瞬間には右京とシャマル除く全員が真剣な表情で料理を見定める。

どれが毒? あれか? などという声がところどころから聞こえるのは仕方ないだろう。

因みに、ヴィヴィオは周りの真似をしているだけであり、ギンガは周りの雰囲気に合わせているだけである。

「ってみんな!? その行動や言動はおかしくない!？」

【いや、至って正常です】

「何というシンクロ率!! そしてなぜ敬語!？」

シャマルの料理の腕を昔から知っているはやて達と右京を瀕死にさせた料理を作った場面をハッキリと見ているフォワード陣から同時に首を横に振られるシャマル。

未だによく分かっていないヴィヴィオとギンガは首を傾げているだけである。

「ははっ、冗談だよ。この料理は全部俺となのはとはやてとフェイトで作ったんだ。安心しろ」

「喜喜……悪い冗談は止める」

「悪かったよ」

右京の言葉を聞いて右京とシャル除く全員が安堵の息を吐き、ヴィヴィオとギンガは再び首を傾げた。

よほど焦ったのか冷や汗をかいているシグナムに窘められ、右京も苦笑しながら謝罪する。

因みに、シグナムは赤紫の布に桜の花びらという意匠、シャルは翠色の布に桜の花びらという意匠の着物を着ている。

「なんや冗談やったんか……もう、シャルも悪ノリせんといてえな」

冗談と聞いてはやても安心し、苦笑しながらシャルを窘める。

周りの者も、全く……という感じで苦笑していた。

そんな中でシャルは……

「……………えへっ」

不自然な程に冷や汗をかきながら舌を出し、誤魔化すように笑った。

テヘペロ という感じだった。

「……おい……シャマルまさか……」

右京とヴィータが言葉を重ね、シャマルを凝視する。

それに続くように、周りの視線もシャマルへと集中した。

因みに、ヴィータは赤い布に桜……もう赤い着物で伝わるよね（疲。

「えっと……は、はやてちゃん達が離れてからこっそりと……サラダを……」

全員がテーブルの上にあるサラダを凝視する。

サラダの数は5つ……一人一つ作った計算になる。

そしてその見た目は……サラダなので、それほど変わらなかった。

あの時の野菜炒めはなんだったのか……と右京が思った。

【（確率は5分の1……外せば……死ぬ！！）】

シャマル、ヴィヴィオ、ギンガ以外の心が完璧に一つになった。

その後はみんな、サラダを避けて隊長三名と右京の作った料理に舌鼓を打ったのだった。

無論、食べ物を残してはいけないという食べる側の礼儀を通す為、サラダも美味しく頂きました。

「ぐふっ……」

「ギン姉！？ギン姉　！？」

「くっ……ギンガ……お前の敵は俺が取ってやるからな！！」

「いや、ギンガさん死んでませんか……」

「ふふっ……分かってる……この川を渡ればいいんでしょうっ？」

【その川は渡るなあああっ！！】

その後、シャマルは八神一家と右京によって説教とお仕置きとO H A N A S H I Iを受けた。

ギンガが目覚めたのは、数時間経った後だった。

因みに、ギンガは薄紫の布の着物である。

食後休憩中、メンバーはなのはとフェイトの部屋にてテレビを見ていた。

今は紅　という番組を見ている。

「この人、フェイトさんに声似てるよね」

「ホントだね。フェイトもこれくらい歌うまいのかなあ」

フェイトとよく似た声で歌う女性を見て、エリオとキャラの2人の視線がフェイトへと向く。

そのフェイトは今、なのはと右京とヴィヴィオと共にソファの上でテレビを見ている。

因みに、エリオは黄色い布、キャラはなのはより少し濃いめの桃色の布の着物である。

2人は4人の元へと向かい、4人の前に座った。

「ん？ どうしたんだ？ 2人共」

「エへへ……フェイトさんとお兄ちゃんと一緒に見たくて」

「勿論、なのはさんとヴィヴィオとも」

屈託なく笑うエリオとキャラの顔を見て、フェイトはキャラを抱き上げて自分の膝の上に乗せ、右京は自分の前に座るエリオの頭をクシャクシャと撫でた。

2人はびっくりしたようだが、すぐに笑顔に戻る。

「いつも……探してたんだ。本当の笑顔……溢れる場所」

「「ん？」」

フェイトが笑顔を浮かべ、音もなく、詠うように呟いた。

なのはと右京はなんのことかと首を傾げた。

「……こういうことになって……思っんだ」

キヤロとエリオの頭を撫でながらにつこりと、首を傾げていた右京となのはに笑いかけるフェイト。

それを見た2人は顔を見合わせ……一度頷いてから笑顔を浮かべ、フェイトの方を向いた。

「「そうだな（ね）」」

「ねー」

同意する2人と、よくわからないまま続くヴィヴィオ。

5人は笑顔のままテレビの方へと顔を向ける。

フェイトによく似た声をした女性の歌は、もう終わっていた。

次に歌い始めたのは……

「お、フェイトの次はなのはによく似てるな」

「本当だ……そっくり」

「曲名は……endless story……」

部屋の中でテレビを見ていた全員が、しばらくテレビから流れる歌に聴き入る。

やがて歌はサビの部分に入り……誰かが呟いた。

「なんか……なのはさんのことを歌ってるみたいだね」

誰が呟いたかは、部屋の中にいたメンバーは知っている。

歌詞を載せられないのが非情に残念ではあるが……どのような曲かは、皆様で確認していただきたい。

時は過ぎ、昼食後。

メンバーは食後の運動をするため、隊舎の外に出ていた。

右京の手には剣玉、羽子板と羽、独楽、お手玉といった日本の遊び道具が入った袋があった。

無論、全て右京のお手製である。

遊び方が分からないフォワード陣四名とギンガははやて達から遊び方を教えてもらい、楽しそうに遊んでいる。

ライトニングの4人は、独楽を使って遊んでいた。

フェイト一家が独楽でバトルし、シグナムがそれを見ているという形だが……。

尚、フェイトは何回やっても真つ先にバトルから脱落する為、若干涙目になっており、他三人は苦笑している。

スターズの3人とギンガは、お手玉を何個まで同時に出来るかを競い合っていた。

スバルの記録は2……3個になった瞬間、お手玉を落としてしまい、脱落。

なのはとギンガは6つ……初心者でこれだけ出来れば上出来……いや、出来過ぎである。

ティアナはなんと20まで成功した。

この20とはお手玉の数であり、ティアナはもう5、6は出来ると断言していた。

この結果に、なのはは割と本気で落ち込んだ。

因みに、スバルは青い布、ティアナはオレンジ色の布の着物である。

さて、スターズとライトニングが仲良くバトっている中、他のメンバーは何をしているのか。

それは……はねつきである。

但し、やっているのは……

「うおおおおっ!!」

右京と人間形態のザフィーラの2人である。

はやて、ヴィータ、シャマル、リン、ヴィヴィオはギャラリーと化している。

尚、ザフィーラは藍色の布、リインは水色の布の着物（小人サイズ）である……これで全員言ったかな。

「ふっ!!」

「甘いつ!!せあ!!」

「甘いのはそっちだ!!」

右京が地面に向けて羽をたたき落とすが、ザフィーラは素早く落とされた羽を拾い上げ、右京の顔の横へと打ち返す。

しかし、右京はその打ち返された羽が顔の横を過ぎた瞬間に体を捻り、羽子板の裏で姿勢の低いザフィーラの上を通り過ぎるように打ち返した。

「まだだ!!まだ終わらんよ!!」

ザフィーラは自身の体の上を羽が通り過ぎる前に上体だけ起こし、目の前に羽が迫る形になる。

そして羽子板を目の前に持ってきていき……手首の力だけで弾き、右京の足元に向かって羽を飛ばした。

「低い!？」

「これはいくら右京でも……」

はやてが羽の位置の低さに驚愕し、ヴィータが腕を組みながら冷静に呟く。

羽の高さは右京の足首ほどしかない……しかし、このまま敗北する右京ではなかった。

「どんな低い羽だろうと!！」

右京は膝から力を抜いて急速に背中から倒れ込み、上体を膝を曲げた状態で地面と水平にする。

その態勢のまま左手に持った羽子板を羽と地面の間に滑り込ませ……

「打ち返すのみ!！」

ザフィーラの頭上目掛けて打ち返した。

しかし、羽の位置は高い……間違いなく、スマッシュを打たれる位置。

「残念だったな右京……この勝負、俺がもらったあああつ!！」

ザフィーラが飛び上がり、羽に向かって羽子板を下ろす。

打たれた羽は地面と水平になっている右京の元へと向かう……その速度は無駄に速い。

流石の右京でもあの態勢は無理か……とはやて達が諦めた時、ただ一人、右京を信じる者がいた。

その者こそヴィヴィオー！

（パパが全身で叫んでる……”俺が勝つんだ！！”って！！）

「う……おおおっ！！」

迫る羽に向かって上体を起こし、当たる前に体を起こしきることに成功する。

しかし、羽は右京の背後を落下し、このままでは地面に落ちて右京の敗北になってしまう。

しかし、次の瞬間には……カツン！ と羽子板が羽を打った音が響き……

「……バカな……」

着地したザフィーラの背後に羽が落下していた。

右京はザフィーラに背を向け、片膝をつき、両手を広げた態勢でいる。

右京はその姿勢からゆっくりと立ち上がり……ザフィーラに向かっ

て振り向いた。

「3つの返し球……トリプルカウンター 墜落と「アニメがちがあああうー!」ぱあつ
!?!?」

どこから取り出したのか、はやてはハリセンを持ち、右京の顔面を
思い切りぶっ叩いた。

流石は関西訛り、ツツコミのキレがハンパない。

その後、右京が叩かれた姿を見たヴィヴィオがわんわん泣き出し、
それを見たなのはとフェイト、無傷だった右京により、はやては拷
も……説きよ……砲撃の嵐に曝されることになった。

その現場を見た全員は、後にこう語る。

【娘を想う父と母の怒りに触れたから塵になった】

…と。

食後の運動（惨劇）から数時間が経ち、今は夜。

メンバーは再びなのはとフェイトの部屋に集まり……カルタをしていた。

参加者はフォワード五名とギンガ、リイン、ヴィータ、ヴィヴィオの9人。

読み手は”なぜか”生きていたはやてが担当している。

参加していないなのは、フェイト、シグナム、ザフィーラ、シャマルはカルタで争う9人を微笑ましく見守っている。

「い” 犬も歩けば」

「はいっ！」

「ちっ……またエリオか」

「流石に速いわね……」

カルタを取ったのはエリオ。

カルタ自体は既に後半戦であり、残り枚数は少ない。

因みに、カルタの総数は五十音で”を”、”ん”を除く44枚である。

個人成績としては……

スバル&ギンガ……2枚。

ティアナ&キャロ……4枚。

リイン……3枚。

ヴィータ……5枚。

右京&ヴィヴィオ……6枚。

エリオ……8枚となっている。

残りカルタは4枚……既にナカジマ姉妹とリインは優勝することは叶わず、ティアナとキャロもエリオと引き分けが関の山。

優勝争いは右京、ヴィヴィオ、ヴィータ、エリオの4人に絞られた。

「準備はええな？」

【おうー！】

「それでは……」か”管理局の白い悪魔」

パシィとカルタを取る音が響き、カルタが宙を舞う。

そのカルタはなのはの元へと飛んでいき……なのははセットアップした。

因みに、取ったのはヴィータ。

「ま、待つてなのは！ どこへ行くの！？」

「離してフェイトちゃん……私は今からこのカルタを作った会社にお話しに行くの」

なのはが扉に向かう前に、フェイトは羽交い締めをしてなのはを必死に止める。

なのはと右京とヴィヴィオ以外が冷や汗をかく中、カルタは続く。

「つ……次な。”こ”金色の死神」

再びパシィとカルタを取る音が響き、カルタが宙を舞う。

カルタはフェイトの元へと飛んでいき……フェイトはなのはを離してセットアップした。

因みに、取ったのは右京。

「行こうなのは……カルタを作った会社へお話しに」

「うん」

「落ち着け馬鹿者」

シグナムがセットアップし、蛇腹剣となったレヴァンティンをなのはとフェイトに巻き付けて動きを封じ、ザフィーラは扉の前に座る。

シヤマルは2人を結界に閉じ込めた。

それでも、カルタは続く。

「……………次は……………」き”機動六課の貧乳狸……………って私のことかあああ
あっー!!”」

パシイというカルタを取る音とバシイッ!!というはやてが読み札
を叩きつけた音が響き、カルタが宙を舞う。

カルタははやての元へと飛んでいき……………それを見たはやてがセツト
アップした。

「シャマル、結界解き。シグナムもデバイスを2人から外すんや」

「は……………はい……………」

どんな表情だったのか、立ち上がったはやての顔を見たシャマルは
すぐに結界を解除し、シグナムはレヴァンティンを元の状態に戻す。

解放されたなのはとフェイトははやてと並び……………ザフィーラが守る
扉に向かった。

「ザフィーラ……………そこを退くんや。私らは、今からこのカルタを作
った会社にお話しに行かなあかん」

「出来ません。どうしても行くなければ……………俺を倒してからに」

ザフィーラが最後まで台詞を言い切る前に、なのはとフェイトが砲
撃を放った。

直撃したザフィーラは断末魔の声を上げることもなく……………円形の穴

の中心で、人間形態で横たわっていた……ヤ無茶しやがって。

はやて達はそのまま、扉から出て行った。

「ザフィーラアアア！？」

「大丈夫ですか！？」

出て行った3人と横たわるザフィーラを除くこの場にいた全員がザフィーラへと駆け寄る。

ザフィーラは周りの者達を見据え……かすれた声で言葉を紡ぐ。

「俺の死を……悲しむ暇があるなら……一歩でも多く先へと進むのだ……。仲間達よ……俺の屍を……超えてゆけ……」

その言葉を最期に……ザフィーラは瞳を閉じた。

【ザフィーラアアア！！】

その後、ザフィーラはシャマルに回復してもらい、なのは達はリインとユニゾンした右京によって隊舎の中で捕獲することに成功した……氷漬けにする形で。

因みに、カルタを取ったのはヴィヴィオであり、最後のカルタを取

ったのはエリオ。

最後のカルタは……”に”二兎を負う者一兎を得ず。

カルタの優勝者はエリオとなったのであった。

夜も更け、晩御飯と風呂を終えたメンバーはそれぞれの部屋で眠る。

そんな中、右京は隊舎の屋上で緑茶の入ったペットボトルを片手に夜景を眺めていた。

右京の眼前に広がるのは、2つの月に照らされている海。

藍に染まる海を見ながら、右京はペットボトルの緑茶を一口飲んだ。

「右京さん」

突然背後から声をかけられ、右京は後ろに振り返る。

そこには、髪を下ろし、右京から貰った着物を着たままのなのがあった。

因みに、右京は寝間着に着替えている。

「どうした？ こんな時間に」

「右京さんがいる気がしたんだ」

「そいつはすげえな」

なのはの答えに小さく笑い、右京は再び海へと視線を向ける。

それを見たなのはは右京の左隣へと歩を進め、同じように景色を見る。
やる。

……かと思いきや、その視線は、どこか期待したように右京を見ていた。

しばらく言葉もなく見ていたが、期待通りにいかなかったらしく、
なのはは少しムスツとして景色に視線を向けた。

「……着物……」

そんな時、右京がボソツと呟いた。

気付いてか、それとも気付かないのか、なのはは景色を見たままだ。

「よく似合ってる……正直、言葉が出ない」

「……ありがとう」

なのはの方を見てハッキリと似合っていると告げた右京に、なのはは
体ごと右京に向き……下ろしている髪を抑えながら笑みを浮かべた。

2つの月に照らされたなのはの笑顔を見て、右京はなのはを抱き締

めた。

急に抱き締められ、なのはは慌てて離れようとしたが……ゆっくりと髪を撫でられ、逆に自分から抱き締めた。

「……なのは」

「……なに？」

「今年も……これからも……よろしくな」

なのはの髪を撫でながら、耳元で囁くように右京は呟く。

なのはは一気に耳まで真っ赤になり……また、笑みを浮かべた。

「……うんっ！……」

一年経っても……二年経っても……何年経っても。

また……愛しい人と共に過ごせますように。

願うのは……そんな……終わらない物語^{ストーリー}

番外編 機動六課のお正月（後書き）

歌詞は入れてない……から大丈夫だと思いたいです。

田村ゆかりさんの”Endless story”……いい歌ですよねー。

サビ部分が何となく、本作のなのはっぽいかなあと思いました……
そんなことない？ 調子こいてすみません（涙

何はともあれ、今年も頑張ります。

よろしくお願ひしますv（*^^*）ノ

いつものように（前書き）

大変長らくお待たせいたしました！！

捏造に自己解釈が入り乱れている内容ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

プロットなし、1話1話全力な自分の誤字や日本語的におかしい部分が多々ある話ですが、楽しんで頂ければ幸いです！！（大事なことなので二回言いました

右京「そんじゃま、いつものように……始まるぞ」

いつものように

↳ No side

「……………やっぱり……………」

「うん……………右京さんじゃなかった」

崩れた高速道路……………もはや瓦礫としか呼べない場所で、スバルとギンガは少し悲しげな声で横たわるチンク達を見ていた。

チンクは気絶しているらしく、横たわったままピクリともしない。

その隣の右京……………だった人物は上体を起こし、スバル達を見て苦笑を浮かべた。

「……………もう少し動きが鈍くなるかと思ったけれど……………あんまり効果なかったみたいね」

右京だった人物は……………変身能力を持つドゥーエだった。

ドゥーエは気絶しているチンクの髪を一撫でし、両手を上げた。

「降伏するわ」

「……………右京兄はどこにいるの？」

ギンガがドゥーエにバインドをしている最中にスバルが問いかける。

ドゥーエはスバルの顔を一度見て……小さく笑った。

「本当に妹とよく似てるわね……いいわ、教えてあげる。右京さんの場所は……」

『こちらロングアーチ。スターズ03が戦闘機人二名を確保しました。更に、シヤマルさんとザフィーラが戦闘機人一名を確保、ライトニング03と04が召喚師の少女を確保、スターズ04とギンガさんが戦闘機人二名を確保しました!!』

「……驚いたね。倒すことが目的ではないとは言え、娘達がこうも簡単に捕まるとは」

フエイトの通信端末から聞こえた声を聞いて、スカリエツティが驚きの声を漏らした。

とは言っても、その表情は楽しげであり、とても驚いているように見えないのだが。

「……わ、私もあなた達を逮捕します。投降すれば、あなた達には弁護の機会が……」

「与えられるというのかね？ 世間的には広域次元犯罪者であり、大々的に管理局を襲撃した私達を？ 冗談はよしなさい」

「う……ごめんなさい」

高圧的に、というよりも父親が娘を叱るような形でスカリエッティから怒られたフェイトは、思わず頭を垂れる。

そんなフェイトの姿を見たスカリエッティは、クスリと小さく苦笑した。

「……私達は、まだ捕まる訳にはいかない。これは何も自分達の保身の為じゃない……今捕まり、ゆりかごを止められては困るのだよ」

スカリエッティの言葉が理解出来ないのか、フェイトは首を傾げる。

スカリエッティは近くのコンソールを操作してモニターを出現させ、その画面を指差す。

その指に釣られるようにフェイトは画面を見る……そこには、ゆりかごの動力炉が映し出されている。

「……喜喜 右京のリンカーコアはね、ある一定の数値から回復することはなかった……どうやってもね。だから、私はまだ試していない方法を試すことにした」

いきなり右京の名を口にしたスカリエッティに、フェイトは何の話かと訝しげな眼差しを向ける。

なぜ、リンカーコアが治っていないことを知っているのか……フェイトは私達しか知らないハズなのに……と思考する。

「それが、君達管理局が懸念し、阻止しようとしている……2つの

月の魔力だ。月の魔力をゆりかごに浴びせ……その魔力でリンカーコアを治せないかと考えたのだよ」

2つの月の魔力を受けられる位置まで上昇したゆりかごは、ミッドの全てを攻撃範囲に収められる。

それはつまり、ミッドの人間全てを人質に取ったことと同じ……フエイト達含む管理局員達がゆりかごを攻撃するのは、主にこれを阻止することが目的である。

上層部に至っては、スカリエッティの目的がそうだとも言っていたが……フエイトが聞いたことが本当だとするならば。

「私達はね、喜喜 右京を治してあげたいのだよ……だからこそ、ゆりかごを止めさせる訳には」

「ドクター!!」

スカリエッティの声を遮るように、ウーノが慌てたように声を発した。

その表情はコンソールにある画面を見ながら驚愕に染まっており……いかにも信じられないものを見たという様子だ。

「どうしたのかねウーノ」

「右京さんが……」

「ツエアシュテールングス……ハンマアアアッ!!」

動力炉にて、ガゴオン!!という轟音が鳴り響く。

その轟音は、ヴィータがグラーファイゼンのリミットブレイクである、身の丈を遥かに超える巨大ハンマーにブースターとドリルがついた状態、”ツエアシュテールングスフォーム”で動力炉を攻撃している音である。

胸や頭から血を流し、息も絶え絶えなその姿は正しく満身創痍。

グラーファイゼンも負担の大きいリミットブレイクでの攻撃のせい
か、所々にヒビが入っている。

動力炉にカートリッジを使った全力での攻撃も、一度や二度ではな
い……それでも。

「チクシヨウ……壊れねえ……」

右京がそこにいるのに……そうヴィータは呟く。

何かのバリアで守られているのか、それとも単純に強固なのか、動
力炉にはヒビ一つ入っていない。

その動力炉の下……動力炉とケーブルで繋がっているカプセル状の
入れ物の中に……右京はいた。

瞬間、動力炉内に瑠璃色の光が広がった。

【……あ】

同時に……軌道六課の面々が、一斉にゆりかごの方角を見た。

ゆりかごの動力炉部分からは垂直に瑠璃色の柱が現れ……ゆりかご付近にいた管理局員達も、突然現れた柱に目を奪われる。

「……流石は喜喜 右京だね」

ラボで、スカリエッティがそう呟く。

そんな呟きが聞こえていないのか、フェイトは画面に映るゆりかご……ではなく、ゆりかごがある方角を見ている。

「右京さん……？」

フェイトが呟くと同時に、ゆりかごの玉座で戦っていたのは、ヴィヴィオの動きが止まった。

ヴィヴィオはどこか安堵した表情を浮かべ、視線だけ動力炉に向ける。

「俺も手伝うぜ？」

その声にはっとして、ヴィータは首だけを回して後ろを確認する。

そこには……先ほどまで眠っていた男性が……自分と同等……否、それ以上の魔力反応を示しながら、久しく見ていなかったバリアジヤケット姿で存在した。

右手には瑠璃色の魔力が込められており……その表情は、好戦的な笑みを浮かべている。

そんな彼を見て……ヴィータは、同じような笑みを浮かべた。

「早く手伝え……右京……！」

「あいよ……カートリッジロード……！」

「ロードカートリッジ、エアアルムープ」

をラインとユニゾンした状態で飛行していた。

向かう先は動力炉……瑠璃色の光の柱の発生源と思わしき場所。

「ライン！あとどれくらいや！？」

（あと少し……十数秒で着きます！！）

簡単な会話を終え、はやてはもうすぐ着くという動力炉に目を向けたまま飛行する。

はやての表情は焦っているような……それでいて嬉しそうである。

（兄ちゃんが生きてる……兄ちゃんがいる！！）

部隊長として、彼女はなるべく感情や道理を殺さなくてはならない。

内心では右京が生きてることを願っていても、指揮する人間として最悪の場合も考えなくてはいけなかった。

しかし、その最悪の場合を打ち砕く出来事が起きた……それが、瑠璃色の光の柱。

モニター越しではあるが、はやては一度、その柱を見たことがあった。

故に確信する……あの光の場所には右京がいると。

確信した時には、ライン共々泣きそうになったものだ。

数分前のことを思い出して苦笑しながらも、はやては動力炉に辿り着く。

「兄ちゃん!!」

焦っているからか、内心のみで呼んでいた呼称を使ってしまうはやて。

そのことを恥ずかしく思う間もなく、はやては目の前の現状に啞然とする。

そういえば、動力炉に行ったのはヴィータだったかとははやては思う。

見たことのある白銀の破片が床に散らばり、自身の家族の紅い少女は見覚えのある男性に姫抱きされており……手には、ヒビだらけの棒。

そして、動力炉を見上げれば……そこには何もなかった。

代わりに、周辺には大小様々な破片が散らばっており……動力炉が砕けていることが分かった。

そして、紅い少女を抱えた男性はゆっくりとこちらに歩み寄り……

「ようはやて……髪、染めたのか？ よく似合ってるぞ」

「……リインとユニゾンしてるんや。分かってて言ってるやろ」

ニヤリと……笑いながらそう言った。

「はやてはヴィータを連れて行ってくれ。なのはとヴィヴィオがこの場所にいるらしいから、俺はそこへ行く。リイン、借りていくぞ」
そう言つて右京がリインを連れて玉座に向かったのが数分前。

はやてはヴィータを抱きかかえながら、自らが侵入した場所へと進む。

リインは右京の行った通り、案内役も含めて右京について行った。

「はやて……？」

進む振動で起きたのか、抱えていたヴィータが自らを抱えている主の名を呼ぶ。

その声に気付いたはやては、飛行速度を緩めることはなく、顔のみをヴィータに向け、笑みを浮かべる。

「よう頑張ってくれたね……流石は私の自慢の鉄槌の騎士や。すぐに回復魔導師のところへ連れてくから、もう少し我慢してな」

「……………」

はやての言葉に嬉しそうな笑みを返し、ヴィータはゆっくりと瞳を閉じる。

安定した呼吸で寝息を立てる姿を見たはやては小さく微笑み……ゆりかごから外へと出た。

数名の管理局員がはやての周りに護衛としてつき、はやてはアースラへと向かう。

その途中、一機の見覚えのあるヘリがアースラに向かっていった。

近くには、巨大な黒い竜と元の姿に戻ったフリードの姿もあった。

それが意味するのは……機動六課の集結。

フェイトはシャツハと共にスカリエッティのアジトにいる。

シグナムは地上本部襲撃時にヴィータと戦ってSランク魔導師を追った。

そして、なのはと右京、リインはゆりかごにヴィヴィオを取り戻す為にいる。

ゆりかごの周辺を見てみれば、あれだけいた管理局員は明らかにその数を減らし、ガジェットの数はいまだ……というより全く減っていないように見えた。

それが意味することは……勝敗に関係なく、決着が近いということだった。

場所は変わり、フェイト達のいるスカリエッツィのアジトであるラボ。

その場所に、頭にタンコブを作り、目を回して気絶しているセインを引きずりながらシャツハが現れた。

「フェイトさん、こちらは終わりました……！？スカリエッツィ！？」

「シスターシャツハ！？」

「ふむ……セインも捕まってしまったか。右京もなぜかは知らないが、リンカーコアが治って目覚めたようだし……もう問題ないか」

シャツハを見たフェイトは忘れてた……とシャツハに聞こえないように呟き、スカリエッツィはモニターを見ながら頷き、ウーノ、トーレ、セツテの三人と目を合わせる。

目が合った三人とスカリエッツィは頷きあい……スカリエッツィとウーノはフェイト達の前から、トーレとセツテは後ろからフェイト達を見る。

その様子に気付いたシャツハは両手に持つトンファーのようなデバイス、ヴィンデルシャフトを構え、フェイトもザンバー状態のバルディッシュュを構える。

「あなた達を拘束します！！」

「ああ、構わないよ」

「………はい？」

スカリエッティの言葉を理解できないらしく、フェイトとシャツハはポカンとする。

いや、シャツハの場合はそうなのだが、フェイトは違う。

あれだけ捕まる訳にはいかないと考えていた相手が、なぜこうもあっさりと捕まることを良しとしたのかが、フェイトには理解出来ない。

その解を教えたのは、スカリエッティ本人。

「私達の目的は、自由になることと右京のリンカーコアを治すことだ。後者は既に達している………なぜかは分からないが、治ったのだから細かいことは言いつこなした。そして、前者の”自由”だが………私は、娘達と共に暮らせるなら………どこでもいいのだよ………牢獄

でも構わない」

そう言ったスカリエッツィは両手を前に突き出し……フェイト達の下へ歩み寄る。

そんな姿を見て、シャツハはポカンとしていた表情を引き締め、再びデバイス構える。

しかし、フェイトはシャツハを手で制し……スカリエッツィに近づく。

2人は互いに視線を交わし……小さく……小さく微笑みあった。

「あなた達を連行します」

「ああ…宜しく頼むよ」

フェイトはスカリエッツィの両手首にバインドをし、他の三人にも同じようにバインドをする。

そして、よく分かっていないシャツハとまだ気絶しているセイン、ラボ内にあるスカリエッツィの自室に眠っていたノーヴェを連れ、ラボの外へと出る。

外へ出た時、スカリエッツィが呟いた。

「さらばだ、私の研究データ（生涯）……もう二度と、誰かの手に渡らず、誰かに使われぬまま……消えてくれ」

いつから持っていたのか、スカリエッツィは手にしたスイッチを押

す。

すると、先ほどまでいたラボは内側から爆発していき、その内部を完膚無きまでに破壊しつつ、入り口は崩落した。

計算しての爆破らしく、ラボから出ていたフェイト達に被害はない。

研究データは科学者の命とは、誰が言った言葉だったか。

その命を失ったハズのスカリエッティは、晴れやかな表情を浮かべていた。

管理局地上本部より離れた上空で、3つの影が対峙していた。

一つは、シグナムのもの……もう2つは……。

「アギト……あの者に着いていけ。魔力変換も、魔力光もお前と相性がいい……それに、ルーテシアが兄と慕う者の仲間だ……悪いようにはしないだろう」

「旦那……」

アギトとゼストのものだった。

ゼストは先ほど、地上本部にいるレジアス・ゲイズと対話した。

過去、ゼストの部隊を壊滅に追いやったのはレジアスなのか。

我々が語り明かした”正義”はどこにあるのか……と。

スカリエッティから過去の真相聞いていたとしても、ゼストは自分の目で、耳で知りたかった。

結果は……スカリエッティから聞いた通りだった。

レジアスは、ゼストと語った正義を貫いた……貫きすぎた。

故に、非道に手を染め、スカリエッティと結託した。

それも今となつては過去の話となった。

決して、レジアスのしたことも、スカリエッティがしたこと、上層部、最高評議会がしてきたことは許されることではない。

しかし、レジアスはゼストと、ゼストと共に掲げた”正義”に誓った。

自分と上層部が行ってきた諸行を全て公開し、罰を受け、管理局の闇の大部分を終わらせると。

それが救いでなくとも、自己満足だとしても、やり遂げると。

それを聞いたゼストは満足し……二度目の人生最後の相手との闘いの場に赴いた。

その場所こそ、今いるこの上空であり。

その相手こそ、今日の前にいるシグナムなのだ。

「……最後に闘うのが、お前のような騎士で良かった」

「……あなたの最後の相手に選ばれたこと……光栄に思います」

ゼストとは長年の相棒である槍型のデバイスを構え、シグナムもまた、長年の相棒であるレヴァンティンを構える。

互いが互いの、人生最高の一撃で終わらせることを決める。

互いのデバイスから薬莖が排出され、シグナムの持つ剣に炎が灯る。

「行くぞ」

「いつでも」

「フルドライブ!!」

「紫電一閃!!」

刹那、2つの影が交差し、互いのいた場所へと移動していた。

背中を向けあい、獲物を振り切った姿勢を最初に崩したのは……シグナム。

彼女は一度剣を横に振り、ゆっくりと鞘に納める。

「私は、あなたと闘ったこの一瞬……永久に忘れない」

「……見事……アギトを……頼んだ」

その言葉を最後に、ゼストは生涯を本当に終えた。

死に際の顔は、とても満足そうな顔だったという。

一つ、また一つ戦場が終結していく中で、ゆりかごの玉座では、依然として戦いが繰り広げられていた。

なのははレイジングハートを巧みに操り、ヴィヴィオの拳や蹴りを受け止め、受け流す。

ヴィヴィオはなのはに息をつかせる間もなく接近して攻撃し、なの

はの得意な距離で戦わない。

なのはがバインドで動きを封じても、数秒すれば解かれてしまう。

「ヴィヴィオ！右京さんが……パパがもうすぐ来てくれるよ！だから……だからもう止めてー！」

「無理だよ……止まらないよ……」

「……………」

必死に止めてと訴えかけるのはと、泣きそうな声で呟くヴィヴィオ。

そんな2人を見て、クアットロは唇を噛み締める。

ヴィヴィオもクアットロも右京が復活したことを悟っており、できることなら、こんな戦いを終わらせたい。

それでも終わらせないのは……終わらせられないからだ。

ヴィヴィオの体内にはレリックが埋め込まれており、それが鍵となり、聖王として復活した。

今もなのはに攻撃を仕掛けているのは、その聖王が持つ”聖王の鎧”という力が原因。

早い話、その聖王の鎧がヴィヴィオを強制的に戦わせているのだ。

「嫌なのに……もうこんなことしないでいいのに……止まらないよ

…」

ついに涙を流すヴィヴィオ。

その姿を見て、クアットロはなのはにレリックのことを話そうと口を開く……その時だった。

「なんだこりゃ……一体どういう状況だ？」

なのは達にとって聞き覚えのある声。

聞きたかった声が響いたのは。

当然、三人の視線は声のした場所……玉座の前の通路に注がれる。

「あ……」

まず、クアットロが声を漏らす。

そこにいた、男性の姿に。

「パパ……」

次にヴィヴィオ。

父と慕う、その姿に……彼女は両手を無意識に下ろす。

「右京……さん……」

最後なのは。

愛しい男性の姿に、涙を流しながら。

「よう、なのは……ヴィヴィオは大きくなったなあ」

リインを連れ、いつものように笑みを浮かべた右京の姿に。

この場にいる誰もが安堵した。

いつものように(後書き)

深夜だからか変にテンションが高い!!

ゆりかご戦争も残すところ、なのはとヴィヴィオとクアットロのみです。

ゆりかご戦争を終えても、作品自体は終わりませんが……

この作品のままvividに突入するか、新作として出すかはまだ決めかねていますがf(へーへ；

この調子で二作同時とかなったら、どれくらい更新速度が遅くなるのか……

考えてはいるんですけどね……無印なのは

それでは皆様、また次回(*。。(ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6350w/>

流れ着いて!ミッドチルダ!

2012年1月7日00時49分発行